

---

# 気象精霊麻帆良へ

雪待兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気象精霊麻帆良へ

### 【Nコード】

N5437N

### 【作者名】

雪待兎

### 【あらすじ】

人間から精霊に転生した主人公がネギまの世界へ。原作のキャラクター達と関わり合いながらも自分のペースを崩さず仕事に取り組む主人公。

そんな主人公と原作キャラが織りなすストーリー。

主人公万能系です。 コメディを目指してるのにシリアス一直線になっています。

## 登場人物設定（前書き）

以前から予告していた登場人物設定をアップします。

気象精霊のキャラの能力に関しては作者の独自解釈による分析が混じっていることをご理解下さい。

能力の表示について

各能力を5ゝ0の六段階に分けた上でその中でも上位と下位を＋－で表現しています。

- 0 能力が無い状態
- 1 一応能力はあるが、術を使えない程弱い
- 2 苦手ではあるが一応術は使えるレベル
- 3 標準レベル
- 4 得意。基本的に気象精霊の実務にはこのレベルの属性能力が必要
- 5 スペシャリストレベル。

## 登場人物設定

名前 シイナ・エアリネ・コノハナ 称号 エアリネ（嵐の精霊）

所属 精霊省氣象制禦管理室第4惑星局東亜支局・精霊省附属病院  
（氣象室に出向扱い）・天空界ツキヨミ公爵家爵位継承権第5位・  
天空界コノハナ伯爵家次女

担当 火の上級精霊・火の主任精霊（セーラ昇格後に就任）・氣象室付き精霊医師

資格 中級文官・氣象学博士・医学博士・薬学博士・精霊医師

種族 天人族 出身地 天空界高天原地方

形態年齢 16歳前後

普段の格好 地上世界のインドネシア付近のカバヤとサロンに似た衣装（幼少時代は浴衣を着ていたが、東亜支局で亜熱帯地方を担当するようになった時に着てみて以来気に入っている）

容姿 戦極姫2の片倉景綱の髪を蒼くしたイメージ

性格 慎重で落ち着いている・苦勞性で仲間を大切にする・結構寂しがり

好物 林檎酒 シードル

能力値 靈力値5＋ 火5＋ 水3 風5 大地2 靈魂5 幻想0 時空5＋

戦闘力3＋ 知力5 生命力4 精神力4＋ 苦勞性5 マジギレ5

解説 神によって精霊に転生した元男。但し赤子から育ち直し、200年以上精霊として生きてきたために本人にとって前世の意識は希薄。

精霊になってからは幼い頃からイツミに師事した為に勉強熱心な周囲の環境に影響されて真面目に修行を積んできた。後にイツミ組三秀の一人で判断力と応用力に優れている。当初は運脈精霊の修行を

していた事がある。

修行時代に何かとケガをすることが多く、医師資格を取得した。ただ治療の得意な気象精霊ということでかなり仕事多忙になり、少し後悔していたりする。

仕事ぶりは堅実にして調整力が高い。パイカラとチームを組んでいたが後にミリイ・ユメミのストッパーとして配される。現在のパートナーはフェイミン。

精霊能力はかなり高いのだが、東亜支局には風ではジユデイス・ミリイ・ファムと精霊界でもトップクラスの精霊が集まっており、本来の得意属性である火の能力を多用しないためにイマイチ目立たない存在。目立たないがユメミには及ばないものの対抗しうる時空能力を持っており、飛行能力はパイカラに次ぐ速度を誇る。

火が専門ではあるのだが、火の能力が高すぎてイマイチ制御しきれていないと自分で思っており、普段は風の術をメインに使っている。その為に周囲からは風の上級精霊と誤解されていたりする。火の属性能力はイツミに匹敵する精霊界最高峰の能力の持ち主であり、キレるとイツミばりの火の能力を見せて無表情で容赦なく炎の術で敵を制圧する。

東亜支局で怒らせてはいけない人物の一人。

前世が男だった影響か男性が苦手な男臭い男（大漢など）に言い寄られるとパニック状態になる。

ただし、幼い頃からの付き合いであるアンソンとだけは仲が良い。  
ちなみにコノハナ伯爵家は地上では木花咲耶姫コノハナサクヤヒメとして伝わっている。

得意技 『音のない世界』 発光円盤 円形粒子加速器 マイクロ電撃波 小型太陽入り結界（要は脱出不可能なサウナ）

名前 ミリイ・オレアノ・ヤクモ 称号 オレアノ （森の精霊）

所属 精霊省気象制御管理室第4惑星東亜支局・妖精界アーベルク  
大公爵位継承権第8位（実質1位）

ヤクモ・オクヌーブス家次女

担当 風の上級精霊・黴雲臨時支局支局長

資格 上級文官・妖精界近衛中隊長第2位

種族 仙人族 出身地 妖精界桃源郷自治州

形態年齢 16歳前後

普段の格好 神道の巫女風の狩衣とプリーツスカート

性格 生真面目な試験秀才・目標に向かって突っ走り、周囲が見えなくなる

好物 発泡羊乳酒

能力値 霊力値5+ 火1 水3 風5+ 大地5 霊魂5+ 幻想5 時空0

戦闘力5 知力3- 生命力4 精神力4 応用力1-

ツッコミ4+

解説 希代の風使い・常に試験合格首席・妖精界武闘大会優勝者・時代の妖精界女王という経歴を持つ気象精霊記の主人公。幼い頃妖精界王女の影姫という重荷を背負っていたが、妖精王夫妻の配慮とイツミの後押しにより気象精霊としての修行を始めた。パイカラ・ユメミ・シイナとは修行仲間で親友。イツミ組三秀の一人で行動力に優れた文武両道な精霊。気象室に入ってから次代の幹部として期待されているものの、現場に出ると直感優先で突っ走ってしまうために失敗も多い。精霊としての能力は火・水・時空を除いて最高値を持っており、非常に優秀。特に風・霊魂の能力に関しては気象室トップクラス。

いつも持っている払い串は妖精王妃・ティタニアから贈られたもので精霊道具と呼ばれるものである。

ミリイはいつもは集中力を高めるために払い串にして使っているが、戦闘時には錫杖にして敵と戦ったり、ユメミにツッコむ時にハリセンにするなど広い用途で使っている。

得意技 『色と音のない世界』 発行円盤 円形素粒子加速器

名前 ユメミ・ナイアス・スヒチミ・ウガイア 称号 ナイ  
アス (泉の精霊)

所属 精霊省氣象制御管理室第4惑星東亜支局・天空界ウガイア大  
公爵位継承権第2位

天空界ウガイア大公爵家長女

担当 水の上級精霊・氣象参謀

資格 初級文官・氣象学博士・解析学博士・統計学博士・生物学博  
士・環境学博士・魔法薬学博士

種族 天人族 出身地 天空界高千穂地方

形態年齢 19歳前後

普段の格好 北米先住民族の衣裳

性格 お気楽かつマイペースな宴会好き

好物 酒類全て

能力値 霊力値5+ 火5+ 水5+ 風3 大地2+ 靈魂0

幻想1 時空5+

戦闘力2- 知力5+ 生命力4 精神力4 酒豪5+

気品4

解説 博士号を6個持つ氣象室きつての才媛かつ精霊界三大公爵家  
ウガイア大公爵家の長姫。氣象精霊記のメインキャラの一人。気品  
が漂っており、氣象室の下級精霊の憧れの的。幼い頃の家庭教師の  
偏った教育により、特権階級意識が強く幼少時代は孤立しがちだっ  
た。イツミの修行場に入り、首席のミリィに挑むものの敗れ続けた  
が、後に友情を築く。一度キレたシィナにぶちのめされた経験アリ。

イツミ組三秀の一人で理論派。ミリィ・シィナ・パイカラとは親友。気象室では当初北米支局に入るが、権力抗争により閑職に回されたが後に東亜支局に転属。宴会好きで底なしのノンベであり、仕事中心であるのが宴会を開こうとする。能力値は偏っているものの火・水・時空は最高クラスの能力を持っている。彼女の亜空間にある酒蔵には常時一万本以上の酒が保有されている。

魔法薬オタクであり、自分の研究所で薬を作っている。

夢は『サボテンの似合う熱帯雨林』

得意技 宴会で酔いつぶす（味方含む）・特大霊光弾・強力時空結界

名前 イツミ・ハマリヤド・アマテル

称号 ハマリヤド

（エメラルドの精霊）

所属 精霊省気象制御管理室第4惑星東亜支局・天空界アマテル侯爵家継承権第1位

天空界アマテル侯爵家長女

担当 精霊省気象制御管理室副室長兼第4惑星東亜支局支局長・火の高級精霊

資格 上級文官

種族 天人族 出身地 天空界高天原地方

形態年齢 12歳前後

普段の格好 中国宮廷風の衣装をアレンジしたもの

性格 冷静かつ公正にして厳格だが面倒見は良い・親ばか

好物 謎

能力値 霊力値5 火5+ 水2- 風2- 大地3+ 靈魂0

幻想1 時空5+

戦闘力5- 知力5+ 生命力3 精神力5 美少女5

親バカ4+



解説 シイナ・ミリイ・ユメミ達の修行時代の師匠にして現上司。  
かつては天上界で火の精霊長官を務めており、火の精霊の最高位にあった。その後権力闘争により罷免され、妖精界にて修行場を開く。その方針は生徒の自主性を重視して生徒自身の力で成長させる放任主義。教え子に自らの能力・資質に気付かせる機会を設け、その後は助言するなど生徒の手助けを行う。賛否両論ある教育方針ではあるが、真の優秀な生徒には効果が高く、現場で活躍する数多くの卒業生を送り出している。中でもミリイ・ユメミ・シイナは特に優秀であり、イツミ組三秀もしくはパイカラを加えイツミ組四天王とも呼ばれている。後に氣象室に復帰してシイナ達の上司となる。能力は完全に時空・火に特化しており、この二つに関しては他者の追隨を許さない。

シイナの修行時代の少し前にランティという娘を生んでいる。  
非常な親バカであり、それはアマテル侯爵家の家系伝統らしく本人も母親に未だに溺愛されている。  
ちなみに3500年近く生きている大精霊であるが、本人の前で年齢を口にする事はジャイオンに『歌を歌って』とリクエストすることに等しい。

得意技 時空転移・おしおき結界・マイクロ波電撃

名前	キャサリン・レヴィアタン・ペイレネ・コブライナ	称号
ペイレネ	(聖なる泉の精霊)	

レヴィアタン (豊穡と稲妻の神)

所属 精霊省氣象制御管理室第四惑星局東亜支局

担当 水の高級精霊・黴雲臨時支局副支局長

資格 初級文官・特級災害師 (自称)・挑発検定3段 (自称)

種族 天魔族 出身地 魔界

形態年齢 25歳前後

普段の格好 西洋の貴族風のローブ

性格 イタズラ好き・気さく・毒舌・生真面目?・災害マニア

好物 ビール

能力値 霊力値5+ 火5+ 水5+ 風2+ 大地4+ 靈魂4

幻想5 時空0

戦闘力5 知力4- 生命力5+ 精神力5+ 毒舌5

マニア5

解説 東亜支局の所属するベテランの気象精霊。イツミとは同期で3000年以上生きている大精霊。功績も多く、二つの称号を持っている。しかしそんな大精霊であるにも関わらず気さくな性格によって分け隔てなく接することから下級精霊や後輩の上級精霊に多くのシンパがいる。

『災害をもつて地上に彩りを』が信念で日夜災害を起こそうとしている困った御方。しかし闇雲に災害を起こすわけではなく、被害は最小限度に止めつつ、派手に災害を起こすことをモットーとしていてその一見相反する行為を両立してしまえるだけの力量を持っている。

昔の自分に似ているという理由からミリィにちょっかいをかけているが、それ以上に元弟子のシイナとの災害勝負に熱中している。

毒舌で相手を挑発する事にかけては天才的な腕前だが、駆け引きに長けており相手のペースを崩す事が得意。

身体・精霊能力の基本能力の高さと長年磨いた技術の高さ、さらに駆け引きの上手さによる戦闘力はかなりのもので本人の好戦的な性格もあつて気象室きつての武闘派。その戦闘力はミリィさえも手玉に取られる程。

ノラとシイナはキャサリンの弟子と言えるが、キャサリンに鍛えられた御蔭でこの二人もかなりの強さになっている。

因みに双子の姉にジユデイスがいる。

得意技 雷撃・挑発・災害起こし

名前 フェイミン・マルカ・フリー

称号 マルカ（

月の知霊）

所属 精霊省氣象制御管理室第四惑星局東亜支局

担当 水の上級精霊・氣象参謀

資格 中級文官・天上界近衛小隊長第2位

種族 天神族 出身地 天上界湖南地方

形態年齢 20歳前後

普段の格好 中国の女官風の衣装

性格 冷静ではあるが負けず嫌い・プライド高い

好物 主に中国系のお茶

能力値 霊力値4 火1 水5+ 風4+ 大地3+ 靈魂3 幻

想4 時空5

戦闘力4 知力5+ 生命力3+ 精神力4 正座4 プ

ライド4+

解説 シイナ・ミリイ・ユメミと同期の切れ者氣象参謀。精霊省の入試で次席で合格して以来、同期で首席だったミリイをライバル視してきた。ちなみにその時シイナは第三位だったのだがシイナは視界に入っていないかったりする。当初配属された北米支局においてユメミとコンビを組んで成果をあげていたが北米支局上層部に疎まれて左遷され続け、最終的には自身の能力と全く関係のない月支局に飛ばされた。その

苦境の中で着々と成果をあげていたミリイに対するライバル心と焦燥感から一時氣象室を裏切り、氣候変動誘発局の一員としてミリイ達と対峙してその頭脳でミリイ達を翻弄する。しかしミリイと対峙

して負けを悟り、その後氣象室に復帰、ミリイ達と同じく東亞支局に転属となる。その後はシイナと行動を共にする事が多く、ミリイ・ユメミペアと並んだ名コンビの切れ者氣象参謀として活躍している。氣象精霊の中では靈力が弱い方であるが、優れた頭脳と高い水・時空の能力によってそれを十分に補っている。

ミリイには負けたものの近衛精霊としても高い戦闘能力をもっており、特に棍を用いた戦いが得意。

お酒が苦手であり、その反面お茶をこよなく愛している氣象室きつてのお茶派。

常に十種類以上のお茶（主に中国系）と茶器をいつでも取り出せるようにしている。

いつも何かとフェイミンを宴会に巻き込もうとしているユメミが最大の天敵。

名前 相坂さよ

種族 精霊になりかけの幽霊

形態年齢 14歳前後

性格 怖がりで寂しがり。大人しく気が弱いが礼儀正しい。

好物 お茶

解説 2-Aの教室にいる幽霊。生徒名簿に載っていることから、学園側はその存在を把握していると思われる。生前に魂の使命を果たし、前世までも功績と合わせて魂の大きさが十分に成長していたことから精霊として生まれ変わる筈だったが、学園の高度な靈格の存在を抑えつける結界の機能により、中途半端な存在のままで結界内に閉じ込められてしまったというのがシイナによる見解。既に60年近く幽霊をしており、話す相手がいないことから切実に友達を求めている。実際に行動に移したりしていたのだが、薄幸体質から

か完全に幽霊として認識させるだけにすぎなかった。

現在は友人となったシイナとほとんど行動を共にしている。

初めてシイナと飲んだお茶に感動したことでお茶が大好きになっている。

最近よくお茶を飲んでいることで何気に霊力が強化されて地味に能力がパワーアップしていたりする。

得意技 憑依・ポルターガイスト・気配隠蔽・金縛り・実体化（短時間）

名前 パイカラ・ウエルナス・ポロシリ

称号 ウエル

ナス（春の精霊）

所属 精霊省氣象制御管理室第四惑星局東亜支局

担当 書法精霊 風の上級精霊

資格 初級文官・書法精霊資格・衛生精霊資格

種族 天人族 出身地 天空界高千穂地方

形態年齢 18歳前後

普段の格好 アイヌ民族風の衣装

性格 地味・弱気・クセモノ

好物 不明

能力値 霊力値 4 + 火1 水3 風5 大地4 + 靈魂5 +

幻想4 時空2

戦闘力2 - 知力4 生命力4 精神力3 地味4 小動

物度5

解説 ミリィ・シイナ・ユメミと同期で氣象室に入った氣象精霊。

シイナと同じくイツミの修行場出身であり、イツミ組四天王の一人。実はかなり優秀だったのだが、能力的に完全にミリィと被ったおかげ

げで全く目立たなかった可哀そうな存在。シイナとは幼馴染であり、ミユラ・ノイエンを含めて幼少期一緒に育った。原作と違ってシイナの影響を受けたためにイツミの修行場ではミリィ達と行動する事が多く、ミユラも現在は気象精霊となっている。

気が弱い為に気象ゲリラとの戦いで神経をすり減らして一時書法精霊に配置換えとなっていたが、シイナの離脱とともに一念発起して現場に復帰した。

気象室東亜支局一の飛行速度を誇っており、その速さ実にミリィの2倍。

なんとかついていける精霊がシイナしかいなかったなのでシイナとコンビを組んでいた。

## 登場人物設定（後書き）

というわけで設定集でした。

主人公のシイナについて述べる能力は当初ミリイと似た感じでしたが、それでは面白くないとこの設定になりました。

SSを書くに当たってモデルを色々なモノから探していたところで戦極姫2の片倉景綱が作者の中でクリティカルヒットしてモデルにしました。

シイナは基本的にNARUTOのシカマルの面倒臭がりじゃないキャラをイメージして書いています。

順次キャラは追加していく予定ですが、設定を乗せて欲しいキャラ（気象精霊のキャラで）のリクエストがあれば感想の方に書いてください。

必ずとは言えませんが、のせるキャラの参考にします。

## プロローグ 精霊の旅立ち（前書き）

この小説にはお酒が大量に出て来ますが決して未成年に飲酒を勧めるものではありませんのでご注意下さい。



## プロローグ 精霊の旅立ち

精霊世界。

そこに住まうのは精霊であり、この世界は精霊が混沌の中から作り上げたものであった。

既に精霊世界が出来てから何億年という時間が経っており、大小様々な16の世界で構成される精霊世界はそれぞれ独特の文化を持ち、それぞれの世界で秩序がしっかりと確立している。

その精霊世界の一つ、天上界には精霊世界最大の行政都市・水の都がある。

ここには天上界を治める神帝ヤウエが統治する天上界の首都というだけではなく、精霊世界の国際組織の本部の多くが存在しているのだ。

水の都は精霊世界最大の湖・せんぶかい膽部海の北岸一帯にある島々からなる都で、長さ五億キロを超える長大な河・つうてんが通天河の幅が約5600キロある河口に出来た街でもある。

その河口の南西には一周約40キロ程の島がありそこに精霊省気象制禦管理室・通称気象室の本部はあった。

精霊世界の国際機関である精霊省に所属する気象室は地上世界の気象環境を司っており、地上の自然現象・・・地震・津波・雷・雨・台風・火山爆発等や太陽・月の管理を行う精霊たちが働いている。

その気象室の本部の一室、第4惑星局東亜支局の部屋において二人

の精霊が机を挟んで向かい合っていた。

「……どうしても気持ちは変わらないのね？」

向い合っている一人、精霊省氣象制御管理室第4惑星局東亞支局支局長兼氣象室副室長を務めるイツミ・ハマリヤド・アマテルは目の前に座る幼少の頃から面倒を見てきた教え子であるシイナ・エアリネ・コノハナに対して確認するように訊ねる。

イツミは人間で言えば12歳程の茶色の髪を結ったあどけない女の子の姿をしているが、その実年齢は3500歳を超える大精霊だ。

しかしその大精霊であるイツミと相対する蒼みのある髪をポニーテイルに纏めた15歳程の少女……シイナ・エアリネ・コノハナは気負いする様子は全くない。

「はい申し訳ありません、イツミ師匠<sup>せんせい</sup>。どうしてもやらなければならぬ用事がありまして」

「3年の休職ねえ……。シイナがそういうのなら本当にそれしか方法が無いのでしょうかね」

穏やかながらしっかりとした口調で答えるシイナの様子にイツミはため息を吐く。

シイナが休職すると判断したのならそれは本当に仕方のないことに違いない。

そういう判断を下せる程に数多い自分の弟子の中でも特に状況判断能力に優れているシイナをイツミは信頼していたし、この一見穏やかそうに見える弟子がその実教え子達の中でも人一倍頑固な気性の持ち主で一度決めた事を滅多に覆す事が無い事を嫌という程知っていた。

それ故にここで引き留める事はこの元教え子を困らせる事にしかないという結論にイツミは達する。

「分かったわ。東亜支局長として受理しましょう」

「ありがとうございます、イツミ師匠<sup>せんせい</sup>」

溜息をつきながらも許可してくれた上司に対してシイナは申し訳なさそうな口調で頭を下げる。

シイナも東亜支局の一員である以上、現在所属する東亜支局が人材不足であり、自分が今抜けると大変な事は把握していただだけに後ろめたさはあったのだ。

「でもその用事が終つたら出来るだけ早く復帰してね？正直貴方に抜けられるとキツイのよ。パイカラが書法精霊に異動したから今うちの支局の風の上級精霊が少なくなってるし、ミリイの暴走しがちだからストッパーの貴方に抜けられるのは痛いわ。ユメミもそうだけどあの子達は規格外だから補佐出来る程能力が高くて広範囲をカバー出来る貴女は貴重なのよ」

シイナの同僚であり、修行時代からの親友の二人の名前を出されたシイナは有能かつ能力は高いがその分失敗した時のスケールも大き

く今まで多くのトラブルを引き起こしてきた親友に苦笑を浮かべる。

「イツミ師匠に褒められるのは嬉しいですし、心配かもしれませんけど・・・大丈夫ですよ。今はフェイミンさんもいますし、キャサリンさんもしばらく大人しくしてくれるって約束してくれましたから。あとパイカラも早く復帰出来るように頑張るって言ってくれていますし、何よりあの子達も加わりますから」

「キャサリンとパイカラはともかくあの子達を動かすなんて貴女相変わらずねえ・・・」

修行時代から何かと精霊同士の仲を取り持つことの多かったシイナの変わらなさにイツミは苦笑した。

「まあいいわ。こちらは何とかするからその用事をしっかりと片付けてきなさい」

「ありがとうございます。イツミ師匠」

シイナは快く自分を送り出してくれようとするイツミにもう一度礼をすると退室した。

「それとシイナ、ここではイツミさんもしくは支局長と呼びなさい」  
いつも通りの上司の声を聞きながら。

休職が受け入れられたシイナはその後同僚にもその事を伝えた。

同僚である気象精霊達はいきなりのシイナの休職に驚いたものの、イツミと同じく大人しいながらも芯が確りとしているシイナの性格を良く知っている面々は仕方が無いと言った様子でそれを受け入れる。

そして同僚に見送られながら本部を出る・・・とはならなかった。

同僚の一人であるユメミ・ナイアス・スヒチミ・ウガイアがいきなり『シイナちゃん見送り会』という名前の大宴会を開いたのだ。

何時もの事ながら仕事だろうがおかまもなく宴会を開きたがる親友に呆れたシイナではあったが、しばらくこの光景も見納めになるかと考えると寂しくなったので参加を決める。

が、事態は予想以上の方向に拡大した。

ユメミの提案にいつもはストップをかける筈のもう一人の親友であるミリイ・オレアノ・ヤクモが賛成に回ったのだ。

東亜支局一のツツコミ役もとい制<sup>ストップ</sup>止役であるミリイが賛成したことで一気に流れが加速する。

元々少数の例外を除いてお酒が大好きな精霊達である。

しかも霊力を大量に消費する術を多用する気象精霊とくれば飲む酒の量は半端ない。

宴会女王・ユメミの指揮により、宴会参謀にライチ・ニユート・チャン、盛り上げ隊長にファム・ムミアー・ザップという体制が即刻整えられると東亜支局の精霊全てに情報が伝達。

ユメミは亜空間の自分の専用お酒保管庫からお酒をどんどん取り出し、お酒を持ちながら同僚である上級精霊や付き合いのある下級精霊までもが駆けつけてくる。

その酒の量高さ3メートルの樽に満タンに詰められたユメミ秘蔵のワインを中心に地上世界で日本人が一日で消費する酒の量とほぼ等しい。

フェイミン・マルカ・フーを筆頭としたお酒が苦手なお茶派の精霊達はその部屋に漂う酒気だけで気絶してしまう程の大宴会になってしまった。

そして宴会の主役であるシイナはもはやお酒の中心地。

次々と酒を飲むこととなり、仕舞いには一石樽ごと酒を飲んでいた。

それでも一石樽で飲んでいたシイナはそれを簡単に飲み干してしまっており、ミリィ・ユメミと並んでシイナが東亜支局三大酒豪の一人と数えられていることを再確認する結果になり、東亜支局三大酒豪伝説の新たなページを刻むことになったりしていたのだが。

この宴会は後に

『ああ、シイナの見送り宴会？あれは楽しかったねえ』

と宴会好きの精霊には楽しい思い出として語られ、

『シイナさんの見送り宴会でございますか？・・・申し訳ありませんが思い出しただけでも気持ち悪くなりそうなのですが』

お酒の苦手な精霊には悪夢の宴会として語られる伝説の宴会となつたらしい。

（少し飲み過ぎたかしら）

丸一日宴会が続いた後（流石にイツミが見咎めて解散となった）シイナは、頭を抑えながら自分の机を片付けていた。

ついシイナの好物であるりんご酒シードルの上物を出されてその勢いのままに流され、一石樽の一气飲みを連発してしまった為、普段は二週間ぶつ続けで宴会をしようが酔い潰れないほどの酒豪であるシイナも少し酔ってしまったのだ。

そんなややだるい身体に自分で回復リカバリー霊術をかけながらシイナは動いていた。

といつても必要な者はいつも大体亜空間に収納しており、いつも空間霊術で出し入れしていたので机には筆記用具・置物のような僅かな私物しかなく、すぐ終わってしまう。

シイナは一度百年近く働いていた部屋を見渡す。

（ここで働き続けたいけど・・・約束だから仕方ないよね。ここに戻ってくる為にもさっさと終わらせないとね）

一度瞑目したあと再び目を開いたシイナは部屋を後にした。

シイナが気象室の本部を出て贍部海の畔まで歩くとシイナの目の前にアロハシャツに短パン、ビーチサンダル、おまけにサングラスといった何処かのチンピラのような格好をした軽そうな若者が現れる。

「よ、準備は出来た？」

「一応出来たわよ。いつでもOKよ」

無然とした顔で答えるシイナに対してそんな様子を気にした様子が無い若者を見やりながら、シイナはここを暫く離れることになった出来事を思い返していた。

「やー、ようやく見つけたよ」

地上世界の太平洋にある島国の梅雨前線の操作を終えて一度本部に戻り、仮眠をとろうとしたシイナの前にいきなり現れた人物は開口一番にそうのたまわった。

「えーと……どちら様でしょうか？」



シイナの記憶にある限り、東亜支局内に目の前のような人物は存在しないし、部外者が気象室本部に入ってくることもない。

気象室の出入りは気象室の私設軍隊である気象防衛隊がしっかりと管理しているのだ。

組織が腐敗していた少し前までならともかく、人事が刷新されて気象防衛隊のトップもシイナの修行時代の仲間であるホーク・スランピン・バルクが務めるようになってからは綱紀が是正され、不審者が本部に侵入するような事は起こり得ないはずだった。

気象室に所属する精霊に制服といったような物は無く、基本的に気象精霊は自らの好きな衣装を身に纏ってはいはいるが、流石にアロハシャツにビーチサンダルといった目の前の男のような格好で仕事をしている気象精霊は居ない。

いきなり目の前に現れた男の事をシイナが訝しんだのも無理はないだろう。

「ひどいな、僕の事覚えてないのかい？君をこの世界に送ってあげたのに」

冗談なのか本気で落ち込んでいるのかわからないような言動をとる男にシイナは顔をしかめる。

（あたしを転生させたって・・・まさか！）

男の言葉に疑問を抱いたシイナだが、心当たりに気がついた。

身内や極親しい友人にしか明かしていない事ではあるが、シイナには前世の記憶と呼べるような物がある。

シイナが現在仕事をしている地上世界の地球と似たような世界。

その世界で普通の人間・児玉祐司として生きていた記憶がそれだ。

そのシイナの前身である児玉祐司は予期せぬ事故によって死亡してしまっただが、その死んだ児玉祐司の目の前にいきなり現れたのが目の前にいるアロハの男だった。

『好きな世界に生まれ変わらせてあげる代わりにいずれこちらの依頼を受けて貰う』

そういう内容の契約を持ちかけて来たアロハの男の提案に児玉祐司は同意し、その結果児玉祐司はシイナ・エアリネ・コノハナとしてこの世界に生を受けたのだ。

「もしかして・・・神様？」

恐る恐る尋ねたシイナだが、そのシイナの様子に男は笑みを浮かべる。

「やつと思い出してくれたかい、シイナちゃん？・・・いや、児玉祐司君と言った方がいいかな？」

「・・・シイナの方で頼むわ。200年以上シイナとして生きてきたから正直前世の自分なんて他人とは思えないわよ。最近自分の前世の事なんて忘れかけてたくらいなもの」

からかうような調子の男に対してシイナはため息をつくように答える。

前世の児玉祐司の記憶を持つてはいるものの、シイナとしてはもはや自分は前世男だったという事実だけを認識しているだけでしかない。

精霊として200年を超える時を生きてきたシイナにとって前世の記憶は知識としてあるだけにすぎない。

シイナ・エアリネ・コノハナにとって、児玉祐司は過去でしかないのだ。

「で、あの約束を果たしにきたの？」

シイナにとっては過去であつてもその児玉祐司の記憶はあり、シイナがこの精霊世界に転生する際にこの目の前の神と交わした契約はしっかりと覚えていた。

前世という身ではあつてもかつて己が交わした契約を破る気持ちはシイナには毛頭ない。

「そうだよ、シイナちゃん。君にはある『物語』の世界に行つてもらいたいんだ」

「『物語』の世界？それつて昔のあたしから見たこの『氣象精霊記』のような世界かしら？」

「うん、その通りだよ。昔のシイナちゃんがいた世界では『魔法先生ネギま』と呼ばれていた物語の世界がそれさ」

「理由を聞いてみてもいい？」

シイナからしてみれば今の生活はかなり気に入っている。

契約である以上従うつもりだが、何故自分がその世界に行く必要があるのか知っておきたかった。

「いや、以前にシイナちゃんにも話した事があるんだけどね、僕を含めた神と呼ばれるような『管理者』は世界の運命因子のバランスを管理しているんだ。ただその中で時々大きな運命因子を持つ生命体が突然に死んでしまつてバランスが崩れる恐れが生まれた時、世界の崩壊を防ぐ為に特別な措置を取るケースがあるんだよ。シイナちゃんみたいに別の世界に生まれ変わらせたりとかね。ただ身内の恥を晒すようで難んだけど……『管理者』にも杜撰な奴がいてね」

アロハの男が何とも言いづらそうにしている様子にシイナの脳裏に嫌な想像が浮かぶ。

「も、もしかして……？」

「うん……。本当なら大きな運命因子を持つ生命体の措置をする場合はその生命体に問題がないか調査するんだけど……面倒臭がつて碌に調査せずに転生させちゃったんだ。そして『魔法先生ネギま』の世界にいわゆるチート能力を持った性格破綻者を放り込む事になった。それでその生命体何だけど……シイナちゃんプレイヤーキラ！って分かるかい？」

アロハの男が疲れた顔で告げた言葉にシイナは自分の背に悪寒が走るのを感じる。

「その顔だと分かったみたいだね……。そう、その生命体は『ハーレムを作る』という莫迦げた欲望の為に邪魔になりそうな物語の人物や他の転生者達を狩りだしたんだ。正直このまま奴を放置すると『魔法先生ネギま』の世界が崩壊しかねないんだよ。そこでシイナちゃんには対象の生命体の駆除を頼みたいんだ」

なんというか……。シイナは頭が痛くなった。

（何処のバカよ、そのハタ迷惑な奴は！）

余りにも情けないというか莫迦らしい事情に思わず何処かに逃避しなくなったシイナだが、契約を交わした以上それを放棄する訳にはいかない。

また聞いていただけでも気分が悪くなるそんな話を放っておくつもりはシイナには無い。

「念のために聞くけど貴方がどうにかするというわけにはいかないのね？」

「決まり事で僕は世界に直接手は出せないんだ。だからこういう時は今回みたいに違う世界から協力者を連れていくんだ。いつでも決まり事で各協力者の一回だけしか頼めないんだけどね」

その言葉を聞きシイナは意を決した。

その後シイナはその仕事が長くて3年程かかるということとその準備をするために一度神と別れたのである。

そうして準備を終えたシイナは今贍部海の畔にアロハの男と立っている。

「いくつか確認したいんだけどいい？」

頷く神にシイナは質問を続ける。

「まずあたしはその仕事が終わればここに帰ってこれるのよね？」

「うん、仕事が終わったら君をこの世界に戻すよ。それは僕が保証する」

一番懸念していた事項が解決したシイナは安堵した。

長くて3年程ならあつという間だ。

「次の質問だけど、この仕事の達成条件について教えて」

シイナの質問に対して神は軽く笑みを浮かべた。

（うん、頭の回転が良くて結構だ。こういう子と仕事するのは本当に楽だよ）

「そうだね。向こうの世界にいる奴がこれ以上悪事を働けないと判断出来るような状態になる事だね。その判断についてはその時になったら僕に相談してくれればいいよ。それと相談用にこれを渡して

おこつ」

アロハの男はシイナの質問に答えつつ何処からか青い玉に紐を通したペンダントのような物を取り出してシイナに渡す。

「これは？」

「連絡用の道具さ。これを持って話しかけてくれれば僕に繋がるよ。他には何か無いかな？」

「……あたしが向こうの世界に行く事で向こうの世界に影響を与える事も考えられるわ。それはどうなるのかしら？それと私の身体は精霊の身体だけどそっちの世界に行ったらどうなるの？」

「基本的に原作に出て来るような人物を殺したり、他の転生者を殺さなければ何をしても問題無いよ。運命因子がその世界から消えなければ何も問題無いからね。それとシイナちゃんの身体だけど基本的に精霊のままだ。まあ人間に視えないと大変だからさつき渡したペンダントを身に付けていれば周囲からは人間に見えるようにしてあるよ。後質問はないかい？」

シイナとしてはこれ以上質問はなかったのでこれに頷く。

「じゃあ確認するよ？シイナちゃんに行ってもらうのは『ネギま』の世界。例の奴の性格上原作の麻帆良学園の人物を狙う可能性が高いからシイナちゃんには麻帆良学園にいつてもらうつもりだ。ここまではいいかい？」

「いいわよ」

200年以上前にしかも前世で読んだ漫画の内容などあまり覚えていなかったシイナだが、神に資料として漫画を渡されてその内容は確認している。

「それでシイナちゃんには原作の2-A組に転入してもらおう。どうやらシイナちゃんはさつさと仕事を終わらせてこの世界に帰りたいみたいだからね。これなら長くて2年位で帰れると思うよ。あと学費とか生活費の方は僕の方でなんとかするから安心してね。」

「ありがとう、助かるわ」

案外と丁寧にフォローしてくれる神にシイナは礼をした。

もしかしたらこの神様も世界の管理で結構苦労しているのかもしれないと思いつながら。

「それと・・・この仕事成功したら報酬として何でも一つお願いを叶えてあげるよ。」

その言葉にシイナは疑問を感じた。

「それは嬉しいけどなんで？この仕事はあたしをこの世界に転生させたことの対価のほすでしょ？」

シイナの律儀さに神は苦笑した。

（こつこつ子ばかりなら僕も楽できるんだけどねえ）

「まあシイナちゃんは快く引き受けてくれたし僕なりのサービスだと思つてよ」



サービスと言われれば受け取らないのも失礼かと思つたシイナはそれで納得した。

「それじゃこれからシイナちゃんを送るよ。目を閉じてね」

シイナが言われたとおりに目を閉じた事を確認すると神はシイナに向けて術を放った。

シイナの身体が光始めたかと思うと次の瞬間には周囲の景色に溶け消える。

「頼んだよ、シイナちゃん」

こうしてシイナ・エアリネ・コノハナは精霊世界からネギまの世界へと旅立った。

## プロローグ 精霊の旅立ち（後書き）

「始まりました気象精霊魔帆良へ！後書きは原作に基づいてあたし、ミリイ・オレアノ・ヤクモと！」

「あたし、ユメミ・ナイアス・スヒチミ・ウガイアが担当するわあゝ。ところでミリイゝ？」

「何？」

「なんであたし達がここにいいのかしらあゝ？」

（ドテツ）

「あんた何も知らないでここにいろの！？」

「うん。だってえゝ作者がここにいれば後で妖精界の銘酒 酒仙童子をくれるっていうからあゝ」

「・・・作者には後であたしがつつこんでおくわ。この小説の原作はネギまと気象精霊記んだけど多分大半の人が気象精霊記を知らないと思うわ。だからあたし達が専門用語とか気象精霊の世界の解説をするのよ」

「ええゝ、面倒くさいわねえゝ・・・ミリイゝ後は頼んだわあゝ」

「（ハリセンを取り出し）スパーンツ！真面目にやりなさい！」

「気を取り直して始めるわよ！まず最初に気象精霊記ってなんなのっていう質問からいくわね。」

「うゝ痛いわあゝ。この気象精霊記って結構古いのよねえゝ」

「そう、気象精霊記はちよつと前のライトノベルよ。あたしとユメミの気象精霊としての活躍を書いた小説で原作者は清水文化先生。富士見ファンタジア文庫から出されているわ。」

「もう廃版になっているからあゝ興味ある人は古本屋を探してみてねえゝ」

「次に読んだ人が疑問に感じるのは精霊世界の大きさね。精霊世界でも大きさはバラバラだけど例えば妖精界は大体地球の公転軌道位

の大きさで一兆を超える精霊が住んでいるわ。」

「面積でいうと地球の陸地面積の一億倍はあるわあ」

「まあ地上世界に比べてとんでもなく広いつてことね。あと精霊はかなり寿命が長いわ。イツミ師匠は3500歳で精霊界でも長老だけど精霊の寿命は大体精霊の霊力が高い程長くなるみたいね。」

「でもあゝ高齢だから年寄りっていうわけじゃないわあゝ。精霊の形態年齢はあゝその人の精神年齢と比例するわあ」

「だからってイツミ師匠が精神が子供ってわけではないんだけどね。精霊の中には形態年齢を操作できる精霊もいるし」

「伯母さんは特別よあゝ。・・・後はあたし達の名前かなあゝ？」

「あたし達精霊の名前は大体3つね。あたしはミリィ・オレアノ・ヤクモだけどヤクモが家の名前でミリィがあたしの名前ね。オレアノは精霊省から精霊として一人前と認められた時に贈られた称号よ。あたしのオレアノは森の精霊っていう意味ね」

「あたしのナイアスは泉の精霊だねえゝ。シイナのエアリネは嵐の精霊だわあゝ」

「シイナ自身は嫌がっているみたいだね・・・。それとユメミみたいに4つ名前がある精霊もいるけどここでは省略するわ。・・・とりあえずこれくらいかな。後は作品の中で説明していく事もあるし」

「そうだねえゝ」

「もし質問があつたら感想に書いてくれれば次の更新であたし達が解説するから質問があればそっちにお願いするわね」

「それじゃあゝ」

「またねゝ」

## 第一話 2 - Aの真価（前書き）

色々考えたんですがプロットを練り直し、改訂した一話を投下し直しました。

かなり早いスピードでアクセスが増えて驚いています。  
読んでくださっている皆様に感謝です。

用事があるので投下は来週になります。

## 第一話 2・Aの真価

エヴァンジュリン・A・K・マクダウエルは不機嫌だった。

周囲にいる2・Aのクラスメートは進級したことで浮かれているが、エヴァンジュリンは既にこの光景を10回以上繰り返している。

10年以上昔に交わした約束も履行されることなくルーチンワークが繰り返されるだけの日々。

昨年超鈴音と葉加瀬聡美の協力によって科学と魔法を融合させたガイノイドの従者である茶々丸が完成し、エヴァのクラスに生徒として在籍しているがだからといって煩わしさが変わるわけではない。

特に今回のクラスは騒がしいことこの上なかった。

（ここまで問題児ばかり集めおって・・・ジジイ、一体何を考えている？）

パツと見ただけでクラスメイトの中に魔力を持つ連中はかなり多い事に加え、特殊技能を持つ者もかなりいる。

これで担任が余程優れた教育者であれば、問題ある生徒をその担任に一任する教育上の配慮と考えることもできるがエヴァンジュリンから見て担任である高畑・T・タカミチは教育者としてそれほど優れているとは思えない。

一般人である新田という教師の方がよっぽど教育者としては上である。

どう見ても学園長が何らかの目的を持ってこのクラスを編成したとしか考えられなかった。

いつの間にかHRが始まり、高畑が転校生を紹介しているがそれもエヴァンジェリンにはどうでもよかった。

例え転校生が来てクラスメイトが増えようがエヴァンジェリンに大きな変化があるわけではない。

その今無駄に元気の良すぎるクラスメイト達によって質問責めにされている木乃花椎奈という女にしても大した魔力を感じるわけでもなく、単に煩い輩が一人増える・・・それだけの話である筈だった。

しかし興味本位でどんな顔の女かチラリとエヴァンジェリンが意識を向けた時、木乃花椎奈に違和感を感じた。

（何だ？このおかしい感覚は。よくわからないが奇妙な力を感じる？）

600年という長い年月の大半を生きてきたエヴァンジェリンにしても初めての感覚だった。

魔力があるわけではなく、気を発しているわけでもない。

普通なら一般人であると判断して見過ごしてしまうだろう転校生の女に感じる微かな違和感。

おそらくこの麻帆良の『正義の魔法使い』の連中では気付かない・・・おそらく学園長でさえ気づいていない。

永き時の大半を裏の世界で生き抜いてきたエヴァンジェリンだからこそ研ぎ澄まされた勘が捉えた違和感。

気にはなつたエヴァンジェリンだが、悪い予感はしなかった。

『もしかしたらこの退屈な生活を変えてくれるかもしれない』

そんなエヴァンジェリン自身にもよく分からない妙な高揚感があった。

（ククク・・・今年はもしかしたら退屈せんかもしれんな）

「マスター？」

自然とエヴァンジェリンの口元には笑みが浮かび、主人の様子に氣付いた茶々丸が声をかけてもエヴァンジェリンの笑みが消えることは無かった。

神がシイナをこの世界に送るにあたり行った処置は完璧だった。

この世界には当たり前のように木乃花椎奈という人物が存在している。

誰から見ても木乃花椎奈は麻帆良学園女子中等部に転校してきた生徒であるというように認識される。

学園長（正直シイナは魍魎界に住む邪仙族めらひひょうんかと思った）と面会した時に軽く思考を走査スキャンしたが、学園長もシイナをそのように認識していた。

ちなみにその時に学園長の靈魂がエゴで漂白・再利用不可能な程に染まりきっているのを見て、精霊世界では魔界にある靈魂工場で溶魂炉に送られることを確信したのだがそれは余談である。

それはおいておくにしても神の施した処置は完全だった。

誰にでもシイナは普通の転校生・木乃花椎奈として認識される。

しかし、それは逆に言えばシイナは完全に普通の転校生として扱われるということである。

転校生という存在にとって転校初日という日の重要度は非常に高い。

特に思春期という複雑な心理状態にある中学生という点を考慮するとこの一日で残りの中学生生活が左右されると言っても過言ではない。

気象精霊としてハプニングが次々起こる中で仕事をこなしてきたシイナの気象精霊としての最大の強みは、常にあらゆる事態を想定して対応策を練っておくという事である。

『原作の登場人物に近づいてくるであろう例の転生者を排除する』という目的を持つシイナにとって『2-Aの生徒』というのは絶好の立ち位置であり、その為にはしっかりとクラスに溶け込まないと



いけない。

そんなシイナにとってこの転校初日は気を遣いすぎるということはある得なかった。

シイナは、転入時に『麻帆良のパパラッチ』こと朝倉和美を筆頭とした2 - Aの好奇心が旺盛過ぎる程旺盛な面々に質よお問攻めに遭ったものの切り抜けてクラスに潜り込むことに成功した。

シイナの外見は周囲と似ている15歳程度とは言ってもシイナは実際前世を含めると300年近い年月を生きている。

対人関係のキャリアで比べたら周囲の生徒と比較になるはずもなく、大した苦労は無かったと言って良い。

しかしそこは異質な麻帆良の中でもクセモノ揃いの2 - Aそれだけで終わるワケがない。

普段は学生の学び舎である教室。

学生寮の自室で荷物の整理をしていたシイナだが突然ルームメイトである五月（これまで超鈴音・葉加瀬聡美と一緒にだった四葉五月が部屋を移り、五月と相部屋）に教室に呼び出された。

原作からシイナは五月が信頼できる人物であり、実際に会ってそれを確信していたので危険性は感じなかったので訝しがりながらも教

室に向かった。

そして教室に入ったシイナを出迎えたのは・・・

『パンツ、パパンツ！』

「「「椎奈ちゃん（さん）2・Aへようこそー！！！！」」」

クラッカーと歓声だった。

教室の真ん中にはご丁寧にもくす玉まで作られている。

そんな突然の出来事に呆然としていたシイナはあれよあれよという間にクラスを中心に連行され、気がつけばコップにジュースをなみなみと注がれて朝とは比べ物にならないくらいの熱気に包まれていた。

ちなみに料理は『超包子』によって五月の新作料理のお試しという名目で格安で提供されている

（これは予想外過ぎるわ・・・ネギだけが例外っていうワケじゃ無かったのね・・・）

普通転校生が来ただけで歓迎会をクラス全体で開くなんて予想できるわけではない。

普通の子供中学生ならクラス内で派閥みたいなものがあり、一致団結するなんてことは珍しいのが普通なのである。

だが今教室には数名の例外を除いてクラスのはぼ全員が顔を揃えている。

歓迎会にしても普通ならそんなに遅くまで校舎に残れる事が許される筈がないのだが、そこは行動力に溢れまくる2・Aの面々。

品行方正で教員からの信用の厚い、『いいんちよ』こと雪広あやかを明石裕奈と佐々木まき絵が煽てて担任の高畑・T・タカミチの同席を条件にクラスの親睦会という名目の元で生徒指導員の新田教諭からあつさりと許可をもぎ取った。

その後各自の部活終了後携帯電話という文明の利器を最大限に活用した連絡網によって驚くべき早さでパーティの準備が整えられたのである。

なんというかノリが良過ぎとしか言いようがない。

隣りに座っていた綾瀬夕映から聞いたそのあまりの手際の良さに思わずシイナは親友の宴会女王が複数いるかと錯覚してしまった。

「歓迎してくれるのは嬉しいけどこれ本当にジュースなの？とこころ踊っている子はいるし、明らかにテンションがおかしいわよ……」

「疑問は正しいと思いますが本当にお酒なんか入ってないです。信じられないかもしれませんがこのクラスではあれで普通です」

教壇でリボンをまさにての延長のように伸ばして空になったペットボトルでお手玉をしているまき絵を『ゴージャドリアン』と書かれた紙パックのジュースを飲みつつ見やり夕映は答える。

修行時代も何かと賑やかな面々に囲まれていたシイナではあったが、流石にお酒が入らない限りはここまでテンションが高くなることはなかった。なのでシイナはあまりにもテンションが高すぎる2・Aの面々に少しひいていた。

そんな元気の良すぎるクラスメイトからシイナは目を放して視線を部屋の隅に向ける。

（朝から思っていたけどやっぱりあの娘・・・）

視線の先にいるのは一見何も無い場所。

窓側の最前列にあるただの机。

教室全体でクラスメイトが騒いでいるのに、その空間のみひっそりとしている。

（・・・これはどうかした方がいいわね、見捨てるとするのは気分が良くないし）

「木乃花さん？どうかしたですか？」

「あ、ゴメン。ちょっと考え事してたから」

「考え事・・・ですか。そういえば木乃花さんはどこか入りたい部活がありますか？もし良かったら図書館探検部に来ませんか？木乃花さんは本が好きそうだし、面白いですよ」

思考を切り上げて誤魔化したシイナに対して部活の誘いをかけるタ

映。

しかしこの一言で一瞬教室は静まりかえった。

そして次の瞬間・・・

「夕映っち！抜け駆けはズルイ！」

「木乃花さんバスケ部入らない！？」

「中国拳法ヤルネ！」

「抜け駆けズルイですー」

「散歩部入ろうよー」

「椎奈ちゃんチアやらない？」

教室は木乃花椎奈歓迎会から木乃花椎奈部活勧誘会へと一瞬で変貌した。

今まででも圧倒されてた2・Aのテンションが氷山の一角に過ぎなかったことを悟ったシイナ。

この事態を打開してくれそうな担任・高畑の姿を探すものの当の高畑は真っ赤になった神楽坂明日菜と話しており、こちらの様子に気付いていない。

（あんた担任でしょー！！？）

これがこのクラスの普通だと割り切っているのか気付いていないのかわからないが、お目付け役の役目を果たしていない担任の様子にシイナは心で叫びを挙げた。

こうして気象室一の苦労性精霊と呼ばれるシイナの異世界での苦労性生活は幕を開けたのであった。

ちなみにこの件からシイナの中での高畑の信用度は著しく落ちたりしたりする。

これが後々色々と影響をもたらすことになるのだが、それはまた後の話である。

## 第一話 2・Aの真価（後書き）

「第一話投稿しました！後書きは引き続きあたし、ミリィ・オレアノ・ヤクモと」

「あたし、ユメミ・ナィアス・スヒチミ・ウガイアが担当するわあ」

「ジュースで宴会か」。シィナは少し不満かもね」

「シィナもおゝ仕事中は飲まないけどお酒好きだからねえ」

「というわけで今回はお酒の話ね！」

「お酒ならお任せえゝ（虚空から酒びんを取りだす）」

「（払い串をハリセンに変化させて）スパーンツ！あんたが飲んでどうするの！」

「えゝとゝゝ。そうそう、お酒の話だったわね。あたし達精霊にとつてお酒は人間でいうご飯みたいなものよ。」

「あたし達はあゝ人間のごはんを食べても栄養にならないんだよあゝ」

「普通なら寝ている間に周りの霊気を人間の呼吸のように吸収するだけで済むんだけど、霊力の大きな精霊とか霊力の消費の激しい術を使うと吸収するだけじゃ足りなくなるのよ。」

「お酒には霊気がいっぱい入ってるわあゝ。人間でいうカロリーって考えた方がいいかもねえ」

「でも精霊が全員お酒好きっていうわけではないのよね。フェイミンさんみたくお茶派もいるし、スズネちゃんみたいにミルク派もあるわ」

「気象精霊はあ、お酒派の人の方が圧倒的に多いんだけどねえ」

「そのお酒派も強いお酒が好きな酒豪派と弱めのお酒が好きな果汁派に分かれているわ。あたしの好きな発泡羊乳酒は酒豪派に入るし、シィナの好きなシールドルは果汁派ね」

「あたしはあゝ・・・」

「ユメミはお酒全部が好きなんでしょうが！」（スパーン！）

「ううゝ、ミリイひどいよおゝ」

「ただお酒にも問題点があるのよね。人間がお肉ばかり食べると身体に良くないように精霊もお酒ばかり飲んでると霊力のバランスが悪くなるわ」

「あたしがあゝ暖房術が苦手な理由がそれなのよねゝ」

「そういう意味ではお茶は精霊にとって身体にいいバランス食品なの。あたしも時々飲んでいるわ」

「あたしだつてのんでるよおゝ」

「あんたが飲んでるのは7対3でブランデーの方が多い紅茶入りブランデーでしょうが！」

「ううゝだつてお酒の方が美味しいんだもんゝ」

「確かにね。精霊世界はお酒が主食だけに地上世界にないようなお酒が沢山あるわ。この物語でも色々出していく予定だから楽しみね」  
「シイナは飲む時は徹底的に飲むからあゝかなりいいお酒を持っているはずよおゝ」

「それじゃ今回はこの辺で」

「またね」「宴会よおゝ！」

「違つてしょ！」



## 第二話 寂しがりな幽霊（前書き）

間が結構空きましたが完成したので投稿します。

設定を見直して前話を書きなおしました。

バトルシーンを期待していた方には申し訳ありませんがバトルシーンはお預けにしました。

用事で出向してる最中に携帯で作成していた番外編が実はかなり書きあがっていたりします。

なので次は番外編になるかもしれません。

いつの間にかPVが10000に近づいていて自分でも焦っています。

ご期待に沿えるよう、頑張りたいと思います。

## 第二話 寂しがりな幽霊

(ううゝ、やっぱり見られてるのかなあゝ?)

相坂さよは困惑していた。

幽霊生活を始めて50年以上にして初めての経験である。

何で自らが幽霊になったのかという問題についてさよ自身は覚えていない。

以前この麻帆良学園に通っていた記憶はかすかにあるのだが、酷く臃げなのである。

だからさよとしては気付いたら幽霊になっていたという状態であり、それ以来60年近くを地縛霊として生きて(?)きた。

その間生徒の何人かが悪寒を感じることもあり、高名な除霊師が呼ばれた事も幾度があるのだが何故か除霊師達にはさよを認識できず結局何もされないまま現在に至っている。

それはこの教室を使うのが今の2・Aになつてからも同様であった。

さよから見て誰一人さよの姿を見れている生徒はおらず、さよの事が話題に上る事さえない。

流石に同じ事を60年近くも繰り返していたら嫌気もさすが、さよ本人が成仏したいと思っけていてもその方法さえ分からない状態である。

おまけに本来さよは話すことの出来る相手が60年もない事でここ最近本当に精神的につらくなってきた。

そんな状況の中で変化が起きたのはつい先日のことだった。

2・Aに転入してきた転校生である木乃花椎奈が転校初日から度々さよに視線を向けてくるのだ。

（私の席だけじゃないみたいだし……）

最初は普通の生徒のように何故か空席になっている『座らずの席』を疑問に思っただけかと思っていたさよだが、どうも木乃花椎奈はさよがいる場所を見ているように感じるようになった。

（私の思い上がり……じゃないよね？）

自分に自信のない弱気なさよは、当初はその考えに自信は持てなかったが、その思いは日々確信に近づいている。

（私……希望を持っていいのかな？）

暗闇のようになにかかる絶望の中で60年近くたってようやく見つけた光明である。

『もしこれが勘違いだったら？』と考えると二度と立ち上がれなくなってしまうように思える。

（でももし本当に私が見えてるなら……）

人と話しをする。

想像しただけで胸が暖くなる。

深夜人が誰一人いない校舎で暗闇の中一人でいることが怖かった。

最近24時間店に灯りが点り、人が集まる『コンビニ』というものが出来て暗さからは逃げる事が出来たものの胸に空いた寂しさは埋まらない。

（でも……それでもだめだったら……ダメ！弱気になるな私！絶対……木乃花さんと友達になるんだ！）

自分を奮い立たせるように拳を握り、気合いを入れるさよ。

その瞬間さよから進む霊力がポルターガイスト現象を起こし、21 Aの教室を混沌に叩きこむというハプニングが起きたりしたのだが、それは全くの余談である。

放課後。

基本的に部活熱心な生徒が多い2 - Aは大抵掃除係を残してすぐに

いなくなる。

そしてその掃除係が帰ってしまうとほとんど誰もいない。

だがこの日は掃除係でしかも日直だったシイナが日誌を書く為に教室に残っていた。

（あわわ、これってもしかして絶好のチャンス！？）

決心してシイナに話しかけるタイミングを探っていたさよは興奮した。

（頑張れ私！絶対に木乃花さんと友達になるんだから！）

意を決したさよは自身を奮い立たせてシイナに正面から近づく。

「あの「相坂さよさんだよね？」……へ？」

いざ話しかけた時に逆に頭を上げたシイナから声を掛けられてさよは驚きで固まった。

「は、はいっ！私は相坂さよですっ！」

「今まで声を掛けられなくてごめんね。もう日誌書き終わるからそうしたらちよつと私に付き合ってくれないかな？ここじゃ話をするにもなんだしね」

「は、はい！こちらこそ是非お願いします！」

マイペースに話し掛けてくるシイナにさよは動転しながらも応じた

ものの、あまりにもあっけない展開に啞然としてしまった。

（はう、私さんざん悩んだのに）

拍子ぬけするような出来事に脱力と少しの安堵を覚えながら。

その後書き終えた日誌を職員室のタカミチに届けたシイナがさよを連れて行ったのは学生寮のシイナと五月の部屋だった。

ちなみに五月は夕方の『超包子』の営業の為に平日の夕方はいつも留守にしている為にいない。

「ここよ、どうぞ」

「おじゃまします。……あれ？」

ドアを開けたシイナに続いて部屋に入ったさよだが、部屋に入った瞬間妙な感触を感じた。

（あれ、なんだかいつも少し感じてた息苦しさがない？）

さよは幽霊となってから常に息苦しさというか身体に何かのしかかっているような感覚を感じていた。

それは年に2日くらいの例外の日を除いてずっとのことだったので、幽霊とはそういうものとして理解してもはや慣れてしまっていたりしたので、この部屋に入った瞬間その感覚が無くなったのである。

「身体が軽くなったでしょ？この部屋全体に結界を張ったからね。今お茶出すから待っててね」

「え？結界？あ、あの、それって……あ、あと私幽霊ですからお茶は……」

「確か前にフェイミンさんから貰ったスイユイカオシャン翠玉高山のお茶が残ってた筈よね」

続けて起きている突発的な出来事やシイナの聞きなれない言葉に混乱するさよであつたが、シイナがいきなり虚空から茶壺や急須等の茶道具を取り出し、卓袱台に並べていくのを見て言おうとしていた言葉を呑み込む。

（もう何がなんだかわからないです）

さよは余りの混乱に思考を放棄しておとなしく待つ事にしたようである。

その間にも急に水の入ったヤカンが空中に現れたかと思うとそれが一瞬で沸騰し、シイナが手際良くお茶を淹れてゆく。

程なくして部屋にはさよが今まで嗅いだことのないような不思議なやさしい香りが漂う。

「はい、どうぞ」

少ししてさよの目の前にシイナが白い陶製の茶杯に入った鮮やかな黄緑色のお茶を置く。

やさしげな香りに誘われてさよは茶杯を手にとった。

「いただきます」

お茶に口をつけると口の中に爽やかな味わいとともに鮮烈な香りが広がり、その後には微かな甘みが残った。

「……おいしいです」

久しぶりに味わう味覚という感覚にさよの目から涙がこぼれる。

さよの頭に『何故幽霊の自分がお茶を飲めたのか?』という疑問が浮かぶが、それを遥かに上回るお茶の心地よさと感動によりすぐに消えた。

「落ち着いた?」

さよの気持ちが落ち着いた頃を見計らって同じくお茶を飲んでいたシイナが声を掛けた。

頷くさよにシイナは微笑みながら続ける。

「改めて自己紹介するわね。あたしはシイナ・エアリネ・コノハナ、精霊世界……こことは違う世界から来た精霊よ」

「え、ええ、え〜と、木乃花さんが精霊で、シイナ……?」

シイナの言葉に思わずさよは飲んでいた茶杯から口を離す。



突然告げられた内容にさよは理解が追いつかずに目をぐるぐると回す。

その様子にシイナは微笑んでさよを刺激しないように注意しつつゆっくりと話し始める。

「そうね、さよちゃんも混乱するだろうから一つずつ話すわね？まず木乃花椎奈というのは偽名よ。偽名を名乗ったのはそっちの方が混乱が少ないから。あたしは目的というか仕事みたいなものがあるってこの世界に來ただけで余計な苦勞は無い方がいいからね、ここまではいい？」

相槌をうつさよを確認するとシイナは話を続ける。

「精霊っていうのは精霊世界に住む靈的な存在……今のさよちゃんに近い存在よ。精霊世界では精霊が人間と同じように社会を作って暮らしてるわ。それぞれが役目を持って仕事をしているの」

「え〜と……シイナさんは精霊なんですよ？シイナさんは何の精霊なんですか？」

「あたしは火の精霊で氣象精霊……地上の氣象を管理する仕事をしているわ。具体的には台風を起こしたりとか雨を降らせたりとかそういう仕事ね」

さよの質問に答えたシイナは『はわ〜』とか言いつつ感嘆しているさよを見やる。

「ここまでいきなりだったから多分さよちゃんも聞きたいこといっぱいあるでしょ？さよちゃんが聞きたい事にあたしが答えていくわ、

答えられる事なら何でも答えるわよ？」

さよは再びお茶を飲み、目を閉じた。

お茶の効果なのかさよの頭はすっきりとしており、いつになく思考が巡る。

少しして頭の中で聞きたい事を整理し終えたさよが目を開ける。

「シイナさんは最初から私の事が見えていたんですよね？何でシイナさんには私が見えるのでしょうか？今まで普通の人は私に気付きませんでしたし、時々私を除霊しに来た除霊者の人も私を見れなかったのですけど」

「あたしがさよちゃんを見て話す事ができるのは貴女が精霊のなりかけだからよ。はつきり言って今のさよちゃんは少し特殊な存在なんだけどこれはまた後で話すわね？簡単に言うと同じ幽霊みたいな存在同士だから会話できるってことね」

「え、でも今のシイナさんはクラスの人とお話していますし……」

「うーん、今のあたしは特殊な状態なのよ。本当はあたしもさよちゃんみたいに普通の人間には見ることが出来ないんだけど、あたしに今の仕事を頼んだ人がやりにくいだろうからってあたしが人間に見えるような術……魔法みたいなものを掛けてくれたの。だからこういうことも出来るわよ。……少しごめんね」

シイナが座ったまま少し浮かぶとさよに近寄り、その手に触れる。

さよには今のシイナが人間ではなく自分と同じ存在だということが

感覚で理解できた。

（温かい……。そうだ、人の手ってこんなに温かかったんだ……）

その瞬間さよの目から涙が溢れだす。

幽霊となって目覚めて以来長年求め続けた人の温もり。

それをようやく手にしたことで泣き崩れるさよをシイナは何も言わずに背中をなでながら見守る。

「もう大丈夫かしら？」

「は、はい。いきなり泣いちゃってすみません」

しばらくしてようやく泣きやんださよは涙を拭いつつシイナに笑顔を向ける。

その後しばらく黙ってもじもじとしていたさよだが、やがて意を決して顔を上げた。

「あ、あの！その今のシイナさんに掛っている魔法を私にもかけて頂くことは出来ないでしょうか！？」

「理論的には出来ない訳ではないんだけど……あたしはその術に必要な幻想の属性が無いのよ。力になれなくてごめんね」

さよの願いに対して申し訳なさそうに頭を下げるシイナにさよは慌てた。

「いえ、そんなシイナさんが頭を下げないください！私が勝手にお願いしたけなんですから！シイナさんが気にする必要は全くありませんから！」

何とか話題を変えようとさよは慌てながら次の質問を考える。

「あのつ、私今まで机とか少しだけ動かすくらいなら出来るんですけど食べたりの飲んだりは出来なかったんですが、何でこのお茶を飲んでいるんでしょうか!？」

その問いにシイナは頭を上げた。

「それはそのお茶が精霊世界のモノでさよちゃんやあたしの身体と同じ霊力で構成されているからよ。今までのさよちゃんは霊力を通して物に触れられても、実体として物に触れられるだけの霊力が無かったんでしょうね。地上の物質は霊力の密度が薄いし。」

「そうなんですか……でも味わう事が出来て本当に嬉しいです。食べ物ってこんなに幸せなものなんですね」

シイナが姿勢を戻したことに安心したさよは置いたお茶に手を伸ばして口に含みながら幸せそうに微笑む。

「そこまでおいしそうに飲んでくれるとこっちまで嬉しくなるわね」  
顔を緩めつつこちらもお茶を飲むシイナ。

「あ、あともう一つ聞きたい事がありました。この部屋に入った時なんだか身体が軽くなったんです。今まで一年に2回くらい似たような事があったんですけど……シイナさんは結界って言っていましたよね？どういことなのでしょうか？」

その言葉を聞いてシイナは少し顔を引き締めた。

「そうね……。あたしがさよちゃんに話しかけた理由もそれに関係するからまとめて話すわね。少し長くなるけどいい？」

確認するシイナにさよは頷く。

「さつきさよちゃんが特殊な存在だっていったわよね？あたしのいた世界では……人間というか生き物にはそれぞれ達成するべき使命というのがあるの。何回も転生を繰り返して魂は使命を見つけ出して果たすことで、魂は少しずつ大きく成長していくのよ。そうして大きくなった魂はやがて精霊の核となるわ。それを精霊が受うけ止めて精霊として生を受けるの。……あたしも驚いたんだけどさよちゃんはその精霊の核のような状態なのよ。この世界にそういう精霊はいないみたいだから不思議に思ったんだけどね。それで……」

シイナは一旦話を区切った。

そしてなにやら言いづらそうな表情をする。

シイナの壮大なスケールの話しに圧倒されて聞き入っていたさよだがシイナの話し辛そうな様子から自分に関係する話しにくい内容だと察した。

「シイナさん、続けてください。私は大丈夫ですから」

さよの毅然とした様子に後押しされたシイナは再び口を開く。

「この麻帆良には都市全体を覆うように結界が展開されているわ。この結界には高位の霊格を持つ存在の力を抑える効果があるの。さよちゃんは精霊に昇華する所をこの麻帆良を覆っている結界に邪魔されていたんでしょうね。結果として精霊になりかけの中途半端な存在になってしまっているのが今のさよちゃんよ。精霊は生物には見えないわ。貴女は丁度靈魂と精霊の中間くらいの存在だから他の人には見えにくかったんでしょうね」

シイナは一度言葉を区切るとお茶を飲み、再び話し出す。

「この麻帆良を覆う結界はあたしにも効果はあるんだろうけどあたしの霊力なら簡単に抵抗<sup>レジスト</sup>出来るわ。でもそうするともしかしたら学園側に気付かれて面倒な事になるかもしれないからあたしは自分を時空結界を覆うようにして掛けてその効果を防いでいるの。今はこの部屋全体に結界の領域を広げているからさよちゃんは学園の結界の効果を受けなくなったからさよちゃんは重たさを感じなくなったのよ。……さよちゃん、貴女は自分を苦しめた学園が憎い？」

最後にシイナが尋ねた質問にさよは目を閉じる。

そして再び目を開けた時さよの瞳には優しげな色が浮かんでいた。

「いい気分はしませんけど学園を恨もうとは思いません。確かにこの60年辛くはありましたけどこうして今シイナさんとお話し出来ていますから。何かを恨むより何かを喜ぶ方が楽しいと思います。……あの、シイナさん、こんな私ですけど出来たら私と友達になつてくれませんか？私ずっと寂しくて友達が欲しくてシイナさんとお

話したかったんです」

そんなさよの様子にシイナは笑った。

「なんというか……人がいいわねえ。あたしでいいならいつでも話し相手になつてあげるわよ。これからよろしくね、さよちゃん」

「こ、こちらこそよろしくお願いします！」

お互いに頭を下げるさよとシイナだが顔を上げて見つめ合うと同時に笑いだした。

実はこの時さよの念願が叶ったとともにシイナの目的も達成されていた。

シイナがさよに関わったのは理由あつてのことである。

シイナは原作を知ったときに注目した人物の一人が相坂さよだった。

シイナ・エアリネ・コノハナは穏やかで冷静な氣象精霊であるが、その実修行時代から常に仲間と共に行動している。

シイナは人間で言えば『自分が中心になつて騒ぐわけではないが、お祭りとか賑やかな雰囲氣が好きな人物』つまり集団行動をとる寂しがり屋なのである。

そんなシイナにとってこれから少なくとも1年はこの世界で生活しなくてはならない事を考えるとどうしても気兼ねなく話せる友人が欲しかったのである。

原作を読んだ時、シイナはさよが自分に似て寂しがりなところから興味を持っていた。

そして教室でさよを見た時に彼女が精霊に似た雰囲気を持っていることに気付いたのである。

その後数日さよを観察する内にシイナはさよの精霊に近い性質を確信するに至った。

そうした事情からシイナはさよを仲間にする事を思い立ったのだ。

その決心の中には、寂しそうだったさよを放っておけないという気持ちもあった。

シイナは一見冷たそうに見えて困っている人を中々放っておけない苦勞性持ちなのである。

そうしてシイナは結界を展開し、学園側から認識されないように行動に移す。

さすがに何も無い（ように見える）ところでさよに話しかけると不審に思われるのでシイナはそのタイミングを探り続けていたのだ。

つまり今日はさよにとって千載一隅の好機であるとともに、シイナにとっても好機だったのである。

お互い求め合っていた二人がこうした関係を築いたのは半ば当然であつたのかもしれない。



しばらく笑っていた二人だが、シイナがさよに話しかける。

「最初の方に話したけどあたしは仕事というか目的があってここに来たの。やる事が終わったら元の世界に帰るわ」

その言葉にさよは寂しそうな困った顔をする。

ようやく出来たばかりの友達と別れることを考えれば当然だろう。

「そこでさよちゃんに提案ね。あたしと一緒にあたしの住んでいる世界にこない？」

「行きますっ！」

間髪を入れずに勢いよく答えたさよにシイナはビックリして持っていた茶杯を思わず落しかけた。

「い、いきなりね……。本当にいいの？」

「はい！私シイナさんとずっと友達でいたいですから！会えなくなるのは寂しいですし、その世界にはシイナさんみたいな精霊さんが一杯いるんですよね？ならもっと友達を作れるじゃないですか！」

満面の笑顔で元気よく話すさよの前向きさにシイナは笑いだした。

「そう、なら一緒に行きましょうか。多分何とかなるわ」

「はい！よろしく願いします！」

こうして寂しがり屋の幽霊はその孤独な運命から解き放たれた。

この二人、この後人間には予想もつかない時間を共に過ごすことになるのだがそれが語られるのはまた別の機会である。

後日。

（最近相坂がずっと木乃花の隣にいるな。木乃花も気付いて話しているようだし……。ククク、ジジイ、奴は貴様の頸木から解き放たれたようだぞ？）

長き時を生きる吸血鬼は事態を面白がり、

「フオ？なんだかワシ大切なものを失ったような気がするんじやが

……」

自分を長年苦しめた結界を放置していた学園のトップに好感を持つ筈がなく、新たに得た友人という存在によってさよが昔自分に好意を抱いていた相手を思い出す可能性さえ抹消された老人は人知れず寂しさを感じていたが、それは自業自得である。

ちなみにさよがこの後学園長の前に現れることは二度となかった。

さよもあまり学園のトップになど会いたくなかったし、シイナにしてもさよとの関係から学園長に疑われるのは嫌だったので学園長の目に触れそうな時はシイナがさよを結界で隠したのである。

ちなみにタカミチは靈視の才能自体が無かったりするのでさよの動向には全く気付いていなかった。

## 第二話 寂しがりな幽霊（後書き）

「恒例となった後書きコーナー！進行はあたし、ミリィ・オレアノ・ヤクモと！」

「あたし、ユメミ・ナイアス・スヒチミ・ウガイアでえ担当するわあゝ」

「さて、作者が急に思い立っていろいろ変更をしたようね」

「なんていうかあゝ、計画性なさすぎだわあゝ」

「まあ作者は酔っ払って書いていることが多いみたいだからね、いい加減にして欲しいわね」

「ビール3本くらいで酔うなんて弱すぎよあゝ」

「あんたと比べたら誰でも弱い気がするけどね……。まあそれはさておき今回は作中でシイナも何回か使っているあたしたち精霊の術について説明するわ」

「正確にはあゝ霊術だけどねえゝ」

「あたしたちは体内にある霊力を使って霊術を使うんだけどまずこれが人間の魔法との大きな違いね」

「実は人間も精霊も使うエネルギー自体は同じよあゝ。ただあゝ精霊の霊術はあたし達自身の力を使うけどお、人間の魔法はあたし達みたいな霊的存在の力を借りているといえるわねえ。だから人間の魔力の大きさは霊力を受け入れるキャパシティみたいなのおゝ」

「ただシイナが今いる世界で魔法使いが誰から力を借りているのか謎ね。もしかしたらあたし達みたいに意志を持たない精霊みたいな存在がいるのかもね」

「あたし達の世界の人間に力を貸すのはあヒマな下級精霊か運命室に依頼されたあ上級天使が殆どだけどねえ」

「話しが少しズレているわね。とにかくあたし達の霊術は精霊自身のエネルギーを使っているんだ。あたしたちの持つ霊力には全て属性があつて、その属性の強弱によって職業上におけるその精霊の属

性や称号・行動などが決定されるのよ」

「属性にはあ、火・水・風・大地の四大元素とお、靈魂・幻想・時空の三亜元素があるわあ」

「全ての元素を扱える精霊はいなくてそれぞれ得意不得意があるんだよね。まず火から解説するとこれは物質の第4形態いわゆる『プラズマ体』を操る力よ。具体的には火・熱・雷・光を操れるわ。氣象操作では高気圧を操ったりするわね。あたしはこの属性がかなり弱いけどユメミやキャサリンさんが得意な属性ね。イツミさんは精霊世界でも最高クラスの火の能力を持つけどシイナはこれに匹敵する位の力を持っているわ」

「シイナ自身はあ普段はあまり使わないけどねえ……。『あたしが火を使うとミリイみたくなるからあ、細かいコントロールが出来るようになるまで安心して使えない』とか言つてえ」

「そうそう、あたしみたく何かとバカでかい力を使っちゃうから……。って何ソレ!？」

「水の属性はあ、水みたいな液体を操るからだねえ。氣象なら海流や低気圧、発展して水竜巻とかを操ることが出来るわあ、水なら水蒸気とか逆に氷とかも操れるねえ。あたしやフェイちゃん、キャサリンさんが得意だよ。ミリイやシイナも扱えるけど得意ではないわあ」

「見事に無視したわね……。まあいいわ。次に風の属性ね。風は空氣の流れを操る属性よ。氣流を操作したり竜巻を起こしたりできるわ。台風の操作で最も重視される属性でもあるわね。あたしが一番得意な属性で他にもファムとかパイカラが得意ね」

「シイナも得意なんだけどおミリイやファムには及ばないわあ。まあ氣象精霊の中でトップクラスの風使い相手だから対象が悪いかもしれないけどねえ」

「うちの支局はジュデイスさんを含めて凄い風使いが揃っていたからね。でもシイナの風の能力はかなり高いわよ」

「大地の属性はあ、固体を操る力よ。震動を操作できるわあ。地

震とか火山の操作に使うけどお、植物の操作にかなり関わっているわねえ。余り得意な人は知り合いには少ないけどお、フィオレさんやミリイ、キャサリンさんが得意ねえ」

「ユメミとシイナは一応術を使えはするけどかなり苦手ね。この四つの属性が精霊の基本よ。残りの三亜元素属性は補助的な役割が強いわ」

「靈魂の属性はあ、生物に含まれる霊的な力で魂とかを操る術よお。生命に関わる操作をするならあ、必須の属性だよお。あたしやイツミ伯母さんにはこの属性は無いわあ」

「あたしはこの属性がかなり高いけどシイナも高わね。あたし達精霊は霊的な存在だからこれと風の属性を組み合わせることで治癒霊術として使う事ができるわね。何かと他の属性と組んで使うことが多い属性よ」

「大地と合わせてえ植物の操作とか、幻想と合わせてえ動物を操作出来るねえ」

「次は幻想の属性かな。これは物質を操作・変換する属性よ。幻術を使うこともできるわ。考えている事を具現化したり、物質の性質や形状を変えたりできるわね。ジユデイスさんは物質変換術と言ってお酒をお酢に変えたりしたわ。あたしやフェイミンさんが得意な属性ね」

「あたしとおシイナは才能が0の属性ねえ。ミリイは前に音速で空を飛ぶ巨大な樹のバケモノを作り出したこともあったわあ」

「昔のことほじくりかえさないでよ……。最後は時空の属性ね。これは時空間に干渉して操作する属性よ。結界を作ったり、逆に精霊の作った結界を見破るには必須の属性だわ。他にも時の流れを操ったり空間転移、亜空間収納とかもできるよ。あたしには全く才能が無い属性だけど」

「ミリイは結界の存在さえ感じ取れないからねえ……。イツミ伯母さんとあたしが得意な属性でえ、精霊界屈指の能力の高さよお」  
「フェイミンさんとシイナも得意よね。シイナはユメミには負ける

けど互角に近い能力を持つてゐるわ。・・・こんなところかな？」

「そうだねえ」

「じゃあ今回はこの辺りで」

「「またね」」

## 間話1 とある教師の憂鬱（前書き）

えゝ、御無沙汰してます。

作者のリアルでいろいろゴタゴタがあって更新できませんでした。

なんとか間をつくって小話を作ったんで投下します。



## 間話1 とある教師の憂鬱

SIDE 高畑

「教室にいたのは私が最後でした。日誌をお返しします」

「うん、御苦労さま」

僕は高畑・T・タカミチ。

この麻帆良学園で教師と魔法関係の仕事をしている麻帆良学園女子中等部2-Aの担任だ。

この麻帆良学園都市は関東魔法協会の本部という側面もあるから少々特殊な環境になっていて、何も関係の無い一般人の教師や生徒に混じって魔法関係者・・・いわゆる魔法先生や魔法生徒が存在している。

僕も特異な立場ではあるけど、魔法先生の一人としてこの麻帆良学園にいるんだ。

魔法先生といっても教師としてこの学校にいるからにはその職分を果たさなければいけない。

僕はわりかし魔法世界でも名前が通っているせいで出張任務に出ることも多い。

だから担任としてクラスを受け持つてはいるけど十分に生徒の事を見きれている自信は無い。

正直なんで僕をあのアスナくんや詠春さんの娘さんを含めた特別に注意が必要な子が多いクラスの担任にしたのか学園長の考えは分からない。

最初は抗議したんだけどいつもの調子ではぐらかされてしまった。

でも担任として受け持ったからにはしっかりと仕事を果たすつもりはあるんだ。

そして僕が今担任として一番気になっているのは日誌を届けに来た女の子、木乃花椎奈くんだ。

「どうだい、木乃花くん。ここでの生活には慣れたかい？」

「はい、寮の同室の四葉さんも良くしてくれてますし、クラスの人も何とつかフレンドリーな子が多いので……。では私はこれで失礼します」

少し話そうと思って話を振ったんだけどあっさりと避けられてしまった。

そして木乃花くんはさっさと職員室からでていってしまっつ。

動作が早いわけではないけどその動きは自然で呼び止める間が無い。

「はあっ」

そして職員室のドアが閉じられると僕はため息を吐いた。

「あれ、どうしたんですか高畑先生？」

そんな僕の様子に気づいたのか同じく2年生を担当しているキツネ目の優しい風貌をした瀬流彦くんが声をかけてきた。

彼も僕と同じで新人ではあるけど魔法先生の一人だ。

同僚で同じく担任ということもあって僕も少し今の悩みを話したくなる。

「いや、今来た生徒は僕のクラスの子で転校生なんだけどね？僕は何故か彼女に避けられているような気がするんだよ」

木乃花くんが僕のクラスに転入してきて一週間位になる。

見た限り木乃花くんは穏やかな性格のようでクラスの子と上手く付き合っている。

そのあたりは彼女自身が言っていたように問題はないと思う。

でもね・・・

「廊下ですれ違った時とか挨拶はしてくるんだけどね、僕と必要以上に話そうとしないんだ」

クラスの子に人当たりが良いらしい彼女だけに僕にだけそういう反応をするのが少し気になる。

「まあ思春期の女の子ですからね。僕のクラスにも結構そういう子はいますよ」

まあ確かに年齢から考えれば珍しいことではないかもしれない。

現に僕のクラスにもそういう傾向がある子は他にもいる。

「そうなんだけどね、何ていうかな？彼女から僕に対する忌避感みたいなものを感じるんだよ」

そう、気のせいなのかもしれないが彼女ははっきりと僕を避けようとして避けているように思えるんだ。

「・・・うちは女子校ですからね。もしかしたら前の学校で男性に嫌な思いをした事がるのかも・・・」

瀬流彦くんは穿った見方を示すけど僕はその線は薄いと考えている。

「いや、この前新田先生と相談しているのを見かけたからそれはないと思うよ」

新田先生に進んで話しかける生徒は珍しいからよく覚えているんだ。

「新田先生と？うーん、高畑先生はその子について何か学園長から連絡を受けたんですか？」

「いや、転校生として紹介されただけだよ」

「じゃあこちら側という事はないですね」

もしかしたら魔法関係者かもと瀬流彦くんは考えたみたいけどその線はないだろうね。

関東に入る魔法関係者は学園長が管理しているはずだ。

英雄に匹敵する力を持つ魔法使いである学園長の目から逃れられるとは思えないし、何より彼女自身から魔力が感じられない。

結局彼女が僕を避ける理由は分からず仕舞いのまま僕は瀬流彦くんにお礼を言ってから仕事に戻った。

本当になんで木乃花くんは僕を避けているんだろうか？

## S I D E   O U T

後日   とある幽霊少女と転校生の会話

「そういえばシイナさんって高畑先生を避けてますよね。何でなんですか？」

「別に高畑先生自身が嫌いというわけじゃないんだけどね……。高畑先生はヘビースモーカーだから身体とか服にニコチンがこびり付いてるのよ」

「ニコチン・・・ですか？」

「うん、ニコチンはね？地上の多くの生き物にも有害だけどとりわけあたし達精霊には猛毒で触れただけで霊体が分解されちゃうの。普段は風の繭で身体を守ってるんだけど学園で術を使ったら怪しまれるかもしれないからそれは使えないのよ。だからできるだけ高畑先生は避けてるの」

「へえ、そうなんですか。・・・ああ、そういえば私も何だか高畑先生の側へ行くと息苦しいんですね」

「ちょっと！さよは半分精霊なんだから下手したら霊体が崩れるわよ？！絶対避けなさい！！」

「は、はい！！」

## とある学園の職員室

「くしゅんっ！」

「高畑先生、風邪ですか？」

「いや、そうじゃないんだけど・・・何で寂しさを感じるんだろう？」



間話1 とある教師の憂鬱（後書き）

「恒例の後書き担当、ミリイ・オレアノ・ヤクモです」

「同じく後書き担当のユメミよお」

「今回は時間がないようなんで短めに行くわね」

「今回はあニコチンについての話だったねえ」

「うん、精霊にとってニコチンは猛毒で煙草は毒でしかないわ」

「だからフィオレさんとか運脈精霊はあ『いつも煙草に気をつけなきゃいけない』って言っていたわあ」

「運脈精霊は人に近くで仕事することが多いからね」

「その代り精霊はアルコールで身体を壊すことはないわあ」

「ユメミみたいに霊力のバランスを壊すまでお酒を飲むのも問題だと思うけど」

「本日の後書きはあここまでえ」

「あ、こらユメミ！」



### 第三話 日本お天気事情（前書き）

第三話投下します。

コメディのつもりなのに全然コメディにならない。

自分のギャグセンスの無さに軽く絶望中です。

いつのまにかPVが20000突破しました。

読んでくださっている皆様に感謝です。

### 第三話 日本お天気事情

桜が散ってからというものの日本・・・特に関東地方では一月程異常気象が続いている。

春は元々天気が不安定で雨が降りやすい季節ではあるが、例年より異常に雨が良く降る。

それだけではなく本来この季節は滅多にこないはずである台風が本土に上陸したりしている。

日本列島全体で異常気象と騒がれてはいるが、その割には意外と被害は起きていない。

雨の異常に降っている関東地方でも雨が降ったかと思えばいきなり気持ちのよいような日本晴れになったりする為に日照不足という事態にはなっておらず、雨も適度な量が降るので作物の育ちはむしろ例年よりいい。

台風が来ても洪水や土砂崩れといった被害はほとんど起きていない。サイクロンやハリケーン、竜巻が日本近海で起きてはいるものの、不思議と津波による被害が起こらない。

何とも不思議な状態ではあるが、そこはお気楽民族の日本人。

被害がないと分かると次第に国民の興味も薄れ、テレビも余り熱心に報道しなくなった。

そんな状態ではあったが、関東地方では気付く人が見れば異常すぎる程な事態が起きたりしていた。

何しろこの関東地方、まるで雨雲が掃除するかのよう規則正しい周期で通過して適度な雨を降らせている。

お陰で空気が適度に湿って花粉が殆ど飛ばず、花粉症の人が大喜びしていたりするのだがその中でも埼玉県のある地域ではきっかり秒単位で雨が降ったり止んだりを規則正しく繰り返していた。

## とある天気番組

### ケース1 台風

『気象予報の時間です。本日の解説も気象予報協会の岸緒さんをお願いします』

頼りなさそうな若い男のアナウンサーが天気図を背景に偉そうな態度の老紳士に頭を下げる。

『まず最初に天気の概要です。南の海上から日本列島へ向けて近づいている台風5号ですが、更に勢力を強めています。午後3時の時点での中心気圧は935hpa、<sup>ヘクトパスカル</sup>最大風速は秒速50mとなっています。台風の半径は600kmです。また、同時期に現れた台風6号も勢力を強めており、こちらは中心気圧945hpa、<sup>ヘクトパスカル</sup>最大風

速も秒速45m、半径は500kmという大きさを台風5号の後に  
続いております。

さて、岸緒さん今回の台風の現象について解説をお願いします」

「今回の台風は海の温度の上昇により、勢力が強まったものです。  
しかしこれからは次第に弱くなっていくでしょう」

解説を担当する老紳士は傲慢というか偉そうな態度で答える。

「はあ、なるほど。しかし岸緒さん？昨日の予報でも勢力は弱まっ  
ていくとのことでしたが今朝から更に強くなっているのですが・・・

」

アナウンサーが遠慮がちに問いかける。

「季節外れの台風ですからな、少しズレはあるかもしれませんがこ  
れから強まることはありえません。『藤原の効果』により二つの台  
風が接近した場合双方の力が弱まると決まっています！」

アナウンサーの指摘を不快に感じたらしい老紳士は半ばから吠える  
ように語気荒く言い切った。

「ですが天気図をご覧下さい。この二つの台風は既に2日も隣りあ  
って進んでいます。しかもどちらも勢力が強くなっているので・・・

」

「ふざけんな！」

アナウンサーの反論の途中で老紳士が叫ぶ。

『そんなのは偶然なんだよ！二つの台風が近づいた時は『藤原の効果』が表れるって50年以上前からの常識なんだ！お互い勢力を強めるなんてありえねえんだよ！』

どうやらキレてしまったらしい老紳士がマイクを握りしめて絶叫する。

『あ、あのう・・・岸緒さん？』

アナウンサーが止めようとするが老紳士はそれが気に障ったようであらう更にヒートアップする。

『大体なあ！こんな時期に台風が完全な上陸コースで来ること自体からして異常気象なんだよ！そんな事例さえない状態で解説をさせられる俺の立場になってみやがれ！そんな解説出来るわけねえだろうが！くそお！責任者出て来い！俺とサシで勝負しやがれえ！！！』  
『つておい！何するんだ！？』

髪を振り乱しながら叫ぶ元老紳士の後ろに黒服の屈強そうなガードマンが現れ元老紳士を羽交い締めにする。

その次の瞬間テレビの画面が変わった。

『』』番組の途中お見苦しい場面がございましたことをお詫びいたします。再開までしばらくお待ちください。『』』

しかし番組が変わる前の瞬間に元老紳士がズルズルと引きずられるシーンがしっかりと放映されており、ニュース番組なのにコントのシーンが放映されるというこの番組はその年のハプニング大賞にぶちぎりでランクインしたりする。

ちなみにこの元老紳士はこのシーンのおかげで減給となったのだがそれは余談である。

## ケース2 竜巻

『やあやあ、こんばんは。気象予報官の上澤です。皆今日も一日元気だったかな？夕方の天気予報の時間だよ』

夕方のテレビ番組に登場したのは水色の背広にピンクのシャツ、更にオレンジのネクタイを締めた見るからに軽佻浮薄そうな若い男性が登場した。

『今日も雨が降ったり止んだり晴れたり曇ったりと面白い天気になったね。それじゃあ全国の天気に入る前に皆が注目している竜巻について話そうか』

その破天荒な格好と口調の軽さのせいでニュース番組ではなくコメディ番組ではないかと錯覚させるようで、解説に重みが全くない。

『昨日から日本の太平洋側で発生している竜巻だけど実は被害は全くでていないんだ。海も波が少し高くなっただけで津波も全く起きていないんだよ。それどころか太平洋沿岸の町では所によってお魚が降った町が結構あるみたいだね。夕飯に美味しいお魚が食べれてラッキーだね。』

予報官は笑顔で背後の天気図をさしてそこに魚のマークを張り付け

ていく。

『そうそう、竜巻なんだけど今発生している竜巻はほとんど移動していないんだ。だからもし竜巻を見かけたら慌てて移動しない方が安全だね。竜巻は全部1時間以内に消えているから近づくかない限り安全だよ。それじゃ次に明日のお天気についてどうか』

淡々と天気解説を進めていく予報官。

しかし結局のところ肝心の竜巻の原因は説明されておらず、何の為の説明だったのか謎のままだった。

埼玉県 麻帆良学園都市

今日も異常気象によってシトシトと雨が降っている麻帆良学園都市の上には分厚い雲が広がっていた。

しかしそんな分厚い雲があってもその雲の上には綺麗な青空が広がっている。

そしてその雲の上では・・・

「いい天気ですねえ」

「うん、青空の下でのお茶会はやっぱり最高ね」

お茶会が開かれていた。

雲の上にはソファとテーブルが置かれ、そのソファに腰かけながらお茶を楽しんでいるのはシイナとさよである。

「それにしても雲細工って凄いです。雲を加工してこんなテーブルとかソファを作るなんて」

「気象精霊の基本技術の一つよ。水の属性が必要だけど少し練習すれば誰にでもできるわ。こういう細かい操作が苦手な精霊もいるんだけどね」

シイナが霊術によって雲から作りだしたテーブルとソファに感心するさよにシイナはお酒の飲みすぎで細かい操作が苦手になっている親友の姿を思い浮かべつつ苦笑しながら答える。

「水の属性・・・ですか？シイナさんって火の精霊でしたよね？」

「火が専門というだけで火だけしか扱えないわけじゃないわよ？あたしなんか風の制御の方が上手かったりするしね。もっとも水はあまり得意じゃないからそんな大きな術は使えないけど」

今はのんびりとお茶をしているが、シイナは先程までその精霊能力を使った気象操作を行っていた。

この世界に来ることになったもののシイナはいずれ精霊世界へ戻り、気象精霊に復帰するつもりである。

その技量を落とさないためにシイナはこの世界に来てからというものの練習をしたくてもできなかった。



精霊世界にいた頃は気象室の本部に擬似操作機があつてそれを訓練に使っていたが、この世界にそんなものは存在せず、実際に気象を操作するしかない。

気象を操作するとなるとかなり地上に影響を与えることになりかねないのでシイナは自重していたのだが、根っからの気象精霊かつ努力家であるシイナがそんな状況に長く耐えられる筈が無い。

『地上に被害を与えない範囲なら問題無い』と自らを納得させたシイナは、『いかに地上に被害を与えずに派手に気象操作をするか』という無茶な題目の下で気象操作の練習を始めたのである。

もつともこの発想に同じ職場のある先輩気象精霊の存在が影響している事は明白なのだが。

そして気象操作で大量の霊力を使ったシイナはその分の霊力を補給するためにもさよとお茶を飲んでいたのであった。

「へー、そうなんですか。でも真面目に練習するシイナさんは凄いですよ」

「まあ小さい時から150年以上ずっと気象精霊の修行をしていたからね。もう習慣みたいなものよ」

ほめるさよの言葉にシイナは照れ臭そうに答える。

「それに計算は全部端末機でやるからあたしはその数値通りに操作するだけだからね」

「確かに機械を使つてお天気を操作するのは驚きましたけど、機械

は計算をするだけで使うのはシイナさんじゃないですか」

なおもシイナを褒めるさよに苦笑を浮かべながらシイナは内心驚いていた。

さよの言うとおり端末機はいわばリーダーと電卓のようなもので、情報を集めることと計算に使う。

つまり実際に方針を決めて手段を考えるのは使用者のシイナ自身なのである。

横で見ていただけでそれを見抜いたさよの洞察力にシイナは感心したのだ。

「良く見ているわね・・・。でもまあ今まで上手くいったのは関東地方の雨の管理とか突発的な台風の操作とか小規模なものばかりだったからよ。大きな操作となると実際は5000以上の下級精霊を動員することもあるわ。残念ながらその訓練は出来ないけどせめてあたしの技量は落とさないようにしとかなないとね」

そう言いつつシイナはカップの中のお茶を飲み干した。

同じく飲み終えていたさよのカップも合わせティーセットを洗淨術で洗い、風の術で乾燥させ、それを虚空に消す。

「もう見慣れましたけど靈術って便利な術が多いですね」

シイナの一連の作業にさよは感嘆の声を洩らす。

「どんな力も使い方次第よ。一歩間違えれば危険なものに変わった

りするわ」

シイナはさよに答えながらも風の術を使って雨雲を吹き散らした。

それまで当たり一面に広がっていた雲が全れ小さい雲の群れとなり、風に乗って遠くへと運ばれていく。

更にシイナは火の能力を使い周囲の空気を暖めると高気圧を作り出した。

高気圧の周辺では雲が生まれにくい状態になり、晴れが続きやすくなる。

「ここところ雨を降らせすぎたし、しばらく晴れにしようかなとね・・・花粉症の人には大変かもしれないけど」

「シイナさん、もう帰るんですか？」

いつもより早めに気象操作を切り上げたシイナにさよは疑問を浮かべる。

「綾瀬が一度図書館探検部に体験参加しないかっていうからね。このあいだラテン語の本読めるってしてから勧誘がすごくて・・・」

「ああ、綾瀬さん目を輝かせてましたね・・・」

さよはシイナの言葉に納得した。

そしてさよとシイナはそろって眼下に広がる図書館島へと降下していく。

その姿はシイナの結果によって隠され、学園中枢に気付かれることはなかった。

日本の異常気象の根本。

授業の合間に気象を遠隔操作で操っていたものが一応学生だったと知る者は永遠にいなかった。

### 第三話 日本お天気事情（後書き）

「恒例の後書きコーナー！司会はお馴染み、ミリィ・オレアノ・ヤクモと！」

「ユメミ・ナイアス・スチヒミ・ウガイアでお送りしまぁ〜す！」  
「今回シイナ随分色々らかしたわね」

「なんか色々と鬱憤がたまってたみたいだよお」

「まあシイナは結構ため込みやすいからね。・・・それにしてもこの世界にも何だかよく知っている人に似た人がいるわね」

「ほんとにそっくりだよねえ」

「このネタがわかるかどうかで気象精霊記を読んだことがあるか分かるわね」

「まあお馴染みの人だからねえ」

「さて、今回の解説のテーマは精霊世界についてよ。今回からシリーズで精霊世界の16の世界を説明していくわ」

「でも地上に比べたら16しか国がないからわかりやすいかもねえ」

「じゃあまず今回は妖精界について説明するわよ！」

「お〜！」

「妖精界はあたしの出身地ね。あたしは妖精界の桃源郷自治州の出身よ」

「お酒の『酒仙童子』で有名だわあ。強いけど飲みやすくておいしいのよねえ」

「またあなたはお酒ばかり・・・まあいいわ。妖精界は精霊世界でも魔法技術や芸術が発達している世界よ。昔精霊世界に存在した幻魔界が分裂して東半分が妖精界になったと言われているわ」

「地上の聖書だとお楽園<sup>エデン</sup>って言われているみたいよお」

「広さは地球の公転軌道くらいで一兆以上の精霊が住んでいるわ」

「住んでいるのはあ妖精族とか仙人族の精霊が多いわあ。他にも小<sup>クシィ</sup>

妖精族とかが住んでいるわあ」

「政治的には妖精王様オベロンの下封建的民主制ね。首都は西の都よ。国會議員は功績と学歴での制限選挙だし、大臣は上級精霊じゃないとなれないわ。精霊世界では永世中立の世界よ」

「妖精界の永世中立はあ、武装中立なんだよねえ」

「そうよ。妖精界は精霊世界で一番強力な軍事力を持っているわ。一番強い国が中立なら誰もせめてこないのよ」

「ミリイも軍隊の中隊長・・・地上の大佐に相当するんだよねえ」

「まあ昇格したのは最近だけだね。それとあたし達が修行したイツミ師匠の修行場もこの妖精界の王立学園にあるわ」

「今じゃ精霊世界一番の名門校よお」

「まあ王立学園の敷地だけで地球の千倍の広さがあるからね」

「シイナのいる麻帆良学園が霞むわねえ」

「まあ今回はこの辺りで」

「「またね〜!」「」

#### 第四話 茶室の吸血鬼（前書き）

更新おまたせしました。

今回は難産でした。

何回消してやり直したことが・・・。

長いので一旦区切り、次回はバトルシーンとなります。

そしてPV30000と60000ユニーク突破しました！

皆様のご愛読に感謝するとともに更新頑張ります！

## 第四話 茶室の吸血鬼

カコンッ

ししおどし  
鹿威しの音が響く。

その音が響き渡る中に設けられた茶室で着物を身につけた緑色の髪  
の女と金髪ロングヘアの少女が相對していた。

金髪の少女・・・エヴァンジェリンがそつと目の前に出された信楽  
の茶碗を持ち上げその縁に口をつける。

「ふむ、美味しいな」

「恐縮です」

エヴァンジェリンはゆっくりと久々の茶の味を堪能していた。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは最近機嫌が良かった。

理由はいくつかあるのだが、最たるものと言えばエヴァンジェリン  
は真っ先に挙げるものがある。

『ここ最近雨が多い』

花粉症のエヴァンジェリンにとって毎年この季節は地獄である。



『サウザントマスター』

『千の呪文の男』 ナギ・スプリングフィールドによって麻帆良に封じられてから肉体が弱体化し、エヴァンジェリンは毎年花粉症に悩むようになった。

吸血鬼の真祖が花粉症とは情けないと自身で感じているが、なつてしまったものはしょうがない。

それ故毎年辛い思いをしているのであるが、今年は日中雨が降ることが多かった。

ここ最近春だというのに台風が上陸したり、日本近海で竜巻が多く発生したりとテレビでは異常気象だとか騒いでいるが、花粉症のエヴァンジェリンにとっては最近の雨は天恵という他無い。

そして花粉症から解放されたエヴァンジェリンが久しぶりに茶席を開きたくなったのもおかしくはないだろう。

そういった経緯によりエヴァンジェリンは茶道部の茶室で久しぶりの茶の席を楽しんでいた。

ちなみに普段は茶の席に茶道体験という形で客を招くことが多いのだが、今回は急にエヴァンジェリンが思い立ったために茶室にいるのはエヴァンジェリンと茶々丸だけである。

服は麻帆良学園女子中等部の制服、見かけはアンティークドールのようなエヴァンジェリンが茶を喫しているのに絵になる程に茶室に溶け込んでいるのは年季だろうか。

エヴァンジェリンが茶を一杯飲み終え、新しく茶を点て始めた茶々丸がふと茶室の外に目を向ける。

「マスター、お客様のようです」

「タカミチではないのか？」

高畑は形式上茶道部の顧問であり、また学園長の言伝をエヴァンジェリンに伝えるために茶室を訪れることが多い。

「いいえ、リーダーの熱源反応からして高畑先生ではないようです。これは・・・マスターと同じクラスの木乃花椎奈さんと思われます」

茶々丸の報告にエヴァンジェリンは一瞬間を置いた後に笑みを浮かべた。

「ほう・・・。どういう目的で来たのか知らんが面白そうだな。通せ」

「了解しました」

（丁度いい。あいつには興味があったことだしな・・・。はてさてどうなるかな？）

「お邪魔します」

程なくして茶々丸がシイナを案内して連れてきた。

シイナの後ろにはさよもいる。

エヴァンジェリンは席を移動して亭主側に座っている。

「ククク、茶道部の茶室へようこそ。取りあえず座れ。私が一服点てよう」

普段は茶々丸が主に茶を点ててはいるが、エヴァンジェリンもその心得があるようで流れるような動作で茶筌を使い茶を点てる。

「相坂さよとは中々に仲が良いようだな？」

顔を上げずにエヴァンジェリンは話しかける。

「まあ友達だからね。マクダウェルさんだっていつも絡繰さんと一緒にでしょ？」

シイナはエヴァンジェリンがさよについて触れても全く気にせずに流す。

（私が相坂に触れても反応せず・・・か。やはり裏と関係があるようだな）

（縁が結ばれてないのにさよが見えている・・・ってことはやっぱり霊格が高いわね）

お互いに表情を全く変えずに話すがそこから生まれる圧迫感に茶々丸はともかくさよは威圧されていた。

（シイナさんとエヴァンジェリンさんから凄い空気が出てます）

既にさよの目尻には恐怖のためか涙が浮かんでいる。

シャカシャカシャカ

狭い茶室に茶筴の音だけが響く。

やがて茶筴を動かす音が止んだ。

「どうぞ」

出された抹茶が入った茶碗をシイナは手に取り右手で3度手前に回してから口をつける。

「結構なお手前で」

少し飲んでからシイナは茶碗を下ろす。

そしてシイナとエヴァンジェリンはお互い微笑みながら目を合わせた。

「それは重畳。・・・さて木乃花椎奈、私に何の用だ？」

並の中学生・・・いや、大人でも気に吞まれて話せなくなってしまふような重圧の中でシイナは微笑みを崩さずにまた一口茶を飲みつつ口を開く。

「茶道部に入りに来たというのもあるけどね・・・本命は貴女と交渉しに来たのよ」

その言葉に一瞬エヴァンジェリンは怪訝な顔をする。

「交渉だ？・・・その様子だと私が誰だか知ってはいるようだな。貴様は何者だ？」

エヴァンジェリンは木乃花椎奈について裏の世界と関係があるものと考えている。

しかし学園長や高畑の様子からして学園側は木乃花椎奈が裏の世界に関わる者と認識していないように思っていた。

同じクラスの忍者である長瀬楓は学園側にしっかりと裏の世界の者と認識されており、人物の出入りは念いりに管理されている。

その中で学園側が把握していない裏の世界と関わる存在であるシイナについてエヴァンジェリンはその出自に疑問を抱いていた。

エヴァンジェリンの疑問にシイナは茶碗を畳の上に置き、居住まいを正した。

「まあ荒唐無稽に思える話かもしれないし少し長くなるけどいい？」

真面目な表情になったシイナはエヴァンジェリンが頷くのを見て自分が転生者である事は省いて今までの経緯を全て語り出した。

「・・・何とも信じ難い話だな」

全てを聞いた後エヴァンジェリンはため息とともにそう漏らした。

「まあいきなりこんな話をして信じてもらえる方が異常だと自分でも思っわ」

シイナが茶々丸が新しく点ててくれた茶を飲みつつ答える。

「だが腹立たしい事に貴様の言う事が正しいと考えた方が辻褄が合う。・・・茶々丸」

「ハイ、マスター。現在のシイナさんは私には認識出来ません。マスターが認識出来ています『相坂さよ』さんが私には認識出来ないことを考慮しましてシイナさんも同じく霊的存在である確率が高いと思われます」

エヴァンジェリンの問いかけに控えていた茶々丸が淡々と報告した。

「・・・というわけだ。これだけ状況が揃っているのだ、少なくとも貴様が精霊だというのは認めざるを得ないだろう?」

「理解が早くて助かるわ。それで交渉には応じてくれるのかしら?」

笑みを浮かべたまま話すシイナに対してエヴァンジェリンは腕を組んで鼻を鳴らす。

「ふん。内容が分からなくては何とも言えん」

エヴァンジェリンは『さっさと内容を話せ』と暗に示す。

そしてシイナはゆつくりと口を開いた。

「あたしの目的は貴女の知識と戦闘技術の研鑽よ。対価は貴女の身の解放・・・あと美味しいお酒もつけるわ」

あっさりと口に出したシイナにエヴァンジェリンは目を見開く。

「何だと・・・！」

エヴァンジェリンには現在二つの呪いが掛けられている。

一つは麻帆良学園の結界による魔力封印、そしてもう一つは『千の呪文の男』サウザントマスターによる登校地獄の呪いである。

このうち魔力抑制の方は学園から出ればいいとしても厄介なのは登校地獄の呪いの方だった。

かつて『千の呪文の男』サウザントマスターが魔力にものを言わせて無理やり掛けたために掛けた術者本人かもしくはその血縁者の血によってしか解けなくなってしまうている。

だがシイナはそれをあっさりと解くと言い放った。

（はったりか？・・・いや、それにしても奴は自然体だ。それに奴が精霊というのなら考えられなくもない）

「ほう・・・貴様からは大した魔力も感じられんが大きく出たものだな。本当に貴様にそれだけの力があるのか？」

挑発するように問いかけるエヴァンジェリンに対してシイナは座っ

たまま目を閉じた。

そして次の瞬間エヴァンジェリンは異変を感じ取る。

「何！？」

妙な感覚を感じたと思った瞬間にエヴァンジェリンは己の中からあふれ出す力を感じた。

（これは・・・魔力が戻っている！？これは恐らく私の『別荘』の中にいるのと同じ感覚だ。まさかこいつは一瞬で『別荘』と同じ空間を創り出したと言うのか！？）

エヴァンジェリンは驚愕しつつシイナを見やる。

「学園結界のに干渉されない空間をこの茶室に作ったわ。取りあえず私の力はこれで分かってくれた？」

エヴァンジェリンの感覚からすれば自分が長い年月をかけて作り上げたマジックアイテムと似た空間を一瞬で作りだしてしまったシイナの能力は己の予想を超えていた。

それ故にある疑問が浮かぶ。

「これ程の力を持ちながら何故私と交渉する必要があるんだ？しかも私は学園から監視されている身だ。お前の存在が疑われる可能性さえあるんだぞ？」

「監視については今のところこの辺りで魔力が使われた形跡はないから心配してないわ。それにいくら力があってもこっちの魔法使い



の力を知らないでいる程無謀じゃないわよ」

茶を啜りつつあっさりとしイナは答えた。

シイナがエヴァンジェリンと接触を試みたのには大きな理由があった。

シイナの目的は件の転生者の無力化もしくは排除である。

その目的上必然的にその転生者と敵対する事となるのだが、相手となる転生者はこの世界で生きてきている以上この世界に魔法を使ってくる可能性が高い。

シイナとて気象ゲリラのような武闘派な精霊達と戦う事が多々ある気象精霊である以上それなりの戦闘技術を持つてはいるが、己の力を過信してはおらず、その転生者に後れを取る事は考慮していた。

シイナとしては万全を期すためにもこの世界で自分の力がどの程度通用するのかわかるとともに、この世界での魔法の戦いや魔法の効果を知っておきたい。

そうした不安点を本番の前に解消するためにも『闇の福音』というこの世界の最強の一角であるエヴァンジェリンとは接触しておきたかったのである。

しかしシイナが動いた理由はそういった打算だけではない。

シイナはここしばらくエヴァンジェリンを観察していたのだが、シイナから見てエヴァンジェリンは危なっかしい存在だった。

人形の従者だけを供に生きてきたエヴァンジェリンは『千の呪文の男』<sup>タイ</sup>によって力を奪われて以来10年以上麻帆良で中学生を続けている。

麻帆良学園都市の警備をしつつも同じく警備をする魔法先生や魔法生徒からは恐れられつつ疎まれ続け、卒業していくクラスメイト達からはエヴァンジェリンの事は忘れ去られ自身はまた中学生生活を繰り返す。

エヴァンジェリンは吸血鬼の真祖でありために存在自体が『魔法使い』から疎まれて長き時を生きてきたが、自ら『悪の魔法使い』を名乗りつつも決して無用な殺しはしていない。

そんな生き方からも分かるようにエヴァンジェリンは不器用な生き方をしている。

唯一の救いは『千の呪文の男』<sup>サウザントマスター</sup>が呪いの解除に来るという約束だったが、その約束もナギ・スプリングフィールドが死んだという情報によって打ち碎かれる。

エヴァンジェリンは今にも壊れそうなほどにヒビが入りまくった心を守る為に孤高の自分を作り上げること以身を守っている。

精霊医師という顔も持つシイナから見れば原作でネギが来るまでエヴァンジェリンの精神がもっていたことが奇跡に近いと思える程に、エヴァンジェリンの精神状態は危ない状態だったのだ。

シイナとしてはそんなエヴァンジェリンが放っておけなかったのである。

そして精霊医師としてのシイナが下した判断は今のエヴァンジェリンに必要なのは気兼ねなく隣に立つことのできる友人であるという結論だった。

相手の真意を引きだすにはまず自分が誠意を見せなくてはならない。

だからこそシイナは自分の素性を隠さずに語ったのだ。

エヴァンジェリンを支える為に。

ちなみにそんなエヴァンジェリンの危うい精神状態に気付いていない学園長や高畑に対する評価もシイナの中では急速に落ちていたりする。

『己の願望の為に他者の運命や気持ちを弄ぶ外道』というのが学園長達に対するシイナの評価である。

「成程な。だがそう簡単に私に話してしまっているのか？私があのにジジイに報告するかもしれんぞ？」

「貴女はそういうことはしないでしょ？・・・それにこれから友人になるのかという相手に隠し事なんかしたくないしね」

からかうような調子のエヴァンジェリンにシイナは真面目な表情で答える。

だがその言葉を聞いた途端にエヴァンジェリンの顔は瞬間湯沸かし器の如く真っ赤になった。

「な、な、何を言う！？」

慌てるあまり立ち上がったエヴァンジェリンの反応を笑いながら内心で『可愛いな』と思いつつシイナは眺めていた。

「冗談じゃないわよ？あたしもさよも二人だけっていうのは寂しいしね。エヴァとは仲良くしたいとおもっているわ」

顔は笑っているがシイナの声には冗談が感じられず、明らかに真剣であるとわかる。

それが理解出来てしまっただけにエヴァンジェリンの頭は混乱の局地にあった。

（私と仲良くしたい！？何言ってるんだコイツは！？）

吸血鬼の真祖になって以来長年求めていたもの。

それが手に入るかもしれないという事実を受け入れようとする一方で、長年の孤独から自らを守る為に作られた壁がそれを阻む。

二つの気持ちに板挟みとなったエヴァンジェリンだったが、その時脳裏にある考えが浮かぶ。

混乱しているエヴァンジェリンの回らない頭にはそれはまさしく名案のように思えた。

「えーい！恥ずかしい事言いおつてからに！私と友になりたいというのならばそれにふさわしい力を示せ！決闘だ！」

「『はい！？』『』」



#### 第四話 茶室の吸血鬼（後書き）

「恒例の後書きコーナー！司会はお馴染み、ミリィ・オレアノ・ヤクモと！」

「ユメミ・ナイアス・スチヒミ・ウガイアでお送りしまぁ〜す！」

「今回シイナの天然ぶりが発揮されたわね〜」

「シイナはあ自分で天然さに気付いてないからねえ」

「あれで真面目だからね、シイナは」

「さて、前回に引き続き精霊世界の世界の紹介ということで今回は天空界よ！」

「東亜支局には天空界出身の人は多いわあ。イツミ伯母さんにい、あたしとシイナ、それにパイカラもそうだよあ」

「天空界はほとんどが天人族の精霊だけど天人族は霊力の大きい精霊が多いからかもね。それと天空界はほとんどが高原で8割が森に覆われている森林地帯よ」

「あたしのお生まれた所も森の都だしねえ」

「精霊界有数の木材の産地なのよね。それともう気付いている人もいるかもしれないけど天空界は高天原とか日本神話と関係の深い土地よ」

「あたしのおお祖母ちゃんは地上でいう天照大神だし、シイナの家も木花之佐久夜毘売の家よあ」

「首都は森の都。政治は君主が存在しない議会制民主主義だけど実際のところ貴族連合といった形ね。天空界には12の王家があつてそその貴族を中心に選挙が行われるわ。ユメミの実家にウガイア大公爵家がその中心ね」

「一応大天空界があ天空界・天上界・天元界・神仙界に分裂する前の天空王ヘゲモンの直系だからねえ」

「天空界は基礎分野に強い世界よ。知能が高い人が多くて特に数学

分野では突出しているわ。基礎工業力も高いし経済力ある世界ね」

「ただあ、おいしいお酒は少ないんだよねえ」

「あんた結局最後はそれなのね・・・」

「じゃあ今回はこんなところで・・・」

「またねっ!」

## 第五話 吸血姫と嵐の精霊（前書き）

更新お待たせしました。

バトルシーンようやく完成です。

エネルギーの計算間違があるかもしれませんがご容赦下さい。

40000アクセスと90000ユニーク突破しました！

最近加速気味に閲覧が増えていまして感謝です。



## 第五話 吸血姫と嵐の精霊

錯乱したエヴァンジェリンの決闘宣言の後、シイナとさよはエヴァンジェリンに連れられてエヴァンジェリンの地下にある『別荘』へと来ていた。

シイナはエヴァンジェリンの突然の決闘宣言に驚きはしたものの、そんな事でいいのならばと大人しく付き合うことにしたのである。

加えてこの世界での自分の実力を量るというシイナの目的からしたらこの事態は好都合であったので断る理由も無かった。

「ふわ、すごいですね」

「確かにこれ程の空間を魔法で作りだすなんてこの世界の技術力も侮れないわね」

『別荘』に入り、目の前に現れた海の上に浮かぶ宮殿という光景に感嘆の声を上げるさよに対して、シイナは感心はしたもののその構造について分析する。

（恐らくこれは封印術を応用したものね。基本的な構造は亜空間倉庫と似ているから幻想の属性があったらあたしにも作れそうなんだけど。・・・フェイミンさんなら出来るかな？）

思考に没頭し動こうとしないシイナ達に対してエヴァンジェリンは苛立ちを隠さずに声をあげる。

「何をしている、コノハナ・シイナ！さっさと来い！」

「あ、ごめんね。今いくわ」

声を掛けられてようやくシイナは本殿へと歩き出す。

（一体なんでこいつはこれから私と戦うというのにこんなに落ち着いているんだ？そこまで自分が勝つという余裕があるのか？）

特に気負った様子もなく飄々と後ろをついてくるシイナに視線をやりながらエヴァンジェリンは先刻より落ち着いた頭で考える。

（しかもよりよってこの『闇の福音』と仲良くしたいだ！？本気で言ってるようだがどういう感覚をしてるんだ？・・・でもそれが本当だとしたら私は・・・って何考えてるんだ私はっ！！？）

「マスター？どうされましたか？」

急に赤面したかと思うと自らの頭を叩き出した主に茶々丸は心配そうな顔をする。

「い、いや、茶々丸、何でもない！さっさと行くぞ！」

エヴァンジェリンは明らかに動揺していると分かる声をあげつつ足を速め、茶々丸もそれに合わせて足を速める。

その後ろではシイナとさよがそんな凸凹主従のやり取りを微笑ましく見つめて『可愛いな』とかいう感想を抱きつつお互いに笑っている。

正直さよはシイナの心配をしていなかったりする。

というよりもむしろシイナと戦うエヴァンジェリンの方が心配だった。

シイナと友達になって以来ほとんどいつも一緒にいるさよは、シイナの気象操作や技の訓練を間近で見ている。

いくら600年以上生きている吸血鬼といっても気象現象さえも軽々と扱ってしまうシイナに勝てるとは到底思えない。

（シイナさんちゃんと手加減してくださいね〜）

密かにエヴァンジェリンの無事を祈るさよだった。

10分後。

『別荘』の海の上でシイナとエヴァンジェリンは対峙していた。

二人とも麻帆良学園の制服から着替えており、エヴァンジェリンは

黒いキャミソールに黒いマント、シイナはカバヤとサロンと呼ばれる水色のインドネシア地域の民族衣装を身につけている。

その二人を別荘の建物の端で茶々丸とさよ、それに『別荘』では自由に動けるエヴァンジェリンの従者のチャチャゼロが見学している。

「勝負は時間無制限、相手が戦闘不能になるかもしくは降参するまでだ。それでいいな？」

ルールを説明するエヴァンジェリンに対してシイナは軽く頷いた。

「それでいいわ」

「茶々丸が打ち上げる花火が合図だ。・・・準備はいいか？」

「いつでもどうぞ」

シイナの返事を確認してからエヴァンジェリンが茶々丸に視線をやる。

その視線を受け取った茶々丸が打ち上げ用の筒を構えた。

「私の名は不死にして悪の魔法使い、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

名乗りをあげるエヴァンジェリンにシイナもそれに応じる。

「火の上级精霊、シイナ・エアリネ・コノハナ」

ドオーーーーーンッ！！！！「いざ、参る……」

今ここに600年の時を生きた吸血姫と300年生きている火の精霊の戦いが幕を開けた。

花火が空間の空を彩ると同時に動いたのはエヴァンジェリンだった。

「いくぞ！【魔法の射手・連弾・氷の17矢】！！」

エヴァンジェリンが無詠唱で発動した複数の氷の矢がシイナに向かっていくがその瞬間シイナの姿がかき消える。

（この距離で避けただ！？虚空瞬動か！？）

エヴァがシイナの姿を探すと30M程離れた地点にシイナが浮かんでいた。

「【魔法の射手・連弾・氷の23矢】！」

「【魔法の射手・連弾・闇の19矢】！」

「【魔法の射手・連弾・氷の31矢】！」

エヴァンジェリンが続けて次々と魔法を放つもシイナはそれらを全てあっさりと回避していく。

「ちっ、チョコマカと！ならば・・・リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。氷の精霊113頭、集い来たりて敵を切り裂け【魔法の射手・連弾・氷の113矢】！」

エヴァンジェリンが放った大量氷の矢はそれまでと同様にシイナが

避けた瞬間急カーブしてシイナに再び向かっていく。

今までのように無詠唱で放たず、じっくりと魔力を練った上で追尾能力を高めたのだ。

（どこでも追ってくる・・・厄介ね）

シイナはその事に気付きながらもそれを避け続ける。

しかし魔法の矢の群れから逃げ続けるシイナの前方から新たな魔法の矢の群れが向かってきた。

「挟みうちっ!？」

エヴァンジェリンが時間差でもう一度同じ魔法を使ったのだ。

次の瞬間魔法の矢の群れ同士が激突し、空中が白煙に包まれる。

だがこれだけで終わるほど『闇の福音』は甘くなかった。

「これで終わりだ。安心しろ、殺しはせん! リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。

【闇の吹雪】! !」

未だ白煙に包まれたままの空間に更に氷と闇が混ざった嵐を叩きこむ。

ドオオオオオッ!!

爆音が響き、その事から『闇の吹雪』が命中したことが分かった。

「ケケケ、大人ゲネエナア、ゴ主人」

戦いの様子を見ていたチャチャゼロがケタケタ笑いながら感想を漏らす。

「いえ、マスターは今の攻撃でも手加減なされていました。シイナさんは無事かと推測されます」

茶々丸もそう述べるが、さよはその光景から目を離さず黙っていた。

（シイナさん大丈夫ですよね？）

大事な友の事を信じながら。

「ククク、手応えがあつた。案外あつけなかつたな」

「何があつけないの？」

「!？」

笑みを浮かべて白煙が晴れるのを見ていたエヴァンジェリンが急に後ろから聞こえた声に驚いて振り向くとそこにはキズ一つついてないシイナが浮かんでいる。

（いつの間に私の背後に回ったんだ、全く気配を感じなかったぞ！

「いや、それよりもアレを食らって無傷だと!？」

エヴァンジェリンはシイナの無事な様子に驚愕が隠せない。

手加減したとはいえ十分に戦闘不能になるくらいの魔力を込めた魔法である。

それを受けて全く無傷のシイナがエヴァンジェリンには信じられなかった。

「貴様は確かに私の魔法を受けたはずだ。どうやってあれを防いだ?」

動揺を必死で隠しつつ問いかけるエヴァンジェリンにシイナは特に隠すわけでもなく平然と答える。

「確かに驚いたけど。とっさに結界を張って防いだけよ。でもあれくらいなら結界張らなくても『風の盾』で防げたわね」

「アレを正面から簡単に受け止める程の結界だと・・・?」

エヴァンジェリンの知る限りあのレベルの魔法を正面から受け止めることの出来る程の魔法障壁を瞬時に展開出来る魔法使いはいない。

エヴァンジェリンが知る限りそういった結界関連の術に最も優れているのは麻帆良学園学園長 近衛近右衛門だが、恐らくシイナと同じ事は出来ないだろうと確信できる。

呆然としたエヴァンジェリンの様子を気に掛けずにシイナは言葉を紡ぐ。



「まあ大体こつちの魔法のレベルも確認できたし・・・そろそろこつちから行こうかな」

シイナが右手の掌を上に向けるとその中に薄く黄緑色に輝く光の塊かたまりが生まれた。

そしてそのままシイナは右手をエヴァンジェリンに向けて突き出す。

「まずは様子見の六・二×一〇の一五乗ジュール！」

シイナが叫んだ瞬間シイナの手から光の塊・・・霊光弾が撃ち出された。

「くっ!!」

とつさに身体を捻ったエヴァンジェリンのすぐ横を電光を纏った光弾が衝撃波を伴いながら通り過ぎていく。

ズッガアア~~~~ン!!

シイナの放った霊光弾はエヴァンジェリンが避けたためにそのまま海面にぶつかって炸裂した。

「な、バカな!!?」

その爆発を見たエヴァンジェリンの表情が変わる。

霊光弾が爆発した場所では海水が瞬時に蒸発した影響と爆発による影響で海底がむき出しになっていた。

すぐに周囲の海水が流れ込んで渦潮のような形を作る。

実はこの時霊光弾の衝撃で津波が生まれていたりしたのだが、とっさにシイナが津波を操作して誘導した為にその津波がエヴァンジェリンの別荘にぶつかることはなかった。

（何だ今の攻撃は！？無詠唱であの威力だと！？）

呆然とするエヴァンジェリンを現実に戻したのはエヴァンジェリンの並み外れた聴力が捉えた茶々丸達の会話だった。

「何だ今ノハ？」

「私にリーダーに反応がありました。あれは純粋なエネルギーの塊のようなものです。今のエネルギー弾の推定エネルギーは三億トンの溶岩を吐き出す火山の噴火エネルギーに相当すると思われます」

「あゝ、シイナさんやり過ぎですよ。もっと加減しないとエヴァンジェリンさんが死んじゃいます」

「アレデ手加減シテンノカ？」

「はい。少し前にシイナさんは霊光弾で大きな隕石を壊したこともありましたが・・・」

「隕石を破壊ですか？それならば少なくとも10Z<sup>ゼタ</sup>Jに相当するエネルギーが必要と思われるのですが・・・」

その会話を聞いたエヴァンジェリンの背中を冷たい汗が流れる。

「あー、外れちゃった。仕方ないか、痛かったらごめんね」の三・〇×一〇の一六乗ジュール！」

再びシイナが今度は石油3・4億トンの火力に相当するエネルギーを含んだ霊光弾を撃ち出す。

「痛いで済むかー！！！」

先程と同様に茶々丸が解説するのを聞きながら辛うじて避けたエヴァンジェリンは涙目でシイナにツツこんだ。

そんなエネルギーをぶつけられたら吸血鬼の真祖といえどひとまりもなく・・・再生する間もなく消滅する。

「大丈夫よ。基本的に光の圧力で弾くだけだからいくらエネルギーが高くても実際の威力はその300万分の1しかないから・・・多分死なないわ」

にこやかに言うシイナだがそれでも最初の攻撃はマグニチュード七・〇の地震のエネルギーに相当する。

精霊同士の戦いでは問題ない威力だが精霊ではないエヴァンジェリンには脅威ではない。

笑いながら答えるシイナを見ているうちに不意にエヴァンジェリンは戦うのが馬鹿らしく感じた。

こちらの魔法は避けられ、当たっても軽く防がれた。

こちらはまだ『こおる大地』や『えいえんのひょうが』を使っていないが多分防がれる。

『闇の魔法』を使ったところで恐らく同じだろう。

そしてシイナは信じられないようなエネルギーを含むエネルギー弾を無詠唱で撃ち、しかもそんなエネルギーを無詠唱で二発も撃ったというのにシイナには全く消耗している節が見受けられない。

どう考えても勝てる要素など見当たらない。

そしてシイナ本人と言えば決闘の最中だというのにマイペースにのほほんとしている。

このまま降参してもいいかという気持ちになりかけたが、『悪の魔法使い』としての矜持がそれに歯止めをかけた。

恐らく自分は勝てない。

しかしただ負けるのも悔しかった。

せめて一矢報いたい。

（この私があかく・・・。こんな気持ち忘れかけていたな・・・）

エヴァンジェリンは身につけていた黒マントに手をかける。

「シイナ・エアリネ・コノハナ、礼を言う。貴様のお陰で目が覚めた。この戦い私の負けだろう。だが私も最後に少しあがいてみたい。すまんが付き合ってもらうぞ」

その言葉からエヴァンジェリンの真剣さを感じ取ったシイナも表情を引き締めて身構える。

そして次の瞬間エヴァンジェリンは虚空瞬動により空中をシイナに向けて疾走した。

「えっ!?!」

不意を突かれたシイナが慌てるもその視界がエヴァンジェリンが脱ぎ捨てた黒マントから発生したコウモリの群れに防がれる。

「【エクスキューションーソード】!」

エヴァンジェリンの右手からビーム状の剣が伸びる。

『エクスキューションーソード』の突きによる特攻。

それがエヴァンジェリンの最後の賭けだった。

戦っている中でエヴァンジェリンが観察したところシイナは体術の類が得意そうではなかった。

瞬動も使えそうではなく恐らく体術だけなら長瀬楓や古菫、茶々丸に遠く及ばない。

懐に潜り込めればなんとか勝機がある。

但しシイナは空中での機動力は高いようなので逃げられる可能性もある。

だからこそコウモリを利用して視界を塞ぎ、虚空瞬動でシイナが何もできないうちに近づく。

そして今、光の剣の切っ先がシイナへと伸ばされ、貫かんとしていた。

そしてそれがシイナに届こうかという瞬間・・・

「がつ!!?」

凄まじい衝撃がエヴァンジェリンを襲い、エヴァンジェリンの意識は一瞬で闇に落ちた。

「ん・・・」

エヴァンジェリンが目を覚めたのはベッドの上だった。

（ここは・・・別荘の私の寝室か）

「マスター、気付かれましたか？」

身体を起こしたエヴァンジェリンに看病の為に控えていた茶々丸が近寄る。

「茶々丸、あれからどうなった？」

起き上がってベッドに腰を掛けた状態でエヴァンジェリンは茶々丸に尋ねた。

不思議な事にあれほどの衝撃があつたのに身体に痛みはなく、むしろ以前より体調が良く感じられる。

「マスターの最後の突撃はシイナさんにダメージを与えたものの、その後マスターはシイナさんが起こしたダウンバースト現象により海に叩き落されました。その後シイナさんが気絶したマスターを回収してこの部屋に私が案内しました。シイナさんがマスターを治療し、そのシイナさんは現在相坂さんと一緒に姉さんと宴会をしています」

「そうか・・・一矢報いれたか」

不思議な事に自分が負けたと知ってもエヴァンジェリンに悔しさは湧かなかった。

むしろ最後の突撃で僅かでもシイナに報いれたことに満足感が広がる。

清々しさを感じつつエヴァンジェリンは茶々丸が用意した着替えに着替える。

（茶々丸が気になる事をいくつか言っていたがそれは後で奴に聞けばいい）

「マスター、身体の具合は大丈夫ですか？」

「うむ。むしろ前よりも体調が良くくらいだ。あいつらは上か？」

「はい」

「よし、奴に会いに行くぞ。ついて来い」

「了解しました、マスター」

エヴァンジェリンは足早に部屋を出ていき、茶々丸もそれに続いていった。

「美味エナ、コノ酒」

「吞ませてるあたしが言うのも難だけど渋いわねえ・・・」

「美味しいですけど私はやっぱりお茶の方が好きです」

『別荘』のテラスではシイナとさよ、チャチャゼロが酒盛をしていた。

その中心には空になった酒ビンが2本既に転がっている。



「天上界の米酒、『暖米<sup>のんべえ</sup>』結構クセのある酒なんだけどね」

シイナは美味しそうに杯を干すチャチャゼロを呆れた目で見て入っている。  
そのシイナの持つグラスには明らかにワインと分かる紫色の液体が入っている。

「コイツヲ飲ンジマッタ他ノ大吟醸ガタダノ水ニ思エルゼ」

そう言いつつチャチャゼロは手酌で酒を注ぐ。

チャチャゼロは『暖米』が気に入ったようであまり飲もうとしない。  
いる。

シイナはそんな様子を見つめつつ

（チャチャゼロの体内ってどうなってるんだろ？）

と考えていた。

そのシイナの隣ではさよがチビチビと舐めるように茶碗に入った酒を飲んでいる。

最初は気象操作の後で酒を飲もうとしたシイナを咎めたさよではあったが、シイナから飲んでも問題ないと説明されて以来シイナに付き合うように少し酒を飲むようになった。

但し本人はお茶の好きなようであまり飲もうとはしていない。

「楽しそうだな」

突然声をかけられたシイナが振り向くとエヴァンジェリンが茶々丸と一緒に歩いてくるところだった。

「ゴ主人、先ニヤツテルゼ」

同じく主人に気付いたチャチャゼロが酒の入った杯を持ち上げる。

それに応じつつエヴァンジェリンはシイナの前に立った。

「ああ、目が覚めたの？・・・身体の具合はどう？」

「お前の治療が効いたようでむしろ前より良いくらいだ。礼を言うぞ」

「いいわよ、あたしがやったんだし。あ、おまけに花粉症も治しておいたわよ」

「そうか・・・って今何て言った!？」

頭を下げたエヴァンジェリンに手を振りながら軽く応じたシイナの言葉にエヴァンジェリンは目を剥いた。

「いや、花粉症で困ってるみたいだったから怪我を治すついでに治しておいたのよ。あたしこれでも医者だし」

大したことないような口調で話すシイナにエヴァンジェリンは愕然とする。

確かに最近花粉が少ないので症状は治まっていたが、いつも感じて

いる鼻の奥の熱が感じられない。

「花粉症に根本治療は無かったはずだが・・・」

「地上世界ではね。精霊世界では大した病気じゃないし、しっかりと治療法が確立されてるわ。霊術も併用したから多分再発はしないわよ」

「もはや何でもアリだな・・・」

あっさりと言うシイナに思わず口を大きく開けたエヴァンジェリンだったが、内心で『コイツなら何でもやりかねん』と思い、それ以上考える事を諦めた。

もう一度礼を言おうとしたが、照れくさそうなシイナの様子にそれも野暮かと思い直す。

「そこまで万能ってわけじゃないんだけどね。ところでマクダウェルさんも飲む？米酒もあるけど」

シイナは目の前に置いてあったワインのビンを持ち上げて示す。

「エヴァンジェリンでいい・・・長ければエヴァでも構わん。そうだな、じゃあ遠慮なく頂こう」

そう言いつつエヴァンジェリンはシイナの隣りに腰を下ろしつつグラスを手を取った。

「あたしもシイナでいいわよ」

シイナがエヴァンジェリンのグラスにワインを注いでいく。

注がれたワインに顔を近づけたエヴァンジェリンの鼻腔に濃厚かつ芳醇な香りが広がる。

「今まで嗅いだ事のない程の香りだ。かなりの上物だな」

「へえ、分かる？天元界産のワイン『貴腐仁』よ」

ワインを眺めるエヴァンジェリンにシイナがワインの解説をする。

「天元界？」

「精霊世界の世界……こっちで言う国の一つよ。ワインとかブランドーの名産地なの……どこかでエヴァ？」

声をかけられてエヴァンジェリンが顔を上げるとシイナが悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

「あたしはこれでエヴァの友達になれるのかな？」

その言葉でエヴァンジェリンはこの戦いの発端……自らが言い出した条件を思い出す。

「あ、あう……」

瞬時にまるで豆電球を点けたかのようにエヴァンジェリンの顔が赤く染まった。

「ケケケ、コンナゴ主人見タノハ久シブリダゼ」

「私はこんなマスターを見たのは初めてですが・・・」

「お人形さんみたいで可愛いです」

そんな様子を見ていた従者二人（？）と幽霊が好き勝手言っがエヴァンジェリンの耳には入っていない。

「あたしとしてはエヴァと友達になりたいんだけどね」

笑みを浮かべたまま話すシイナはエヴァンジェリンをからかつつも満々である。

「貴様は・・・私にか、勝ったから・・・だから・・・その」

もじもじしながらもエヴァンジェリンは言葉を絞り出すかのようにぼそぼそと話す。

「うん？何て言ったのかな」

明らかに聞こえているはずなのに聞こえていないかのようにシイナは振る舞う。

「ケケケ、イイ性格シテヤガルナ」

「おかげでいい画像がとれます」

「シイナさーん、あまりイジメるとかわいそうですよ」

その会話が聞こえたのかエヴァンジェリンの顔が更に赤くなり震え

だした。

そしてエヴェンジェリンはギュッと閉じながら叫ぶ。

「こ、これからよろしく頼む！」

まさに叫ぶような言葉にシイナは微笑んだ。

「こちらこそよろしく、エヴァンジェリン」

シイナはワインの入ったグラスを掲げる。

その意味に気付いたエヴァンジェリンもグラスを持ち上げた。

「乾杯」

静かにグラスのぶつかる澄んだ音が響く。

こうして600年止まっていた不死の吸血姫の時間の歯車が再び動き出す。

しかし当人達は友となった相手と飲む酒の味を心ゆくまで愉しんでいた。



## 第五話 吸血姫と嵐の精霊（後書き）

「毎度お馴染みの後書きコーナー！進行はあたしミリィ・オレアノ・ヤクモと」

「ユメミ・ナイアス・スチヒミ・ウガイアがお送りしまあゝす！」  
「今回シイナのチートぶりが凄いわね・・・」

「作者があ、『設定上仕方無かった』とか言い訳してるわあ」

「シイナは確かに強いけどね、特にキレた時は」

「シイナは怒らせたくないわねえ。でも接近戦はミリィの方が強い  
のよねえ？」

「まあシイナは近衛精霊でもないしあまり体術は得意じゃないわ。  
でもそれは精霊世界での話であって地上世界の生物と比べたら基本  
スベックは比べ物にならないわよ」

「あたし達はあ、いくら霊光弾受けても叩かれたくらいしか感じな  
いしねえ」

「シイナの飛行速度は秒速1000kmを軽く超えてるし、おまけ  
に身体は丈夫、結界で防御して霊光弾とかで遠距離攻撃・・・地上  
世界から見たら動く機動要塞ね」

「作者があ『ある砲撃が得意な女の子』をイメージしたとかいつて  
るわあ」

「その辺は危ない会話になりそうだから止めておきましょう」

「さて、今回の精霊世界紹介は魔界ね」

「精霊世界では一番科学技術が進んでいる世界よあ」

「魔界に住んでいる種族は多いわ。魔人族や天魔族、それに鬼神族  
や妖精族が住んでいるの」

「東亜支局ではあキャサリンさんとジユデイスさん、それにムーメ  
がそつだねえ」

「まあムーメは王女様だからね。ただ象徴君主制による大衆政治だ



から一応ジョアナ大公爵家が『魔王』として君臨していて貴族もいるけどあまり権力はないわね」

「フィオレさんがいる地上の生物を管理する万魔殿の靈魂運命監察室とかがあるからあ、地上世界の人には地獄というイメージをもたれているわあ」

「確かに自由社会だけど倫理とか安全には厳しいからかなり安全な社会なんだけどね」

「温泉が多いからあ地獄のイメージがあるのかもねえ」

「王都は虹の都。産業は科学が発達しているおかげで情報科学や工業が盛んで精霊世界トップレベルよ。他にコーヒーとか紅茶の産地でもあるわね」

「ただ言語が多過ぎるしい、国際感覚が鈍いのよねえ」

「まあ万能な世界なんてないし仕方無いわよ」

「それじゃ今回もそろそろこの辺りで・・

「またね」

## 第六話 酒宴は武器の一つ（前書き）

第六話出来たので投稿します。

最初エヴァとの関わり合いは1話で終える予定だったのに何故か3話も続いちゃいました。

この分だと原作突入までどれくらいかかるのか不安です（汗）

後書きにアンケートがあるのでお答頂ければ幸いです。

ではどうぞ～

## 第六話 酒宴は武器の一つ

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは外見は幼女でも吸血鬼である。

600年を超える長き時を生き、『不死の魔法使い』・『闇の福音』・『人形使い』等の異名を持つエヴァンジェリンは裏の世界では恐れられ、600万ドルという高額 of 賞金首である伝説級 of 存在として君臨している。

それは『千の呪文の男』<sup>サウザントマスター</sup>によってエヴァンジェリンが麻帆良学園に封じられてからも変わることには無かった。

そしてそんな経歴を持つ吸血姫は現在自宅の地下にある『別荘』の・

「うっ、頭が割れる」

ベッドの上で呻いていた。

「完全な二日酔いね」

エヴァンジェリンの様子を診察していたシイナが告げる。

「ケケケ、情ケネエナ、ゴ主人」

「明らかに昨夜のマスターは飲みすぎでしたから」

「おまえら……！うっ……」

エヴァンジェリンは好き勝手言っている自分の従者を怒鳴ろうとしたものの頭の痛みでそれも叶わない。

普段エヴァンジェリンは酒を嗜みはするものの二日酔いに陥ることはない。

それが何故今回はこんなことになったかという・・・

「これもシイナの出した酒が全て美味すぎるからだ・・・」

エヴァンジェリンは恨ましげにシイナを睨む。

そう、シイナが用意した酒はエヴァンジェリンが今までに飲んだどんな酒も超える美酒ばかりだった。

その味に夢中になったエヴァンジェリンはつい自制を忘れて飲み過ぎてしまったのだ。

それこそ『別荘』内で魔力が戻っている状態のエヴァンジェリンが酔う程に。

おまけに米酒やらブランデーやらワインやらリキュールやら次々とシイナに勧められるままに飲んだのでいわゆる『チャンポン』状態である。

そりゃ悪酔いしない方がおかしい。

「大体なんでシイナはあれだけ飲んで平気なんだ・・・」

エヴァンジェリンの脳裏には昨夜のシイナの姿が焼き付いている。

きっかけは些細なことだった。

シイナの酒の飲みっぷりの良さを見たチャチャゼロが酒呑み勝負を仕掛けたのだ。

だがそのシイナが開始と同時に酒ビンをラッパ飲みし始め・・・そしてそのままノーブレスで一本を飲み干してしまった。

更に続けて3本、4本とラッパ飲みで一氣に酒ビンを干してしまう。

しかもそんなだけ無茶苦茶な飲み方をしているというのにシイナはピンピンしていた。

妙にテンションが上がっていたシイナは

『さあ、宴会はまだまだこれからよ』

といいつつさらに虚空からりんご酒シードルの入った樽を出すとそのまま樽を傾けて飲み始める。

チャチャゼロとの勝負だった筈なのだが流石のチャチャゼロもシイナの飲みっぷりに唖然として最早勝負を放棄してシイナがガンガン飲んでるだけでしかなかった。

そしてエヴァンジェリンはと言えば・・・既に酒が入って妙にテンションが上がっていたせいで飲んでいる酒の美味さにも助けられ、自分も負けじと杯を呷っていたのだ。

その結果途中でぶっ倒れてしまい今に至っている。

「基本的に気象精霊は酒好きが多いし、アレくらい飲むのなんて日常茶飯事よ」

「どんだけ飲むんだ、お前らは・・・」

大したことないかのように答えるシイナにエヴァンジェリンは呆れはてた。

ちなみに気象精霊全てが酒豪というわけではない。

シイナは気象室の東亜支局で三大酒豪の一人に数えられており、かつて気象精霊の同僚であるユメミ主催のお花見宴会に参加して20日以上続いた宴会で最後まで酔いつぶれなかったという経歴を持つ猛者である。

その時は大体一日一石・・・180リットル程飲んでいたので総計4000リットル程の酒を飲んだ事になる。

ユメミは常にミリイやシイナを宴会に巻き込もうとするが、単に仲が良いというだけではなく酒豪であるユメミに付き合える数少ない精霊であるという理由もあったりするのだ。

そんな酒豪精霊であるシイナにとってたった750ml位の酒なんてコップ一杯くらい感覚でしかない。

「まあエヴァがこんな調子だから呪いを解くのはまた今度ね」

「何だと・・・うつっ」

溜息をついて立ち上がったシイナをエヴァンジェリンが引き留めようとすが、エヴァンジェリンはすぐに頭を抑えて蹲ってしまふ。

「こんな魔力が不安定な状態でエヴァの霊体をいじくったらどうなるか分からないわよ。大人しくしときなさい」

「うつっ」

叱りつけるように言うシイナにエヴァンジェリンは全く反応できない。

だがここで事態を見守っていた茶々丸が助け舟を出した。

「あの、シイナさん。二日酔いを治す薬というのはないのでしょうか？」

その言葉にエヴァンジェリンは顔を上げる。

確かに花粉症を治せるくらいならそういった手段を医者であるシイナが持っていてもおかしくはない。

「あるにはあるんだけどね・・・」

シイナはそう言うと虚空からフタのついたビンを取り出した。

ラベルがついており、そこには『シャツキリ 3号改』と書かれて

いる。

その薬を見てエヴァンジェリンは寒気を感じた。

（何だ？何故か寒気がする・・・まるでハカセの発明品を目の前にしてる時のような・・・）

そのビンを持ちつつ溜息をついてシイナは話しを続ける。

「ユメミ・・・あたしの友達で魔法薬作っている子と共同開発した薬で実際に医務室で使ってる薬なんだけどね。あくまでも精霊用の薬だから地上の生物に使ったらどんな副作用が出るのか分からないのよ」

その言葉を聞いてエヴァンジェリンの顔が固まった。

「副作用・・・ですか？」

「この薬のベースになった薬が『シャツキリ 3号』っていう薬なんだけど・・・一気に体内のアルコールを燃焼させるから水属性が弱い人だと口から霊光弾を吐いたり、身体が燃え上がったりしちゃうの。それだと使えないから少し効果を弱めたのがこの薬なのよ。エヴァは氷系が得意みたいだから大丈夫かもしれないけど・・・試してみる？」

問いかけてきたシイナに対してエヴァンジェリンは即座に首を横に振った。

シイナの話を聞く限りどうもそのユメミという製作者にハカセや超鈴音と同じにおいがする・・・ネーミング的にも。



（あの靈光弾を吐き出すなんて冗談ではない！）

シイナの靈光弾の威力を目で見ているエヴァンジェリンとしてはそんな危険性のある薬を飲む気は即座に失せた。

「でしょうね。二日酔いなんて静かに寝てれば治るんだからあせって無理することないでしょ？そんなに焦らなくてもあたしは逃げないわよ」

エヴァンジェリンの反応を予想していたらしいシイナはそう言いつつピンを虚空に消した。

「ま、そういうことだからエヴァも安静にしていた方がいいし、あたしは寮に帰るわね。茶々丸さん、後はお願いするわ。じゃあまたね、エヴァ」

「はい、お任せ下さい」

「お大事に」

シイナは手を振って踵を返し、部屋の出口へと向かっていく。

それを見てさよも頭を下げてからそれに続いていった。

だがそれをエヴァンジェリンが呼び止めようとする。

「おい、この別荘からは24時間経たないと出られ・・・」

エヴァンジェリンの言葉は最後まで続かなかった。

歩き出したシイナの前に穴が開き、シイナとさよがその中へ入ると瞬時に穴が消えてしまう。

「シイナさんとさよさんの反応が消えました。この空間から外へと出たものだと思います」

淡々と分析結果を述べる茶々丸にエヴァンジェリンはしばらく口を開けたままだった。

「・・・クハハハ、一体どこまで非常識なんだ？あいつは・・・」

「ソナノ今更ダゼ？ゴ主人」

諦めたような口調で主に呟きに応じるチャチャゼロは既にシイナに順応したようだった。

その頃、麻帆良大学工学部の研究室の一室にて・・・

「くしゅんっ！」「」

小さなクシャミが二つ部屋に響く。

「ハカセ、風邪ひいたネ？」

「いえ、そうじゃないんですけど・・・。超さんこそ」

「私も違うヨ。これは誰か私たちの噂をしてるネ」

「そんな非科学的なこと信じてるんですか？」

「やれやれ、ハカセは相変わらずネ」

「そりゃそうですよ。科学者が非科学的なこと信じてどうするんですか」

「時にはそういう事を信じてみるのもいいと思うヨ」

「いいんですよ、私は科学に魂を売った人間ですから」

「ハハハ、さて、冗談はこれくらいにしておいて実験を進めるヨ」

「はい、次の工程なんですけど・・・」

エヴァンジェリンの家を出たシイナとさよは既に夕方になり、部活を終えて下校する生徒がちらほら見られる学園内を寮に向けて歩いていた。

その中でさよがシイナに話かける。

「あの、シイナさん。本当にエヴァンジェリンさんを治す事って出来ないんですか？」

「あれ、さよ、何でそう思うの？」

「回復リカバリー霊術と治癒ヒーリング霊術はシイナさん得意じゃないですか。そんなシイナさんが二日酔いくらい治せないなんておかしいと思っただけです」

当たり前のように話すさよにシイナは苦笑した。

「・・・鋭いわねえ。まあその通りよ、治癒霊術を使えば二日酔いくらい簡単に治せるわ」

事もなげに答えるシイナにさよは頬を膨らませる。

「じゃあなんで治せないなんて言っただんですか!？」

「あら、あたしは『治せない』とは言っていないわよ？あたしは茶々丸さんに『二日酔いを治す薬はないか』と聞かれて『二日酔いを治す薬はあるけど使わない方がいい』って答えたんだもの。嘘はついてないわ」

ニヤリと笑いながらシイナは答える。

「それは屁理屈です!」

さよはそれに納得出来ないようで頬を膨らませたままである。

「そう怒らないでよ。治さなかったのには理由があるんだから」

「どんな理由ですか!？」

「エヴァ治す事への対策のためよ」

「対策・・・ですか？」

一転して真面目な表情をしたシイナにさよは疑問を顔に浮かべる。

「そうよ。エヴァの治療をしてる時に調べただけど今のエヴァには二つの呪いが掛っているわ。【登校地獄】と【魔力抑制】の呪いがね」

「二つの呪いですか・・・。アレ、でもエヴァンジェリンさんがサウザントマスターっていう人に掛けられたのは【登校地獄】の呪いですね？」

シイナの話しを聞いたさよは疑問を浮かべる。

酒盛りをしている時にエヴァンジェリンの封印に関する話はさよも聞いていた。

「そう、『千の呪文の男』<sup>サウザントマスター</sup>がエヴァに掛けたのは【登校地獄】だけ。そして【魔力抑制】の呪いを掛けたのは恐らく・・・学園<sup>じゅく</sup>の魔法使いよ」

「ええっ！」

「だっておかしいじゃない。『千の呪文の男』<sup>サウザントマスター</sup>は学園<sup>じゅく</sup>の警備員にする目的で呪いを掛けたのよ？何でそのために魔力を封印しなきゃい

けないのよ」

「そういえば・・・弱くしちゃったら警備員の意味がないですよね」  
シイナの説明にさよは納得の声をあげた。

「その通りよ。この事実を知ったらエヴァは怒り狂うでしょうけどね、それは大した問題じゃないわ。・・・問題はあたしが解いた後のことよ」

「解いた後・・・？」

「ええ。呪い自体は多分簡単に解けるわ。ただ【登校地獄】の方はともかく【魔力抑制】を掛けたのが学園（こく）の魔法使いだとするとあたしが解いたら恐らく呪いが解けた事に気付かれる・・・」

「・・・もしかして？」

「そう。あたしにとってもエヴァにとっても好ましくない事態になるでしょうね。学園側は当然呪いを解いた人物を探すでしょうし、エヴァを警戒して暴走することも考えられるわ。無論魔力が復活したエヴァなら返り討ちに出来るでしょうけど・・・間違（まちが）いなく麻帆良から出ていく事になるわね。それはエヴァにとっても都合が悪い筈」

「え、何ですか？」

さよは首を傾げた。

エヴァンジェリンが学園を出て行ってまずくなる事態というのは思

い浮かばない。

「エヴァは否定するでしょうけどね、エヴァは間違いなく今のところ穏やかな日々を送っているわ。監獄の中という条件はつくけど。『闇の福音』が解き放たれたというニュースはあつという間に広がる・・・それこそ賞金稼ぎとかが直に集まる程にね」

「・・・！」

シイナはさよが理解したのを確認しつつ続けた。

「それに茶々丸さんの問題もあるわよ。ここから出ていったら茶々丸さんのメンテナンスはどうするの？」

「あ、そういうば葉加瀬さんがしてるんですけどっけ？」

「葉加瀬さんと超さんね。彼女達の拠点・設備が学園（こく）にある以上茶々丸さんを此処から離すわけにはいかないわ」

「そう考えると・・・問題が多いですね」

「そうよ。エヴァの二日酔いを治したらすぐ呪いを解きたがるのは目に見えてるわ。だからこの問題を解決するための手を打つ時間が必要だったのよ。だからエヴァには悪いけど二日酔いを治さなかったの・・・そのために酔い潰したんだしね」

「ええっ！？」

さよはシイナの説明を聞いて驚きの声あげた。

「その為にわざと酔い潰したんですか!？」

「そうよ。もっともあたしの友達がよく使う方法なんだけど」

悪びれもせずに答えるシイナにさよは冷や汗が出る思いだった。

(そんな事を考えながらお酒をあれだけ飲んでたんですか!?)

何も言う事が出来ないさよにシイナは続ける。

「あとエヴァの身体を分析した時ちょっと面白いことを思いついた  
もあるわね。多分出来ると思うけどしっかりと検証してみたいか  
ら時間が欲しかったのよ・・・ふふふ、エヴァの驚く顔が目には浮か  
ぶわ」

クスクスと笑うシイナをさよは啞然としながら見つめていた。

(シイナさんとケンカはできるだけしたくないです)

そうさよが思っているところに突然声が響いた。

「やめてください!!」

シイナが笑うのを止めてその方向に目をやる。

シイナが見ている方向にさよも目を向けてみると・・・

ロングヘアーの女子生徒が数人の男の囲まれていた。

「あれ、長谷川さんですね?」



「多分・・・そうだと思うわ」

## 第六話 酒宴は武器の一つ（後書き）

「ミリイと！」

「ユメミのお！」

「「後書きコーナー！」」

「いやー、今回シイナが凄かったわね」

「作者があ、『本当はシイナの性格こんなじゃなかったんだけどこれの方が面白そうだから矯正しようか迷ってる』とか言ってるわあ」

「それをキャラに引きずられてるって言うんだけどね」

「そんなわけでえ、シイナの性格について設定通りでいくかそれとも今回みたいな性格で固定するか読者の方にアンケートをとりまゝす」

「設定通りの方がいいなら1、今回の方がいいなら2を感想の方にお願いね」

「よろしくねえ」

「さて今回は前回作者が説明し忘れた霊光弾について説明するわよ」  
「いい加減だねえ。霊光弾はあ、あたし達精霊のお、一番基本的な攻撃方法だよあ」

「基本的にはあたし達精霊の霊力を抽出してエネルギーに変換したエネルギー弾と考えていいわ」

「威力はあるんだけどお、あまり射程距離はないのよねえ」

「基本は真っ直ぐにしか飛ばさせないけど弾の形を変えたり、電撃を纏わせると操作できたりとかバリエーションは広いわね」

「一番重要なのは前口上よあ」

「小説の中でシイナが『まずは様子見』の六・二×一〇の一五乗ジュール！』って言ってたのが前口上ね」

「ホントはあ、霊光弾を撃つこと自体には言葉を言う必要はないわ

あ  
」

「だけど靈光弾のエネルギーは凄く高いし、靈力の高い精霊はそれこそ高威力の靈光弾を何発でも撃てて大変な事になっちゃうから能力が高い精霊が多数所属する精霊省・・・氣象室のある精霊の国際連合みたいな組織の規則でこの前口上で同じ言葉を使っちゃいけないって決まってるのよ」

「だから、いくら戦闘中に前口上をとっさに思いつくかが重要なんだよね」

「あとジュールっていうのはエネルギーの単位で地球上で102gの物体を1m動かすエネルギーのこと。前口上では靈光弾に使ったエネルギーの量を表すの。上の例だと六・二×一〇の一五乗ジュールがそれね」

「今回のシイナはかなり手加減したほうねえ」

「普段のシイナは普通に日本で一年間に消費されたくらいのエネルギー・・・5・2億の石油換算トンくらいの靈光弾をぶちかましてるしね」

「さて、今回の精霊世界紹介は天上界よ」

「あたし達、氣象精霊が所属する氣象室の本部があるところだねえ」

「そう、天上界の首都の『水の都』は精霊世界最大の行政都市よ。」

昔精霊世界最大の帝国・・・大天空界の行政機能が水の都にあったことが起源になってるわ」

「今も神聖世界同盟・・・天空界・天元界・神仙界・天元界の同盟の行政機能は全部この都市にあるよあ」

「そうね、但しあくまでも同盟の行政機能であって各世界の主権は各世界にあるわ。ただそれらは天上界の閣僚・・・二十四賢人の賢人会議によって動いてるんだけど、その代表者の神帝ヤウエが天上界の大統領みたいなものを兼ねてるせいで天上界が神聖世界同盟の世界を支配してるっていう選民思想があるんだよね」

「本当はあ、天空界が一番力を持つてるしい、天上界は大した産業

が無いから実質的な国力は低いわあ」

「政治は上級精霊のみが選挙権のある制限選挙による民主主義それで選ばれるのが神帝<sup>ヤウエ</sup>で地上の大統領みたいなものね。地上世界の領有権を主張していてその為にあたし達氣象精霊の邪魔をする氣象變動誘発局もその為の工作部隊よ」

「住んでるのはあ、天神族・仙人族・龍人族・猫神族・天人族・有翼人族と種類が多いわねえ」

「あたし達の仲間だとフェイミンさんがこの出身ね」

「さて、今回はここまでにしときましようか」

「読者の皆さんアンケートもよろしくねえ」

「じゃあ

「またね」」

## 第七話 メガネとコアラ（前書き）

おまたせしました。

第七話完成です。

今回は今までで一番の難産でした。

ちうちゃんは動かしくいです（汗）

シイナは多少2の方を織り交ぜていくことにします。

結構長くなってしまいましたがどうぞ

## 第七話 メガネとコアラ

（あゝちくしょう、何でこうなってんだ！）

長谷川千雨は内心でボヤいた。

ケチのつきはじめはメガネが壊れたことだった。

仕方がないので放課後に馴染みのメガネ屋に修理に行ったのだが、その店主に『今かけてるスペアのメガネもフレームが歪んでるからサービスで直してあげようか』と言われたのだ。

店主は昔からの付き合いで千雨の眼鏡が伊達メガネであり、視力が裸眼で1・2あることを知っている。

千雨がメガネをファッションで掛けていると思ってるからこそその言葉だった。

最初は渋ったものの寮生活の千雨にとって節約は重要である。

結局店主に勧められるがままにスペアのメガネも預けた。

メガネもないのでさっさと寮へ帰ろうと考えていた千雨だが、途中通りがかった衣服店で布地の大セールをしているのを発見、『これで新しいコスプレの服が作れる！』と大喜びして店に突撃、その後部屋の食料・・・インスタントラーメン等が切れてることを思い出し、あれこれ買っているうちに時間が経って遅くなってしまったのだ。

急いで寮に帰ろうとした千雨だが、何故だか今日に限ってよく声を

かけられた。

いわゆるナンパというやつだが丁寧に断っていたものの本日4組目になる目の前の男達はしつこかった。

金髪にピアスといった明らかにチャラそうな格好をした男達は千雨の顔を塞ぐように立っている。

「いや、だからさ、荷物重そうじゃん？俺達が荷物持つの手伝ってあげるからさ、ちょっとだけ付き合ってよ」

「そうそう、少し付き合ってくれたら家まで送ってあげるからさあ」

「私寮住まいなんで門限ありますから！」

千雨がそう主張しても男達は全く聞こうとしない。

いや、聞こえてはいるのだろうが聞くつもりがないのだろう。

「そんなの少しくらい破っても大丈夫だよ」

「そうそう、それよりも楽しい事しようって」

（ホントしつkeer！大体『大丈夫』も『楽しい事』もてめえらの主観だろうが！）

表面上はあくまで丁寧に拒絶しながら千雨は内心毒づく。

今までの輩は麻帆良学園の学生だったらしく、揉め事を起こせば広域指導員が駆け付けるのを知っていたので断れば引き下がっていつ

だが、目の前の男達はどうかやら外部から来たらしい。

（くそ！さっきから声あげてんのに全く誰も来やしねえ）

助けてくれないまでも大きな声をあげていたら誰かが学校関係者の方に連絡してくれると期待して大きな声を出していた千雨だが、全く広域指導員が来る様子はない。

千雨は内心そろそろやばいかと焦っていた。

「あわわ、シイナさんどうするんですか？」

さよが千雨が見るからに不良っぽい輩にからまれていると分かって慌てるが、それに対してシイナは冷静だった。

「うーん、手荒いことはしたくないんだけどそんなに余裕はないみたいね・・・」

シイナはすぐには動かずに考えを纏める。

（元々長谷川さんの様子は気になってたし・・・問題ないわね）

シイナは自分の中でそう結論づけた。

一度方針を決めてしまえば後は早い。

シイナは一瞬で千雨を助ける流れを構築してしまう。

「さよ、長谷川さんを助けるわ。アレお願いできる？その間にあた



しが長谷川さんを連れ出すから」

方針と流れを説明して笑いながらさよに役割分担を頼むシイナに対しさよはコクコクと頷いた。

「はい、やってみます！」

「よし、じゃあいきましょうか」

シイナとさよはお互いに目を合わせるとシイナはゆっくりと千雨の方へと近づき、さよは男達の裏へと移動していった。

「私は急いで帰らないといけないんです！」

「別に平気だって。ね、いいだろ？ 少しくらい付き合ってよ」

馴れ馴れしく掛けてくる男達に千雨はいい加減辟易していた。

相変わらず男達は千雨の言葉を全く聞こうとしない。

そのしつこさは呆れを通り越してむしろ見事さえ言える。

（こいつら程度を知らねえのか！？）

千雨もいい加減に男達の相手をするのに疲れてきていた。

だがそんな時にても動きそうになかった男達に突然異変が起き

た。

「が、な……んだ？から……だが……！？」

千雨の顔を塞いでいた男達が急に動きを止めたのだ。

男達はまるで何かに縛られているかのように身体を痙攣させている。

（え？一体どうしたんだこいつら？）

突然の男達の変化に千雨は戸惑い、どうしてよいかわからなくなってしまったが、その後ろから救いの声が掛けられた。

「あれ、長谷川さん？」

いきなり呼ばれた自分の名前に千雨が後ろを振り向くと最近転校してきたクラスメイト……木乃花椎奈が視界に入った。

「こ、木乃花？」

「今のうちにいくわよ」

千雨にだけ聞こえるくらいの声で話しかけながらシイナは千雨に近づくと、突然のことに対応出来ないでいる千雨が左手に持っていたビニール袋を代わりに持つてしまう。

「お兄さん達、あたし達もう門限なんで帰りますね。いきましょ、長谷川さん」

「お、おう」

目の前の男達の様子が気になるが、確かにこの場から離れるチャンスである。

千雨は一瞬迷った末にシイナに従ってこの場を離れることにした。

そうして二人が遠ざかっていったすぐ後に生徒から通報を受けた広域指導員、『デスメガネ』こと高畑・T・タカミチが到着し、ナンパ男二人は『麻帆良で手を出すな』とナンパ仲間から言われた言葉の意味を知ることとなる。

「ありがとな、おかげで助かった」

しばらく歩いて男達の姿が見えなくなった辺りで千雨は足を止めてシイナに頭を軽く下げた。

「大したことじゃないわ、それに最大の功労者はあたしじゃないし」

「は？」

シイナの返事に千雨は疑問を浮かべる。

シイナではないと言ってもあの場にシイナ以外に自分を助けてくれた人はいなかった筈だ。

「さよ、出てきても大丈夫よ」

「は？木乃花、お前何を言って・・・」「え、え〜と、こんばんは！へ？」

誰もいない空間に目を向けるシイナに千雨は訝しげな顔を浮かべるが、その顔が固まった。

誰もいなかった筈の空間に急にセーラー服を着たロングヘアーの少女・・・さよが現れたのだ。

「は、はじめまして！私、相坂さよです！」

ペコリと完璧なお辞儀をするさよに対して千雨は・・・硬直していた。

（あれ？目の錯覚か？今コイツいきなり目の前に現れたよな？しかもコイツ・・・足が無い！？）

様々な考えが千雨の頭の中を駆け巡るが、最後に千雨が行き着いたのは・・・諦めだった。

（ああ、こいつもか）

その思考を最後に千雨の身体から力が抜け・・・千雨は意識を失った。

小学生の頃から疑問を感じていた。

『何で人が空を飛んでいるのか』

『何で吹っ飛ばされた人がピンピンしているのか』

『何であれだけ大きい学校の湖が地図に載っていないのか』

周囲の大人や同級生に尋ねたが誰一人まともに答えてくれなかった。

そんな周囲とのひずみは成長するにつれて大きくなった。

『なんで国の図書館より大きな図書館が学園に存在するのか』

『都市全体が一つの学園で構成される街が実在するものなのか』

『そもそも何で学園全ての学校のトップをあのありえない後頭部をした学園長が兼ねているのか』

成長する毎に疑問は大きくなり、増えていく。

そしてその周囲との違和感は今クラスになって更に拡大した。

『何で明らかにオーバートクノロジーなロボットにしか見えないヤツと一緒に授業受けてるのに誰も指摘しないのか』

『何で自分のクラスだけ留学生が異様に集中しているのか』

『自分のクラスには身体能力的にも学力的にも中学生離れしたヤツが多すぎはしないか』

誰も自分の疑問に答えてくれず、また同意もしてくれない。

まるで自分の常識が非常識なのではないかと錯覚してしまうような日常。

その生活の中でいつしか自分と周囲を隔てる証としてのメガネをかけるようになった。

のぞき穴から覗くようにして日々を過ごし・・・壊れてしまいそうな自分の常識を守る。

当然クラスで孤立するようにはなり、そんな日々が続く中で何とか出口を求め、やがてネットというこの学園と外の世界を繋げる窓口を自分の世界とするようになった。

自分でも薄々理解はしている。

自分の世界は虚構の世界であり、ネットを通して会話をしてもそれは一時だけのことで人との繋がりはないと。

自分から切り捨てたものの仲良く話して普通の学生生活を送っているように見えるクラスの連中が時々羨ましく思えた。

だからこそ。

2年生になって転校生が来た時はかすかな期待を抱いた。

『もしかしたら自分の感覚を理解してくれるのではないか』

・・・と。

だがその淡い期待も打ち砕かれた。

（私は・・・本当に一人なのか？）

「う・・・ん・・・」

千雨が目を覚ました時、千雨はベッドの上に横になっていた。

千雨が倒れた後、シイナは迷彩結界で姿を隠しながら千雨を抱えて寮まで飛んで帰った。

そして勝手に千雨の部屋に入るわけにもいかなかったのでとりあえず自分の部屋に運びこんで自分のベッドに寝かせたのだ。

千雨が身を起こすと木製の家具が置かれたナチュラルな印象を受ける部屋が目に移り、ベッドの近くに置かれたテーブルで同じクラスの木乃花椎奈が椅子に座って何かを書いているのが目に入る。

「あ、起きたの？」

千雨の様子に気付いたシイナが座っていた椅子から立ち上がる。

「・・・木乃花？」

「そうよ」

「じじは・・・？」

「あたしと五月の部屋よ。長谷川さん何があったか覚えてる？」

その言葉で千雨の脳裏に先程の出来事が蘇る。

「まあいきなり幽霊が現れたら驚くわよね。驚かせてごめんね」

「・・・」

頭を下げるシイナに千雨は無言でベッドから起き上がり、そのままベッドから降りた。

「・・・寮まで運んでくれてありがとよ。いきなりで悪いが部屋に帰らせてもらう」

千雨はシイナの返事も待たずにドアへと向かう。

千雨の基本方針は出来るだけ非常識な事には関わらずに普通の学生生活を送ることである。

そんな千雨にしてみれば、幽霊を紹介するような人物とはなるべく関わりたくなかったのだ。

だがシイナにこのまま千雨を出て行かせるつもりはない。

シイナから見て千雨もエヴァンジェリンと変わらないかなり危険な精神状態をしている。

むしろ明らかに逃避と思われる行動に没頭している分千雨のほうが切羽つまっている状態である。



だからこそシイナは千雨が最も反応するであろう言葉を発した。

「やっぱり非常識なものは怖い？」

シイナの言葉はまさに千雨の最も深い部分を突く。

そして自分を突きさす言葉に千雨は足を止めて振り返った。

「何だと・・・？」

シイナは椅子から立ち上がると千雨と相対して目を合わせる。

これは医者として患者と目を合わせるといふ基本的な行動である。

「まあ当たり前よね。ここでは当たり前のことが当たり前じゃなくて、ありえないことが普通の事なんだから」

「てめえ何を言ってるんだ！？」

怒鳴る千雨に対してシイナは微笑んだ。

その微笑みに千雨をさらに怒らせる。

「こここの常識と貴女の常識は相容れないって言ってるのよ」

あともう少しと判断したシイナがダメ押しとばかりに告げたその言葉を聞いた途端に千雨の中で何かがキレた。

「当たり前だろうが！！人が普通に空を飛んで！！そこら中を世界最先端レベルを超えたロボットが動いていて！！どう見ても世界遺

産レベルの大きさの木が普通に在って！！何で誰もおかしいって言わねえ！？何でどいつもこいつも普通に笑ってやがる！？そんな常識があつてたまるか！！」

千雨は吠えるようにまくし立てる。

普段被っていた仮面をかなぐり捨ててその顔には怒りと悲しみが混ざったような表情が浮かんでいる。

そしてその眼にはうつすらと涙が滲んでいた。

「いままで私が指摘しても誰もが笑っただけ！しまいには私が変人扱いだ！7年以上もクラスで除け者扱いされてきた私の気持ちがお前に分かるか！？おまけに転校生つてことでもしかしたら話を通じるかと思つてたお前が平然と幽霊を紹介しやがる！私に一体どうしろつて言うんだっ！？」

それは長谷川千雨という存在が今まで溜めて・・・堪えてきた魂の底からの叫びだった。

誰からも理解されず、結果として孤立という道を歩まざるを得なかった少女の魂の叫び。

最後には絶叫するように怒鳴り、泣き崩れた千雨をシイナは黙って見ていたが、その内面ではこの学園の魔法使い達に対して呆れかえっていた。

（『認識阻害』の結界のせいでこんなに苦しんでる子がいるのに自分たちの都合の為にそれ続けている。しかも魔法先生が担任の子がこんなに歪んでいるのに気付いていないなんて・・・）

改めてシイナは原作が極めて危ないバランスの上に成り立っていたことを実感する。

（原作の内容は過信しないほうがいいわね）

そしてシイナはより一層警戒を怠らないようにすることを心に誓った。

それは同時に危うい様子のある因子・・・理不尽な力によって潰されそうなものを医師として全て引き受ける事を覚悟した瞬間でもあった。

その後しばらく泣き続けた千雨だったがやがて泣きやむと、今まで溜まっていた鬱憤を放出したためか冷静さを取り戻した。

シイナは千雨が落ち着くのを見計らって声を掛ける。

「・・・スツキリした？」

「・・・ああ、いきなり怒鳴って悪かったな」

それにしつかりとした口調で応じた千雨のその目にはいつもの何かを分析するような色が浮かんでいる。

「木乃花は・・・ここで何が起きているのか知ってるんだな？」

千雨の口から出た言葉は確認だった。

千雨は目の前に座る人物・・・木乃花椎奈が自分が持ち得ない情報を持っていると確信していた。

でなければさっきのような質問をするわけがない。

この学園の現状を疑問に感じていなければさっきのような言葉が出るはずがなかった。

シイナは全てを観察するような千雨の目を全く気にせずに再び椅子に腰をおろした。

「話も長くなるから長谷川さんも座ったら？」

シイナが千雨に椅子を勧め、千雨も大人しくそれに従って椅子に腰を掛けた。

千雨が腰かけるとキッチンから五月が出てきてシイナと千雨、もう一つ空いたイスの前にホットココアの入ったマグカップを置く。

「どうぞ」

「ありがと、五月」

ニツコリと笑ってココアを置く五月に礼を言うシイナを見て慌てて千雨も五月に会釈をする。

「四葉・・・いたのか・・・」

そのままキッチンに戻る五月を見ながら千雨は呟いた。

精神が不安定であったこともあるが、千雨は今まで五月がいることに気付かなかった。

あれだけ大声を上げたのに人が来なかったのだから当然の反応である。

実はシイナは千雨が叫ぶ前に防音の為に部屋に結界を張っており、キッチンにいた五月には届かなかったという理由があったりするのだが。

「最初からいたわよ？」

「へっ……っておい！話聞かれてもいいのかよ！？」

ココアに口をつけながら応じるシイナに千雨は少ししてから慌てた。学園の異常に関する話を簡単にホイホイと漏らしていいのか心配したのだ。

「五月はもう知ってるから問題ないわ」

「そうなのか……」

正直シイナは五月には自分の正体を含めて全てを話している。

というのも寮生活を始めて、ほとんど食事を取らないシイナ（精霊は飲み物が食事で固形物を取る必要がない）を五月が締めあげたのだ。

結果五月の迫力に観念したシイナは洗いざらい五月に事情を説明したものの『食べ物人は人を幸せにするもの』という信念を持った五月の説得―（説教？）―によりそれ以降五月がいる時は食事を取る事になった。

ちなみに幽霊のさよの存在まで軽く受け入れてしまった五月にシイナは尊敬の念を覚え、それ以降シイナは五月に頭があがらなかったりする。

この部屋の頂点に存在するのは間違いなく五月であった。

#### 閑話休題

シイナがココアに口をつけるのを見て千雨もまたココアのマグカップを手取る。

そしてもう一つ置かれたマグカップに目をやった。

「・・・もしかして？」

シイナに尋ねる千雨にシイナは頷く。

「さよ、もう大丈夫よ」

「はい、こんばんは」

シイナが声を掛けると恐る恐るさよが姿を現す。

さすがに二度目である事もあって千雨は若干身体をこわばらせたも

の、声を上げることは無かった。

「はじめまして！2 - A、出席番号一番の相坂さよです！」

ペコリと頭を下げるさよに千雨もぎこちないながらも挨拶を返す。

「え・・・と・・・はじめまして？」

千雨が返した挨拶にさよはぱつと顔を上げると満面の笑みを浮かべた。

「わ〜ん、普通の人と挨拶出来ました〜!!」

身体全体で喜びを表現しているさよの姿に呆氣にとられる千雨にシイナは苦笑する。

「さよは今まで60年位幽霊やってただけどほとんど認識されなかったのよ」

「もしかして『座らずの席』って・・・？」

「さよの席よ」

その答えに千雨は頭を抱えた。

「最初から目立つ奴らが多いと思ってたけど幽霊までいたのかよ、うちのクラスは・・・」

「まあ特殊な子が多い事是否定出来ないわね」

「ってあれ？木乃花はなんで相坂と知り合いになっっているんだ？」

頭を抱えていた千雨が顔を上げてシイナに尋ねかける。

よく考えてみればどこに教室にいた幽霊と転校生の接点があったのか千雨には分からなかった。

「それにさっき相坂が功労者とか言ってたよな？」

「あたしには最初からさよが見えていたからね。すぐ友達になったのよ。それとさっきさよが功労者って言ったのはあいつらに金縛りを掛けたのがさよだからよ。だからあいつらは動けなくなったの」

その答えを聞いて千雨は身を引いた。

そのさよの方を見つめるも、さよは困った顔をしながらココアを飲んでいる。

「金縛り・・・って、おい！それになんで幽霊が普通にココアを飲んでんだよ！？」

冷や汗をかきながら叫ぶ千雨にシイナは目を背けつつココアを飲み、言いづらそうな仕草をしていたが、やがて口を開いた。

「最初は出来なかったらしいんだけどね。あたしと一緒にいるうちに霊力がパワーアップしちゃったらしくて短時間の実体化とか金縛りが使えるようになったみたい。今のさよはほぼ人間と変わらないわ」

さよのパワーアップについてシイナは大体その原因を掴んでいた。



さよはシイナと一緒にいる中でお酒やお茶を飲んでいたおかげで霊力が上がったのだ。

それで金縛りができるようになったのだが、それを見たシイナがもしかしたらと思ひさよに試させたところ、さよは幻想の要素を持っていたようで短時間なら実体化する術が使えるようになったのである。

そんなさよの状況を平然と答えるシイナに千雨は恐怖を感じた。

「木乃花・・・お前何者だ？」

「異世界から来た火の精霊・・・って言ったら信じる？」

冗談っぽく逆に千雨にシイナが尋ねた。

そして人差し指を立てるとその先に火を点す。

その様子をまじまじと見つめながら千雨はしばらく沈黙し、やがてため息をついた。

「お前がそうだって言うならそうなんだろうな」

「あら？信じるの？」

千雨の中の常識は『そんな存在がいるわけがない』とシイナの言葉を否定する。

だがその一方で千雨の理性はシイナの言葉が真実だと認めていた。

「精霊かどうかはわからねえがここまで非常識な事に平然としていて普通の人間だっていう方がおかしいだろ・・・でそろそろこの学園について聞かせてくれないか？」

もはや悟ったような態度になりながら千雨はシイナに続きを促した。

その後シイナは千雨に説明する。

この麻帆良が関東魔法協会という魔法使い達の組織の拠点であること。

その魔法使い達が魔法の存在を隠蔽する為に学園全体に『認識阻害』の効果がある結界を張っていること。

そして千雨が元々体質的にそういったものが効きにくい体質だったこと。

その説明を受けた千雨は・・・身体を震わせた。

「つまり、なんだ？私はその魔法使い共の勝手な都合でずっと苦しんでたっていうわけか？」

「まあ、そういうことになるわね」

シイナは淡々と答え、千雨にはそのシイナの態度からシイナが嘘についていない事が察せられた。

「まああたしが説明しておいてなんだけど・・・魔法とか信じるの？」

そんなシイナの質問に対して千雨はため息をつく。

「信じたくはねえけどな。魔法だって考えたほうが辻褄が合うんだよ。つたどこまで非常識なんだ・・・」

明らかに疲れた様子で千雨はうつむく。

「卵を立てられないと思っててもコロンブスの方法を知ってしまえば立てられるのが当然になる。気味の悪い非常識も理屈が分かってしまえば納得できるものよ。まあ、麻帆<sup>マホ</sup>良は特殊過ぎるケースでしょうけれど」

「・・・そうだな」

しばらく目を閉じていた千雨はマグカップに残っていたココアを一気に啜る。

「なあ、私にこんな事話してよかったのか？木乃花は魔法使いじゃないんだろ？私がお前が精霊だってばらすかもしれないんだぞ？」

「あら、長谷川さんはばらすつもりがあるのかしら？」

「…………お見通しかよ」

千雨の言葉がただの冗談だと簡単に見抜いてしまった自称精霊というクラスメイトに千雨が自分が腹芸では敵わない事を悟る。

シイナの正体について知ってしまった千雨ではあるが、シイナの言う通りその事実を他人に告げるつもりは全くない。

自分が苦しんでいた原因がこの麻帆良の魔法使い達にあると知ったからには、それを恨みこそすれども協力なんてする義理は無いからだ。

そして千雨はマグカップをテーブルに置いて立ち上がった。

「今日は色々とありがとな。おかげで少しスッキリしたよ」

「そう？なら良かったけど・・・夕飯どうするの？」

千雨に応じつつシイナが時計を示す。

時計は7時半を示していて、寮の食堂はもう閉まっている時間だった。

「食堂はもう閉まってるけどいつも通りアレで済ますよ」

そう言つて千雨は部屋のドアの近くに置かれていた自分の買い物袋を指さす。

そして千雨がそのまま部屋出しようとした時・・・この部屋の主がその前に立ちふさがった。

「よ、四葉・・・？」

この部屋の主こと2-Aの癒しキャラ、四葉五月は千雨の前に仁王立ちになる。

「長谷川さん、いつもインスタント食品で済ませてるんですか？」

大きな声ではない。

だがしかし有無を言わせない迫力を持つ五月の声に千雨は頷いた。

「お、おう、そうだけど・・・」

「インスタントばかりだと身体に良くありません。長谷川さんの分も用意してありますから食べていって下さい」

「は、はい・・・頂かせてもらいます・・・」

後ろにコアラのシルエットが何故だか見える五月の迫力に気おされ、千雨は（強制的に）お相伴に預かることとなった。

30分後。

テーブルの上に料理がところ狭しと並び、その料理をシイナ、千雨、さよ、五月が囲んでいた。

料理は和食や洋食のメニューがほとんどであり、五月が超包子では作らない分野に挑戦していることが見て取れる。

ちなみにさよは実体化していれば食べることが出来るようになって  
いる。

「おいしいです」

「おいしいわね」

「ふふ、ありがとうございます」

そうして五月の料理に舌鼓を打つなかで千雨は五月に言葉を投げかけた。

「四葉さ・んはこの学園の事知ってたんだよね？この学園に対して何も思わないのか？」

それに対し、五月は気持ちの良い笑顔を浮かべたまま答える。

「知ってましたけど特に何も思わないですよ。私の夢は料理人になることです。私はその夢のために今自分に出来ることをせいっぱいやっていくだけですから」

口調は柔らかいがその中に確固たる意思を込めて五月は答える。

その答えを聞いた千雨は箸を持ったまま何かを考えていたがやがて口から笑みがこぼれた。

「そっか・・・そうだよな」

「あつ、長谷川さんやつと笑いました！」

「なんだ、そんな顔出来るんじゃないの」

「笑顔が一番の健康の元ですよ」

「へ？」

いきなりのさよの大声に目を丸くした千雨だったが、続くシイナの五月の言葉で自分が笑っていることに気付いた。

『ちゅ』の笑顔とは違う自分の心からの本当の笑顔。

「そつか・・・私まだ笑えたんだ・・・」

そんな千雨の様子に五月が立ち上がる。

「さあ、長谷川さんも元気になりましたし今日はいっぱい食べて下さいね。デザートもありますから」

「・・・はい」

その後和やかに夕食の時間は過ぎていき、千雨は五月にお礼を言っ  
て自分の部屋へと戻って行った。

翌日

「修理のキャンセル・・・ですか？」

「はい。申し訳ないんですけど・・・もう必要なくなりましたから」

真実申し訳なさそうに告げる少女・・・千雨に対して気のいい店主はしばらくしたあと二カつと笑った。

「分かりました。メガネは私が預かっておきましょう。また必要になったら言って下さいよ」

そう言つて店主はメガネを箱の中にしまう。

「ありがとうございます。迷惑をおかけしてすみません」

店主にもう一度礼を言つた後千雨は店を出た。

ふと空を見上げると雲ひとつない蒼空が広がっている。

今までメガネ越しに見ていた景色が凄く輝いて見えた。

よしつと気合いを入れると千雨は雑踏の中へと一步を踏み出す。

それは今まで自らを守る為に殻に閉じこもっていた少女がようやく再び歩み始めた一歩だった。



## 第七話 メガネとコアラ（後書き）

「恒例の後書きコーナー。司会はあたしミリィと」

「ユメミでお送りするわぁ」

「シイナ相変わらず色々な人の問題に突っ込んでるわね」

「シイナはそういうの引きつけるからねえ」

「まあシイナは手慣れているから大丈夫よね」

「そうそう、話題は変わるけどおコアラって一般のイメージと結構違うんだよねえ」

「うん。コアラって癒し系のイメージがあるんだけど……。コアラの食べるユーカリの葉ってコアラにとってお酒と同じ効果があるんだって」

「それってつまりい、コアラはいつも酔っ払っている状態ってことだよねえ」

「作者は実際にコアラを触ったことあるらしいけど『目が据わって怖かった』って言うってたわ」

「『コアラが掴まってた腕の跡が2日程消えなかった』とも言ってたねえ」

「さて、今回の精霊世界の紹介は天元界よ」

「セーラさんの出身世界だねえ」

「天元界は四大州の一つで神聖世界同盟の加盟国ね」

「ただあ、天元界はあまり政治とか文化に積極的じゃないんだよねえ」

「そうね。だからこそ大した権力闘争も起きずに平和が続いたんだろうけど」

「そのかわりい、天元界はその分の情熱を農業に注いでいてえ、精霊世界で一番の穀倉地帯になってるんだよ。美味しいワインやブ

ランデーが沢山あるわぁ」

「またユメミは……。まあとにかく天元界に住んでるのは天神族と酒仙族。政治は完全普通選挙による民主政治で貴族階級は名目だけの存在ね。文化的にのどかな世界でおっとりとした精霊が多いわ」

「今回は短いけどこれくらいにしておきましょうか」

「そうだねえ」

「じゃあまた次まで」

「「またね」」「」

## 第八話 解呪と御札（前書き）

大変お待たせしました。

先週はPCを触れない環境にあって大幅に更新が遅れてしまいました。

## 第八話 解呪と御札

「アハハハ！私を長年苦しめたナギの呪い、やっと解けたぞ！」

「ケケケ、オカゲデ俺モ動ケルゼ」

森の中にあり、普段は静寂に包まれているログハウス内に笑い声が響く。

その声には嬉しさが滲み出ているようであり、かなり弾んでいた。

「元氣ねえ、エヴァ」

「私はエヴァさんの気持ち少し分かります。私もシイナさんにこの学園から出られるようにしてもらった時は凄く嬉しかったですから」

両手を上に掲げて高笑いをするというまさに嬉しさを全身で表現していると言つてよいエヴァンジェリンの様子を見ながら一仕事終えたシイナは茶の間に敷かれた座布団に腰を下ろしていた。

その隣には実体化しているさよも座っている。

最近さよはシイナの提案で霊力の使い方に慣れるために学園関係者の目につかない場所では殆ど実体化して過ごしており、最初は短かった実体化の時間のかなり長く実体化出来るようになっていたりする。

「お疲れ様です、シイナさん。・・・どうぞ」

微笑ましげにエヴァンジェリンの様子を見ていた二人の前に茶々丸がフタをした湯呑を置く。

「ありがと、頂くわね・・・って雫茶!？」

「これ雫茶っていうんですか？」

出されたお茶に驚くシイナに対してさよは疑問を浮かべる。

茶々丸が用意したのは雫茶と呼ばれ、茶碗の直接茶葉を入れて少量のぬるめのお湯を注いでフタをして蒸らし、その後茶碗のフタを押さえながらにじみ出てきた茶の滴を飲むというものだ。

少しずつしか飲めない飲み方ではあるが、ギュツと凝縮された茶の旨みを味わう事が出来る。

茶々丸からその解説を聞いたシイナとさよは早速雫茶を啜った。

「うわ、雫茶って贅沢な味ね。お茶葉もいいものだわ」

「すごいお茶が甘いですよ」

「マスターが最近お気に入り飲み方です。お茶の旨みが最大限に生かされますし、この八女の玉露にはピッタリかと思われます」

「楽しんで貰えたようで何よりだ。茶々丸、私の分も頼む」

「はい、マスター」

思わず茶の美味さに感嘆の声をあげながらシイナとさよがお茶を楽し

しんでいるとようやく落ち着いたエヴァンジェリンも茶の間に移動して腰を下ろした。

「落ち着いたみたいね、エヴァ。身体の調子はどうかしら？」

シイナの医師としての確認にエヴァンジェリンはニヤリと笑う。

「上々というところだな。【魔力抑制】の効果があるから全力とまではないが、【登校地獄】による封印分が解けたおかげで多少の魔力・・・麻帆<sup>マホ</sup>良の魔法使い共くらいの魔力は使えるな」

今回シイナが解呪したエヴァンジェリンの呪いは掛っていた二つの呪いのうち【登校地獄】だけである。

最初シイナに言われた時は不満の声を上げたエヴァンジェリンだったが、再び賞金首として扱われることへの煩わしさと茶々丸のメンテナンス為という説明を受けるとあっさりと納得した。

エヴァンジェリン自身シイナの指摘が尤もだと感じた事もあるが、それよりもその問題を解決する為にシイナが対応策を用意してきたという事が大きかった。

そこまで考えて準備までしていたシイナの行為がエヴァンジェリンには嬉しかったのだ。

「それは良かったわ。でも本当にこっちの魔法って無茶するわねえ」

エヴァンジェリンの様子に安心したシイナだが解呪の時を思い出して呆れ声を漏らした。

「まさか学校とエヴァを人工精霊で直接結びつけてる【登校地獄】の呪いに手を加えていじるなんて正気を疑うわ」

シイナが靈魂系靈術で調べたところ【登校地獄】の精霊に後から何者かが手を加えて呪いの内容を変えた形跡があったのだ。

まあそれでも浄化靈術でシイナがその呪いも含めて一瞬で解除してしまったのだが。

「まさか学校を無事卒業すれば解ける登校地獄に後付け設定を加えていたとはな・・・あのくそジジイ!!」

凄まじい怒りを見せるエヴァンジェリンだがそれも無理はないだろう。

エヴァンジェリンが知る限り、呪いの事を知っていてなおかつ呪いに変更を加えることが出来る人物など学園長しか存在しない。

その学園長はエヴァンジェリンの呪いに手を加えた上で拘束し続け、そのうえで友人ヅラして平気でつきあっていたのだ。

おまけに本来は少し対象の魔力に負担をかけるだけの筈の【登校地獄】に学園の結果を利用することで【魔力抑制】の効果まで加えて今まで呪いは全てナギの【登校地獄】によるせいだと思っていたエヴァンジェリンは見当違いにナギを恨んでいたのである。

「エヴァから聞いた話で『千の呪文の男』が『呪いを解いてやる』って言ったというのはもしかしたら『俺がお前を闇から解放してやる』っていう意味だったのかもね」

「そうだな・・・ナギめ・・・」

3年でまた会いにくると言っていた約束を破ったことについては相変わらず腹が立つが、自分を拘束していたのがナギでは無かったという事実がエヴァンジェリンの中の恨みを消していく。

ナギの事を信じきれなかった自身への怒りという感情も湧いてくるが、それを置いておいてもエヴァンジェリンは記憶の中のナギの姿を思い出していた。

しばらく思い出に浸っていたエヴァンジェリンだがふと視線を隣りに座るシイナに戻す。

「すまなかったな、少し昔を思い出していた。ジジイについてはシイナが言うとおり確かに面倒だからな、シイナの顔を立てておくが・・・。それで魔力の方はどう対処するんだ？」

雫茶の後の茶葉に醤油を垂らしたものを楽しんでいたシイナは持っていた箸を置いた。

「ああ、そうそう。これをエヴァに渡して置くわ」

シイナはサロンのポケットに手を入れて中から数枚の紙片を取り出す。

それは短冊のような形をしていてルーン文字と呼ばれる字が色々と書かれていた。

「おい、ちょっとまでシイナ。その札全然折れ曲がってないけどど



うやってしまってたんだ」

「ああ、私の服のポケットは亜空間ポケットになってるのよ。かなりの容量が入るわ」

「まるで四次元○ケットだな・・・」

呆れつつエヴァンジェリンはシイナから受け取った札をしげしげと眺める。

（見かけは陰陽術に使う札に似ているが書かれているのはルーン文字だな・・・）

「これは？」

「御札魔術に使う札よ。エヴァの呪いをどうするか色々悩んだんだけど昔習ったそれを思い出したの」

実はシイナは悩んでいた時にふと王立学園で修行している時に仲良くなった小妖精<sup>ヒクシー</sup>に教えてもらった御札魔術を思い出したのだ。

シイナからすれば自分で霊術を使っただけが手っ取り早いのですっかり忘れていたのだが、その中に呪いを無効化する術があった事を思い出したシイナは亜空間倉庫から昔貰った魔法書を取り出して思い出しながら御札を作ったのである。

「御札魔術だと？」

「そう、主に小妖精族<sup>ヒクシー</sup>が使う術式なんだけどね、術者の霊力魔力を御札に書かれたルーン文字で作られた魔術式を通して効果を発

揮するの。その札は【封呪の御札】で呪いを無効化する効果があるわ」

「ほう・・・つまりこの札を付ければ【魔力抑制】を解除できるということか？」

「その通りよ。試しに使ってみたら？今は隔離結界をエヴァの家を包むように張ってるから学園側には気付かれないでしょうし。使い方は御札に魔力を込めてエヴァの身体に貼るだけよ」

「ふむ、試してみるか・・・」

シイナに勧められるままにエヴァンジェリンは御札に魔力を込めて自分に胸に貼りつける。

「なるほど効果は確かなようだな、魔力が完全に回復している」

（陰陽術のように札に霊力を込めているわけではなくて札はあくまで魔法式でそこに魔力を通すことで効果を発揮するのか。これは実質無詠唱で呪文詠唱した時と同じ効果を出すのと同じだぞ）

貼りつけた瞬間に今まで感じていた【魔力抑制】がなくなり、全力時の魔力が身体に宿るのを感じたエヴァンジェリンは内心で驚きの声を上げる。

「ちゃんと効果が出たわね。御札は基本的に使い捨てで効力があるのは貼ってる時だけだから注意してね。・・・あとこれも渡しておくわ」

御札の効果に未だ驚きがやまないエヴァンジェリンにシイナは更に

4枚の御札を渡す。

4枚はそれぞれ別の文字が書かれていて別の種類の御札であることが分かる。

「こいつは何の札なんだ？」

「イヤガラセ用の御札。今回の件であたしも学園にイライラしてるのよ、これでも。でも実際の被害者であるエヴァをさしおいてあたしが何かするわけにはいかないからね。それを使うかどうかはエヴァが決めて」

「ほう・・・」

ニヤリと笑いながら説明するシイナにエヴァンジェリンも同じく楽しげな笑みを浮かべた。

「別に肉体的なダメージはないから安心していいわよ？精神的にはどうか知らないけどね」

「ククク、なるほどな。ちなみに効果を聞いてもいいか？」

「それはお楽しみにときましょ。もしエヴァが使ったらその時に教えてあげるわ」

「そうか。ククク、できれば使いたくないんだがなあ、ただどうしてもどんな効力があるのか知りたくなるかもしれないなあ」

「フフフ、あたしも出来たら教えたくないんだけど今教えたくてたまらないわ」

お互いに意味ありげな笑い声を上げながら相對する二人も様子に

「あわわ、なんか真つ黒な空氣が出てます」

さよは身体をびくびくさせ

「ああ、マスター、あんなに楽しそうに」

茶々丸は主人の楽しげな様子を映像に記録し

「ケケケ、ソレデコソゴ主人ダゼ」

チャチャゼロは久しぶりに見る主人の黒い笑みに満足していた。

この後茶々丸手製のケーキでエヴァンジェリンの解放お祝いをする  
ことになったシイナ達だが、シイナはそこでエヴァンジェリンに「  
御札魔術をおしえてくれないか」と頼まれる。

シイナ自身友人に教えてもらったものでもあるのでシイナは「許可  
なく他人に御札魔術を教えない事」を条件に教えることにした。

その後シイナはエヴァンジェリンの別荘で魔法についてエヴァンジ  
エリンに教わる傍らでエヴァンジェリンに御札魔術を教えることと  
なり、シイナ達とエヴァンジェリン一家は深く付き合うことになっ  
ていく。

後日

麻帆良学園女子中等部にある麻帆良学園学園長室から学園長の叫び声が響いた。

その悲鳴を聞いた学園長の秘書的な役割を務める源しずながドアを開けようとしたが、しずなは部屋を見た瞬間にドアを閉じて全速力で逃げ出してしまう。

その後他の魔法教師も部屋に入ろうとはせず、逆に学園長室を魔法で隔離してしまった。

浅黒い肌をした男性教師を始めとした数名の教師が学園長室に突入しようとするものの、麻帆良学園でシスターを兼任するシスター・シャークティや葛葉刀子、源しずな、更には事態を聞いて集まった魔法生徒の中でも高音・D・グッドマンや佐倉愛衣もそれに同調してしまう。

そのために学園長室へ入ることができないまま、結局学園長が自力で部屋を出る翌日までその隔離は続く事になった。

部屋を脱出した学園長は原型を留めておらず、最初に遭遇したタカミチが思わず居合拳を放とうとしてしまう程だった。

学園長の全身は真っ赤になっており、特に元々大きかった後頭部が

かぶれと腫れで更に大きくなっている。

部屋を出た学園長はそのまま倒れてしまい、丸三日目を覚ますことは無かった。

ちなみにその後一部男性も含めた女性教師達は学園長を敬遠するようになり、その状態がしばらく続いた。

また魔法先生達が学園長に何があったのか聞こうとしても学園長は身体を震わせるばかりで何も答えなかったらしい。

## 後日談 精霊と吸血姫の会話

「シイナ、あの御札は何だったんだ？」

「あ、エヴァ使ったんだ？」

「うむ。ジジイと暮を打ってたんだがその最中に呪いの話をしたらとぼけたんでな。むかついたから部屋を出る時にジジイの背中に4枚まとめて貼りつけた」

「うわ、4枚一遍に！？・・・あれは召喚の御札よ」

「召喚だと？」

「うん、しかも同じ種族のものを大量に召喚するタイプで【ノミの御札】と【イエダニの御札】と【やぶつ蚊の御札】・・・」

「うわ、まさにイヤガラセだな・・・ん？もう一つあっただろ？」

「・・・もう一つはゴキ・・・」

「いや、言わんでいい！」





## 第八話 解呪と御札（後書き）

「毎度お馴染みの後書きコーナー担当のミリィです」

「同じくユメミよお」

「今回出てきた御札魔術は氣象精霊記と同じ世界を元にした作品、あんていゝくシリーズに出てくるものよ」

「その主人公組の小妖精が使う魔術なんだよねえ」

「シイナは王立学園時代に習ったらしいけど誰にならったんだろうね？」

「さて、今回の精霊世界紹介は神仙界よ」

「天空界・天上界・天元界を含めた四大州の中で一番マイナーな世界だねえ」

「まあその通りなんだけどね。ただ通天河が通らなかったせいであまり文化や政治は発展しなかったけど天元界と同じく農業が発展した穀物地帯でもあるわ」

「首都は風の都でえ、政治は封建的共和制よお。納税額による普通選挙が行われてるわねえ」

「貴族制も名目だけ残ってるわね。住んでる種族は天神族と仙人族がほとんどよ」

「あたしたちの知り合いだとお、コズエちゃんとか若旦那のマハルさんがここの出身だねえ」

「まあこんなところね。・・・作者はまだ本調子じゃないみたいだけどこれから更新は続けていきたいって言ってるわ」

「完結まで頑張らないとねえ」

「それじゃ今日もこの辺りで

「またね」

## 間話2 朝倉の転校生レポート（前書き）

何となく4日おきのリズムで投稿するようになっています。

取りあえずこのペースを維持していきたいと思います。

100000PV、20000ユニーク、お気に入り登録200件  
を突破しました。

皆様の応援に感謝します。

## 間話2 朝倉の転校生レポート

SIDE 朝倉和美

あたしは朝倉和美。

この麻帆良学園女子中等部の生徒にして報道部突撃班のエースさ。

私の事を『麻帆良のパパタッチ』って呼ぶ人もいるね、光栄なことだけど。

昨日東南アジアで大きな火山が噴火したみたいだけどそれはプロの仕事。

私の仕事はこの麻帆良のことさ。

いつも情報収集・・・もとい取材に勤しんでいる私だけど今一番に気なってるネタがあるんだ。

そのターゲットが今私の視線の先にいる今年の四月にうちのクラスの転入してきた転校生、木乃花椎奈さ。

うちのクラスは元々レベルの高いコが多いけど椎奈ちゃんもそれに劣らずというかなりトップクラスの美少女なんだよね。

ただある日ふと気付いたんだけど椎奈ちゃんってほとんど個人情報

が分からないんだよ。

転校してきた日にインタビューしたけど上手くはぐらかされちゃったし。

でも謎があればそこに突撃して真実を掴むのが私の記者魂！

この朝倉和美様にかかれば突き止められない真実なんてないことを証明してあげるわ！

そんなわけで早速取材開始よ！

まずはうちのクラスの連中から当たっていくとしますか！

出席番号1番 相坂さよ

まあいきなり最初からだけど一度も見たことないんだよね、この子。

席も『座らずの席』とか言われてるくらいだしね。

こりゃ飛ばすしかないかな。

『シイナさんは優しくて面倒見がいい人ですよ』

あれ？

空耳かな？

なんか聞こえた気がするんだけど・・・。

身体に寒気もするしさつさと次にいこ。

出席番号2番 明石裕奈

『木乃花さんの印象？何か大人っぽい雰囲気があるよね、あたし達より年上みたいなのがするし。木乃花さん運動神経いいしうちの部に入って欲しかったな』

まあ確かに椎奈ちゃんは大人っぽい雰囲気があるよね。

桜咲とか龍宮も大人っぽいけどそれを柔らかくしたような感じの。

確かに体育テストでもかなり上位の成績をマークしてたから運動部には欲しい人材だね。

結局文化系の茶道部に入っちゃったけど。

出席番号4番 綾瀬夕映

『椎奈さんの印象ですか？このクラスでは数少ない常識人ですね。いつも落ち着いてる雰囲気があるです。本好きでよく図書館に来る

のでは是非とも図書館探検部に入って欲しかったんですが・・・」

なんかそんな言われ方すると私らが常識無いみたいで気に掛るんだけど・・・。

でも確かに常識人ではあるけど何か常に一步退いた立ち位置にいて周りの賑やかさを楽しんでる印象があるね。

ちうちゃんみたいにツッコミ入れるわけじゃないし・・・。

出席番号5番 和泉亜子

『木乃花さんの印象？素敵な人やねえ。この間体育でうちが怪我した時もすぐ応急処置してくれはったし、うち保健委員なのになさけないわあ。将来お医者さんになるんやないかなあ。何か木乃花さんがうちにマッサージしてくれてから背中も・・・あ、なんでもないよ、これは気にせんというてな』

そういえば椎奈ちゃんってよく健康相談もしていたわね。

保健委員の和泉が言うくらいだから結構そういう知識が豊富なのかな。

でもお医者さんっていうのは言い得て妙かも。

ただ和泉最近妙に機嫌がいいわよね、何があつたんだろ？

出席番号6番 大河内アキラ

『木乃花さん？大人っぽい子だね、まるで私達より随分年上みたいナ。あと動物好きかも。この間木乃花さんがネコの赤ちゃんが生まれた所に連れて行ってくれたんだよ。それと木乃花さんと腕相撲したんだけど私負けたの久しぶりかも・・・』

大人っぽいっていうのはみんな共通の印象みたいだね。

動物好きっていうのは初めて聞いたね、後で確認とおかないと。でもたしかアキラちゃんって握力60以上あったと思うんだけどそれに腕相撲で勝ったって・・・かなりの力持ち？

出席番号7番 柿崎美沙

『椎奈について？桜子と名前が似てるから紛らわしいわね。基本的に大人しいけど賑やかなのは好きみたいよ。いつも楽しそうに教室見てるしね。あとこの間一緒にショッピング行っただけで随分と色々買ってたわよ』

あー、確かに椎名と名前が重なってるね。

でも賑やかなのが好きなのはうちのクラスの特徴だからなあ。

ショッピングに行くっていうのは意外かも。

あまり服に興味なさそうなタイプに見えるけど、実はオシャレ好きだったりするのかな。

出席番号8番 神楽坂明日菜

『へ？木乃花さん？よく勉強を教えて貰ってるわね・・・って何よ、朝倉その顔は！あたしも最初は勉強する気なかったんだけど怒られたのよ、木乃花さんに。言っておくけどこれはあたしだけじゃなくてまきちゃんとかにも怒ってたわよ？でも木乃花さんの説明聞いて確かに納得したから勉強を教えて貰ってるの。分かりやすいし、将来先生になるのが目標なんだってさ』

なんか意外な話が聞けたね。

そういえば最近バカレンジャーの中で明日菜とまき絵は居残り減ってるかも、前は一番多かったのに。

先生になるのが目標・・・ね、結構しつかりとした考え方持ってるのかもね。

出席番号9番 春日美空

『うーん、私ちょっと木乃花さん苦手なんだよね。なんとなくかシスター・シャ・・・ゲフン、ゲフン。い、いや知り合いの人と同じでなんか逆らっちゃいけないオーラ出してるし。イタズラ仕掛け



たら笑顔で復讐しそうな感じの』

あー、確かに少しわかるかも。

絶対にコイツを怒らせたらいけないっていうオーラを持ってる人ね。  
うちのクラスだと那波もそうだけど。

取材もあまり深入りしない方がいいかな・・・。

出席番号10番 絡繰茶々丸

『よくマスターの家にいらっやいますし、仲良くして頂いてます。  
同じ茶道部に入ってますがお茶が好きなので色々なお茶葉を持っ  
てきて貰っていますね』

へへ、茶道部に入ったのはお茶自体がすきだからなのか。

結構優雅な趣味してるのね。

結構いい家の出身なのかな、いいinchよみたいナ。

出席番号11番 釘宮円

『木乃花さん？なんていうか大人だよ。この前も確か氣象解析学  
とかいう難しい本読んでたから頭もいいみたいだし。あ、でも高畑  
先生が苦手みたいだよ？この間明らかに避けてたし』

高畑先生が苦手？

椎奈ちゃんって英語の小テストとか悪くないしなんでだろ？

出張で休みが多いけどいい先生だと思うんだけどな。

担任としては別だけど。

これは少し詳しく調べてみる価値あるかな？

出席番号12番 古菲

『椎奈アルか？うーん、少し苦手アルね。前に勉強しろと言われたネ、少ししたら言われなくなったアルけど。でも五月とは仲は良いみたいヨ』

くーちゃんも椎奈ちゃんに言われたんだ・・・でもアスナみたいに勉強はしてないのね、

結構おせっかいというか世話焼きなのかな？

四葉さんとは同室の筈だからその辺が関係あるのかもね。

出席番号13番 近衛木乃香

『うーん、そうやねえ・・・頼れる人やなあ。何かうちらとは同い年には思えへんわ。この前もウチの悩み聞いてもらたし、めっちゃ人の話きくのがうまいんよ。なんかお医者さんみたいやったなあ』  
確かに何か随分老成してるといつか達観してるような雰囲気はあるね。

人の話聞くのが上手いか・・・それは記者として教えてもらいたいスキルだわ。

でもこのかつちもお医者さんみたいに感じてるのね。

出席番号14番 早乙女ハルナ

『あー、木乃花？しょっちゅう図書館に来てるよ。しかも難しい数学とか地学関係の本ばかり読んでるし、あれは本屋ちゃんとは別の意味で本の虫だね。でもあの子ラヴ臭が全くしないからネタにならないんだよね』

いや、ネタにならないのはむしろ健全なんじゃないの？

・・・記者としては残念だけど。

でも椎奈ちゃんそんなに何で本をよんでるんだろ？

学者でも目指してるのかな？

出席番号15番 桜咲刹奈

『木乃花について聞きたい？別に興味ないな。これから剣道部があるから失礼』

あつちやく、取材失敗・・・。

それにしても桜咲って本当にクラスに興味持たないよね。

このクラスでも龍宮ぐらいとしか話さないし。

でも最近アスナとまき絵の成績が上がってるせいで新しくバカボワイトとしてバカレンジャーに入りかけてること気付いてるのかな？

私の勘だと次の中間あたり危なそうな気がするんだけど。

ま、気を取り直して次いきましょ。

出席番号16番 佐々木まき絵

『椎奈ちゃん？大人っぽい子だよね。この前勉強するように言われたけど私バカだからさ、やっても無駄だと思ってたんだけど椎奈ちゃん教えるの上手くて結構これでも勉強できるなっただよ。確か「自分の将来の目標がはっきりするまでは可能性の幅広げるためにもしっかりと勉強した方がいい」とか言っててなるほどって思ってたんだよね』

まき絵も椎奈ちゃんに勉強教えてもらってたのか。

教師目指してるだけあって面倒見いいのかな？

言ってる事も確かに正論だしね。

でも同じバカレンジャーでもくーちゃんと長瀬と夕映っちは教わってないみたいだけど・・・。

出席番号17番 椎名桜子

『木乃花ちゃん？あたしと結構話してるよ。今よくやってるのが賭け事勝負なんだけど私の3勝0敗25引き分けなんだよね。そういえばこの間買い物行った時に冗談でドレス着せちゃったんだけどよく似あってたにや〜』

賭けごとならほぼ百発百中を誇る椎名と賭けごと勝負してほぼ引き分け！？

これは新たな麻帆良賭けごとクイーンの誕生か！？

これはネタになりそうだな。

でも意外だね、真面目そうに見えて賭けごとするんだ・・・。

出席番号18番 龍宮真名

『木乃花かい？すまないけど何も答えられないな、私もまだ死にた

くはないんでね。クラスメイトのよしみで忠告しておくけどあまり木乃花について深追いしない方がいいぞ』

へ？

椎奈ちゃんって何かヤバイものがあるの！？

あの冷静沈着な龍宮があんなこと言うなんて相当ヤバイよね……。

どうしょ、この件から手を引こうかな……。

いや、あたしは真実の奴隷！

ジャーナリストとして危険に踏み込まずして真実を知る事はできない！

てなわけで次いこ、次！

出席番号19番 超鈴音

『木乃花力？色々に興味深い存在ダヨ、茶々丸とも仲良いみたいネ。この間悩んでた数式にアドバイスくれたし、相当出来るネ』

超が分からない数式にアドバイス！？

うわ、それって少なくとも超りんとか葉加瀬並みには頭がいいってこと！？

急に転校してきた天才少女……記事になりそうだわ！

出席番号20番 長瀬楓

『拙者は少々苦手でござるな。あの御仁中々その手の内が読めぬ故。ただ拙者達に勉強を勧めてきて拙者は断ったでござるが、明日菜殿達に指導しているあたり面倒見が良いのは間違いござらん』

やっぱりバカブルーにも言ってたんだ・・・。

おせっかいというかお人よしというか・・・本来は担任の高畑先生の仕事なんだけどあの人も言わないからな。

仕事しつかりしようよ、高畑センセ・・・。

出席番号21番 那波千鶴

『椎奈とは結構仲いいと思うわ。一緒にいて楽しいし・・・話題が合うのよ。最近をよくお茶会もしてるわ、相坂さんと3人でね。でも和美、なんでそんな事を聞くのかしら？もしよからぬ事を考えたら・・・分かってるわよね？』

いいえ、誓って心にやましい事はしませんから！

ただ個人的に気になって調べてるだけです！

だからちづ姉、その構えたネギをどうにかして！！

ていうか今ネギをどこから取り出したの！！？？

出席番号22番・23番 鳴滝風香・史伽

『しいな姉？ここだけの話だけどしいな姉あの鬼新田とかなり仲がいいよ。よく話してるところ見かけるんだもん。もしかしたらあの二人禁断の仲だったりして・・・』

『あわわ、お姉ちゃん、その話をしたらだめですー！！また幽霊がくー！！？』

あの鬼の新田といい仲！？

これは禁断の関係か！？

あ、でも鬼新田なら多分そういうことはないか。

あの先生自分にも他人にも厳しいからその線引きはしっかりしてるしね。

多分椎奈ちゃんは先生を目指しているらしいからそれについて質問してるとかだろうな。

出席番号24番 葉加瀬聡美

『木乃花さんですか？時々茶々丸と一緒に研究室に来てますよ。この間研究室においてあった量子解析学のデータを理解していたんで研究を少し手伝って貰いました。ただ私達みたく科学に魂を捧げる



つもりはないみたいなんで残念ですね〜』

マジ？

本当にこれってクラス第三の天才少女出現じゃん！

このマッドサイエンティストの研究を理解出来るってどれだけよ・・・。

出席番号25番 長谷川千雨

『あ、椎奈？何でそんな事を聞くんだった？悪いがあいつには世話にな  
ってるしあいつの迷惑になることするって言うなら話さないぞ。・・  
・あ、悪いこれから勉強会があるからもう帰るわ』

うわ、取りつく島もなし！？

それにしてもちうちゃん変わったわよね。

髪を下ろしてメガネを外してから一気にこのクラスの美少女ランキングでトップクラスにランクインしたし。

ホームページで引退宣言もして実際に閉鎖しちゃったと思ったらいきなり勉強に力入れ始めたけど・・・。

とりあえずそのきっかけに椎奈ちゃんが係わっているのは間違いなさそうだね。

出席番号26番 エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

『余計な詮索はするな。後悔したくなければな』

うん、無理だあれば。

茶々丸さんによれば椎奈ちゃんと仲いいみたいだけど何も話す気なさそうだし。

それにしても最近かなり上機嫌だけど何があつたのかな？

出席番号27番 宮崎のどか

『木乃花さんですか？大人っぽい人だと思います。難しい本を一杯読んでいて・・・ああいう人になりたいです』

うーん、本屋ちゃんも引つ込み思案だしあまり情報はないか。

実学関係の本ばかり読んでるってことは本が好きなんじゃなくて勉強熱心なんだろうな。

図書館探検部に入らなかった理由もそこにありそうだね。

出席番号28番 村上夏美

『なんかちづ姉と雰囲気が似てるよね。それとよく私の部屋に遊びに来てちづ姉とお茶飲んでるよ。ちづ姉は保母さん目指してるけど木乃花さんも先生を目指してるみたいで気が合うみたい』

やっぱりちづ姉と仲はいいんだ？

確かにあの二人雰囲気が似てるね。

あれ？

あの二人がにこやかにお茶会してるところ思い浮かべたら寒気がしてきたんだけど・・・。

出席番号29番 雪広あやか

『木乃花さんですか？時々クラス委員の仕事を手伝って下さるので助かっていますわ。そうそう、この間千鶴さんとお茶を一緒に一緒にさせていただいたのですけれど木乃花さんが持ってきてくれた紅茶が凄く美味しかったですのよ。でも何故か銘柄は教えて頂けなくて残念でしたわ』

舌が肥えてる筈のいいんちよが氣にいる程のお茶ってどんな味なんだろう？

私も今度頼んでお茶会参加させてもらおうかな？

出席番号30番 四葉五月

『大人の考え方が出来る人だと思います。しっかりと自分を律することが出来る人ですよ。ただ、放っておくと飲み物だけしか飲まないのが困ったところですね。私がいる時は一緒に食べてくれるんですけど・・・』

ああ、確かに土台がしっかりしてるって感じはするね。

四葉さんもそうだけどちづ姉とかも持つてるしっかりと自分の将来を考えてる人特有の雰囲気っていうか。

飲み物しか摂らないって・・・もしかしてサブリ系の人？

出席番号31番 ザジ・レイニーデイ

『……………』

私うまくザジさんとコミュニケーションとれないんだよね。

うちのクラスでザジさんとコミュニケーションとれるのいいんじゃないかみたいだし。

っていいいんちよ何でザジさんと会話出来てるんだろ？

担任 高畑・Ｔ・タカミチ

『え、木乃花君かい？真面目ない子だと思うよ。でも何故だか僕を避けてるように感じるんだけど・・・朝倉君何か知らないかい？』

クラスの話だけじゃなくて先生からの視点も欲しかったんだけど・・・収穫なしか。

でも高畑先生、担任が教え子の事を報道部に聞くって何か間違ってる気がするんだけど。

このクラス大丈夫かな・・・。

高畑先生への取材が終ってお礼を言ってから私は職員室を後にした。

外を見るといつの間にかもう夕方になっている。

これ以上遅くなると寮の門限に引っかけりそうだから部室に寄らずに帰ることにした。

「はあ・・・」

夕暮れの中校舎から駅に向かって歩いてしていると自然にため息が出た。インタビューを通して椎奈ちゃんについて分かった事は色々あった。基本的に大人しくて勉強熱心、世話焼きでお茶好き。

超りんや葉加瀬が認めるくらい頭が良くて将来は先生を目指している。

他にも力持ちだったり、勘が鋭そうだったり。

うちのクラスで特に仲が良さそうなのが茶々丸さん、椎名、ちづ姉、ちうちちゃん、エヴァちゃんに四葉さん。

他にもアスナやまき絵ちゃん、いいんちよとかとも交流があるみたいだけど。

でも情報は結構集まったんだけど肝心の椎奈ちゃん自体が見えてこないんだよね。

うちのクラスのほとんどの子と何かしら交流があるみたしだけどそれも結構怪しい。

まるで意図的に付き合ってるように見えなくもないし……。

何か裏がありそうな予感はあるんだけど龍宮の言葉が気になる。

私の中に記者の勘が最大限に警報を鳴らしてるんだ、『これ以上踏み込んだら危ない』って。

それにこれ以上さしたる証拠も無しに他人のプライバシーに立ち入ったらやってる事が取材じゃなくて詮索になる。

それは私の記者としてのプライドが許さない。

「後はゆっくり私が時間をかけて観察していくしかないかあ・・・」

私の中で出た結論を口から漏らしながらふとそらを見上げたら夕暮れの空に光るものが・・・って流れ星が5つ!?

今の時期に流星群なんてあつたっけ?

とにかくこれはスクープだわ!

今こそ鍛えた私の撮影術の腕を見せる時よ!!

「激写!!」

私はいつでも取り出せるようにしてあるデジカメを取り出して流れ星の写真を撮る。

撮った画像をすぐ確認するとそこにはしっかりと5つの流れ星が写っていた。

「よっしゃー!! 明後日の新聞の見出しはこれで決まりよ!!」

私は思わずガッツポーズをとった。

「はっ! こうしちゃいられないわ! さっさと画像を保存しないと!」

私は一刻も早く寮に帰る為に駅への道をかけ出す。

ついさっきまで考えていた事なんか全く忘れて。

S I D E   O U T

そのころ月と地球の間の宇宙空間

先日東南アジアで大規模な火山が噴火し、気象操作訓練の絶好のチャンスと考えたシイナは、火山の噴火で成層圏に広がった火山灰を



洗い流していた。

「あー、微小惑星を使って成層圏の火山灰を洗い流そうと思ったけどやっぱり天文精霊みたいに上手くはいかないわね・・・」

以前に行った海底火山の噴火の時を思い出して、地球に氷で出来た微小惑星を落として火山灰を洗い流そうと天文精霊の仕事を見よう見まねで行って地球に氷の所惑星を落としたシイナだが、やはり慣れない操作のためにシイナが落とした200個の氷の微小惑星の内半数近くが見当違いの方向に落ちてしまったのだ。

「まあ小さい氷微小惑星だから地表に着くまでに燃え尽きるし問題は無いわね・・・仕方ないわ、ある程度の氷微小惑星は目標地点に落として60%以上の火山灰は洗い流せたし・・・後は大型の台風を操作して地道に落としていきましょ」

操作の結果から方針を転換することにしたシイナは新たな氣象操作の為に地球の大気圏へと戻って行った。

この日一人に氣象精霊の活動により、いきなり小規模な流星群並の頻度で流れ星が世界各地で見られることになったのだがそれを知るものは地球に誰一人おらず、予告なしの流星群に大慌てするだけだったという。

## 間話2 朝倉の転校生レポート（後書き）

「今回の後書きはミリイとユメミが急用でいないので代わりに私、イツミ・ハマリヤド・アマテルが担当させてもらうわ」

「ユナ・デモリエル・ハウンドもお手伝いで来ましたあ」

「それにしてもシイナったらいつの間に天文精霊の操作覚えたのかしら？」

「この間あ海底火山の爆発で協力して天文精霊の精霊と仲良くなつたみたいですよ」

「あの子も大概に勉強熱心よね」

「さて、精霊世界の世界の説明シリーズだけどミリイとユメミが大方の世界の説明をし終えたみたいだから今回は残りの世界を纏めて説明するわね」

「残っているのはあ、宇宙界、天道界、妖魔界、陽明界、白妖界、幽冥界、邪界と魍魎界ですねえ」

「まずは宇宙界ね。この世界は普通、良くない言い方をすれば地味な世界よ。大衆民主主義の世界でローテク工業が盛んね。住んでいるのは天神族でライチやモミジがこの世界の出身よ」

「次は天道界ですけどこの世界はあまりよく分かってないですよ。精霊世界でもかなり小さな世界ですよ」

「妖魔界は妖精族、酒仙族や仙人族で構成された魔界と妖精界に挟まれた世界よ。部族制民主主義の世界でかつてのエデンの園の東と地上では言われてるわね」

「陽明界は妖精界の一部が独立した世界ですよ。だから住んでいるのは酒仙族と妖精族がほとんどですねえ。鎖国状態であまり実態がわからない世界ですよ」

「白妖界は言わば精霊世界のカントリー系の世界ね。部族制で古い種族である純妖精族が住んでいるわ。うちの支局のノーラもこの

出身ね」

「幽冥界は地上の冥界としてイメージされる場所ですう。魂が最後に行き着く世界っていわれてますねえ」

「邪界は古くから精霊世界にある世界よ。昔は幻魔界、大天空界と並んで精霊世界の中心地の一つだったんだけど今は鎖国状態で実態がよく分かっていないわ」

「最後に魍魎界は独自に発展した世界で、かなり独特の種族が住んでる世界ですう。よく地上世界にも出没してるみたいで妖怪とイメージされるのはこの世界の精霊っていわれてますねえ」

「これで説明は終わったわね。それにしてもシイナ早く帰ってきてくれないかしら。何かキャサリンがシイナがいなくなってからフヌケちゃってるのよね」

「私も寂しいですう」

「まあ愚痴はこれくらいにして今日はここまでにしましょうか」

「はいですう」

## 第九話 シイナの憂鬱と怒り（前書き）

お待たせしました。

第九話投稿です。

今回から大きく原作ブレイクの流れとなります。

オリキャラも登場する予定なので原作重視の方はご注意ください。

それではどうぞー

## 第九話 シイナの憂鬱と怒り

麻帆良祭。

それは麻帆良学園都市にある学校全体で行われる学園祭であり、3日間に渡って開かれるそれは延べ40万人以上の人が訪れる麻帆良学園都市最大のビッグイベントである。

麻帆良祭では催し物の収益がそのまま学生の懐に入るために自然と学生も力を入れて学園祭の準備をすることとなる。

しかし学校という場所は本来教育機関であり、『楽あれば苦あり、苦あれば楽あり』という言葉通り6月に開催される麻帆良祭の前には中間試験という名の壁があつたりする。

逆に言えばこの中間試験さえ超えてしまえば麻帆良学園はまさに学園祭モードへと突入すると言えるのである。

それは麻帆良学園女子中等部2 - Aも例外ではなく、試験結果が返されてバカレンジャーのメンバーが変化するというハプニングがあったものの試験勉強から解放された生徒達は学園祭モードに入っていた。

ホームルーム  
HRで催し物を決める際に多少のトラブルがあつたものの、最終的に雪広あやかの提案によって英国風喫茶という事にが決まり、その準備に取り掛かっている。

そんな麻帆良祭本番を3日後に控えたある日の放課後、シイナは茶道部の茶室で共に頭を悩ませていた。

茶室にいるのはシイナの他にはさよ、茶々丸、エヴァンジェリンであり、頭を抱えているシイナをよそに茶々丸が点てたお茶を楽しんでいる。

「覚悟はしてたつもりだけど・・・本当に頭が痛いわ・・・」

シイナはため息をつきつつ、お茶を口に含んだ。

シイナを悩ませているのはつい先程エヴァンジェリンから説明された話の内容である。

シイナは『ネギま』の世界に来た目的である転生者についての情報を得ようとエヴァンジェリンに魔法世界の話を聞いていた。

あわよくば手懸かりだけでも見つければ対策が立てやすくなるぐらいに考えていたシイナだが、シイナの予想に反してあっさりとその転生者の事が分かったのだ。

（不老不死で元3000万ドルの賞金首、魔力がサウザンドマスタの10倍でおまけに写輪眼の持ち主ってなんの冗談よ・・・）

ルルーシュ・ウェンリー。

かつて『不死の魔王』、『絶対強者』、『ルシファアの化身』と呼ばれ魔法世界を震撼させ、先の大戦において『紅き翼』の一員として世界を救った者の一人だというその話を聞いた時シイナはあまりのイタさに軽い絶望感を覚えた。

シイナ自身転生させて貰った身ではあるが、ある程度の才能には恵

まれたものの気象精霊の世界で修行し続けて己を磨いて実力をつけ、平穩で充実した生活を送っていたシイナからしてみればあまりにも痛すぎる事実である。

その結果思わず頭を抱えてしまったシイナにさらにエヴァンジェリンの話が追い打ちをかけた。

「私のあいつと面識はあるが正直二度と会うのは御免だな。いきなり私に会いに来て『闇の魔法を教える』と言ってきたんで一度断ったんだが、あまりにもしつこくまとわりついてきたものだからお望み通り【闇の魔法】で一度吹き飛ばしてやったんだ。そうしたら次に会った時には【闇の魔法】を使えるようになっていた。私が苦勞して身につけた技術をあっさり我真似するなんてそんなふざけた事があるか!？」

話している間に当時の事を思い出したのかエヴァンジェリンの口調も段々と荒くなっていく。

「しかもあるうことかこの私に『俺のハーレム計画の為にハーレムに入ってくれ』だと!？ナギのような奴ならともかくあんな品性のない奴なんか死んでも御免だ!！どうせ『紅き翼』に入ったのも英雄になつてモテたいからだぞ? 結局あまりモテてないのはいい気味だがな」

この世界に来る前に神から聞いていた内容からハタ迷惑な奴だとは思っていたシイナだったが、予想を遥かに超えるひどさにそんな人物の為に自分が駆り出されたのかと思うと凄く空しくなる。

それと同時に神があれば程自分に気を使っていた理由に納得がいった。

（こんな奴を相手にしなきゃいけないあたしに同情してたのね・・・）

こんな面倒事を押し付けた神を恨みたくもなかったが、元々の契約である上に引き受けたのはシイナ自身である。

シイナに任務を放棄するという考えはさらさらないが、予想以上に痛い転生者を相手にしなければならぬ事にシイナは気持ちを重くしていた。

「あわわ、シイナさん大丈夫ですか？」

余りにもなシイナの落ち込みにさよは心配の声をかける。

「大丈夫よ、ちょっと痛い人を相手にしなきゃいけない事にショックを受けたただだから。心配してくれてありがとうね」

さよに心配されたシイナは下げていた頭を上げて微笑みつつお茶を飲む。

シイナはさよを妹のように思っている。

そんな可愛い妹分が自分を心配してくれることに嬉しく思うと同時にこれ以上心配させたくない。

そんなシイナの気持ちをくみ取ってか、空気を読めるガイノイド、茶々丸が助け舟を出した。

「そつえばシイナさん、佐々木さんと神楽坂さんに勉強の指導をなさっていたようでしたが・・・」



その言葉にエヴァンジェリンが反応する。

「ククク、確かにあの時は見物だったな」

エヴァンジェリンは先週中間試験の結果が返された時の出来事を思い出し、笑いだした。

2 - Aはクラスが編成された1年生の時からダントツで試験成績のブービー賞をキープしている。

だが今回は予想に反して最下位を脱出していた。

下から4番目という成績ではあるもののこれは快挙である。

だがその中心である2 - Aでは別の驚きで混乱していた。

神楽坂明日菜、全教科平均点73点。

佐々木まき絵、全教科平均点69点。

なんとクラスの最下位五人組、通称バカレンジャーの中でも下位だったバカレッドとバカピンクがバカレンジャーどころかクラスでも中の上の位置まで浮上したのだ。

バカレンジャーに抜かれた事実がクラスを阿鼻叫喚の中に叩き落とす。

中でも今回赤点を出したことで目出度くバカホワイトとしてバカレンジャー入りを果たした桜咲刹那の落ち込みは並ではなかった。

このバカレンジャーの二人の大躍進を筆頭に、今回限りで登校地獄から解放される事でやる気を少し出したエヴァンジェリン、いつも主を超えないように調整していた茶々丸、勉強にやる気を出した長谷川千雨が躍進を遂げ、シイナも100番以内に入った（余り成績が上位過ぎると目立つのでシイナは手を抜いて平均点が90位になるように調整している）ことで2・Aは今回の結果に繋がったと言える。

「まああの桜咲刹那の絶望に満ちた顔も良かったが・・・あいつらに一体何をしたんだ？」

エヴァンジェリンが言うあいづらが神楽坂明日菜と佐々木まき絵の二人である事はシイナにも容易に想像がつく。

「まあ少し将来の事を含めた説教をしたらやる気出してくれたからね。後はレベルに合ったものから段々レベルアップするように調整するだけよ」

簡単に答えはするが、その実シイナは二人の指導にかなり力を入れていた。

佐々木まき絵も神楽坂明日菜も物事にひたむきに取り組むことが出来る集中力を持っている。

将来は尊敬する上司兼師匠であるイツミのように氣象精霊の師範を目指しているシイナにとってはそんな伸び代がある生徒は宝石の原石を見ているようで楽しくて仕方がない。

そしてシイナは特にアスナに注目している。

シイナはアスナの頭の素質は雪広あやかに匹敵すると思っていた。

神楽坂明日菜はまさに猪突猛進という言葉が似合う存在である。

不思議に感じられる程リーダーシップはあるが、その頭の出来はお粗末としか言えない・・・と一見そう見える。

ただシイナが霊眼術で見たところアスナには記憶封印措置に伴い頭にリミッターが掛けられている状態だった。

原作を見る限り、記憶を消すと頭がパーになるそうなのでおそらくその為だろう。

頭が一般人の半分も働いていない状態で今の成績である。

果たして本来のアスナの實力はどれ程なのか。

シイナ自身としてはリミッターを解きたいが、こればかりは部外者である自分が手を出して良いものではない。

この件に関与出来るのは神楽坂明日菜、高畑・T・タカミチ、そして今は亡きガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだけであるとシイナは考えている。

「・・・残念ね」

アスナの事を考えてポツリとシイナは言葉を洩らす。

「ん、何がだ？」

エヴァンジェリンが反応するがシイナは微笑むばかりでお茶を飲み、エヴァンジェリンもそれ以上聞くことは無かった。

それからしばらくシイナ達は麻帆良祭の茶道部の催しもの（最近機嫌が頗る良いエヴァンジェリンも参加することになっている）である野点茶屋の段取りを確認していたのだが、その最中不意にシイナが動きを止めた。

「どうした、シイナ？」

「・・・御免ね、ちょっと用事が出来たわ」

シイナは手に持っていた茶碗を畳の上に戻すと立ち上がる。

「おい、まて一体どうしたんだ？」

普段のシイナと何か違うどこか切迫した雰囲気を感じたシイナの様子に驚いたエヴァンジェリンが呼び止めるもシイナは止まらずにそのまま茶室を出ようとする。

が、その時この茶室にいて最もシイナという時間が長いさよが動いた。

「シイナさん！落ち着いて下さい！」

普段殆んど大きな声を上げないさよに一喝にシイナの動きが止まる。

「シイナさんが何か焦っているのは分かりますけどエヴァンジェリンさんもシイナさんを心配してるんですよ！」

「・・・そうね、さよ。確かに少し焦っていたわ、驚かせてゴメンね」

シイナは振り向くとさよとエヴァンジェリンに頭を下げた。

「別に構わないが・・・急いでいるんだろう？私もついていくからその途中で説明してくれ。茶々丸、後を頼んだぞ」

「了解しました、マスター」

「私も一緒に行きます！」

エヴァンジェリンはそう言うとシイナに同行すべく立ち上がり、それにさよも続いた。

「お前程の奴が焦るんだ、何か重大な事が起きたんだろう？」

「一人で行こうなんて水臭いですよ」

笑いながらシイナに応じる二人にシイナは背を向けた。

「分かったわ、一緒にいきましょう。・・・ありがとう、エヴァ、さよ」

この時、誰にも見られはしなかったがシイナの目には涙が浮かんでいた。

「声……みたいなものを感じたのよ」

走りながらシイナは説明をする。

茶室を出てからシイナ達はシイナが感じる声の方へと地上を走って移動していた。

さよもエヴァも飛べるので空を飛んだ方が早いのだが、学園祭が近い為に麻帆良学園内の警戒がかなり厳しくなっている。

シイナの結界術を持ってすれば気付かれずに飛ぶ事も出来るのだが、用心して地上を移動しているのである。

「声？」

「あたしは靈魂の属性……魂とか生命の靈力が強いから生命とか魂の波動みたいなものを感じ取れるんだけど……何かが生まれそうなんだけど凄く苦しんでいる気配を感じたの」

疑問を浮かべるエヴァンジェリンにシイナは説明する。

基本的にシイナも感覚で感じ取ったものであるので他人には説明し

にくい。

「私も少し感じるようになってきました。何だか赤ちゃんが泣いてるような感じです」

さよも不安そうな顔を浮かべつつシイナの後ろに続いている。

比較的精霊に近いだけに靈魂の波動を感じ取っているようだ。

そのさよが感じ取れる程にその声の発生源に近づいている。

そんなこんなで走っていたシイナ達が辿り着いたのは学園の敷地にある小高い丘の上だった。

「世界樹……か？」

エヴァンジェリンがぼそつと呟く。

「ええ、『声』の発生源は間違いなくこの樹ね」

シイナはエヴァンジェリンに答えつつ信じられない程大きな木、世界樹へと近づき手を触れる。

暫く診察するように世界樹に手を触れ、目を閉じていたシイナだったがやがてその身体が震えだした。

「そう……、そういうことなのね」

「お、おい、どうし……!?!」

シイナの変化に思わず声を上げたエヴァンジェリンだが振り返ったシイナの様子に思わず息を呑む。

振り返ったシイナはまるで表情を消したように無表情な顔をしていた。

まだシイナと一月程の付き合いしかないエヴァンジェリンだが、シイナの人となりは理解しているつもりだった。

だが考えてみれば冗談で怒ってみせることはあってもシイナが本気で怒ったことは見たことが無い。

しかし今日の前にいるシイナは間違い激怒している。

顔は無表情だが静かな、しかし凄まじいまでの怒りを感じ取ることができる。

ここに至ってエヴァンジェリンはシイナの本性を思い出した。

（そうだ、シイナは・・・火の精霊！火を象徴するものは・・・まさに『怒り』だ！）

周囲が凍るようなシイナの怒気に思わずエヴァンジェリンは後ずさる。

そしてシイナはゆっくりと口を開いた。

「エヴァ、貴女に協力して欲しい事があるんだけど・・・」





## 第九話 シイナの憂鬱と怒り（後書き）

「御馴染みの後書きコーナー担当に復帰しましたミリィです」

「同じく復帰したユメミよお」

「何だか知らないけどかなりシイナが怒っているわね・・・ってユメミどうしたの!？」

「（隅でガクガク震えている）だってえ、シイナが無表情になってるぅー!!」

「あゝ、そういえば以前シイナってユメミにキレたことあったわね」

「あの時は生きた心地がしなかったわぁ・・・」

「まあ滅多な事じゃシイナは怒らない筈なんだけど・・・よっぽど腹に据えかねることがあったみたいね」

「学園が焦土にならない事を祈るわぁ・・・」

「前回あたし達が休んでいる間にイツミさんが世界紹介を終わらせちゃったから今度は精霊の能力について説明するわ。初回は飛行術よ」

「飛行術はぁ、属性に関係なく霊力があれば精霊なら誰でも使える術だよ」

「ユメミは昔高所恐怖症のせいで使えなかったんだけどね」

「むっかぁ、それはいいじゃないのお!」

「まあ、とにかく精霊の基本の術の一つで基本的に精霊にとっては歩くのと変わらない技術ね」

「ただぁ早さは精霊によってかなり違うわぁ。あたしは遅い方だよお」

「あたしは早いほうだけど・・・シイナとかパイカラ程じゃないわね」

「あの二人は秒速2000kmを超えるからねえ・・・」

「それと精霊も飛ぶ時は空気抵抗を受けるから高速で飛ぶと摩擦熱

で大変な事になるわ。だから精霊はそれを防ぐ為にそれぞれ工夫をしているのよ」

「あたしは結界を張ってるしい、ミリィとシィナは【風の繭】を使っているねえ」

「こんなところかしらね。それじゃ今回もかの辺りで・・・」  
「またね」

## 第十話 理事長室の攻防（前書き）

第十話投稿です。

今回は時系列にズレがあり、少し分かりづらい展開となっています。

読みにくいかもしれませんがご容赦下さい。

## 第十話 理事長室の攻防

「一体エヴァンジェリンは何の用があるのかのう？」

麻帆良学園女子中等部にある理事長室。

長年使用していた学園長室がとある事情により半永久的に閉鎖されることとなった為に現在は学園長室も兼ねている部屋で麻帆良学園学園長、近衛近右衛門は首を捻っていた。

学園祭を明日に控えた今日の昼にエヴァンジェリンから『用事があるから今日の夜に会いに行く』という連絡を受けた。

ただそれだけのことだが、ついこの間エヴァンジェリンによってかなり酷い目に遭わされたばかりの為かその顔には冷や汗が浮かんでいる。

そもそもエヴァンジェリンから連絡してくる事自体がかなり珍しい。

近右衛門とエヴァンジェリンは囲碁仲間がよく囲碁を打つ仲だが、それも近右衛門から誘うのがいつものことであり、エヴァンジェリンから声をかけてくる事は滅多にない。

となればエヴァンジェリンの用は何か近右衛門に対して言いたい事があるともみるべきであった。

そして近右衛門にはその心当たりがあり過ぎる程ある。

「ふむ・・・君はどう思うかの、高畑君？」

近右衛門が話を脇に控えていた高畑に振る。

いきなりエヴァンジェリンが襲いかかってくる事は考えにくく、学園結界による【魔力抑制】の影響もあるので危険はないと考えていた近右衛門ではあるが、一応用心の為に高畑を呼んでいた。

因みに他の魔法先生はエヴァンジェリンに対する悪感情が強い傾向があり、暴発するの危険もあるのでこの場には呼んでいない。

「普通に考えればエヴァが電気を利用した学園結界の仕組みに気付いたというのが妥当でしょうね」

「やはりそうかのう。もう少しかかると思ってたんじゃがな・・・」

少し考えるそぶりをしてから答える高畑に近右衛門も同意した。

この麻帆良学園には世界樹の魔力と電力を利用した結界が張つてあるが、どちらか片方でも作用しないと結界が消える仕組みになっている。

ただエヴァンジェリンは魔法の専門家ではあっても科学関係には疎い傾向があり、現在エヴァンジェリンが大人しくして動いていない事もあってその仕組みには気付かないだろうと学園側は考えていた。

（茶々丸君が従者となった以上いつ気付いても不思議ではないがの・・・しかし・・・）

既に先日その追及を一度受け、その後思い出したくもない目に遭った近右衛門はこの時期にもう一度エヴァンジェリンがその為に話

し合いを求めることに腑が落ちない。

その違和感の答えを求めて首を捻り続けていた近右衛門だった。がドアの向こう側に人の気配を感じて顔を上げた。

「ジジイ、私だ。入るぞ？」

その声と共にドアが開き、金髪の少女・・・エヴァンジェリンが入ってくる。

「待たせたか？」

「いや、時間通りじゃよ」

そんな挨拶を交わしながらエヴァンジェリンは近右衛門の前に立った。

「ふん・・・タカミチも一緒か」

「別に問題はなからう・・・して今回の用件は何かの？」

チラリと高畑を見やったエヴァンジェリンだが近右衛門の言葉に顔を戻す。

「その前に一人紹介したい奴がいる。今日貴様らに用があるのは私ではなくシイナなのでな、入っていいぞ」

エヴァンジェリンの声に反応して廊下で待機していたのであろう人影がドアを開けて部屋に入ってくる。

だが入ってきた人物を見て近右衛門と高畑は怪訝な顔を浮かべた。

「フオ？」

「木乃花君？」

入ってきたのは高畑と近右衛門が知る限りこの春に高畑のクラスに転入してきた生徒、木乃花椎奈だった。

驚く二人を他所<sup>よそ</sup>にシイナはエヴァンジェリンの横に立つ。

「お二人には改めてお目にかかります。私は当代木花咲耶姫が眷族にてシイナと申します。今宵は相談したき儀があり我が友、エヴァンジェリンが助けを借りて参上しました」

気品溢れる声で口上を述べて礼をするシイナに対し、空気に吞まれてしまった高畑と近右衛門は何も反応出来なかったがそこは年の功というべきか、近右衛門はすぐに我に返った。

「麻帆良学園学园长、近衛近右衛門じゃ。ワシの記憶が確かなら君は女子中等部2-Aの木乃花君だったと思うんじゃないか？」

「故あって木乃花椎奈としてこの世界に降り、それを隠していた事はお詫び申し上げます。私の正体を疑うのも最もな事・・・これならばどうです？」

挨拶を返しながらも訝しげな顔を浮かべる近右衛門にシイナは落着いて対応しながら霊力を解放する。

「むっ!？」



「なっ!？」

突然部屋に満ち溢れた凄まじい程の力の奔流に近右衛門と高畑は目を剥いた。

「・・・確かにその言葉に偽りはないようじゃな」

背中に大量に冷や汗を掻きながらもなんとか近右衛門が言葉を絞り出す。

「分かって頂けたようで何よりです。それでは本題に入らせて頂いてもよろしいでしょうか？」

その近右衛門達の様子にシイナは微笑むと靈力を抑えた。

それと同時に部屋に満ちていた力が収まる。

「う、うむ」

近右衛門が頷いたのを確認してシイナは口を開いた。

「私からの用件は唯一つ、この麻帆良にある世界樹と呼ばれる樹に掛っている魔法を全て解除して欲しい・・・それだけです」

「何っ!？」

その言葉を聞いた高畑が思わず声を上げるがそれを近右衛門が制止する。

「高畑君！・・・理由を聞いても良いかの？」

「簡単なことです。今あの世界樹から私達の新しい仲間が生まれようとしているのに、今世界樹に掛っている魔法に邪魔されてその生命が生まれる事を阻まれているから。それが理由です」

「・・・その新しき生命とやらが生まれた後はどうなるのかの？」

「今世界樹が魔力に満ちているのは中に精霊がいるからこそです。精霊が誕生した後は世界樹は抜け殻・・・ただ大きいだけの樹に過ぎません」

シイナの説明を聞いて近右衛門は唸った。

シイナの要求を聞き入れれば麻帆良は世界樹というパワースポットを失うこととなる。

学園結界も消え失せ、学園の防御機能は低下するだろうし認識阻害も効力を失い、更に今目の前にいるエヴァンジェリンも解放されてしまう。

そうなれば関西呪術協会とのパワーバランスも崩れるだろうし、本国からも追及があるだろう。

かと言って要求をはねのけるのも考えものである。

元々関西の陰陽師の家の生まれである近右衛門は日本の信仰についてかなりの知識がある。

その中で木花咲耶姫と言えば天孫降臨神話でニニギノミコトの妻と

なるかなりメジャーな神である。

火の神、安産の神として富士山の浅間大社に祀られる大神である木花咲耶姫の影響は大きい。

まだ関東には、浅間大社を始めとした赤城神社、氷川神社といった独立大社・箱根神社、江ノ島神社を中心とした相模神社連合・鹿島神社、香取神宮を中心とした鹿島香取連合・日光呪術協会・筑波笠間同盟・更には成田山や久遠寺、鎌倉仏教勢力のような関東魔法協会に属さずに独自勢力を保った土着組織が存在する。

ここで木花咲耶姫の眷族が顕現したと分れば、全国各地に広がる浅間大社を中心とした土着勢力が一斉蜂起する可能性さえある。

「・・・事は重大じゃ。こちらの意見を調整したいので少し時間をくれんかの？」

考え込んだ拳句の近右衛門の答えにシイナはにこやかな笑みを浮かべた。

その様子に隣のエヴァンジェリンが一瞬ビクツとする。

「そうですね・・・。ところで学園長、私は今虫の居所が酷く悪いのです」

いきなりのシイナの言葉にエヴァンジェリン以外の者がポカンとした。

「は？」

「私達の仲間として新たに生まれようとしている者が自然の摂理に逆らって己が欲の為に動く者達の為にその身を長年利用されて泣き叫んでいる。正直私としては力づくで事を済ませてもよいと思っております」

その言葉とともにシイナから凄まじい怒気と霊力が迸る。

ピシピシッパリンパリンッ

その力に耐えきれずに部屋の窓に次々とヒビが入り、割れていく。

さらには霊力の密度が高まって黄色い光となってシイナの身体を覆った。

「くっ!？」

あまりの圧力に思わず高畑が両手をポケットに突っ込むが、その瞬間シイナに視線を向けられて立ちすくんでしまう。

「ですが私は出来れば穏便に事を収めたいとも思っています。ただ私の仲間である存在を知らなかったとはいえ長年苦しめた拳句にお詫びの言葉もない輩に力を振るうことはやぶさかではありませんが」

シイナの顔から笑みが消えると同時にシイナの周囲に幾つかの光の球が現れる。

高畑と近右衛門にはその光の球がとんでもないエネルギーを秘めている事に気付いた。

「そ、それは？」

震える声を無理やり押さえつけながら問う高畑にシイナは何でもないかのように答える。

「これですか？まあ小さい太陽のようなものですね」

「何っ！？」

その答えを聞いた高畑は目を剥いた。

近右衛門も内心驚いてはいたが、高畑が大きく驚いた為にその分冷静だった。

（これ以上刺激するのは危険じゃな・・・ここは一旦受け入れるしかないかの）

「承知したわい。じゃがこちらでも世界樹があることが前提の環境になつておるし、色々準備が必要なのじゃが・・・」

近右衛門はシイナの要請を受け入れながらもなんとかそれを引き延ばそうとする。

だがシイナはそんな近右衛門の思惑をあつさり潰した。

「準備が出来れば良いのですね？・・・ならば一年猶予を差し上げましょう。一年の間・・・来年の麻帆良祭まで私が世界樹に力を供給します。その間に準備を整えてください」

口実をあつかりと潰されてしまった近右衛門は逃げ道が塞がれてしまったことを悟った。

「・・・承知じゃ」

「それでは契約成立ですね。・・・そうそう、私は麻帆良祭の三日目の夜に世界樹から仲間を助けますのでそれまでに魔法は解いておいて下さい。それでは失礼します」

絶句してしまった近右衛門と高畑を尻目にシイナは言葉を残してその場から空間転移して消えた。

「ジジイ、私の用も済んだようだから帰るぞ。一応長年のよしみで忠告しておくが変な事は考えんほうがいいぞ？シイナは私より強いからな」

それまで沈黙を保っていたエヴァンジェリンもシイナが消えるのを見届けると踵を返して部屋を出ていく。

後には近右衛門と高畑のみが残された。

エヴァンジェリンとシイナが去ってしばらく経ってから高畑が口を開いた。

「学園長、本当によろしいんですか？」

その質問に近右衛門は首を振って答える。

「仕方がないじゃろう・・・高畑君、リョウメンスクナは知ってるな？」

近右衛門の突然の質問に高畑は戸惑った表情を見せる。

「はい、確か詠春さんの・・・関西呪術協会の本山に封じられている鬼神ですね」

「正確に言つとリヨウメンスクナ本体ではなくその分祀した一部じやな。本体は飛驒に祀られておる。」

「それは知っていますが・・・」

何故そんな事を聞くのかといった表情を高畑は隠さなかった。

「そのリヨウメンスクナに敵うと思うかね？」

「・・・いいえ」

少しの躊躇った後に高畑は否定する。

覚醒してまだ力がない状態ならともかく伝説に残る大鬼神に一部ではあるとは言つても一個の人間が勝てるとは思えない。

それこそ『紅き翼』全員で戦つても難しいだろう。

「彼女は・・・恐らく富士に祀られる木花咲耶姫じゃ。眷族とは言つておつたがの。何故現世に顕現したのかは分らんが・・・下手すれば最悪富士山が噴火するぞい」

その言葉を聞き高畑の顔から血の気が引いた。

いくら魔法使いといえども人の手で自然災害を扱うことは出来ない。

日本最大の火山である富士山が爆発すればその被害は目もあてられないだろうことは高畑にも想像出来る。

「・・・彼女の条件を飲むしかないじゃろうな。せめて一年とはいえ時間があるのが救いじゃが・・・。他の先生には世界樹が一年後に枯れそうでその対策をしていくと話して納得してもらっしかないの。・・・来年にはネギ君の受け入れもあるんじゃないが・・・どうしたもののかのう？」

近右衛門は突然降って湧いた難問に大きなため息をついた。

「はあゝ、疲れたゝ。やっぱりああいうのは肩が凝るわねゝ」

「ククク、その割には様になってたがな。あのジジイ達の顔は面白かったぞ？」

理事長室を後にしたシイナはエヴァンジェリンと合流し、エヴァンジェリンの別荘に移動していた。

デッキチェアに横になりながら林檎酒シードルの瓶を持ってラツパ飲みしているシイナからは理事長室で見た怒気が完全に消えうせている。

「まあ一応貴族としてああいう場は何回か経験してるしね。それに学園にはまだ少し怒ってるわよ？」



同じくデッキチェアに横になってこちらはワイングラスを優雅に傾けているエヴァンジェリンにシイナは笑みをみせる。

「ふん、嘘を付け、とんだお人好しが。そもそもこんな芝居する必要はなかったろうが。そもそもあいつはもうここにいるしな」

そう言つてエヴァンジェリンが視線を向ける先には・・・

「ふえゝ、赤ちゃん可愛いですゝ」

「記録中です」

茶々丸とさよが見守る中、揺り籠ですやすや眠る緑色の髪をした赤ん坊の姿があった。

## 第十話 理事長室の攻防（後書き）

「後書き担当のミリィと」

「ユメミよぉ」

「今回読みにくい構成になってるわね」

「作者のプロットの練り不足にしか思えないねえ」

「思ったよりシイナ怒ってないみたいね」

「まああれくらいなら序の口だしねえ」

「今回は説明がないかわりにお知らせがあるわ」

「今までえ後書きで説明をしてたけどお読みにくいから時間があつたら今までの説明をまとめるそうよぉ」

「今さらな気もするんだけどね・・・後書きはただの雑談コーナーにするみたい」

「あとリクエストがあれば後書きに氣象精霊のキャラを登場させるみたいだからリクエストがあれば感想に書き込んでねえ」

## 第十一話 暗躍とは知られずに進むものです（前書き）

第十一話投稿です。

作者の技量不足であと一回学園祭編が続きます。

今回へ時系列が過去になっていますのでご注意ください。

ではどうぞ〜

## 第十一話 暗躍とは知られずに進むものです

時は二日前の夜に遡る。

「エヴァ、貴女に協力して欲しい事があるんだけど・・・」

世界樹に触れるなり周囲が凍りつくような怒りを発したシイナだったが、冷静さは失っていないかった。

ただその声は落ち着いてはいるものの聞いたエヴァンジェリン達が底冷えするような迫力があり、その声からシイナが心底激怒していることが分かる。

その圧力にさよが幽霊にあるにも関わらず器用にぺたんと地面に座り込んでいる。

その声で話しかけられたエヴァンジェリンは自分が怒られているわけではないのにも関わらず己の身体が震えあがり、今にも腰が砕けそうになったが何とか吸血鬼の矜持で持ち堪えた。

「う、うむ、別に構わないが事情を説明してくれないか？」

震える声を抑えながら何とか声を発するエヴァンジェリンの様子に自分がエヴァンジェリンとさよを震えあがらせている事に気付いたシイナが一度目を閉じて深呼吸をする。

「スウ・・・ハア・・・。・・・そうね、少し我を失ってたみたい。怖がらせちゃったみたいでごめんね」

シイナが再び目を開けた時、シイナが纏っていた底冷えするような怒気は治まっていた。

シイナの様子は元には戻ったが、その怒りを見たエヴァンジェリンとさよは固く誓った。

『シイナ（さん）は絶対に怒らせないようにしよう』と。

「簡単に言つと少し前のさよと今の世界樹は同じような状態になっているの」

「私と同じ・・・ですか？」

「む・・・どういうことだ？」

シイナの説明にさよが首をかしげ、さよの事情を知らないエヴァンジェリンが怪訝な顔をする。

「さよは学園結界のせいで精霊の核の状態で拘束されていたわけなんだけどね、この子の場合にはまさに精霊として生まれようとしているのを邪魔されているのよ」

シイナは世界樹の幹に触れながら悲しそうに世界樹を見上げる。

「いいえ、もっと性質が悪いかもしれないわね。何せ生まれようと

しているのにそのエネルギーを奪われ続けているのだから・・・」

「・・・まさか・・・学園の結界か!？」

シイナの言葉にエヴァンジェリンがハッとしたように声を上げる。

それを見たシイナは悲しげな表情のまま頷いた。

「その通りよ。学園結界の為の術式に生まれてくる為のエネルギーを吸われ続けているの。毎年の発光現象はこの子がなんとか生まれようともがいて霊力が暴走してる為よ。そしてその霊力さえ魔法陣で分散されて利用されている・・・まさに奴隷の牢獄としか言いようがないわ・・・!」

「ひ・・・ひどい・・・」

吐き捨てるように言うシイナにさよが絶句した。

エヴァンジェリンも言葉には出さないものの苦虫を噛み潰したような顔をしている。

本来出産という行為は母体にも赤子にも激しい負担がかかり、多くのエネルギーを必要とする行為である。

その生まれる為のエネルギーを奪われ続け、生まれる事ができずに長い時を過ごす。

言うなれば出産中の母体から血を抜き取っているようなものである。

それがどれ程の地獄か想像に難くはない。

しばらく沈黙の状態が続く中、さよが口を開いた。

「そ、それでどうするんですか？」

「勿論今すぐ助けるわよ。ただその後にエヴァの協力が必要なの」

不安げに尋ねたさよにシイナは即答し、エヴァンジェリンに視線を向ける。

「その後？」

シイナの視線を受けたエヴァンジェリンはキョトンとした顔を浮かべる。

（世界樹から精霊を助ける術式の手助けというのは分かるが・  
・その後とはどういうことだ？）

シイナの話の流れからシイナが自分に世界樹に掛けられている魔法の解除の手伝いで協力を求めるというのが理解出来るが、その後に必要なというのがエヴァンジェリンの腑に落ちなかった。

「ええ、エヴァには超鈴音と学園長への取次役をお願いしたいの。もちろん報酬は用意するわ」

シイナは世界樹の精霊を助ける手段を考えると同時に原作への影響について考えていた。

シイナの本来の目的はネギ・スプリングフィールドを痛さ全開の転

生者、ルルーシュから守ることである。

そのシイナにとって世界樹の精霊を助けることは当然としてもその為に麻帆良に大きな影響を及ぼして結果的にネギが麻帆良に来れないようになってしまつて、ルルーシュの行動が読めなくなつていつネギが襲われるか分からなくなるのは些か不味い事態となる。

また来年の麻帆良祭事件を起こす超鈴音は計画の骨である世界樹についてかなりチェックしている筈であり、その超鈴音が世界樹の変化に気付いて変な行動を起こす事も考えられる。

それは避けたいし、基本的に中立ではあるがどちらかと言えば超鈴音に同情的であるシイナとしては超の計画をこちらの都合で一方的に潰すのも気が引けた。

さらにいきなり世界樹を失うことで関東魔法協会に混乱を与えることについては何とも思ひはしないが、その為に麻帆良の一般人も被害を受ける可能性も考えられる。

これらの事について考えたシイナの出した結論が精霊を助けた後抜け殻となるだろう世界樹にシイナが霊力を供給することで世界樹の機能を維持するという事だった。

確かに世界樹の力は膨大ではあるが、生まれてもない精霊の霊力であり、シイナの霊力量からしてみれば大したものではなく余裕で供給出来る。

ただその場合どうしても当事者・・・超鈴音と学園長との交渉が必要となつてくるが、完全な一般人を演じてきたシイナが接触するのは難しい。



しかし超鈴音と学園長両方に繋がりを持っているエヴァンジェリンを介すれば交渉の機会を簡単に作ることが出来るだろう。

そういった内容を説明するシイナをさよとエヴァンジェリンは目を丸くして見ていた。

「・・・凄いな」

シイナは短時間で今の状況とあらゆる可能性を想定し、それを踏まえた上で計画を作り上げている。

そのシイナの能力にエヴァンジェリンは思わず感嘆し、さよに至ってはキラキラした目でシイナを見ている。

「別に大した事じゃないわ。不測の事態が日常茶飯事の気象操作の現場で気象参謀なんかしていたら自然に身についただけよ」

自分を見つめるエヴァンジェリンとさよの目に気付いたシイナは苦笑する。

気象精霊の任務は不測の事態の連続と言っていい環境である。

普通に台風の操作をしているだけでもその操作の途中で失敗が起きて事態が拡大したり、気象ゲリラの妨害が入ったり、災害好きな先輩が暴走したり、直感で動く親友その1がとんでもない事態を引き起こしたり、現場を手伝う下級精霊が宴会好きの親友その2に誘われて宴会モードに突入したり・・・

（・・・あれ？何かおかしくない？思い返してみたら何故か味方が

原因になった事の方が多く思い浮かぶんだけど・・・)

現場で働いている時の事を思い浮かべたシイナの目から思わず涙がこぼれた。

「シイナさん、どうしたんですか？」

いきなり目の前で泣き始めたシイナにさよが心配の声をかける。

「うっん、何でもないわ。これは心の汗なの・・・フッフ」

己の苦勞の連続の日々を思い出してしまったシイナは涙を拭いつつ乾いた笑い声を漏らす。

そのシイナの様子を見てこれは触れない方がいいと判断したエヴァンジェリンが話題を元に戻す。

「ま、まあ取りあえず状況は分かったし、そういうことなら協力しても良い。というかそれくらいの事なら報酬なんかいらんぞ？」

エヴァンジェリンからして見たらシイナにはかなり世話になっている。

呪いは解いて貰えた対価として魔法を教えるもの、その上で御札魔術を教えてもらっているのである。

付き合いは短いがシイナはエヴァンジェリンにとって自分を特別視せずに対等に気持ち良く楽しく付き合い合える貴重な友人となっている。

そっという友の頼みに応えるのは当たり前前の事であり、加えて事情を

知った今はむしろエヴァンジェリンとしては進んで世界樹の精霊を助けてやりたいとも思っている。

そんな状況で報酬なんか貰うのは逆に気が引けた。

「そう？でもまあプレゼントのようなものでも思ってくれないかしら？元々エヴァの呪いに関するアフターサービスの様なものだし・・・」

現実に戻ってきたシイナは残念そうな顔をする。

「む、そうか？ならば後で受け取らせてもらおうでしょうか」

「フフフ、あたしの研究の成果よ。楽しみにしていてね」

シイナがそんな顔をするなら受け取らないのも逆に失礼かとエヴァンジェリンは思い直すとシイナは満足そうな笑顔となった。

「さて、エヴァの協力も得られたし・・・さっさと始めましょうか  
！」

ここに人知れず、麻帆良を揺るがす大陰謀が始まった。

まずシイナは迷彩結界を展開した。

迷彩結界は光の屈折を利用して周囲に溶け込む効果を持つ結界であり、結界の外からはシイナ達の姿が見えなくなる。

「これでよし・・・と。次は・・・これね」

「シイナ、それは何の御札なんだ？」

シイナが取り出した二枚の御札を見てエヴァンジェリンが尋ねる。

「これは【靈力付与】の御札よ。こっちの『バクテイオー仮契約』のカードを参考にして二枚一組で片方の御札に靈力を込めるともう片方の御札に力が供給されるようになってるわ」

エヴァンジェリンに答えつつシイナは御札の一枚を世界樹に張り付ける。

すると御札が世界樹に吸い込まれるように消えていった。

「やっぱり余り大した靈力の消費量じゃないわね。これなら普通に結界を張るのと対して変わらないわ」

（これぐらいならもし戦闘になってもあまり影響ないわね。いつでもお酒飲んで靈力回復すればいいし）

【靈力付与】の御札を通して自分から世界樹に靈力が供給されているのを確認してその靈力の消費具合を確かめたシイナは安堵の声を上げる。

大きな雲を丸ごと包むように数十キロに渡って結界を展開すること

さえよくあるシイナにとって麻帆良学園都市を覆うくらいのエネルギー等大したことはない。

（さて・・・待ってて、すぐに助けるからね）

今まで精霊から搾り取っていた霊力を肩代わりして精霊と学園結界の魔法を切り離れたシイナは心の中で生まれる前の精霊に声をかけつつ精霊を誕生させる準備に入る。

自分の霊力を用いる霊術は魔法や魔術と違って呪文を必要としないが魔法以上に集中力を必要とする。

シイナはこれから行う繊細な霊力コントロールに集中するために目と閉じた。

シイナが目を閉じた次の瞬間にシイナと世界樹が霊力によって光出す。

それはあまりにも幻想的な光景だった。

世界樹から放たれた光がゆっくりとシイナの腕の中へと集まって行く。

その光景をエヴァンジェリンとさよは動かずに見惚れるようにじっと眺め続けた。

どれ程時間が経っただろうか？

やがてシイナの腕の中の光が段々と強くなり、何かの形を作ってい

く。

その光が最も強く輝いたと思った瞬間に光が全て消えうせ、シイナの腕の中には緑色の髪の毛を生やした赤ちゃんが納まっていた。

「オギヤー、オギヤー」

赤ちゃんが元気な産声を上げる。

作業を終えたシイナはようやく目を開けたが、その顔には長時間の集中による疲労が色濃く表れていた。

いくら莫大な霊力を誇るシイナでも【迷彩結界】、【霊力付与】を使用しながら並行して長時間に渡って繊細な作業を行ったのだから当然のことだろう。

疲れてはいたが、シイナは時空霊術で虚空から毛布を取り出して赤ちゃんを包む。

「終わったわよ・・・」

顔を上げたシイナの声に連れられてそれまで様子をじっと見守っていたさよとエヴァンジェリンがシイナに駆け寄る。

「シイナさん大丈夫ですか!？」

「シイナ、大丈夫か？」

同時にシイナに心配の声を掛けた二人にシイナは笑みで応える。

「あたしは大丈夫だし赤ちゃんも無事よ」

疲れた顔をしているが笑みを見せるシイナにエヴァンジェリンとさよは安堵の息を吐いた。

「精霊の赤ちゃんも人間の赤ちゃんとな変わらないんですね。男の子ですか？女の子ですか？」

「女の子よ。・・・さよ、抱いてみる？」

シイナが抱える赤ちゃんの顔を覗き込むさよの質問に答えつつシイナは赤ちゃんをさよに差し出す。

「い、いいんですか？」

さよはおっかなびつくりといった様に赤ちゃんをぎこちなく受け取った。

「オギヤー、オギヤー」

「はい、よしよし・・・」

未だに泣き続ける赤ちゃんを必死にあやすさよを眺めつつシイナは消費した霊力を補給する為に虚空から酒瓶を取り出して口をつけた。

「お疲れ様だな、シイナ」

「ありがと。疲れたけど無事に産まれてよかったわ。全く、あんな赤ちゃんを長年苦しめるなんて・・・」

シイナに労いの言葉を掛けるエヴァンジェリンに返事をしつつシイ

ナは憤慨する。

「そ、そうだな！」

どこか上擦ったような声のエヴァンジェリンの様子にシイナは目を細めた。

エヴァンジェリンは赤ちゃんをあやすさよの方をチラチラと見やりつつ身体をモジモジさせている。

（はーん・・・）

余りにも丸わかりすぎるエヴァンジェリンの仕草にシイナはニヤリと笑った。

「エヴァ、貴女も赤ちゃん抱いてみたら？抱きたいんでしょ？」

その声のエヴァンジェリンは身体をビクツとさせた。

「わ、私は決して、あ、赤ちゃんを抱きたいとは思っていないぞ！  
？・・・だが、せ、せっかくの機会だ。抱いてやるとするか！さよ、交代だ！」

「素直じゃないわねえ・・・」

顔を赤らめながら叫ぶように言ってさよから赤ちゃんを受け取るエヴァンジェリンの様子にシイナは苦笑した。



「で、シイナ。こいつの名前はとうするんだ？」

エヴァンジェリンが一通り赤ちゃんを抱いて満足した為か上機嫌で今はシイナの腕の中ですよすやと眠る赤ちゃんを見やりつつ尋ねた。

「そうね・・・エヴァとさよは何かある？」

「こいつを助けたのはシイナだ。こいつもシイナに腕の中が一番安心するようだし、シイナに任せる」

「私もシイナさんが決めた方がいいと思いますよ」

エヴァンジェリンとさよの言葉にシイナは少し考え込む。

「アオイ・・・というのはどうかしら？漢字だと葵って書くんだけど・・・」

「アオイか・・・品があつていい名前だと思うぞ」

「この子は今日からアオイちゃんで決まりですね！」

シイナの提案した名前にエヴァンジェリンとさよが賛意を示す。

こうしてアオイと名付けられた世界樹から生まれた精霊はこの世に生を受け、シイナ・エヴァンジェリン達に家族の一員として迎え入れられた。

おまけ

この翌日シイナはエヴァンジェリンを仲介にして超鈴音と接触をした。

この接触でシイナは見事に超鈴音と相互中立の盟約を結ぶ。

最初はシイナに半信半疑であつた超鈴音だが、『カシオペア懷中時計型航時機』の動作に必要なだった世界樹の魔力が実は時空属性の霊力だと気付いていたシイナがその場で霊力を供給してカシオペアを起動させる。

シイナ的能力と実験を見た超鈴音はシイナが1年間世界樹に霊力を供給することで自身の計画に支障はないと判断し、シイナを敵に回すより同盟を結んだ方がメリットが高いと判断。

これにより基本中立で干渉する場合はその都度契約を結ぶという密約が成立した。

更にシイナは学園地下にいるクウネル。サンダースことアルビレオ・

イマと接触。

その際エヴァンジェリンとアルビレオが揉める（一方的にエヴァンジェリンがアルビレオにおもちゃにされる）という一幕があったものの、シイナ的能力を警戒したアルビレオはシイナの提案する相互不可侵の約束に同意した。

こうして本命である学園長との交渉の前に完全に足場を固めてしまったシイナは冷や汗を流すエヴァンジェリンに一言こう告げる。

『戦いつていうのは始まる前に勝負をつけるものよ』と。

それを聞いたエヴァンジェリンはシイナと手を取ることを選んだ2カ月前に自分を褒めたくなるのと同時にホンの少し、シイナを相手にすることとなる学園長に同情した。

この後エヴァンジェリンの予感は当たり、近衛近右衛門は常に胃薬が手放せない身体となるのは余談である。

## 第十一話 暗躍とは知られずに進むものです（後書き）

「今回の後書きはリクエストの結果で私、ノーラ・マギエル・ディアマウンテと師匠のキャサリン様でお送りしますのね！」

「全く・・・何であたいがこんな処に駆り出されなきゃいけないんだ・・・折角竜巻で遊んでたところなのに・・・」

「リクエストの結果だから仕方ありませんのね。キャサリン様、自己紹介をお願いしますのね」

「あたいがキャサリン・レヴィアタン・ペイレネ・コブライナだ」「キャサリン様なんか不機嫌ですのね？」

「当たり前だ！シーナの奴いきなり消えたと思ったら異世界でこんなに面白そうなことやっているんだぞ！？しかも氣象室がないから大災害起こし放題じゃないか！」

「えーとキャサリン様？シーナさんは帰りがっているようなんですのね？」

「知るか！？災害起こし放題という時点で天国だろうが」

「それは・・・キャサリン様だけだと思いますのね・・・」

「ふん、シイナだつてキレるとあたい以上の大災害を起こすぞ。正直あの学園長とやらがどれだけの災害をシイナに起こさせるか見ものだな」

「それは期待しちゃいけないような気がしますのね」

「お？なんか作者に呼ばれてるみたいだ。あたいに用があるらしい。行ってみるか」

「あ、キャサリン様！？・・・いつてしまいましたのね・・・というわけで今回はここまでですのね」

## 第十二話 懐かしさと黒歴史（前書き）

すみません。

予定より遅れましたが第十二話投下です。

サークルの後輩の文化祭の応援に行ったらそのまま拘束されて延々とアップルパイを作り続けることに・・・

二日で焼き上げたアップルパイ40個以上。

しばらくリンゴは見たくありません・・・

前回あれだけ言ったのにまだアオイ編終わりませんでした。

思いついたネタをどんどん入れてしまった作者が悪いのですが・・・

200000PVと300000ユニーク突破しました！

皆様の応援に感謝です。

## 第十二話 懐かしさと黒歴史

SIDE エヴァンジェリン

私は鏡というものが大嫌いだ。

鏡で自分の姿を見る度に嫌でも私が呪われたものであることを自覚させられる。

600年以上昔に毎日鏡で自分の姿を確認したのはもはや私の心の傷となっていた。

だが今私は自ら進んでまた鏡の前に立っている。

一瞬昔の記憶が頭をよぎったがそれも一瞬のこと。

「よしっ！」

それまで閉じていた目を開くとそこには・・・600年間見慣れた私ではなく夢に見た私そのものの姿があった。

『闇の福音』は裏の世界では600年生きている女吸血鬼として認識されている。

それは私がいつも幻術で大人の姿に化けて行動していたからだ。

私の願望というべきか私が成長した姿を想像して大人の姿に化けてはいたが所詮は幻影、紛い物の姿に過ぎない。

吸血鬼の真祖となった私の身体は不死を得た代わりに成長を失った。

結局私自身は10歳の姿のままだ。

あのまま吸血鬼にならずに成長出来た未来を幾度夢見たことか。

だが・・・今私の目の前の鏡には身長160cm程となった私の姿が映っている。

足はスラッと伸び、顔はまだ子供っぽさを残してはいるものの若々しい果実のように可憐。

プロポーションは私の理想程ではなかったが、出るところ出ては引っ込むところは引っ込んでおり全体のバランスから均整のとれたプロポーションと言える。

しかもシイナが言うには今の段階はまだ一段階目。

もう一段UPする事を考えれば期待は十分持てるだろう。

鏡は真実を写すものと言われている。

幻術で化けた姿は鏡には映らない。

だが逆に言えば鏡に映ったということは幻術などではなく実際の姿だという証明となる。

つまり・・・この成長した姿が今の私の姿なのだ！

中々現実味が湧かずに確信を得られなかったが、確信を得た今様々

な感情が水門を開けたように一気にあふれ出てくる。

「フハハハハッ！！！！やったぞおおーーーー！！！！」

「どうぞ」

カチャ

茶々丸がシイナの目の前に茶碗を置いた。

湯気のたつその中ではお茶が鮮やかな緑色の輝きを放っている。

「ありがとう」

茶々丸にお礼をしてシイナは茶碗を手に取りそつと口元に運ぶ。

少し香りを嗅いだ後にお茶を口に含んだシイナの口の中に丸みのある爽やかな渋みとほのかな甘みが広がった。

「いいお茶ね、香りもいいし・・・何より淹れ方が最高よ」

ほつつと息を吐きながらシイナはお茶を褒めた。



実際に精霊世界で地上界よりも上質なお茶を飲み慣れている筈のシイナが驚く程に茶々丸が淹れてくれたこのお茶をシイナは今まで飲んだお茶の中で一番美味しく感じていた。

「気に入って頂けたようで何よりです。・・・シイナさんは日本茶がお好きですか？」

「そうね、最近はフエイミンさん・・・仕事仲間の人の影響で中国系のお茶を飲む事が多いし、紅茶とかハーブ系も嫌いではないけど・・・やっぱり一番好きなのは日本茶ね。どうしてそう思ったの？」

「いいえ、シイナさんが本当に美味しそうにお茶を飲まれる姿がマスターがお茶を飲む時と似ていたもので。どこか懐かしげな表情を浮かべていらつしやいましたし・・・」

「そう・・・そう見えた？」

茶々丸に自分では気付かなかった点を茶々丸に指摘されたシイナは感慨深い笑みを浮かべて目を閉じた。

（あたしそんな顔してお茶を飲んでいたんだ・・・。精霊界だと日本茶系のお茶を飲んでもそんな顔した覚えはなかったんだだけだね。地上の日本茶を飲んでそんな顔したってことはあたしの中にまだ児玉祐司の頃の意識が残ってたのかな・・・）

気象精霊の世界に転生して20年位はまだシイナの中の人格は児玉祐司という日本人の意識が強かった。

だが精霊世界でシイナ・コノハナとして過ごすうちに段々と意識は

変化し、妖精界の王立学園でミリイ達と出会った頃にはシイナの中から児玉祐司という人格の意識は消え、シイナ・コノハナという今の自分になっていた。

それから200年近い時が流れたが、そんな中にまだ自分の中に児玉祐司という意識が残っていたことにシイナは驚いた。

「このお茶・・・朝宮茶ね」

「その通りですが・・・ご存知でしたか？」

シイナがポツリと漏らした言葉に茶々丸は目を見張る。

まさか出したお茶の銘柄を一発で当てられるとは思っていなかった。

「ええ、少しね・・・」

朝宮茶は滋賀県の特産のお茶である。

シイナの前世である児玉祐司は滋賀県の出身であり、母方の実家がお茶農家であった児玉祐司の実家ではいつもこの朝宮茶を飲んでいた。

おそらくその味の記憶が児玉祐司が変化したシイナの魂をゆり動かしたのだろう。

（確かにあたしの元になったのは児玉祐司という日本人の魂だけど・・・それも含めてあたしはあたしだしね）

シイナにとって児玉祐司は前世の記憶であり、今生きているのはシ

イナ自身である。

児玉祐司という魂の上にシイナとして生きてきた時間を重ねたのが今のシイナなのだ。

気象精霊シイナ・エアリネ・コノハナにとって児玉祐司は懐かしむ過去ではあっても振り返るものではない。

（その児玉祐司と神様の契約、あたしがこの先に進むためにもしっかりこなさないかね）

自分の中で決意を新たにしつつシイナは少し冷めてしまったお茶を一気に飲み干す。

「・・・ところで」

「はい」

「エヴァのアレ一体いつまで続くのかしら？」

ポツリと呆れが混じった声を漏らしながらシイナは目のある方向に向ける。

そのシイナの視線の先では・・・

「ハーハッハッハ！！どうだナギ！！ついに私は真の『闇の福音』へと進化するのだ！！私のものとならなかった事をせいぜい後悔するがいい！！ハーッハッハッハ！！！！」

別荘の海の上に浮かびながら、なんというかはじけまくって大声で

笑い声を上げ続けている吸血鬼の真祖の姿があった。

「霊術を掛けたあたしが言うのも難だけど・・・エヴァ大丈夫かしら？もしかしたらあたし変な術かけちゃった？」

シイナの頬を冷や汗が伝った。

シイナはエヴァの【登校地獄】の呪いを解いてから研究していた霊術をつい先程エヴァに掛けていた。

その効果は・・・対象の成長。

本来動物の成長の霊術は幻想の属性が不可欠な霊術であり、幻想の属性を持たないシイナには扱えない術である。

だが吸血鬼の真祖であるエヴァンジェリンの身体は肉体よりも霊体に依る要素の方が大きかった。

エヴァンジェリンの【再生】の能力が霊体を元に行われることを知ったシイナは霊体の年齢を成長させれば肉体年齢もそれに合わせて成長するのではないかと考えたのだ。

霊体の年齢を成長させるだけならばシイナの持つ靈魂と時空の属性があれば可能である。

つい最近その術の成功を確信したシイナは先刻その術をエヴァンジェリンに掛けたのだ。

術を掛ける前にエヴァンジェリンに確認したところ理想の年齢は18歳ということであったのでシイナはエヴァンジェリンの身体の負

担も考え二度に分けて術を掛けることにして、取りあえず霊体年齢を4年程進めた。

その後エヴァンジェリンが【再生】を行ってエヴァンジェリンの肉体は見事に14歳程に変化し、シイナの計画は見事に成功したと言えるのだが・・・。

「いいえ、マスターの状態は正常です。マスターの脈拍から唯興奮しているだけだと思われます」

「ケケケ、ソレホド永遠ノ幼女ヲ卒業シタノガ嬉シカッタンドロウナ」

「それにしても・・・もう2時間もあんな状態よ？」

実はシイナがエヴァンジェリンに術を掛けてから既に2時間程の時間が経っている。

当初は驚いて自分の身体を確かめていたエヴァンジェリンだったが、茶々丸に姿見鏡を持ってこさせて自身の姿を確認してからずっとあのように騒ぎ続けていたのだ。

最初はいつか落ち着くだろうとエヴァンジェリンの様子を眺めていたシイナ達であったが、エヴァンジェリンのテンションは全く落ちる気配がなくむしろ時間が立つ程上がっていった。

更にエヴァンジェリンはどこにしまってたのか明らかに以前のエヴァンジェリンのサイズに合わない衣装の数々を取り出すと一人ファッションショーは始めてしまったのである。

今はさよに抱かれているアオイがエヴァンジェリンの様子を面白がって見ている為に放置を決め込んでいたシイナだったが、余りにも長く続いているエヴァンジェリンのハイテンションに若干不安になっっていた。

そのアオイも疲れたのか途中で眠ってしまい、今はさよに付き添われて建物の中で眠っている。

「茶々丸さん、お茶ご馳走さま。そろそろエヴァを止めてくるわ」  
そろそろエヴァンジェリンを止める潮時かと思いシイナは立ち上がった。

シイナはそのまま空に浮かび上がるとエヴァンジェリンの方へと移動する。

「エヴァ」

「フハハハ！どうだナギ！このプロポーションは！」

「エヴァ、聞こえてる？」

「もはやロリエヴァなどと誰にも言わせんぞ！」

「エヴァ？」

「これこそ『闇の福音』の完成形だ！」

「・・・ダメね、これは」

シイナが声を掛けても全く反応せずに自分に世界に入ってしまったっているエヴァンジェリンにシイナはため息をついた。

そしてシイナは虚空から大きなハリセンを取り出すと大きく息を吸う。

「ミリィ直伝！音速ハリセン！」

パアアアーーーーンッ！！

音速を超える速さで振るわれたハリセンがエヴァンジェリンの頭を急襲し、心地よい大きな音を立てた。

常に張っている筈の魔法障壁を簡単に突破され、脳天に音速のハリセンを受けたエヴァンジェリンは思わずその場に蹲ってしまう。

「つ~~~~~~~~！！いきなり何をする！？」

「全く、いい加減こつちの世界に戻ってこないからでしょうが・・・」

「

思わず抗議の声を上げるエヴァンジェリンをシイナはジト目で見やる。

「長年の夢が叶ったんだぞ！？少しくらい騒いでもいいだろうが！」

「少し？」

抗議を重ねるエヴァンジェリンの言葉にシイナがピクッと反応した。

「へー少しねえ？」

「そ、そうだ！少し浮かれて騒いでいただけではないか！」

意味ありげに口元を歪めるシイナの様子に少し嫌な予感を感じつつもエヴァンジェリンは強がりの声を上げる。

「へえ、じゃあエヴァはこれを見ても平気なのね？」

イタズラっぽい笑みを浮かべつつシイナは持っていた端末機の手操作を始めた。

するとシイナ達の目の前に大きなスクリーンが現れて先ほどまで叫んでいたエヴァンジェリンが映し出された。

人はその時はテンションが高く気分ノリノリで行動していたとしても落ち着いてから見ると自分の姿ながら見るに堪えないということが多々ある。

多くの人はその現象をこう呼ぶ・・・黒歴史と。

エヴァンジェリンにとって今日の前で展開されている映像はまさにそれだった。

「\*#\$%¥&!??~~~~~」

エヴァンジェリンは声にならない声を上げながら顔を真っ赤にしてその場にしゃがみこんで悶えてしまった。

「一応最初から録画していたから2時間分あるけど・・・全部流す



「？」

「済まん、私が悪かったから。頼むから全て消してくれ・・・」

「了解」

確認するシイナにエヴァンジェリンはうなだれて身体を震わせながら泣き声の混じった声を絞りだした。

そのエヴァの様子にすっきりしたのかシイナはイイ笑顔を浮かべている。

シイナが端末機を操作して映像を消去している間、エヴァンジェリンは

「私は厨二病・・・私は厨二病・・・」

とブツブツ呟きながら器用に空中に座り込んで指先で『の』の字を書いていた。

「さて・・・と。エヴァ、冗談はここまでにしておいてそろそろ時間よ」

端末機の操作を終えたシイナが未だに座り込んでいるエヴァンジェリンに声を掛ける。

その声のエヴァンジェリンはピクツと反応する。

「時間だと・・・!？」

「そう・・・盛大な茶番劇のね」

シイナがそう応えた途端にエヴァンジェリンは勢いよく立ちあがった。

「フハハハハ！そうか！いよいよこの学園のバカ共に私に力を見せつける時が来たというわけだ！」

「・・・死者が出ると不味いから殺さない程度にね？それと・・・あの約束覚えているわよね？」

エヴァンジェリンのあまりの立ち直りの早さに呆れつつシイナは確認する。

「ふ、覚えているぞ。安心しろ、約束は守るさ」

エヴァンジェリンは意味ありげに口元をつり上げた。

その様子を見てシイナは安心した。

（これなら大丈夫そうね。・・・さて学園長、貴方はどう動くのかしら？）

こうして麻帆良祭最終日。

学園中が打ち上げ祭で盛り上がる中、もう一つの祭が静かに幕をあげる。

気象精霊によって整えられた舞台上で役者達はどうのように動くのか。

脚本家はただ微笑むのみだった。

「さあ、そろそろいくわよ、エヴァ？」

「ククク、正義バカ共がどんな行動にでるか・・・見ものだな」

## 第十二話 懐かしさと黒歴史（後書き）

「今回もリクエストにお応えしまして後書きは私、森の下級精霊コズエ・ミモリと」

「登場二回目のユナ・デモリエル・ハウンドがお送りしますう」

「いやあ、今回はシイナ様の本領が出ていましたね！」

「そうですかあ？シイナさんっていつも優しい先輩だと思っていましたあ」

「いえ、それは間違いないですよ？ただシイナ様は本当に怒ると笑顔で相手の逃げ場をなくすように状況を作ってから相手を追い詰めるんです！」

「えーと、それってえ・・・」

「つまり敵対した相手には容赦しないってことですね 最もシイナ様がそこまで怒ること自体珍しいことなんですけどね」

「コズエさんはシイナさんが怒っているところ見た事あるんですかあ？」

「何度かありますよ？最近だと大型台風3つを操作していた時にユメミ様に宴会をけしかけ続けた大漢さんを結界で閉じ込めて中に小さい太陽を放り込んで脱水症状になる寸前までそのままにしていたね」

「聞かない方がいい事を聞いてしまいましたあ・・・」

「まあ余程の事がない限りシイナ様は怒りませんから大丈夫ですよ」

「でも今シイナさん怒ってるんですよえ？」

「・・・」

「コズエさん何か言って下さい？」

「ということでシイナ様の怒りを受けた麻帆良学園の人達はどのようなのでしょうか？おひとり様商品券一枚でどうぞ」

「コズエさん！？」

**第十三話 嫌な予感に限って当たるものです（前書き）**

すみません。

リアルが忙しくて一回休んでしまいましたが第十三話投稿です。

総合評価1000pを突破しました！

拙い作品を読んでもくださっている皆様に感謝です。

### 第十三話 嫌な予感に限って当たるものです

#### 《麻帆良学園理事長室》

麻帆良祭最終日。

三日間続いた麻帆良祭も全ての催し物を終え、外から来た観光客達は麻帆良を去って行った。

しかし残った麻帆良の学生達により麻帆良全体が打ち上げモードへと移行し、楽しい雰囲気や漂う中で麻帆良学園理事長室はその外の空気とは対照に凄まじい緊張感に包まれていた。

「・・・世界樹の発光現象が一瞬止まったじゃない？」

「はい。先程まで世界樹は例年通り発光していたのですが・・・5分前に10秒程発光現象が止まりました。その後は何事もなかったかのように再び光出したのですが・・・」

普段はいつも飄々としている上司がいつになく真剣である様子に気押されながら源しずなは緊張した声で答える。

事の始まりは5分程前だった。

近右衛門はシイナとの約束で世界樹にかけてある魔法を一度解除する事に同意した。

だがそれを関東魔法協会に所属する麻帆良の魔法先生や魔法生徒に直接言えば反発や暴発があるだろう事は近右衛門にも分かっている。

なので学園結界の解除は信用のおける数名にのみ真相を話し、後の関係者には

『麻帆良学園都市全体を覆う結界に異常が生じ、そのメンテナンスの為に臨時に結界を解除する』

という名目で行われる事となった。

そして結界の解除に伴って入ってくる危険性のある侵入者を防ぐ為に大停電の時と同様に学園各地に魔法関係者を配置。

その警戒態勢の中で世界樹の発光現象が一瞬止まったのだ。

既に世界樹にかけた魔法は解除していることから、おそらくシイナ達が世界樹に何かしたのであることは予想がつく。

だが学園長は何かが起こるような胸騒ぎがして仕方がなかった。

そしてその近右衛門の不安は悪い方向に的中してしまう。

ピリリリッ

部屋に携帯電話の音が響いた。

「ふむ、明石君か。ワシじゃが・・・」

『学園長！大変です！』

電話に対応した学園長の耳に明らかに緊縛していると分かる相手、

明石教授の声が響く。

麻帆良大学の教授で魔法先生の一人である明石教授は麻帆良の結界システムの指揮を担当していて、なおかつ柔軟な思考を持つ穏やかな人物である。

今回の件の真相を知っている数少ない人物の一人であり、今は管制室で結界解除の指揮を執っている筈であった。

穏健な知性派でいつも冷静に物事に対処する明石教授のただならぬ様子に近右衛門も顔を引き締める。

「どうしたのじゃ？何が起こったのかの？」

『今回の結界解除の内容が漏れたようで飯塚先生ら一部の魔法先生、魔法生徒が担当している持ち場を放棄して世界樹へと向かっていきます！私の判断で神多羅木先生に追って頂くように頼みましたが多分間に合わないかと！』

「なんじゃと!？」

# 《麻帆良学園の一区画》

人通りがない道を十数名程の集団が駆け抜ける。

黒い背広を着た男性を先頭に所々ロープを纏った人影が混じるその



集団は麻帆良学園に所属する関東魔法協会の構成員達である。

「飯塚先生！本部から持ち場に戻るようにとの指令が来ていますが！？」

その集団の中の一人が先頭を走る男性に向かって叫ぶように話しかける。

「そんな物は無視しろ！世界樹が狙われているんだ、こちらの方が重要性が高い！」

飯塚と呼ばれた先頭を走る男性は振り返りながらも怒鳴る。

「全く、学園長も甘い！世界樹は麻帆良の要だぞ！狙われている可能性がある以上一番優先すべきは世界樹だろうに！」

再び顔を前に戻した飯塚は走りながらもぼやいた。

飯塚は麻帆良の魔法先生だがその中でも関西呪術協会を徹底的に潰すべきという考えを持っている強硬派に所属している人物である。

そんな飯塚は関西呪術協会の長、近衛詠春と縁戚関係にあり、東西の融和を唱える上司である近衛近右衛門を齒痒く思っていた。

近衛詠春は『紅き翼』の一員で大戦の英雄の一人であるが、西洋魔法至上主義者である飯塚にとって『英雄』とは『千の呪文の男』サウザンドマスターのような魔法使いであり、近衛詠春には余り好感を抱けない。

そんな不満を抱いていた飯塚だが、関東魔法協会の理事であり、麻帆良学園学園長である近衛近右衛門には表だって逆らえない。

その為、これまで不満を抱きながらも学園長の指示に従っていた飯塚だったがそんな彼にチャンスと思われる事態が転がり込んできた。今回の『結界の臨時メンテナンス』について飯塚は内心疑問を抱いていた。

麻帆良の結界は年に2度大規模なメンテナンスが行われている。

今年も4月に大きなメンテナンスが行われており、それから2カ月程しか経っていないにも関わらず異常が見つかることもおかしいし、何より学園長の説明が不鮮明なのだ。

そんな時に同じく強硬派に属する飯塚の同僚が、今回に件に何か裏があるらしいという情報を掴んできた。

その情報により猜疑心が肥大化しながらも学園長の指示に従って麻帆良の警備についていた時に飯塚は世界樹の発光が突然に一瞬消えたのを目にする。

『何者かが世界樹に何かしている』

そう判断した瞬間に飯塚の中に燦っていた猜疑心が爆発した。

飯塚は持ち場を放棄すると飯塚と同じく西に悪感情を抱く魔法使いに声を掛け、世界樹へと移動を開始したのである。

飯塚にはある思惑があった。

世界樹に何かしている者が何者かは分からない。

だが関東魔法協会の者であれば、自分達にその事を黙っていた学園長を糾弾する事で自分の関東魔法協会内での発言力を上げることが出来るし、関東魔法協会の者でなければ自分達が捕縛することで功績を元に同じく関東魔法協会内で優位に立つことが出来る。

いずれにしても自分の立場はかなり上昇することが見込めるだろう。

そうすればあの汚らわしい吸血鬼も処分できるかもしれない。

そんな思考が頭を駆け巡った瞬間に飯塚は自分の『正義』に酔った。自分と同じく学園長に不満を抱いていると思われるガンドルフィーニを誘った時、『持ち場を放棄するわけにはいかない』と断られたのは残念だったが、考え直してみれば自分以上に人望があるガンドルフィーニを誘えば自分の功績もガンドルフィーニの物となってしまうと思えばガンドルフィーニが来なかったのは逆にチャンスであると言える。

「飯塚先生！世界樹の下に光る人影が！」

思考に沈んでいた飯塚の意識を隣りを走っている魔法使いが引き戻した。

世界樹の方を見てみると確かに人の輪郭をした光るものが二つ見える。

「よし、突入するぞ！皆杖を構えて気を抜くな！」

「「「「はいっ！！！」」」」

## 《世界樹の麓》

『マスター、シイナさん。どうやら麻帆良の魔法関係者十数人がこちらに向かっているようです』

毎年麻帆良祭の期間にアオイが魔法による拘束を破ろうと靈力を暴走させていた事により発光現象を起こしていた世界樹。

数日前アオイがシイナの手によって助け出された結果、唯の大きな樹となってしまうた世界樹だがシイナが靈力を供給して今年も例年通りの発光現象を起こしている。

そして麻帆良祭最終日に世界樹の下で告白をすれば恋愛が成就するという『世界樹伝説』にあやかっただけ今年も世界樹広場にカップル予備軍が集まる中、その世界樹の麓にはシイナとエヴァンジェリンが立っていた。

「何と言つか・・・予想通りの反応ね」

「ふん、あのジジイは見通しが甘すぎるんだ。そんな奴が頭で下を統制しきれぬ筈がない」

世界樹の上部の枝から周囲を監視していた茶々丸が報告する内容に対し、シイナは呆れ、エヴァンジェリンは予想通りといった反応をする。

麻帆良の関係者らが世界樹に向かっている事はシイナ達の予想通りの行動であった。

シイナがわざわざ近右衛門に行動する日を告げたのは近右衛門が約束を破る、もしくは近右衛門が破らなくても部下が暴走する事を懸念した為である。

エヴァンジェリンから近右衛門について聞いたシイナは近右衛門の組織の長としての資質に疑問を抱いていた。

10年以上麻帆良の警備員をしているエヴァンジェリンに対して麻帆良の魔法関係者の多くは忌避感を持っている。

組織内にいつ暴発するかもわからない溝があることは組織にとってかなり危険な状態である。

10年以上時間があつたのにも関わらずそれを改善出来ていないのにも関わらずそれを気にしていない近右衛門は組織の長として致命的に楽観的過ぎると言える。

長が楽観的過ぎて更にそれを注意する人物がいない組織は緊張感が欠け、結果として統率力が低下する。

それはシイナがこの先麻帆良で過ごす上で学園側とどう関わるか決める上で確かめる必要があつた。

そして今日試しにシイナは世界樹に靈力を供給する量を調節して一時的に発光現象を止めてみたのだが、案の上それに見事に学園の魔法関係者は食いついたのだ。

『世界樹に何かする』と事前に分かっているのにそれを止められなかった近右衛門に対するシイナの評価はストップ安である。

「エヴァ、予定通り行くわよ。茶々丸、記録よろしくね」

「ククク、ようやく奴らにうさを晴らすことが出来るな」

『了解しました』

ため息をつくようなシイナにエヴァンジャリンは楽しげに笑う。

今回相手をするのはシイナとエヴァンジェリンだけであり、茶々丸は樹上から映像を撮ることになっている。

「じゃあエヴァ、迷彩をかけるわね」

シイナが手を上げるとシイナとエヴァンジェリンの身体が光を纏ってちょうどマネキンが光っているように見えてしまい、その容姿の判別がつかない状態になる。

シイナとエヴァンジェリンが自分の身体の具合を確かめていると林の向こうから人がやってくる気配がした。

「来たようだな」

エヴァンジェリンが呟くとその瞬間林の向こうが騒がしくなり、何人もの人影が姿を現す。

その先頭には大きめの杖を構えてシイナ達に向けている黒いスーツの男、飯塚が立っている。

「貴様ら何者だ、ここで何をしている!？」

他の魔法関係者もシイナ達に向けて杖を構える中でリーダー格である飯塚が声を張り上げた。

飯塚達からしてみたら光る人の輪郭だけしか見えないシイナ達は正体不明の不審者にしか見えない。

「世界樹を解放するだけよ。誰か知らないけど邪魔しないでくださいね?」

光の迷彩をしていても声は変わらないので正体がバレる可能性のあるエヴァではなくシイナが答えた。

だがその答えは飯塚達の『正義』を刺激する結果となる。

「私達はこの麻帆良学園の魔法使いだ!世界樹は麻帆良学園の所有物と知らないのか!怪しい奴らめ・・・捕まえる!」

「・・・・・・【魔法の射手・連弾・戒めの風11矢】!」

「・・・・・・【魔法の射手・連弾・戒めの風13矢】!」

「・・・・・・【熱波・武装解除】!」

事前に打ち合わせしたのだろう、飯塚の声を合図に魔法使い達が拘束の効果を持つ風の矢と武装解除の魔法を次々と唱えた。

一人一人が放つ風の矢が少なくとも人数が多い為に200近い魔法

の矢と様々な属性の武装解除の魔法がシイナとエヴァンジェリンに襲いかかる。

（よもやこれ程の数の魔法を受けては無事では済むまい。ふふ、これでようやくあの汚らしい吸血鬼を・・・）

魔法に矢の軌跡を見て自分の勝利を確信しながら飯塚は笑みを浮かべる。

だがその笑みはすぐに固まることとなる。

「障壁の御札！」

「シルフ・エスクード  
風の防壁！」

迫りくる魔法に対してエヴァンジェリンは御札を取り出して目の前に光の盾を作り出すことで魔法を防ぎ、シイナは霊術で風の盾を作り出してその激しい乱流によって魔法を引きちぎり拡散させてしまふ。

「全く・・・いきなりこれとはね。でもこれならもう十分ね」

「ああ、そうだな」

全く被害を受けた様子のない二人の様子に魔法使い達は恐怖に駆られた。

「なんだあれは！西の陰陽術師か！？」

「馬鹿言え！あんな術見た事ないぞ！？」



「うわああああ！・・・【魔法の射手氷の3矢】！」

エヴァンジェリンが御札を使用したことで敵は陰陽術師かと混乱する中で恐慌をきたし、耐えきれなくなつた魔法使いの一人が闇雲に魔法を放つ。

「【魔法の射手光の5矢】！」

「【魔法の射手火の3矢】！」

それにつられて魔法使い達は先程とは違う攻撃性を持った魔法を次々放つた。

シイナとエヴァンジェリンは先程と同じようにそれを防ぎながら反撃に移る。

「雷<sup>いかづち</sup>の御札！火の御札！」

エヴァンジェリンは魔法障壁と御札で生み出した光の盾で【魔法の射手】を防ぎつつ、御札魔術を使って魔法使い達をなぎ倒していく。

御札にルーン文字で書かれた魔術式を媒介に行使される御札魔術は本人の属性に関係なく魔術を使用することが可能で本来はエヴァンジェリンが扱えない属性の攻撃をすることが出来る。

魔法使い達の中に飛び込んで行つたエヴァンジェリンとは対照にシイナは遠距離攻撃に徹していた。

「吹き飛ばすの四・二×一〇の六乗ジュール！」

相手からの魔法を結界霊術で防ぎつつ、小さい光の玉を投網のように打ち出す霊光弾のバリエーションである妖魔光で数人の魔法使いを一気に吹き飛ばしていく。

TNT火薬1キロの爆発に相当するエネルギーであるシイナの妖魔光から逃れた魔法使いをエヴァンジェリンが御札魔術で倒していき、1分も立たないうちに飯塚以外の魔法使い達は皆地に倒れ伏してしまった。

「……ば……馬鹿な！」

仲間の魔法使い達が次々と吹き飛ばされていく光景に飯塚は自分の目を疑った。

関東魔法協会の中核である麻帆良学園に所属する魔法使いのレベルは一般の魔法使いの水準と比べて遥かに高い。

その高位の魔法使い達が簡単に倒されていく光景など飯塚は信じられなかった。

身体を震わせていた飯塚だがその時にある事に気付いた。

暴れている二人の注意は明らかに自分から外れており、しかもシイナとエヴァの位置は飯塚からみて直線状に重なっている。

（今なら……）

「……ものみな焼き尽くす浄化の炎、破壊の王にして再生の火よ、我が手に宿りて 敵を喰らえ【紅き焰】！」

呪文の詠唱が終わるとともに飯塚の手から爆炎が放たれ、一直線にシイナとエヴァに向けて突き進んでいく。

しかし飯塚が己の全魔力を注ぎ込んだその魔法をシイナは小さな竜巻を作り出すことで防いだ。

竜巻と爆炎が激突するも、霊力を込められた竜巻によって爆炎はズタズタに引き裂かれてしまう。

そして竜巻はそのまま猛スピードで移動すると己の全てをかけた魔法を防がれて茫然としてしまった飯塚を飲みこむ。

「うわあああああつ！！！？？」

竜巻とは要するに気流が激しく回転しているものである。

猛スピードで回転し、更にそこに上下運動まで加わったエネルギーを受けた飯塚は竜巻の回転によって気絶してしまった。

「もうそろそろいいかしらね」

時期を見計らってシイナが術を解くと竜巻が急に消えて気絶した飯塚がどさつと地面に落ちた。

「終わりだな」

飯田が気絶している事を確認したエヴァンジェリンが手に持っていた御札をマントの裏に仕込まれたケースにしまう。

「お疲れ様です。マスター、シイナさん」

そして世界樹の上で待機していた茶々丸もバーニアをふかしながら降りてきた。

「しっかり撮れたか？」

「はい。一部始終録画完了しました」

茶々丸が世界樹の上で待機していた理由。

それは魔法使い達の動きを監視するという意味もあったが、一番の目的は今回の戦いの様子を撮影するためである。

茶々丸が片手持っている超とハカセの発明品である撮影装置には魔法使い達がシイナ達にいきなり攻撃し、シイナ達が仕方なくそれに応戦した様子が一部始終記録されていた。

「上出来だな・・・ってシイナ？一体何をしているんだ？」

成果を確認したエヴァンジェリンがシイナを見るとシイナは死屍累々と横たわる魔法使い達の一人の傍に座り込んでいる。

シイナは倒れている魔法使いに向けて右手をかざし、その手は薄らと光っていた。

「骨折とか火傷とか大きな怪我だけ治しているのよ」

シイナの返答に『何でそんな事をするんだ？』と思い、口に出しかけたエヴァンジェリンだったがシイナが治療している意味に気付き

納得した。

計画ではこの後エヴァンジェリン達は『学園の魔法使いがシイナ達にいきなり攻撃を仕掛けてきた事』について近右衛門の責任を追求するつもりである。

そこで『いきなり攻撃を仕掛けられたので仕方なく応戦した』という事実があっても、あの近右衛門が『過剰防衛』としてシイナ達に言い返す可能性は十分にある。

だがそこで『その後治療した』という事実があればそれを防ぐ事が出来る。

長い時を生き、戦略や戦術といった駆け引きには自信のあるエヴァンジェリンだがこういった政治的な駆け引きについてはそこまで詳しくない。

それ故にシイナの抜け目のなさにエヴァンジェリンは感心した。

実のところシイナとしてはそういう考えもあるにはあったが、あまり大怪我させても寝覚めが悪いという理由が大きかったりするのだ  
が・・・。

その後シイナ達は用心して迷彩結界で姿を隠しつつそのまま移動してまた2ーAの打ち上げの輪に加わる為に移動した。

シイナ達が移動してしばらくしてから現場に到着した神多羅木達が見た物は、例年通りに発光現象を起こしている世界樹とその麓に少しの怪我は負っているものの大きな怪我はなく横たわる同僚達の姿だけだった。

《麻帆良学園理事長室》

麻帆良祭の振り替え休日の二日目、近右衛門は再びシイナ達の訪問を受けていた。

前回と同様に近右衛門の他に高畑が同席しているが、魔法世界でA以上の評価を受ける高畑とそれ以上の実力を持つ近右衛門といえど目の前のソファーに悠然と座りながらお茶を楽しんでいるシイナが放つプレッシャーに身体の震えが止まらない。

『のう、高畑君。君から話しかけてくれんかのう？』

『学園長、何で僕に振るんですか！？僕はあくまで同席しているだけですよ！？』

近右衛門と高畑が念話でお互いに交渉役をなすりつけ合う程シイナは圧倒的なオーラを放っていた。

「さて・・・話し合いは終わりましたか？」

湯のみを机に戻し、ニツコリと微笑むシイナに近右衛門は腹を括る。

「う、うむ。ようこそ参られたの、木乃花殿。して、今日は何の用かの？」

普段他人と話している時の『フォ、フォ、フォ』という笑い声を出す余裕さえなく、その特徴的過ぎる後頭部から冷や汗を流しまくって明らかに強張っていると分かる近右衛門の姿にシイナの隣に座っているエヴァンジェリンは笑いを押し殺している。

「あら？ 聡明な学園長さんなら私が今回お尋ねしたい事もご理解していると思っていたのですが？」

何とかとぼけようとしていることが丸わかりな近右衛門の様子にシイナは背後に『何トボケようとしてんだデメエ。トボケようってんならどうなるかわかってるよなあ？』というオーラを浮かべてにこやかに話しかける。

「・・・ふむ、残念ながら心当たり事はないんじゃないが・・・」

シイナの迫力に少し躊躇した近右衛門だったが結局とぼける事を選んだようだ。

麻帆良祭の最終日の夜に起きた事について近右衛門はもちろん把握している。

暴走したのは飯塚ら一部の魔法使いだが、シイナと契約した以上『部下が勝手に暴れました』という言い訳は通らない。

今まで魔法によって治外法権化した麻帆良で関東魔法協会理事と麻帆良学園学园长という名のもと好き放題してきた近右衛門は素直に謝罪するという一番賢い道を選ぶ事が出来なかったようである。

「そう・・・それは残念ですね。ところで今日はお二人に見て欲し

いものがあつて参りました。茶々丸さん、お願い」

「はい、分かりました」

シイナは笑顔を崩さないまま、後ろに控えていた茶々丸に話しかけた。

茶々丸は返事をしながら前に出ると手に持っていたノートPCをテーブルに置いて操作する。

やがてPCの画面に一昨日の夜に起きた全ての映像が映し出される。

それまでも冷や汗を掻いていた近右衛門と高畑だったが映像が進む度に冷や汗の量が増えていく。

映像には麻帆良学園に所属していると宣言した飯塚が光る人物にいきなり攻撃を仕掛けた事がはっきりと映っている。

しかも映像の最後には光る人物の光が消えてシイナが現れるところが映っており、何一つ言い逃れ出来る要素が見つからない。

映像が終わってしばらくしてからシイナはゆっくりと口を開いた。

「私はてっきりこの間学園長さんに世界樹について許可を頂けたと思ったのですけれど……。ご覧の通り問答無用でいきなり攻撃されたのですよ。私としては不幸な行き違いと思いたいのですけどね？」

本当に残念そうな顔を浮かべるシイナに近右衛門もぎこちない笑顔を浮かべる。



「う、うむ。本当に残念なことじゃ。しっかりと世界樹について伝えたりもしたんじゃがどうやら連絡が行き届かなかったようでの・・・」

シイナの話の方向が事故で済ませようと進んでいると思った近右衛門は少しホッとしながらシイナに同調する。

だがここで獲物を逃がす程シイナは甘くなかった。

「ただ行き違いだったとはいえ戦った方は大変責任感が強く、この麻帆良を守っていらっしやるようにお見受けしました。それほどの気概を持つ方がいらっしやるなら私が長く世界樹に霊力を分けて麻帆良を守るのに余計な事をしない方が良いと思っていますのです」

何気なく言ったシイナの言葉に近右衛門と高畑はギョツとした。

シイナの言葉を言い換えれば『それだけの気概があるのなら世界樹に霊力を供給しなくていいよね?』と言っているのだ。

今の世界樹を中心とした麻帆良の結界と認識阻害の魔法はシイナが霊力を供給することで発動している。

それがいきなり消えればと麻帆良に大混乱が起きるのは想像に難くない。

学園の結界はともかく認識阻害の魔法が消えてしまえば麻帆良は非常識のオンパレードである。

そうなれば麻帆良学園都市が全国から注目されてしまう事は想像に

難くないし、麻帆良学園全域で起こる魔法関係の事故を全てフオロ―する等出来るものではない。

また魔法の存在がバレるのは時間の問題となるだろう。

加えて麻帆良の魔法先生の大半は教員免許を勝手に偽造した上で教師をしている。

今まで認識障害の魔法によって教育委員会や警察の目から逃れていたがそれも出来なくなってしまうだろう。

「ワシらとしてはそれは流石に困るのじゃが・・・」

シイナの脅しに対して近右衛門はなんとか譲歩を引き出そうとする。

「あら、そうですか・・・。ただ私としても仲間を必死に助けようとしている処をいきなり犯罪者呼ばわりされた挙句に攻撃されて作業を中断されたのは流石に気持ち良くは無いですよ」

笑みを浮かべたままではあるが言葉とともにシイナから発される圧力が増していく。

その圧力をまともに受けた近右衛門は命の危険を感じるとともにあることに気付いた。

（ふぉ！？麻帆良の結界が消えかけておるのか！？）

いつも感じられる麻帆良の結界の効果が薄れていくように感じた近右衛門は戦慄した。

原因は間違いなく目の前で微笑みながらお茶を啜っている存在である。

おそらく霊力の供給量を減らしたことで、世界樹の力が消えかけているのだ。

この時近右衛門は麻帆良の命綱がシイナに握られていることを実感した。

それと同時にこれ以上こちらがぐずれば事態を悪化させかねないと悟る。

「それで一体何をお望みかの？」

がつくりと肩を下ろして白旗を上げた近右衛門に様子にシイナは笑みを消した。

「通告です。私が世界樹に霊力を供給するのは問答無用で来年の麻帆良祭の最終日・・・夏至の日まで。そしてそれまでに一向に結界解除後に向けての準備が進まないようでしたら少しずつ世界樹への霊力の供給を減らしていきます。これは警告だと思ってください」

「承知した・・・」

その言葉を聞いた近右衛門は力なく項垂れた。

シイナの言葉はまさに通告である。

近右衛門がこれを見無視したら容赦なく実行することは想像できる。

一年の間に本腰を入れて対処しなくてはならない。

結界がなくなれば麻帆良の防御力は格段に落ちる事となる。

だがそれは本来ならば必要ないものなのだ。

関西呪術協会も結界は張っているがそれは術者の力によるものであり、警備も全て関西呪術協会の手によって行われている。

自分達の力で守る力がないというのは単に人材不足というだけである。

その人材不足も近右衛門がしっかりと後進の教育に力を入れていれば解決した話なのだ。

無論近右衛門とて無為に過ごしてきたわけではない。

しかし近右衛門の戦力補充は主に外部からのスカウトである。

高畑を始めとして元関西の神鳴流剣士である葛葉刀子等実力ある魔法関係者は殆どがスカウト組である。

エヴァンジェリンという魔法世界でも最高クラスの魔法使いが麻帆良に来て魔法関係者とエヴァンジェリンとの厄介事を避ける事を重視してその関係の改善を図ろうとせずに魔力を封印し、警備に不安があることから呪いに手を加えてエヴァンジェリンを押し留めという中途半端な事をしている。

要は今までのツケがきているのである。

「それと通告の他に要求が一つあります」

続けられたシイナの言葉に近右衛門は顔を上げた。

「・・・何かの？」

「今回の件でエヴァには色々骨を折ってもらいました。聞けばエヴァはナギ・スプリングフィールドに呪いをかけられたようですがその呪いが歪んでいるようです。私の力でその歪みを治したいと思うのですが？」

「ほう、私の呪いが歪んでいるだと？それは初耳だ。私としては是非解いてほしいな。いい加減中学生も飽きた」

これまで沈黙してお茶を楽しんでいたエヴァンジェリンがシイナに呼応して声を上げる。

「・・・分かったわい。エヴァンジェリンの呪いが歪んでいるというのならば解いてやって下され」

近右衛門としてみればエヴァンジェリンの【登校地獄】の呪いに手を加えたのは自分である。

シイナは登校地獄自体を解くと言っているわけではなく、歪みを治すと言っているだけである。

本来【登校地獄】は登校拒否の生徒をまじめに登校させる為の呪いであり、学校のない時間に学校に拘束する効果などないし、卒業すれば解除されるものである。

エヴァンジェリンを麻帆良に拘束しているのは近右衛門が呪いに手を加えた為だ。

ここで反対すれば何故近右衛門が反対するのかということになり、エヴァンジェリンは近右衛門と敵対するだろう。

（あの計画の為にエヴァンジェリンと今ここで仲たがいするわけにはいかんしう）

「それは良かった。それでは私はこれで失礼します。約束は忘れないようになさって下さいね。この会話は茶々丸さんの中に記録されていますから」

項垂れた近右衛門に対し、シイナは再びニッコリと微笑むとソファーから立ち上がり部屋を出て行った。

「じゃあな、ジジイ。呪いが直ったら早速東京に買い物にでもいくか」

そのシイナに続いてエヴァンジェリンも上機嫌で部屋を出ていき、それに茶々丸も続いた。

シイナ達が出て行ってしばらくしてからそれまで口を閉じていた高畑は口を開いた。

「学園長・・・」

心配そうな顔をする高畑に近右衛門は力なく笑う。

「どうやら儂らは踏んではならぬものを踏んでしまったらしいの・・・」

・。じゃが仕方がないわい。本気で取り組んでいくしかないの・。  
」

ふつつとため息を吐きつつ近右衛門は立ち上がった。

近右衛門のやらなければならぬ事を考えればある時間はかなり短い。

この上は一刻も早く仕事に取り掛かるしかなのだ。

「とりあえずは・・・飯塚君達のことかの・・・」

今やらなければならぬ案件を頭に浮かべつつ近右衛門は再びため息をついた。

その後実際の責任者である飯塚は、近右衛門も実際に真実を誤魔化していた負い目があり、職場放棄による厳重注意だけで済む事となったのだが、目を覚ました飯塚は風が吹く度に恐慌状態に陥るようになったために魔法先生を続ける事が難しくなり、麻帆良学園を辞めて魔法世界に戻る事となった。

衰弱した飯塚のあまりにもやつれた様子に関東魔法協会での近右衛門の決定に文句を言う者はだれ一人いなかったという。

### 第十三話 嫌な予感に限って当たるものです（後書き）

「久しぶりに後書きコーナーに復帰しました！ミリイと」

「ユメミよお」

「シイナが最近どんどん黒くなってようない気がするわね」

「シイナはあ、元々敵対する人には容赦がないからねえ」

「まあ相手も相当ひどいこと言ってるし同情できないけどね」

「それにしても作者ったらこんなに原作ブレイクして大丈夫なのかしら？」

「かなりプロット練りには苦労してるみたいよお？今回もネタを一つ削ったみたいだし」

「どんなネタを考えていたのよ・・・」

「まだ原作にさえ入っていないからねえ」

「さっさと原作に入ってほしいわね・・・」

「さて、今日はこの辺でお開きね、じゃあ・・・」

「またね」



## 第十四話 アオイの大冒険（前書き）

お待たせしました。

なんとか4日以内に投下です。

ギリギリですが（汗）

慌てて書いたので少し荒くなっています。

このところ読んで下さる方が増えたようでなんとか期待を裏切らないように頑張ります。

## 第十四話 アオイの大冒険

サツサツ

森の中に佇む一軒のログハウス。

『闇の福音』ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの自宅であるその家の前で箒で掃く音が静かに響く。

「ふゝ、これで今日の掃除も終わりました」

相川さよはエヴァンジェリンの家の前で箒を手にして満足気な笑みを浮かべた。

さよの前には落ち葉や飛ばされてきたのであろうビニール等が集まり小さな山になっている。

さよは自分の掃除の成果を満足気に確認して箒を動かしてそれをちりとりになめながらふと少し前まで自分が常にいた女子中等部の校舎のほうを見やった。

「シイナさん達もそろそろ試験が終わった頃でしょうか？」

シイナとさよは麻帆良祭が終わってからエヴァンジェリンの家に移り住んでいた。

その理由は家族が一人増えたからである。

世界樹から生まれた精霊、アオイ。

いくら人間には見えない精霊であるといってもまだ赤ちゃんのアオイの世話をすることは寮生活では難しい。

麻帆良祭の期間中シイナ達はアオイを含めてエヴァンジェリンの家で生活しており、そのまま崩し的にエヴァンジェリンの家で暮らす事になったのだ。

エヴァンジェリンとしても半ば家族同然の付き合いであるシイナ達が転がり込んだとしても今さらの事であり、内心家族といったものに飢えていたエヴァンジェリンはこの状態をかなり喜んだ。

従者である茶々丸も主人であるエヴァンジェリンが喜んでいるし、最近ではアオイの様子を録画することが趣味となりつつあった茶々丸にとってこの事態は僥倖である。

そんな理由から特に障害もなく始まった共同生活だったがその中心はアオイであった。

エヴァンジェリンにしてもシイナ達にしても育児の経験はない。

だがそんな事を抜きにしても周囲の庇護を求める赤ちゃんの魅力というものは凄まじいものがある。

それこそそれまで孤高を貫いてきたエヴァンジェリンさえ虜とする程に。

幸いシイナには精霊の育児についての知識はあり、修行時代に師匠のイツミの愛娘で当時赤ちゃんだったランティの世話をしたことがあったし、実家でシイナの次に生まれた弟の世話を母親がする様子

を見た事もあった。

その為名付け親でもあるシイナを中心にアオイの世話をすることになったのだが、ここで問題が発生した。

シイナ達もエヴァンジェリン達も一応の身分は学生である。

最初は順番に学校を休んでアオイの世話をするという事をしていたのだが、仮病などはそう何度も使えるものではないし、特に学園側には【登校地獄】の呪いが続いていると思われるエヴァンジェリンは学校に行く必要がある。

そんな中でアオイの世話役を買って出たのがさよだった。

2・Aの生徒として名簿に載ってはいるものの普段は認識されておらず、『ゲ　ゲの　太郎』の主題歌通り試験とは無縁の幽霊生徒であるさよは登校しなくても問題はない。

それに加えて生前の夢が『誰かのお嫁さん』であつたさよはアオイの世話をすることに生き甲斐を感じていた。

さよの負担が大きい事からシイナ達も当初は渋っていたのだが、幸い今まで中々生まれる事が出来なかった反動かアオイの成長度合いが早いこともあって何とか大丈夫であろうという結論になり、日中シイナ達が学校に行っている間のアオイの世話はさよがすることになったのだった。

「さて、そろそろアオイちゃんのご飯をあげる時間ですね」

箒とゴミを片づけたさよは鼻歌を歌いながらログハウスに戻るとそ

のままキッチンに向かってシイナが用意したミルクを温めて哺乳ビンに詰めた。

精霊の赤ちゃんの食事は基本的には酪乳<sup>ミルク</sup>なのだ。

成長度合いの早いアオイは霊力を多く必要とすることから、アオイにはシイナが用意した霊力豊富な精霊世界産のミルクを飲ませている。

さよも少し飲んでみた事があるが、飲むとほのかな甘みが口に広がり口が肥えているエヴァンジェリンが絶賛する程の味だった。

ちなみにさよやエヴァンジェリンは何でシイナがそんなミルクを持っているのか疑問に思ったのだがシイナ曰く

『同僚にスズネちゃんっていう酪乳派の子がいるのよ。あの子宴会やる時もいつも酪乳を飲むから亜空間倉庫にいつもいくらかストックしているの。まさかこんな役に立つとは思わなかったけどね』

と職場の同僚の為に用意したものらしい。

「アオイちゃん、ゴハンですよ」

用意した哺乳瓶を持ってアオイの揺り籠を置いてある2階に向かったさよだが首を傾げた。

いつも声をかけたら返事をするはずのアオイの声がないのだ。

「アオイちゃん？」

早足に2階に駆けあがるさよだが次の瞬間目を見開いた。

「アオイちゃん!？」

揺り籠で寝ているはずのアオイの姿がないのだ。

そして揺り籠の横では開け放たれた窓のカーテンが風で揺れていた。

時はさよが外で掃除している時に遡る。

「あつ?」

アオイは寝かされていた揺り籠の中で目を覚ました。

目を覚ましたアオイがまず先に探したのはアオイにとっての母親、シイナの姿だった。

アオイは世界樹からシイナの術によって生まれた精霊であるが、シイナの術によって誕生したアオイはその際にシイナの霊力の影響を受けている。

アオイにとっての母親はまさにシイナなのだ。

だが今は学校で期末試験を受けているシイナがここにいる筈がない。

「グ、あつ!？」

探してもシイナの姿が見つからないことで泣きだしそうになったアオイだがその時アオイの本能が働いた。

部屋に残っていたシイナの霊気に気付いたのだ。

アオイは本能でよりシイナの霊気が強い方を探しあてる。

その方角にあるものは・・・開いていた窓だった。

その方角に母親<sup>シイナ</sup>がいる。

そう感じ取ったアオイは身体を動かそうとするがそこはまだ生まれてひと月程しか経っていない赤ちゃんである。

ただ手足を動かすだけで起き上がることなぞ出来ない。

それをもどかしく感じたのかアオイは動くのを止めるとその小さな身体から霊力を放出し始めた。

「あうっ!!」

その霊力によってアオイの身体が空中に浮いた。

精霊にとって飛ぶ事は行動の一部である。

人間の赤ちゃんは生後半年程でずりはい、ハイハイを覚えるのだが、精霊の赤ちゃんはそれより先に空に浮かぶ事を覚えるのだ。

本能で浮遊術を覚えたアオイは揺り籠から浮かび上がった。

浮かび上がったアオイの身体は空中をフワフワと漂っており中々安定しないが、それでもアオイはシイナの靈気を感じる窓の方を向くとフワフワと揺れながら窓の方へと進んでいく。

「あうー」

フワフワと揺れ、ゆっくりではあるが移動の手段を覚えたアオイはシイナを求めてそのまま窓から外へ出て行ってしまう。

アオイが出た後に残ったのは空になった揺り籠であり、それにさよが気付いたのはアオイが出て行ってから10分後のことだった。

「あうー」

エヴァンジェリンの家から抜け出したアオイは一直線にシイナの靈力を感じる方へとフワフワ進んでいた。

風が吹く度に身体が揺れるがそれでもフワフワと進んでいく。

「あう?」

空中を進んでいたアオイだったがその動きが止まった。

地上を見つめるアオイの視線の先には何匹が集まってじゃれあっている猫の姿があった。

「あうー」



アオイにとってシイナ達を除けば初めて見る動物である。

興味を持ったものへと寄っていくのは赤ちゃんに共通のことであり、アオイはフワフワと猫が集まる方へと降りて行く。

「ふみゃみゃ!？」

猫や犬というのは霊感が鋭い動物である。

人間には見えない精霊であるアオイの姿を認めた猫達は警戒の声を上げる。

「あうゝ」

だが猫に興味シンシンなアオイはその猫達の様子が気にならないらしく、そのままフワフワと猫達の前に低空で浮かぶ。

「ふーっ!!」

猫に触ろうと手を伸ばすアオイに毛をさか立てる猫達だったが急にその動きが止まった。

一匹の猫がアオイに近づくとアオイの手に前足を重ねる。

「あうゝ」

「ふみゃあゝ」

まるで握手するかのようなアオイと猫の様子に他の猫もアオイに近

づいて顔を擦り付ける。

まるでアオイを仲間と見るような猫達だが、実はこの時アオイは身体から靈魂の属性の靈力を放っていた。

靈魂の属性は生命を癒したり成長させたりする『生命を育む』属性である。

猫達はそのアオイが放つ靈魂の属性の靈力の心地よさにリラックスしたのだ。

そのまましばらく猫達とじゃれ合っていたアオイだったがその場に更に1匹の猫が現れた。

「みゃあ！」

一回り大きな身体のその猫の声にアオイとじゃれ合っていた猫達は動きを止めてアオイから離れ、その猫の下へ走っていく。

どうやらアオイとじゃれ合っていた猫達は子猫であつたらしく、親の猫が迎えにきたようである。

「あう」

そのまま猫達が親猫についていくように去っていくのを寂しそうに見ていたアオイはその光景を見てシイナを探していた事を思い出したように再び上空に浮かび上がるとフワフワとまた移動を開始した。

30分後。

フワフワと空を飛んでいたアオイはようやく麻帆良学園女子中等部の校舎へと辿り着いた。

だがアオイには目の前の建物の中にシイナがいるのは分かって場所までは分からない。

「あうゝ・・・」

迷うようにフワフワと右に左に移動していたアオイだったがやがてすぐ近くの窓が開いていることに気付いた。

窓の中に入れば母親に会えるかもと考えたのかアオイはそのままフワフワと窓から校舎に入って行く。

アオイが入った部屋、それは理事長室だった。

部屋の主である近右衛門は留守にしているらしく、中には誰もいないようである。

「あうゝ」

部屋に入ったもののシイナの姿は見当たらず、泣き出しそうになったアオイだったが机の上に散らばる紙に気付いた。

「あう?」

アオイは興味の赴くままに机の上へとフワフワ移動してお尻から着地した。

その際にインク入れにアオイの足がぶつかってインクがひっくり返り、『平成××年度麻帆良学園貸借対照表』と書かれた紙にインクがぶちまけられるがアオイは全く気付かない。

アオイの目の前にある書類には『新麻帆良防衛体制計画書』と書かれているが、アオイには文字が読めない。

不思議な模様が書かれた紙を興味深そうにみていたアオイだがやがて興味を無くしたようにそこから浮かびあがった。

その拍子に机に置かれていた湯呑みが机から落ちて割れるがアオイはそれに気付いた様子がない。

「あうゝ」

再び空中に浮かんだアオイは周りをキョロキョロと見渡す。

何かを探すようにキョロキョロしていたアオイだったがやがてその視線が一点に固まった。

「あうゝ」

喜びながらフワフワと戸棚に向かって移動するアオイの視線の先には白い液体に満たされた瓶が置いてある。

実はこの時アオイはお腹が減っていた。

普通なら酪乳を飲む筈の時間に家から抜け出し、なおかつここまで浮遊しながら移動してきたアオイはかなり靈力を消費してしまったのだ。

そうして酪乳を求めて哺乳瓶を探すアオイの目に映ったのが戸棚に置かれていた瓶だったのだ。

その瓶には白いミルクに似た液体が入っており、瓶の形も哺乳瓶に似ていた。

白い瓶の前に移動したアオイは手を伸ばすが、いくら小さいとはいってもガラス製で中に液体の入ったその瓶はアオイに持てるようなものではない。

ガシャーーンッ

持とうとしたピンはアオイの手から滑り落ち、そのまま床にぶつかり割れてしまった。

「あうっ・・・ヴェっっ!!!!」

それを見て食事がなくなってしまったと思ったアオイはそのまま泣きだしてしまう。

しばらく泣いていたアオイだったが、しばらくして窓から聞こえてきた声に泣くのを止めた。

「・・・あう?」

聞き覚えのある声につられて窓の傍に移動するアオイの目に映った



「うん、少し用があるのよ。そういえば明日菜今回の試験どうだった？」

「ふっふっふ、今までで一番自信があるわ！自分でも驚くくらいサクサク解けたのよ！」

聞いてほしかった事を聞かれた明日菜はVサインをしつつ胸を張った。

「えゝ明日菜が！！？」

「ヤバ！私もしかして明日菜に抜かれる！？」

「明日菜に一体何があったの！？」

その明日菜の声を聞いたクラスメイトが悲鳴を上げた。

前回の中間試験で見事にバカレンジャーを脱出している明日菜だけにその言葉にはもしかしたらという信憑性がある。

「そう、良かったわね。それじゃあたしは用事があるから・・・」

「うん、勉強見てくれてありがとね。またね」

明日菜との挨拶をそこそこにシイナは教室を飛び出す。

シイナの顔には少し焦りがあった。

（なんで近くにアオイの霊力を感じるの！？）

シイナは最後の試験の時からアオイの霊力を感じ取っていた。

試験中にいる筈がないアオイの霊力を感じた時シイナの驚きは思わず声を上げそうになった程だったのだ。

「どうしたんだ、シイナ？そんなに焦って・・・」

シイナが教室から出たところでシイナを追って教室から出たエヴァンジェリンがシイナに声を掛けた。

試験後のシイナの様子におかしさをエヴァンジェリンは感じていたのだ。

ちなみに現在のエヴァンジェリンは急激に成長した事を怪しまれるのを防ぐ為に幻術によって以前のままの姿である。

「・・・アオイがこの辺りにいるわ」

シイナのその一言にエヴァンジェリンも眉をひそめる。

「なんだと・・・！茶々丸、荷物を頼む！」

「了解しました」

エヴァンジェリンは荷物を茶々丸に託すと返事も待たずにシイナと一緒に駆けだした。

校舎から飛び出したシイナとエヴァンジェリンはアオイの気配がする方へと走る。



「全く！なんでアオイがいるんだ！？そもそもアオイはどうやってここまで来たんだ・・・」

「わからないわ。ただアオイの霊力が少し強くなっているのが気になるわね・・・」

走りながら話すシイナとエヴァンジェリンだがその間にも目はアオイを探し続ける。

「この辺ね・・・」

アオイの気配が強くなった事を感じ取ったシイナが立ち止まる。

二人が視線をあちらこちらにやっているとそこにアオイの声が響いた。

「あう」

シイナが声の方へ振り向くと校舎の窓の一つからアオイが飛び出してくるところだった。

「アオイ！」

アオイは飛び出した勢いのままシイナの胸の中に飛び込み、シイナはアオイをやさしく抱きとめる。

「あう」

ようやく母親を見つける事が出来たアオイは笑顔満面である。

「全く・・・どうしてこんなところにいるのよ」

アオイが特に怪我をしているようでもない事を確認したシイナはホツと息をついた。

「まさか本当にアオイがいるとはな・・・さよはどうしたんだ？」

エヴァンジェリンもアオイの世話をしている筈のさよに悪態をつくもののその顔には安堵が広がっている。

その問題を起こしたアオイは母親の腕に抱かれた安心感からか既にスヤスヤと眠ってしまっていた。

「マスター、シイナさん」

シイナとエヴァンジェリンが眠ってしまったアオイの顔を覗き込んでいると後から追いかけてきた茶々丸が追いついた。

その茶々丸もシイナの腕の中にアオイが抱かれている事を確認するとそれまで纏っていた雰囲気緩和が和らいだ。

「御苦労だったな、茶々丸。全く、いつの間に飛べるようになったんだ、こいつは・・・」

「精霊は歩くよりも先に飛ぶ事を覚えるわ。それにしても生後ひと月で飛ぶなんて思わなかったけど・・・。随分と疲れているみたいだけど一体この子ここに来るまでにどんな冒険をしてきたのでしょうね？寝ながらこんな笑顔をして・・・」

エヴァンジェリンとシイナが苦笑しながら見つめる中、シイナの腕に抱かれたアオイは微笑むような笑顔を浮かべたままスヤスヤと眠っていた。

一方その頃、学園長こと近衛近右衛門はため息をつきながら廊下を歩いていた。

「全く・・・まさかこんなに酷いとはのお・・・」

「ええ、僕もここまで魔法至上主義が蔓延しているとは思いませんでしたよ・・・」

近右衛門の一步後ろを歩きながら高畑も同じくため息をつきつつ応じる。

麻帆良祭からひと月経ち、麻帆良祭で飯塚が起こしたトラブルの処置を終えた近右衛門達は一年後の世界樹の喪失に向けて動き出していた。

世界樹によって維持していた【学園結界】と【認識阻害】の機能のうち、【学園結界】については近右衛門によって何とか目途がついた。

関西呪術協会出身である近右衛門にとって結界術は十八番であり、世界樹を利用したもの程ではないにしろ十分に強力な結界を展開す

る目算がたったのだ。

だが問題は【認識阻害】の方だった。

【認識阻害】が効かないということは今まで【認識阻害】によって麻帆良を関東魔法協会の魔法使い達に都合が良いように運営していた在り方を変えなければならぬということである。

それには一般の生活に溶け込む必要があるのだが、麻帆良の魔法使い達は自分達は魔法が使えるという優越感を持っており、自覚があるにしろ無いにしろそれに抵抗を示したのだ。

元々麻帆良の魔法使いにエリート意識がある事は知っていた近右衛門だったが、自身が苦勞して対策を練っている中で見た一般人の事を理解しようとしぬ魔法使い達の魔法絶対主義に愕然とした。

それと同時に今まで関東魔法協会の長としてその権力を行使する時には気付かなかつたが、いざその仕組みを再構築するにあたって己がいかに魔法使いを中心に麻帆良を支配してきたのかに気付いた近右衛門はいつの間にか魔法使いの考え方に染まっていた自分に驚いた。

（儂は・・・魔法使いと陰陽師を繋ぐ橋になるために魔法を学んだというに・・・何でこうなっていたんじやろうか・・・）

近右衛門が今までにしてきたことは旧世界の勢力に排他的な本国からの余計な干渉を防ぐために関東魔法協会を魔法世界から出来る限り遠ざけることだった。

その甲斐があつて今の麻帆良力をつけて半ば独立した状態を手に入

れたが、勢力を拡大したために今度は関西呪術協会との対立が酷くなってしまうている。

（本末転倒とはこのことじゃな・・・）

シイナによつてこのような状態に追い込まれた近右衛門だったがそれによつて見失ったものに気付いたのだ。

それに気付いてから近右衛門はまず魔法使い達の意識を変えなくてはならないと精力的に動いた。

だが近右衛門はその難しさを日を経る毎に感じていた。

今日も【認識阻害】失効後の魔法先生達の扱いについて魔法先生達と論議していたのだが元々こちらの世界出身であり、正式な博士号や教員免許を持っている明石教授や葛葉刀子、弐集院先生、瀬流彦先生等を例外として多くの魔法先生がその立場の変更に反対し、会議が難航したのである。

「まあ地道にコツコツやっていくしかあるまい・・・」

「・・・そうですね」

先程の会議の様子を思い出しつつ近右衛門と高畑はため息をついた。

「じゃあ僕はこれからテストの採点をしなくてはなりませんので・・・」

「・」

「うむ」

（来年はネギ君が来る予定じゃが・・・ネギ君の扱いも考え直さないとお・・・）

理事長室前の階段で高畑と別れ、来年の事を考えつつ理事長室に入った近右衛門だったが部屋に入った瞬間固まった。

理事長室には紙が散乱し床には様々な破片が転がっていたのだ。

そして近衛門はインクにまみれた書類や床に散らばる破片、液体に見覚えがあった。

「な、明日の会議用の重要書類が！わしのお気に入りのお湯呑みが・・・わしの秘蔵の夜酒用のマツコリがあああああ！！！！」

あまりにも惨状に近右衛門は絶叫した。

その夜、理事長室で泣きながらダメなってしまった書類を書きなおす近右衛門の姿があった。

その後、アオイのしでかした事を知ったシイナがこっそりと理事長室に精霊世界の幻の名酒一「雨雫」を置いていき、それを飲んだ近右衛門はその疲れが吹き飛ぶような美味さに涙を流したとか。

## 第十四話 アオイの大冒険（後書き）

「ミリイと」

「ユメミのお」

「「後書きコーナー！！」」

「何というか・・・今回はご都合主義ここに極まれりって感じね・・・」

「作者は『これが限界だった・・・』とか言ってるよお」

「はあ・・・全く何でしたっけとプロットを作らないんだか・・・」  
「色々試行錯誤しすぎた悪い例よねえ」

「それはそうとシイナったら完全な子持ちの母してるわね・・・」

「一応シイナってえ伯母さんと親戚になるのよねえ・・・」

「あ、なんかすごい納得したわ。でもそれってユメミも・・・」

「あたしはあしばらく結婚する気ないもおん。あたしの恋人はコレで十分よお？」

（酒瓶を掲げるユメミ）

「あんたが言っていると説得力ありすぎて冗談か本気が分からないわね・・・」

「さて、それじゃ今回もこの辺で」

「「またねー！！」」

## 第十五話 老人と気象精霊（前書き）

すみません！

大幅に遅れての投稿です。

言い訳させて頂くとリアルが凄まじく忙しくて作者の精神状態もパニック状態でもとても書ける環境にありませんでした。

加えてネギまをコミックで追う作者は32巻で世界樹がかなり重要な存在と判明し、既に原作が壊れてしまっていることで大幅なプロットの練り直しを迫られました。

これから少し更新が遅れ気味になるかもしれませんが投稿は続けていきますのでよろしく願います。

それではどうぞ～



## 第十五話 老人と気象精霊

ミン、ミン！

森のあちらこちらでセミの鳴き声が響く。

いかにも夏を感じさせる光景だが、森に囲まれているエヴァンジェリンのログハウスの周りでは特にその声逆に暑苦しく思える程鳴り響いている。

しかし外から見ればセミが騒がしく、更にログハウスという構造上暑苦しく思えるエヴァンジェリンの家ではあるが、その中は家中に適度な温度の風が絶えず循環し、一歩家に入れば心地よい風を感じる事が出来るという快適な環境にあった。

幼いアオイの為に冷房霊術を使ってこの環境を作り出しているのはシイナだった。

そして最近ほぼこの家の住人として定着してしまっているシイナは現在・・・

ぶにゅ、ぶにゅ。

「う」

小さなベッドでスヤスヤと眠っているアオイの可愛らしい頬を指先で軽く突きつつその子猫のようにむずがる姿に悶えるという至福の時間を満喫していた。

夏休みに入って時間が出来てからシイナは暇な時間をほぼアオイとの触れ合いに費やしている。

夏休み初日に宿題を即行で片付け、明日菜とまき絵の勉強の面倒やエヴァンジェリンとさよとの魔法の訓練、自身の気象操作の訓練を効率良くこなしながらも少しでも長くアオイと触れようとするその姿はまさに母親そのものであり、シイナが確実に親バカ<sup>アマテル</sup>の血を引いてる証と言えよう。

ちなみにシイナのアオイのための暴走？は夏休み前から始まっており、シイナが勉強の面倒を見ている明日菜とまき絵にも及んでいたりする。

『これで赤点取るようだったら許さない』というオーラ全開で勉強会に臨むシイナの迫力を感じ取ったのか分らないが、明日菜もまき絵も期末テストで学年全体の平均点を超えたのだ。

また前回の中間試験でバカレンジャーの明日菜とまき絵に負けたりもしくは追いつかれそうになった2-Aの面々が危機感を抱いて必死に勉強し、更に実力を隠す必要がなくなったシイナや最後くらい真面目にやろうと本気になったエヴァンジェリンとそれに追従する茶々丸、更に最近成長著しい千雨が一気にトップ集団に躍り出たことで2-Aは期末試験で学年トップになっている。

ただ2-Aでも危機感があったものの修行と木乃香の護衛に時間を割かれ、更に勉強を教えられる友人が周囲にいなかった刹那は今回も赤点をとってしまい、綾瀬夕映<sup>バカラック</sup>、古菲<sup>バカイエロー</sup>、長瀬楓<sup>バカフル</sup>、ザジ・レイニー<sup>バカバー</sup>、デイ<sup>ブル</sup>とともに見事バカホワイトとして新たなバカレンジャーの地位を確立してしまった。

その後泣きながら修行に打ち込み、修行相手の葛葉刀子を圧倒する刹那の姿があったというのがそれは余談である。

それはさておきアオイの反応を堪能していたシイナであったが、その時間はこの家の主が戻ってきた事で打ち破られた。

「今帰ったぞ」

エヴァンジェリンの声によってエヴァンジェリンと茶々丸が帰ってきた事に気付いたシイナはアオイから目を離れた。

傍から見たら親バカ全開であるシイナだが、本人の中ではしっかりと親バカモードと日常モードの切り換えが出来ているのだ。

「おかえり。茶々丸さんのメンテナンス終わったの？」

シイナはアオイが寝ている2階のから階段を降りつつ玄関から入ってくるエヴァンジェリン達に声を掛ける。

「はい。無事に霊力感知システムをインストール出来ました」

「シイナ、ハカセ達が技術の提供に礼を言ってたぞ」

「別にいいのに。茶々丸さんもアオイとさよを普通に見れるようになればこっちも助かるしね」

エヴァンジェリンと茶々丸が今日出かけていたのは超とハカセに茶々丸のバージョンアップとメンテナンスをもらうためだった。

定期的にメンテナンスをしている茶々丸だが、シイナ達との生活が

始まったことで不都合が生じたのだ。

ガイノイドである茶々丸は一般的な機械と同じように霊的な存在を捉えることが出来ない。

神様の措置で人間のように見せることが出来るシイナはともかく、霊体の状態のさよやアオイを感知することができないのだ。

今までは幻想の属性の霊術を少し使えるようになったさよが仲介してアオイの姿を具現化したりしてきたのだが、さよ自身が常に具現化出来る程の霊力は持っていない為にこの方法はさよの負担が大きいい。

そこでシイナは自分の端末機のような精霊世界の霊力に対応した機械の仕組みの技術を超一味に条件付きで提供した。

かの発明王エジソンが晩年オカルトの研究をしていたように科学者にとって霊や魂の研究は一つの夢である。

『科学に魂を売り渡した』と自ら断言する自称火星人とマッドサイエンティストがこれに飛びつかない筈がなく、急ピッチで研究が進められた御蔭で今日めでたくその成果である霊力感知のシステムが茶々丸搭載されることとなったのだ。

本来ならば精霊世界の技術を許可なく地上界に流出することは問題なのだが、ここは『ネギま!』の世界であって『氣象精霊記』の世界ではないからこそシイナの決断だった。

「・・・そうだ。シイナ、頼まれていた事分かったぞ」

ソファに腰を下ろし、さよが運んできた良く冷えた麦茶で喉を潤しながらエヴァンジェリンは思い出したかのようにエヴァンジェリンは声を上げた。

「私はマホネットにログイン出来ないが茶々丸がハッキングに成功して座標を割り出せた。ほら、これだ」

エヴァンジェリンは小さなメモ用紙をシイナに手渡す。

その紙に書かれている事を確認したシイナは軽く笑みを浮かべた。

「そう、ありがとう。助かったわ」

「別に大したことじゃないさ。それで早速行くのか？」

「ええ、今からちょっと行ってくるわ。あたしがいない間アオイをお願いね？」

エヴァンジェリンの問いにぶらっと近所に出かけるかの調子で答えたシイナはそのままソファから立ち上がると玄関へ向かう。

「シイナさんは本気でこれから行く気でしょうか？」

シイナが玄関から外へ出て行くと茶々丸がエヴァンジェリンに問いかけた。

茶々丸に質問されたエヴァンジェリンはどこか呆れた調子である。

「本気だろうな。地球を1分もあれば軽く一周してしまえるシイナならいくらウェールズと言っても近所と変わらんよ」

淡々と答えるエヴァンジェリンの目にはシイナの非常識な行動を既にいつもの事として受け入れてしまふ達観したような趣があった。

今まで散々にシイナの万能っぷりを目の当たりにしてきたせいでエヴァンジェリンの常識感は壊れつつあるようである。

「あつた。ここがメルディアナね」

シイナがエヴァンジェリンの家を出た1分後、シイナの姿はグレートブリテン島ウェールズ地方の上空にあつた。

シイナの眼下には高い塔を持つ大きな建物・・・メルディアナ魔法学院と思われる建物を中心に緑豊かでどこかのどかさを感じられる街並みが広がっている。

シイナがここに来た理由は自身が守らなければいけない対象であるネギ・スプリングフィールドの様子を見る為である。

神様からは『ルルーシュはネギが麻帆良に来た後でネギを襲う』と言われているが、ルルーシュや自分というイレギュラーがいる以上原作にどのような影響が出ているか分からないし、ネギを守るにしてもネギがどんな人物なのか分かっていれば守り方に差が出てくる。

そう考えたシイナは以前からネギの様子を見たかったのだが、シイナはメルディアナ魔法学院の所在地を知らない。

その為にシイナはエヴァにメルディアナの所在地を調べてもらったのだ。

座標さえわかれば氣象精霊として地球を飛び回っていたシイナにとって楽なもので、簡単にここに辿り着ける。

「さて・・・ネギ・スプリングフィールドを探しますか！」

シイナは自分に気合いを入れると見つからないように迷彩結界を展開しつつ地上に降りて行った。

幸いにしてシイナは簡単に目的の人物、ネギを見つける事が出来た。別にシイナが特別な術を使ったとかいうわけではない。

地上に降りている途中に町はずれにある草原で空に向かって白い雷が放たれるのを見つけたシイナがそこに向かうと空に向かって杖を構えるネギの姿があったのだ。

「なんというか・・・秘密？何ソレ？っていう感じね・・・」

その光景を見ていたシイナは呆れていた。

原作でネギは『夜中に図書館に忍びこんで閲覧禁止の魔法書を読ん

で密かに訓練して魔法を習得した』と言っていた。

確かに本人は秘密のつもりで訓練しているのだろう。

その為に町はずれという誰もいない場所で訓練するのはシイナにもわかる。

だがネギは周囲に結界を展開するわけでもなく大規模な魔法の練習をしている。

いくら町はずれとは言っても白昼堂々と草原に暴風や雷の嵐が発生すれば目立たないわけがない。

本人は秘密ネギのつもりでも傍から見たらバレバレである。

（こりゃ・・・原作通り魔法の秘匿とか全く期待出来なそうね・・・  
。しかもあれは・・・）

呆れながら魔法の練習をするネギを見ていたシイナだったがシイナはネギの周囲に何人かの魔法使いが隠れていることに気付いた。

最初はネギを狙っているのかと警戒したシイナだが、見てみると魔法使い達はネギを護衛するように動いていた。

（これは・・・ネギを守っているんでしょうね。でも見守るだけで禁書の魔法を使うネギを注意してない。・・・最悪ね）

魔法使い達の考えを理解したシイナは内心ため息をついた。

護衛がいるのは『英雄の息子』というネギの立場を考えれば理解出



来る。

自分の身を守る為にネギ自身が強くなる事も確かに必要だろう。

問題なのはネギが違反行為をしているのに周囲がそれを叱らないことだ。

子どもは周囲の大人に叱られることで良し悪しの分別や常識を身に付けていく。

シイナも修行時代にはイツミに何度も叱られた。

叱られて反省することで子どもは精神的に成長すると言えるのだ。

だがネギのように周囲に叱ってくれる人物がいないと子どもは自分の考えが常に正しいと錯覚してしまう。

シイナは原作のネギがどこか我儘で自分の考えを他人に押し付けがちな原因が理解出来た気がした。

（これは歪むのも仕方ないでしょうね……。なんとつかあの子自身がある意味被害者か・・・）

麻帆良に来たらなんとかネギの歪みを解消出来るよう手を打つべきかと考えつつシイナはその場を後にした。

次にシイナが向かった先はメルディアナ魔法学院の校舎である。

実はシイナが今回ウェールズに来た理由はネギの様子を見る以外にももう一つあった。

それはネギの故郷の石化した村人の治療である。

その理由としては原作を読んだ時に不憫に感じた事や、精霊医師という医師の一人として助けられるかもしれない人物を放っておけなかったという事もあるが、自分の精霊としての能力がどの程度この世界で通用するか調べたかった事が大きい。

シイナはエヴァに魔法について教わっているとはいってもまだまだ不明な点が多いのだ。

シイナが介入する事で原作の流れに変化が生じる可能性もあるが、既に麻帆良で大きく魔法に関わっているし、多少の問題なら何とか出来ると思う程にはシイナは自らの能力について自信を持っていた。

とはいえ目立ちたくは無いのも事実なのでシイナはこっそりと治療するつもりである。

「迷彩結界を維持したまま校舎の裏手に降りたシイナはそのまま地面に手をついた。

シイナは目を閉じて集中し、大地の属性を通して地中の様子を探る。

シイナの大地の属性能力は辛うじて大地の術が使える程で弱い方だがそれでもどのあたりに大きな隙間・・・地下室があるか位はなんとか感じ取れる。

「見つけた・・・！」

少ししてシイナは校舎の地下の一角に大きな隙間を感じ取った。

地下室の場所の目星をつけたシイナは霊体状態に戻ってさらに迷彩結界を展開しつつ校舎に入る。

感じ取った大きな隙間の感覚を頼りに進むシイナはやがて大きな扉の前に辿り着いた。

「ここみたいだけど・・・鍵がかかってるわね・・・」

目の前の扉には鍵穴が付いており、さらには何か魔法でも扉が開かないような処置がなされている。

「幻想の能力があれば簡単に鍵を解除できるけど・・・仕方ないわね」

シイナが幻想の属性の属性を持っていれば鍵自体に干渉して鍵を外す事も可能だったかもしれないが、あいにくとシイナは幻想の属性を持っていない。

鍵を解除する事を諦めたシイナはその場で空間跳躍術を使ってドア越しに空間転移した。

空間跳躍術は時空の属性を使った言わば瞬間移動である。

空間に穴を開けて離れた場所に移動するこの術は空間に穴を開ける時に鉄筋コンクリートも簡単に押し潰すようなダウンバーストを生させる。

きちんと結界で防護すれば問題ないが、石化した村人の事を考えるとあまり使いたくない術である。

シイナが部屋に入ると部屋の中は真っ暗であった。

「暗いわね・・・」

シイナは光の術を使って光球を作り、辺りを照らす。

「ビンゴ！」

光に照らされた部屋の中には石化した村人達の姿があった。

（慎重に・・・）

シイナは村人達に触れないように慎重に部屋の真ん中に移動する。

「ここでいいわね」

部屋の中央に移動したシイナは傍にあった石像に手を触れた。

「この人って・・・確かスタンさんだっけ？」

シイナが触れた石像は村の長老的存在だったスタンが石化したものだった。

触れた石像が原作の登場人物であったことに若干驚きながらシイナは霊術で石像を分析していく。

「これなら普通に浄化の術で解けるわ・・・」

永久石化の呪いは魂を司る悪魔がかけたものであるが故に人間の霊体に影響するもので、靈魂の靈術を使えば解除が可能だとシイナは確信した。

（でも一人ずつ浄化の術を使って解除するのは面倒ね・・・なら！）

浄化の術は対象を限定したものであり、一人ずつしか浄化できない。

数百人はいる村人を浄化するのはかなり厄介であり、目覚めた村人によってシイナが存在がばれる可能性もある。

そう判断したシイナは自身の靈力を溜め始める。

「浄魔結界！」

シイナが溜まった靈力を解放すると部屋全体に浄化の靈力が満ち溢れた。

シイナが部屋全体を覆う浄化効果を持った結界を展開したのだ。

展開した結界によって石化した村人がどんどん元の姿に戻っていく。

頃合いを見計らったシイナが結界を解除すると部屋には石化は解除されたものの気を失って横たわる村人達の姿が溢れかえる。

「これでいいわね」

石化さえ解除できれば後はいずれ気がついた村人達が自ら動き出す

だろうと判断したシイナは成果を満足気に見渡した。

（さて・・・さっさと退散しますか！）

結構大きな霊力を使用したために流石に魔法使い達が異変に気付くだろうと判断したシイナは長居は無用とばかりに部屋から出ようと考えた。

そうして出口に向かうシイナに後ろからかけられる筈がない声が掛けられる。

「・・・さて！」

驚いたシイナが振り返るとそこにはとんがり帽子を被った老人・・・スタンの姿があった。

スタンは他の村人と違って意識を保っていたのだ。

シイナは浄化の結界の展開に集中するために空間迷彩等を解除していたためにスタンはシイナに気付けたのだろう。

驚くシイナに対してスタンはゆっくりとシイナに近づいていく。

ただ相当な無理をしているらしく、その顔には大量の汗が浮いていた。

「ちょっと！無理しないで！」

シイナはあわてて声を上げるがスタンはそれを目で制す。

スタンを止められない事を悟ったシイナは自らスタンの方へと歩み寄った。

「お主がわしらの石化を解いてくれたんじゃない？」

「ええ、そうなるわね」

真剣な目でシイナを見つめるスタンに対してシイナは頷いた。

「そうか……。村の者を代表して礼を言おう」

言葉とともにスタンは頭を下げた。

「別にいいわよ……。助けたのはあたしのエゴだし。それでお礼を言う為にあたしに声をかけたの？」

照れたようにシイナは指先で頬を掻きながらシイナはスタンに尋ねた。

「それもあるが今の状況が分からなくての。恩人にこう尋ねるのは気が引けるが……。お前さんは何者じゃ？」

鋭い目のままスタンはシイナに尋ねる。

実際に村の惨劇の場にいたスタンからすれば自分達に掛けられた石化が悪魔によるものでおいそれと解けるものではないことが理解できる。

それを解除したシイナの存在が気にかかるのは当然だろう。

シイナはスタンの質問にため息を吐いた。

「ここはメルディアナ魔法学院よ。6年前に石化した村の人達は事件の後ここに運び込まれたの。あたしについては悪いけど何もいないわ。あまり目立ちたくないのよ」

「ふむ・・・」

スタンは一瞬考えこむがすぐに顔を上げた。

「恩人を困らせるのは気が引けるしの。分かった、お前さんの事はワシの胸の中にしまっておくでしょう」

「ごめんなさい、助かるわ」

スタンの返事に安心してシイナだが、上が騒がしくなり始めたことに気付くと顔を引き締めた。

「そろそろ騒がしくなりそうだからあたしはここで失礼させてもらうわね」

「そうか・・・気をつけての」

スタンに別れを言っただけで踵を返したシイナは空間跳躍術で移動しようとするがふと気付いたようにスタンを振り返る。

「そうそう、ネギ君の事なんだけど・・・彼周囲に怒ってくれる人がいないみたいよ？今彼はかなり歪んでしまってるわ」

そう言い残すとシイナは空間転移してその場から消え去った。



「空間転移まで使えるとは。何か精霊に近いような感覚はしておったが一体何者じやろうか……。それにしてもネギが歪んでおるとは……。アイツに顔向けできんわ。……。全く、校長は何をしておったんじゃ？」

後に残されたスタンはシイナの言葉に一人思考に沈んでいたが、部屋の扉の方から人の気配を感じるとその対応をするために思考を切り換える。

「まああやつが何者であろうとワシらが助けられたのは事実じゃな。約束どおりあやつのは事はワシの胸の内にしまっておくでしょう……」

「

そう呟くとスタンはゆっくりと扉の方へ近づいていった。

『千の呪文の男』<sup>サウザンドマスター</sup>の息子が住む村の襲撃事件で石化してしまった村人達が元に戻ったというニュースは裏の世界を駆け巡る。

かつて高位の治療術師達も解く事が出来なかった呪いが解除された事に対する関心は凄まじいものであったが、メルディアナ魔法学院の魔法使い達が部屋に入った時に唯一意識を保っていた老人がは「気付いたら元に戻っていた」と一貫して答え続ける。

老人が何か知っているのではと訝しんだ者もいたが、熟練の魔法使いである老人の記憶を覗ける事は叶わず、老人の頑固さは有名であったこともあって真相が明かされる事はなかった。

こうして気象精霊によって原作という名の道が静かに動き出すのだが、それを知るものは唯世界を見守る神ばかりである。

## 第十五話 老人と気象精霊（後書き）

「恒例のおゝ後書きコーナーあ！今日はあゝあたし、ユメミとおゝ」

「私、フェイミン・マルカ・フーが務めさせていただきますわ」

「フェイちゃん、この作者いい加減すぎるよねえゝ？」

「そうですね。こうなる事を予測して普段から書きためていれば  
よろしいでございましょうに……」

「無計画過ぎるわよゝ」

「まあお馬鹿な作者は放っておきましょう。しかしなんだかシイナ  
さんが壊れているように感じられるのですが……」

「えゝ？シイナは元からああいう子よあ？あの子真面目だけどお天  
然なのよあ。ああ見えてえ結構熱血だしねえ」

「はあ……。そういえばシイナさんは支局長の親族でいらつしゃ  
るみたいですが？」

「そうよあ。シイナのお祖母ちゃんがあ、あたしのおお祖母ちゃん  
の妹なんだよあ」

「ユメミさんとシイナさんがはどこですか。あまり似てないですわ  
ね」

「えゝ、似てるよあゝ？シイナもお酒好きだしねえゝ」

「そ、そうでございますか……」（何でございましょう？何か嫌  
な予感が……）

「というわけでえゝ飲もう？」

「いえ、ユメミさん、私はこれから用事が……。ああ、引つ張ら  
ないで下さいまし！」

「ダゝメゝ？今日はフェイちゃん逃がさないよあゝ」

「あゝゝゝゝ！！！！」

### 間話3 各々の思惑（前書き）

すみません。

また投稿が遅れました。

リアルが忙しく書く時間があまり取れません・・・。

これから更新がかなり不定期になるかもしれません。

あと今回と次回は間話になります。

少し退屈かもしれませんがそれでもよろしければお読みください。

それではどうぞ～

### 間話3 各々の思惑

SIDE   メルディアナ魔法学院校長

ネギの卒業を迎える時期に入って急に身の回りが慌ただしくなった。

何が起きているのか分からぬが急に起こる変化に対して儂らは戸惑うばかりじゃ。

まずネギの卒業を控えた7月に入ってすぐに儂の友人である近右衛門から連絡・・・というよりも要請じゃな・・・があった。

本来ならネギは卒業後の修行として近右衛門がおる日本の麻帆良で教師をする筈じゃった。

じゃが近右衛門がいうには6月に麻帆良で大きな事件があったらしくネギを教師として迎え入れるのが難しいという事じゃ。

何でもその事件で麻帆良の世界樹に問題が起こり、麻帆良はそれまで【認識阻害】の魔法によって治外法権のような状態にあったじゃがそれが維持できなくなっただけらしい。

結果としてメルディアナのように隠れ里にあるわけではない麻帆良は一般社会との共存を余議なくされ、その一般社会の法律の為にネギを教師として扱うのは問題があるということじゃ。

しかしこちらとしてもこの時期に至っての計画の変更は難しいと言わざるをえん。

元々ネギを麻帆良に送るのはネギの身の安全の為とネギに『英雄』の子としてやっていける為の力をつけさせる為じゃ。

このウェールズは本国とのゲートが近い御蔭でメガロセンブリアの元老院に影響を受け過ぎる。

こちらでも元老院の中にネギを利用しようとする勢力があるのは気付いておるし、ネギを元老院の操り人形とするわけにはいかん。

その点ゲートが廃棄され、なおかつ本国から半独立しておる麻帆良はそれを防ぐ意味で最適じゃ。

それにネギの身に降りかかるであろう災いを防ぐ力をネギが付けるための要素も整っておるしの。

儂と近右衛門の話し合いという名の駆け引きは長く続いたが最終的には『日本の麻帆良学園で働くこと』をネギの課題とする事で落ちついたわい。

じゃがその為にネギには災難というか同情するような事になったんじゃないが・・・傍から見ると分には面白いと言わざるをえんのう。

ネギも最初は戸惑ったようじゃがそれが『立派な魔法使い』になる為の試練だと受け入れたようじゃ。

まあ後の事はネカネ君とアーニヤに任せるとしよう。

本人達のノリノリじゃったしな。

そして最近起きた事件としても一つ。

このメルディアナ魔法学院に収容しておった5年前の『悪魔襲撃事件』の被害者達の【永久石化】が解けた事じゃ。

つい先日地下で大きな力の波動が起こり、その発生源と思われる石像化した村人を収容しておった部屋に向かった儂らが見たものは呪いが解けて生身で床に横たわる村人達の姿じゃった。

その後は大変じゃった。

村人達の呪いが解けたのは確かに喜ばしいことじゃ。

普段は気丈に振るまいながらも常に石化した両親や村人達の事を気にかけておったアーニヤやネカネ君は両親の姿を見て泣いておったしう。

じゃが問題となったのは一体何故、【永久石化】が解けたのかということじゃ。

【永久石化】はその名の通り術者が死んでも呪いは解けず、解くには術式を解除するしかない呪文。

その解除にしても悪魔によって掛けられた【永久石化】は名だたる治癒術者達をしても解呪できなかったシロモノじゃ。

『一体何者が呪いを解いたのか』に注目が集まるのは当然のことじやな。

儂らが部屋に入った時意識があつた唯一の村人、儂の知人でもある

スタンは何か知っておるようじゃったが何も話そうとせん。

儂もスタンの頑固さは知っておるから無理に聞き出すことは出来んし……結局スタンが話さん限り真相は謎のままじゃろう。

まあ石化が解けた事自体は目出度い事じゃし、それ自体には問題はないのじゃが、何故儂がその件で苦勞しているかと言えば……

「校長！今日こそ返事を貰いに来たぞ！」

いきなり校長室の扉が開いたかと思えば入ってきたのはとんがり帽子を被ったローブ姿の老人、儂の古い知人であるスタンじゃった。

このスタンこそが今の儂の悩みのタネじゃ。

「スタン……いい加減にしてくれんか？」

これまでに何度言ったか分からん言葉が思わず儂の口から洩れる。

じゃがスタンはそれを一向に気にせん。

「ふん！お主が頷くまで儂は諦めんぞ！」

そのまま校長室に置いてあるソファに腰をおろしてしまうスタンに儂はため息を吐いた。

「さつさとネギの卒業を取り消さんか！」

ワシよりも年をとっておるとは思えん大声でスタンが怒鳴る。



「スタン・・・既にネギは卒業証書を手にしておる。それは無理じや」

村人達の呪いが解けた後ネギとアーニヤは卒業を迎えた。

卒業式を両親の出席のもとで行えたアーニヤは涙ぐんだりしておったのじゃが・・・卒業式の後スタンが儂に『ネギの卒業を取り消せ』と怒鳴りこんできたのじゃ。

その時は何とか退けたが、それ以来スタンは村人達が村の復興の為に村に帰った後もここに残って連日儂の部屋に詰めかけておる。

「卒業は卒業する資格を持った者がするものじゃろうが！あいつにはまだ早いわい！」

「そうはいつでもネギは卒業するだけの能力を持っておる」

「確かに能力だけは持っておるな。じゃがネギは卒業に足るだけの心構えが出来ておらん！それを飛び級の上で主席で卒業させるなどお主何を考えておるんじゃ！」

「・・・」

吠えるように怒鳴るスタンの言葉は正論であるだけに反論は出来ん。

「確かにナギと違って勉強は出来るかもしれないが、あやつには一般常識や対人関係というものが完全に欠如しておる！魔法の勉強を教えるだけが学校ではなかるう！」

何も言いかえせん儂に対してスタンはなお続ける。

「おまけにあの歪みようはなんじゃ！？あれは完全にナギを崇拜しておる完全な父親依存症じゃぞ！？しかも自分の母親の事を口にもせんとは！あやつは卒業以前に人として大切な土台が出来ておらん！飛び級させてまで卒業させる意味はなかるうが！・・・お主は一体今まで何をしておったんじゃ！？」

言い切ったスタンは儂を睨みつける。

確かにナギを良く知っておるスタンからしてみればネギの現状に怒りはするじゃろうな。

儂としてもネギに対して不安は持っておる。

じゃがそれでももう色々と限界なのじゃ。

ネギがメルディアナに来てからというものこの本国からの干渉が続いておる。

ここ数年『英雄の息子は本国で教育する』等と言ってくる本国からの干渉に儂はかかりつきりじゃった。

無論ネギについては気にしておったがいかんせん儂もそこまでネギに注意しているわけにもいかん。

校長としての仕事もあつた儂はネギの世話をネカネ君と先生達に任せておったんじゃが・・・。

ネカネ君も両親を【永久石化】されておる被害者だけに唯一に身内であるネギに厳しく当たれなかったようじゃし、魔法学校の先生達

はナギの息子に対する意識が強かった。

おまけに儂もネギに降りかかる災いから身を守る力を付けさせる事ばかり考えておった結果が今のネギじゃ。

スタンの言い分は正論じゃが、正直にもう余裕がないのもまた事実。

去年から本国からの圧力が年々強まっておる。

これ以上ここではネギを守ることは出来んのじゃ。

儂は今までスタンに話していなかった裏の事情を説明した。

後から思えば儂も疲れていたのかもしれない。

スタンの性格を考えればその後の言葉は理解できるじゃろうに……。

儂の話を黙って聞いておったスタンは儂の話が終わると同時に立ちあがった。

「そうか、分かったわい。それならばネギが修行に出るまでワシが徹底的にネギを叩き直そう！子どもが誤った方向に進みそうな時は叱ってやるのが大人の仕事じゃ！このままじゃあのバカに顔向け出来んわ！」

宣言するかのように言い切ったスタンに対して儂は何も言えなかった。

ナギも事を持ち出されれば儂は何も言う事は出来んし、儂はスタン

の一度決めた事を放り出さない頑固さは熟知しておる。

こうなったスタンは止めるだけ無駄じゃ。

「早速ネギに話しにいかねばの。邪魔したな」

儂の沈黙を了承ととつたらしいスタンはそのまま部屋から出て行った。

スタンのやろうとしておる事は間違っておらんし、確かにネギのようになるじゃろう。

じゃがスタンの厳しさを知っておる儂はネギに対して同情せずにはおられなかった。

課題のこともあるし・・・ネギは前途多難じゃな。

SIDE フェイト・アーウェルンクス

「ウェールズの村人に掛っていた石化の呪いが解けた？」

僕は最近計画が間近になってきている『完全なる世界』の計画遂行のために魔法世界中を飛び回っている。

前の大戦でナギ・スプリングフィールドを筆頭とした『紅き翼』に

よって人材が減少したために人手が足りないからどうしても僕が動く必要が多いからだ。

だから今の僕にはじっとしている時間も疎かにはできない。

今も僕は『完全なる世界』のアジトで珈琲を楽しむ傍らで旧世界にいるメンバーからの報告書を読んでいる。

だけどその定期報告の中に気になる報告があった。

どうやらウェールズのメルディアナ魔法学院で5年前に石化された村人達の呪いが解けたらしい。

5年前、ナギ・スプリングフィールドの息子が住んでいた魔法使いの村を多数の魔族が襲撃した事件。

あれはメガロセンブリアの元老院の暴走によるものだ。

自身の欲から僕達『完全なる世界』に情報を提供していた連中・・・こちらとしても利用していただけの存在だったけど、ああいった小者は自分達の脅威となる存在を排除するためだったら暴走するから始末に負えない。

その結果がナギ・スプリングフィールドの息子を含めた数人以外の村人が【永久石化】されるに至った訳だ。

【永久石化】は元となる者を倒しても効果は消えない。

それが解けたとなれば誰かが解呪したという線が濃厚だね。

ふむ。

先日旧世界の日本の麻帆良学園にある世界樹に異変が起きたという報告もあった。

何かが旧世界で起きているのは間違いなさそうだね。

特に麻帆良の世界樹は僕達の計画の要だ。

あれに異変があつたら計画の変更も考えないと・・・。

調達の誰かに任せても良いけど・・・僕が動いた方がよさそうだね。

と言つても僕もまだ魔法世界でやらなければいけないことが多い。

今の案件が一段落したら行ってみよう。

もしかしたら面白い事が起こるかもしれないしね。

とりあえず今は珈琲の香りを楽しむ事としようか。

S I D E    超鈴音

「超さん！すごいですよ！この理論！」

研究室にハカセの興奮した声が響くヨ。

同じ科学者の端くれとしてその気持ちは十分分かるけどネ。

「うむ。まさか魔力と霊力の元が同じだという私達の仮説が正しかったとは思わなかったヨ！」

ハカセに応える私の声が弾んでことが自分でもよくわかるヨ。

それほど木乃花サンから譲られたこの機械は凄かったネ。

霊力を測定する装置。

私も科学者の夢である霊の研究について興味は持っていたもののまさか霊力と魔力が似たものとは思わなかったヨ。

特にハカセは霊が科学で解明出来る事を知って感激してるネ。

昔超常現象をプラズマとか言っていた人がいたガ・・・霊がエネルギーであるという意味では間違っていないかった力。

この機械をくれた木乃花椎奈。

転校してきた時は何も感じなかったが・・・まさか異世界の精霊と八向この世界の精霊の中に神や伝説の存在として人間界に伝わっている精霊もいるみたいだけど、木乃花サンも恐らくそれに含まれるネ。

エヴァンジェリンサンを通して紹介された時は驚いたヨ。

いきなり霊力についての講釈を始めた時は何の目的か分からなかった

ガ・・・科学者のサガでその内容にいつの間にかひきこまれたネ。

ついでにカシオペアを起動させてしっかりと能力を保証した上での世界樹の取引。

見事な交渉術と言うしかないネ。

しかも私が見るに木乃花サンはまだまだカードを隠してるヨ。

何で私の計画を知っているのか不思議だけど、私に損はないし正直木乃花サンを敵に回すのが怖かったネ。

麻帆良祭最終日の戦い。

エヴァンジェリンさんが言うにはあれで木乃花さんは1%も実力を出してないらしい。

敵対した事を考えると身体が震えるヨ。

あの時直感に従って取引に応じてて正解ネ。

その結果今こうしてこの機械があるヨ。

『他人に許可なく技術を譲渡しない』という条件はあるけどそれでも霊力を感知する機械は魅力的ネ。

「どうやら霊力を魔法使いが取り込むものが魔力みたいですね」

「うむ・・・言わば植物と似ているヨ」



ハカセとこの機械を調べた結果、魔力と霊力が根本的に同じ事が分かったネ。

これなら魔力を感知する機械を応用すれば霊力も感知出来るヨ。

簡単に考えたら動物が植物から出される酸素を利用するように魔法は霊的存在から出される霊力を利用しているネ。

簡単な事だけどこれが分かっただけでも凄い進歩だヨ。

これで計画の時に戦力を向上させることが出来るネ。

「ハカセ、早速霊力感知のシステムを組み上げるヨ！」

さあ、木乃花サンの同盟相手としてしっかりと頼まれてた事をこなすネ。

与えられてるだけというのは最悪の状態でしかないからネ。

S I D E     ? ? ?

チツクシヨー！

またフラレた！！

テオドラちゃんめ！小さい時はあんなに『お兄ちゃん』って俺に  
懐いてたのに！！

『お主も冗談好きじゃな』って全く相手にしないなんて・・・そり  
ゃないだろ！

あの筋肉ダルマの事を顔を赤くしながら見ているくせに！

アリカたんにもアタックしてしてたのに結局あのバカに取られたし・  
・・。

エヴァちゃんもあのバカに一直線だ。

俺だってイケメンで英雄なのに一体何故だーーーー！！！？？

俺は転生オリ主じゃなかったのか？

転生オリ主はハーレムでウハウハになるのがお決まりなのに~~~~  
！！

これが原作の修正力とかいうヤツなのか！？

許さんぞあのアロハな神め！

「兄ちゃん、荒れてるなあ・・・」

テオドラちゃんにフラれた腹いせに酒場でヤケ酒していたらダンディな酒場のマスターがにこやかに笑いながら目の前にジョッキを置いた。

「ま、若い時は失恋のいくつかなんてしとくもんだ。これはオゴリさ」

うーん、かつこいいぜマスター。

そうか、ここはバーボンハウスだな？

実は俺は500歳を軽く超えてんだけどここはありがたく頂戴しよう。

「ありがとよ、マスター。お礼にここは『英雄』ルルーシュお気に入りの店って紹介しとくぜ！」

「ほう、ありがとよ。冗談でもありがたい」

俺の宣言にマスターは慌てるでもなく笑いながら頷いた。

うーん、シビレるぜマスター。

そのままジョッキを傾けていた俺だったがマスターが思い出したように口を開いた。

「そついえば英雄って言えば、あのサウザンドマスターの息子がもうすぐ旧世界の学校を卒業するらしいな」

その言葉に俺の動きが止まった。

今マスターは何て言った？

あのバカの息子が卒業するって？

あのバカの息子といえば『ネギま』の主人公、ネギのことだ。

いつのまにか原作開始の時期になってたのか・・・。

それが分かった瞬間俺の桃色の頭脳がフル回転する。

ふふふ、そうか答えは分かったよ、ワトソン君。

ネギと言えばラッキースケベなイケメン最強スペック主人公。

これからあの薬味坊主は女の園、麻帆良学園女子中等部でムフフな展開になるわけだ。

あの可愛かったアスナちゃんも大和撫子な刹那ちゃんもあのけしからん身体をした女の子達の大半とのお付き合い。

うん、気に入らん。

俺の中で瞬時に『薬味坊主を潰して俺がその位置に納まる』というプランが出来上がる。

よし！そうなれば善は急げだ！

待ってるよ俺の未来の嫁達よ！

今俺が薬味の魔の手から助けにいくぞ！

そうして俺は酒場を飛び出した。

後ろから『食い逃げだ〜！』という声が聞こえた気がするがそれは気のせいだ。



### 間話3 各々の思惑（後書き）

「恒例の後書きコーナー！今回の担当はミリイとー！」

「ユナですう！！」

「全く、作者つたら自分で4日更新って決めたならしっかりやればいいのに」

「最近お付き合いでの用事が多いそうですう」

「元々この小説はお酒飲みながら書いてるんだから単なる言い訳よ」

「ミリイさん厳しいですねえ」

「最近シイナがいなくて失敗が多いのよ」

「なんか色々動き出したわね」

「最後に人ってあまり会いたくないですう・・・」

「正直言つてあたしもゴメンね。それに別の心配もあるし・・・」

「心配ってなんですかあ？」

「シイナがね・・・」

「確かにシイナさん綺麗ですからあの人に付きまとわれそうですう」

「そうじゃないんだけどね・・・」

「？」

「それはともかく折角話が動きだしたんだし作者には頑張っ欲しいわ」

「そうですねえ」

「それじゃ・・・」

「「またね」（ですう）」」

## 番外1 その頃の東亜支局の面々（前書き）

申し訳ありません。

投稿が遅れに遅れました。

ここしばらく正 丸が手放せない身体だった事に加えて最初に書きあげた話の出来に納得出来ず一から書き直すハメに。

今回ネギまのキャラは一切登場しません。

ネギまファンの方にはつまらないかもしれませんが重要なファクタ  
ーですので・・・。

それではどうぞー



## 番外1 その頃の東亜支局の面々

地球ではあらゆる自然災害が日夜起きている。

火山の噴火、日照り、地震、台風、大雨、津波 e t c . . . 地上に住む者には天災と表現されるこれらの災害は実は、地球の環境や生態系を管理するために、気象精霊達によってある時は抑えられ、またある時はもたらされているのだ。

だがこれらの災害に関わっているのは気象精霊だけではない。

気象精霊の活動を快く思わず気象精霊の妨害をする者や、それぞれの組織の目的為に気象操作に介入する精霊が少なからずおり、その精霊達によって起こされる災害もまた少なからず存在する。

それらの気象ゲリラに対して気象精霊達はその豊富な霊力と気象操作で鍛えた技術等を駆使して立ち向かい、地球上では日々気象精霊達と気象ゲリラ達の戦いが繰り広げられているのだ。

ちなみにその戦いの余波によってまた新たな災害が発生し、地上では洒落にならない被害が出ていたりするのだがそれはご愛嬌である。

そして弓状列島と呼ばれる地上の島国の上空では今まさにその気象精霊と気象ゲリラの戦いが繰り広げられていた。

「吹っ飛びやがれ」の三・六×一〇の一六乗ジュール!!」

ずつとおお~~~~ん……

辺り一面に響き渡るような爆発音が響く。

「隊長殿！今の攻撃で5人がやられました！ダメですつ、戦線が維持できません！」

「え〜いつ！たった2人相手に何をしておるのだ！？」

この場で戦っている勢力の一つ、光で身体を隠している勢力を指揮するピカピカに剃り上げた頭と長い下睫毛が特徴的な精霊が部下の報告に怒鳴り声を上げる。

この何故か上半身裸でその筋骨隆々な身体を誇示している精霊、公式名をフェルデゴール・タウミエル・ゼガリア十四世ジュニアといい、天上界近衛軍第二特務部隊……通称気象変動誘発局の隊長である。

その見た目からして暑苦しい筋肉精霊に迫られた部下は身を縮めるがそこに助けが入った。

「まあまあ隊長殿、ここ連日殆どの隊員が有給申請しているおかげで今日私達が連れてきた隊員は普段裏方の事務をしている人員ですから仕方がないのではないのでしょうか？」

穏やかな声で宥めるのは浅黒い肌に長い銀の髪、そして額にある黄色い第三の目が特徴的な精霊である。

「仕方ないで済むものではなかるうが！アッシュ君、何とかしてきたまえ！」

「いえ、あの方をなんとかするなんて無理ですよ。ここ数力月の被害を忘れたんですか？」

無理難題を自分に押し付けてくる上司にため息を吐きつつ、気象変動誘発局の特務精霊長であるアシュレイ・ベシュテル・メルキオーネは首を振る。

「シイナさんがいなくなつてやりやすくなつたかと思つたのですけどね」

再び顔を戻したアシュレイの視線の先では相変わらず2人の精霊が50人以上いる光を纏つた精霊相手に大暴れしていた。

「うおりゃゝ、そら、そら、どうした！もつとあたいを楽しませろゝ！……！」

身体に電光を纏い、辺りに妖魔光と雷撃をまき散らしながらショートヘアの金髪とソバカス顔が特徴的な眼鏡をかけた精霊、キャサリン・レヴィアタン・ペイレネ・コブライナが光を纏つた精霊に襲いかかる。

「くそ、アイツを止め……ぶげらっ！？」

キャサリンは何かを叫ぼうとした精霊にそのまま回し蹴りを決めて一撃で昏倒させた。

「どいつもこいつも齒応えないな！もつとあたいを満足させろ……！」

そのままキャサリンは怒鳴りながら次の標的に向けて突撃していく。

キャサリンの背後がガラ空きになるのだが・・・

「成敗の四・三×一〇の一五ジュールですね！」

ずううう~~~~ん・・・

その後ろでキャサリンを背後から攻撃しようとしていた敵を透明な2枚翅と頭から生えた触角が特徴的な精霊、ノーラ・マギエル・デアアマヌテが妖魔光で吹き飛ばした。

キャサリンが暴れまわり、その後ろでノーラがそれをフォローする。

たった2人のしかも素手で戦う気象精霊相手に50人以上いる筈の武器を持った気象ゲリラ達は完全に抑え込まれていた。

「くっそおお〜！こうなったらオレ自らあの暴力女をぶちのめしてくれるわ！」

「隊長殿！？お待ち下さい、ここは撤退を！？」

部下達が蹴散らされていく様子に業を煮やした筋肉精霊がアシユレイの制止を振り切って動きだした。

キャサリンに向かって飛ぶ筋肉精霊の手にはいつの間にかモーニングスターが握られている。

「この暴力女め！オレが相手だ〜！！」

「へっ、お前があたいの相手をしてくれるってんのかい、この筋肉ハゲおやぢ？」

空中でキャサリンと筋肉精霊が睨み合うが、キャサリンの一言で筋肉精霊が逆上した。

「誰がハゲだ！？下賤な輩め、これはスキンヘッドというのだ！」

怒声を上げつつ筋肉精霊はモーニングスターを頭上で振り回しながらキャサリンに突撃する。

「喰らえい！！！」

「遅え！」

筋肉精霊がモーニングスターを振り下ろすが、キャサリンはそれを身を翻して避けると筋肉精霊の頭にローリングソバットを決める。

「ふぬっ！？」

その衝撃で思わず筋肉精霊がモーニングスターを手放し、モーニングスターがあらぬ方向へと飛んでいくが、筋肉精霊自身は大したダメージを負った様子はなかった。

「ぐぬおおー！よくもこのオレの高貴な顔を蹴ってくれたな、この暴力女が！」

キャサリンを睨みつけつつ筋肉精霊は虚空に穴を開け、その中から今度はウォーハンマーを取り出した。

「あんたも大概タフだよな・・・まあ、あたいとしちゃ楽しめるからいいけど」

キャサリンはその様子を見て呆れながら再び身構える。

だが次に筋肉精霊から発せられた言葉にキャサリンに雰囲気豹変した。

「ふん。貴様などあのオレに恐れをなして逃げたあの忌々しい狸女と遊んでおればいいものを！」

「あ？」

それまでキャサリンが終始浮かべていた笑みが消え、目つきが鋭くなる。

「お前今何て言った？」

聞いたものが震えあがるような迫力のこもった言葉をキャサリンが発するがそこは空気の読めない事には定評がある筋肉精霊である。

キャサリンの変化に気付くことなく胸を張った。

「暴力女、耳が遠くなったのか？オレは貴様なぞシイナとかいうオレを恐れて閉じこもっている忌々しい狸女と遊んでおる方がお似合いだと言ったのだ！」

ぶちっ

キャサリンは自分の中で何かが切れる音を聞いた。

「もう少し遊ぶつもりだったんだけど気が変わった。一気にケリをつけてやる」

「あわわ、ここは危ないですね〜！」

キャサリンの身に纏う雰囲気豹変した事に気付いたノーラがキャサリンの傍から避難する。

「一球入魂の三・三×一〇の一六乗ジュール。警告の四・七×一〇の一七乗ジュール。脳天必中の五・一×一〇の一六乗ジュール。邪心改正の二・三×一〇の一七乗ジュール。見敵抹殺の六・八×一〇の一六乗ジュール・・・」

次の瞬間キャサリンの手から霊光弾が次々と筋肉精霊に向けて放たれた。

「のわ〜〜〜〜〜!!!!」

電撃も混じった集中砲火を受けた筋肉精霊は断末魔の叫び声をあげる。

「これで終わりだ！二度と顔を見せるな」の三・三×一〇の二〇乗ジュール!!!!」

キャサリンは集中砲火を受けて黒コゲになった筋肉精霊に接近してその身体に掌を当てると至近距離で霊光弾のエネルギーを炸裂させた。

そのエネルギーをモロに受けた筋肉精霊が双曲線を描いて飛んでい

く。

しばらくすれば地球上の新しい霊工衛星が出来上がることだろう。

「さて、お前もやるか？」

筋肉精霊が宇宙空間に向かって飛んでいくのを見ていたキャサリンがアシュレイの方を振り返るとアシュレイは首をすくめた。

「まさか。残っているのは私だけですし、ここは退散させて頂きま  
すよ」

その宣言通りアシュレイはその場で空間跳躍して姿を消した。

キャサリン達の周囲に転がっていた筈の氣象変動誘発局のメンバーもアシュレイが転送したのかいつの間にか姿を消している。

「シイナ・・・か」

構えを解いてポツリと呟いたキャサリンの様子をノーラは心配そうに見守る。

（キャサリンさま、やっぱりシイナさんがいなくなって寂しそうですのね・・・）

キャサリンは東亜支局のベテランの水の高級精霊、特級災害師（自称）にして挑発検定三段（自称）の”災害オタク”である。

東亜支局においてキャサリンとシイナは天敵といえる間柄であった。



元はシイナが東亜支局に配属された時にシイナの指導役を務めたのがキャサリンだった。

面倒見が良い所があるキャサリンは向上心旺盛なシイナを良く指導し、シイナも実力者であるキャサリンの事を尊敬してその教えをしっかりと吸収する良い師弟関係だったのだ。

だがシイナが成長して現場を任されるようになると状況は一変する。

シイナは今でこそ気象精霊として前線で活動しているが、元々シイナは気象参謀であり、そのやり方には特徴があった。

気象参謀としてのシイナが持っている分析能力はユメミ程は高くはないし、情報収集能力にしてもライチ程高くはない。

また気象参謀としての計画立案能力を見ても、ユメミやフェイミン程の切れ味をシイナは持っていない。

そんなシイナだがユメミとフェイミンが東亜支局に来た事で気象参謀が充実して、今度は足りなくなった現場指揮官である主任精霊にシイナが昇格するまではシイナは間違いなく東亜支局でもトップクラスの気象参謀として名を馳せていた。

ユメミやフェイミンが立案する作戦のように効率的な作戦ではなく何かあった時にすぐ動ける事を考慮した柔軟性のある作戦を立てつつ広い視野を持って状況を認識し、あらかじめ幾つもの手を打って周囲を利用する。

そういった性質を持つ気象参謀であったシイナは時としてキャサリンの災害を利用する事があった。

そんな事が度々あった事から天の邪鬼な処があるキャサリンは師匠である自分の災害が弟子であるシイナに利用されたことでシイナに競争心を持つ。

それ以来キャサリンとシイナの氣象操作での戦いは一種の名物だった。

だがシイナがいなくなった事で今まで張り合っていた相手を失ったキャサリンはその鬱憤を氣象ゲリラ相手に晴らしていたのだ。

だがいくら暴れまわっても中々キャサリンの心は晴れなかった。

「くそ、つまらねえ」

頭を掻きつつキャサリンはぼやくがその時異変が起きた。

「じゃあ丁度良かった」

どこからか言葉が響くとともにキャサリンの目の前にアロハシャツにサングラスといったいでたちの男が現れたのだ。

「な、何だお前は!？」

キャサリンは慌てるが、男はそのままキャサリンの手を掴むとキャサリンと共に姿を消してしまった。

後に残されたノーラは突然の出来事にしばらく呆然としていたがしばらくして我にかえる。

「た、大変ですね~~~~!!? キヤサリさまが誘拐されてしまいましたのね~~~~!??」

## 《太平洋上空》

成層圏に浮かぶ大きな雲。

その淵に女の精霊が3人腰を下ろしていた。

それぞれ特徴のある服を身に纏っており、北米先住民族風に衣装を着た方は水の上級精霊ユメミ・ナィアス・スチヒミ・ウガイアといい、神道の巫女風の衣装を着ている方は風の上級精霊ミリィ・オレアノ・ヤクモ、中華風に服を着ている方は水の上級精霊フェイミン・マルカ・フーという。

ともに気象室に所属する上級精霊である。

そのミリィ達は何をしているかと言えば見学だ。

『モミジ姉さん、そっちに雲が少し流れているので戻して! クミンちゃん上昇気流の操作をお願いします!』

ミリィとユメミの前では今まで下級精霊としてミリィ達を手伝っていた緑色のショートヘアの髪をした精霊、コズエ・ミモリが気象操作の指揮を執っていた。

「コズエさん・・・凄いですわね」

「うん。前から凄いとは思っていたけどね・・・」

「なんか凄く手慣れているよねえ」

フェイミンがポツリと呟いた言葉に思わずミリィとユメミも頷く。

シナが氣象室を出て行った次の日、新しく東亜支局に3人の上級精霊が加わっていた。

風の上級精霊、コズエ・ネムセル・ミモリ。

水の上級精霊、カスミ・ミステル・アサギリ。

水の上級精霊、モミジ・アップサエル・トヨクモ。

今まで現場でミリィ達を手伝っていた下級精霊三人娘が上級精霊として東亜支局に加わったのである。

コズエ達の事情を知っていた東亜支局の事務方の若旦那こと書法精霊マハル・ドルイド・ドナンからコズエ達が実は上級精霊の資格を持っており、今まで称号を返上していたという話を聞かされた時、ミリィ達は思わず呆然としてしまった。

上級精霊というのは初級文官資格を持っている必要があり、その試験合格率なんと3%というとてもなく難しく、合格すればエリート<sup>①</sup>の道が約束されている程の資格である。

そんな資格を放り出している精霊がまさか身近いるとは夢にも思っていない。

以前から下級精霊とは思えないような的確な分析と気象操作を行い、更に賭けと称した展開予測について見事に状況を予測してたりするコズ工達は気象精霊として一流の実力を違わずに持っていた。

さらに長年現場で気象を支えてきただけに三人娘は経験も豊富である。

「ていうかあゝあたし達より有能かもしれないねえ」

呑気にそんな台詞までもらすユメミだったがフェイミンはため息をつく。

「ユメミさん、それ以上は言わない方がよろしいかと。あそこの方が余計に暗くなりますわ」

フェイミンがちらりと向けた視線の先には・・・カオスがあつた。

「ライチ、いー加減にその辺にしとくのニャ」

「ヒック、ファム、ほつといてくれなのだ。どーせボクはもうすぐ下級精霊に戻る落ちこぼれなのだ」

気象室東亜支局の宴会コンビこと丸い眼鏡が特徴的な火の上級天使  
ライチ・ニユート・チャンと猫の姿をした風の上級精霊 ファム・ムミアー・ザップである。

雲の上で体育座りしながらホットチョコレートの瓶をもってらっぱ

飲みするライチ。

その周囲には空になったホットチョコレートの瓶が20本近く転がっている。

見ているだけで胸やけしそうな光景である。

猫神族であり見た目が子猫のファムがそのライチを二本足で立って肩に手を置きながら宥めており、傍から見るとカオスとしか表現のしようのない光景だった。

ライチとファムは正規の上級精霊ではなく、氣象精霊としての実績が認められて下級精霊から昇格した叩き上げ組である。

しかし最近度重なる失敗でライチだけが上級天使に降格されていた。それも本来なら下級精霊に降格のところを氣象室の精霊不足によりそれが緩和されたという裏事情がある。

「モミジもカスミもコズエも皆初級文官資格を持っているし優秀なのだ。ボクなんかお払い箱なのだ！」

どうやらコズエ達三人娘が加わったことで自分は用済みになったと思ひ込んでいるらしい。

実のところ三人娘はこれまで弓状列島の広範囲をカバーしていたシイナの穴埋めをしているだけでライチとファムの担当区域である亜熱帯地域までカバーできず、ライチが用済みになる理由はなかったりする。

というよりも東亜支局は人材不足を人員の能力の高さでカバーしてきた経緯があり、気象室の中でも人員が少ない。

その中で反乱を起こした為に上層部が根こそぎクビになった北米支局に元東亜支局副支局長のジュデイスが支局長として赴任することになり、それと交替でフェイミンやミリーの姉であるユーリイが加入して出来た新体制が最近ようやく落ち着いたところである。

そんな中でまだ新しく大きなミスをしたわけでもないライチが降格になるはずもないのだが、ライチは盛大な勘違いを起こしていた。

「こういう時シイナさんなら上手くライチさんを宥めて下さるのですが・・・」

「うーん、それはないわねえ」

「というか多分ライチをしばき倒すわね」

東亜支局の現場の調整役的な存在だったシイナを思い浮かべつつ漏らしたフェイミンに対してシイナとの付き合いの深いミリーとユメミは否定的な感想を述べた。

「え？それはどういうことでございましょうか？」

フェイミンから見たシイナはいつも冷静に状況判断をして他人のフオローをすることに長けている面倒見のいい東亜支局のお姉さんの存在である。

事実面倒見の良いシイナの人気は高く、キャサリンと並んで他の気象精霊から慕われている。

シイナについてそういった印象を抱いているフェイミンにとってシイナの親友であるミリイとユメミの反応が意外だった。

「シイナは確かに面倒見がいいけどね・・・例外があるのよ」

「シイナは温厚だけどお、結構あれで過激だからあゝ」

ユメミとミリイの会話にフェイミンは首をかしげる。

「シイナさんが過激・・・でございますか？」

自信が持つシイナのイメージとかけ離れた言葉に思わずフェイミンはきょとんとした。

フェイミンのその様子のミリイは苦笑を浮かべる。

「フェイミンさんってシイナについてどう思ってる？」

「そうでございますね・・・。冷静かつ温厚で面倒見の良い方だと思いますが・・・」

ミリイの質問に対してフェイミンは少し考えてから自分の感じるシイナのイメージについて述べた。

「それも間違いじゃないんだけどね・・・。簡単に言えイツミ師匠と同じよ。基本的には温厚で怒らないけど締めるところは締めるし、いざ怒ったら・・・ね」

以前イツミが怒った時を思い出したのかミリイは身震いをする。



その様子にフェイミンは冷や汗を垂らした。

その先は聞いてはいけないとフェイミン理性が警告するが、それと同時に好奇心も騒ぎ出す。

そしてフェイミンは好奇心を選んだ。

「シイナさんが怒ると・・・どうなるのでございますか？」

「黒コゲよお？」

「は？」

呆然としてしまったフェイミンにさらにミリイが追い打ちをかける。

「ユメミ・・・少し省略しすぎよ。でもまあシイナを怒らせた相手が黒コゲになるのは確かだけど」

ため息を吐くようなミリイの様子にフェイミンは二人が冗談を言っているわけではないと悟った。

「シイナさんは確か風の上級精霊では？称号も『嵐の精霊』エアリネですし・・・」

「シイナは火の上級精霊よ。普段風の術ばかり使っているから皆よく勘違いするんだけど」

「シイナの火の属性能力は伯母さんに匹敵するわよお？」

フェイミンは冷や汗が止まらなかった。

フェイミンも今の上司であるイツミがかつて火の精霊の最高位、火の精霊長官であったことは知っている。

その上司に匹敵する程と言えばその能力は精霊世界最高峰と言っても過言ではない。

「な、何故シイナさんは普段火の属性を使わないのでございますか？」

「自分の能力の制御に自信がないんだって。別に言う程下手なわけではないんだけどね。繊細なコントロールが少し苦手なだけで」

「でも怒った時と男の人が絡む時はあ、容赦なく火の属性を使うわよあ？」

「男の人・・・でございますか？」

ユメミの意外な言葉にフェイミンは首を傾げる。

「シイナって男に人が苦手なのよ。特に暑苦しい人に迫られると確実にパニックを起こすわ。その時は男の人を含めて辺り一面を焼き尽くすわね」

ミリイの何気ない言葉にフェイミンは以前気象変動誘発局に協力していた時の事を思い出した。

そういえばあのツルピカ頭の隊長が程良いウエルダンの状態で銀髪の子に運ばれて帰ってきた事があった気がする。

パートナーを組んでいて今や親友といえる友人の意外な顔にフェイミンはショックを受けていた。

数少ない常識人の友人と思っていたシイナ、東亜支局の他の面々と同様にクセの強い精霊だった事に。

（シイナさん・・・あなたはまともだと思っていましたのに・・・）

「そ、それで話を戻しますがシイナさんがライチさんに怒るとおっしゃいますのは？」

受けたショックを隠すかのようにフェイミンは話を戻した。

「それはアレよお」

ユメミが指さした先は件のライチである。

「・・・ああ、そういうことでございますか」

ユメミが指さした先を見てフェイミンは先刻二人の言ったことが理解できた。

ライチの周囲では現場のお手伝いである下級精霊達が寄り集まって宴会を開いていた。

ご丁寧に『ライチ、お帰りなさいPart2 下級精霊一同』と書かれた横断幕まで用意されている。

どうやらライチの降格を前提とした残念会？のようだ。

「おー、ファムさまイイ飲みっぷりでやんす！」

その中心ではさっきまでライチを慰めていた筈のファムがいつの間にかいて一升瓶をラッパ飲みしている。

傍で大漢が煽っているところを見ると大漢がいつものようにお酒をエサにファムを連れ出したのだろう。

確かに仕事場で下級精霊達が宴会を始めるのは気象精霊の現場では珍しくない現象である。

現場の指揮官である上級精霊がそれを注意するかはその上級精霊次第で、シイナはどちらかと言えばその真面目な性格故に注意する方であるがこの状況がただ下級精霊が宴会をしているというだけならばシイナは注意はしないだろう。

だが今下級精霊達に宴会の口実の与えてしまったのはライチだ。

今この場の指揮官はこの気象操作を任されたコズエ達であり、ミリーを含めた他の上級精霊達はその見学に来ているだけにすぎない。その見学に来ている者がその場の宴会のきっかけとなるということ  
は・・・

「ライチはコズエちゃん達の邪魔をしているわね」

きっぱりとミリーが断言する通り今の状況は『見学に来たライチが原因で現場を混乱させた』と言えるのだ。

「おまけにい、もう一人の原因は大漢さんだしねえ」

筋肉精霊程ではないが下級精霊のまとめ役である大漢も十分に暑苦しい男である。

事実シイナは彼を苦手としており、過去にいきなり手を握ってきた彼を文字通り『千の雷撃』で黒コゲにした事があった。

「・・・シイナさんが今いなくてよかったですわ」

フェイミンの脳裏にライチを注意しようとしたシイナが酔った大漢に絡まれるシーンが再現され、それを想像したフェイミンの顔が蒼くなった。

「あれ、あれってノーラ？」

安堵の息をフェイミンが吐く中でミリィが立ちあがった。

フェイミンとユメミがミリィのいる方を見ると確かに同僚であるノーラが猛スピードで近づいてくるのが見える。

「ノーラだねえ」

「本当ですわね。どうやら慌てていらっしゃるようですが・・・」

三人が疑問を浮かべている間にもノーラはどんどん近付いてきてやがて三人の目の前に降りてきた。

「どうしたの、ノーラ？」

ノラのただならぬ様子にミリイが恐る恐る声を掛ける。

「た、た、た、大変ですね!!? キャサリンさまが誘拐されてしまったのね!!!」

「『ええ』!!!?」

## 番外1 その頃の東亜支局の面々（後書き）

「今回の後書きコーナーは番外編ということで特別に私、茶々丸が担当させていただきます」

「あわわ、もう一人の担当の相川さよです」

「さて、鋭い読者の方はもう気付かれたかもしれませんがどうやらシイナさんのご友人がこちらにいらっしやるみたいです」

「どんな人が楽しみですね」

「ええ、私も楽しみです。・・・マスターの反応が」

「・・・」（茶々丸の言葉にどう反応したらいいか分からずさよ右往左往）

「シイナさんに伺う限り老練かつ愉快なお方のようなので皆さまも（マスターの反応を）お楽しみにお待ち下さい」

「チャチャゼロさん、これでいいんでしょうか？」

「ケケケ、諦メロ。妹ガ壊レテイルノハSSノセオリーダゼ？」

「あわわ、メタ発言はだめですよ」

「これでシイナさんの動きにも幅がでそうですし・・・ハカセに頼んでメモリーの増設を・・・」

「あわわ、これ以上は拙いので今日はここまでです」

## 第十六話 キャサリン台風襲来（前書き）

え〜と・・・ごめんなさい！

更新とんでもなく遅れました！

少しリアルで色々ありまして中々書く時間と気力がありませんでした。

お待たせしてすみませんでした。



## 第十六話 キャサリン台風襲来

エヴァンジェリンが所有する『別荘』。

本来は名前通り、エヴァンジェリンが自身のリフレッシュの為に所有している私有リゾートの魔法球である。

事実最近までは主に学園から出られなかったエヴァンジェリンが南国気分を味わう為や人形の従者達の作業所兼保管所として使われてきた。

だが半年前にエヴァンジェリンがシイナ達と知り合ってからシイナ達とエヴァンジェリンの修行場所兼第二の家として機能している。

そして今日も技術交流という名の訓練をし終えたシイナ達はリゾートの一角で茶々丸特製の料理とシイナが持ち込んだお酒のディナーを楽しんでいた。

「でも困ったわねえ・・・」

楽しい会話の中でシイナがポツリと漏らした一言に注目が集まる。

「何かあったのか？」

「あうゝ？」

食後のデザートとしてモモっ娘ワインを楽しんでいたエヴァンジェリンが首を傾げ、それにつられてアオイも哺乳瓶を持ちながら首を傾げるとシイナは苦笑した。

（アオイも結構エヴァに懐いているわよね。エヴァもまんざらじゃなさそうだし・・・）

「いや、あたしも気象操作で色々訓練してみたいことがあるんだけどね、一人だと難しいのよ・・・」

「ああ、そういうことか」

最後は言葉を濁すかのように言うシイナの様子にエヴァンジェリンは納得した。

現在シイナはエヴァンジェリンに御札魔術を教える代わりにエヴァンジェリンから魔法の魔力運用の理論を教わっている。

一見靈力を扱うシイナには意味がないかのように見えるが、自前のエネルギーと借り物のエネルギーという違いはあるものの魔力と靈力の根本は同じ者であり、『ネギま！』の世界における魔力運用はかなり完成されていてシイナにも学ぶものが大きい。

その訓練によってシイナの靈力運用の技術は大幅に向上し、苦手だった火の属性の靈力運用技術も大幅に向上している。

ではシイナの悩みは何かと言えば、それは修行の成果を実践出来ないことであつた。

シイナの修行の認識とエヴァンジェリンの修行の認識は大きく異なっている。

エヴァンジェリンにとっての修行は己が生き残るため・・・しいて

は強くなるための戦闘訓練である。

だがシイナは本来気象操作を仕事とする気象精霊であり、現在は転生者<sup>ル</sup>に対応する為に魔法戦闘の訓練をしてはいるものの本来の修行と言えば気象操作の修行なのだ。

気象精霊の活動の多くは上級精霊が多くの下級精霊を指揮する事で行われている。

シイナを含めた上級精霊は一人で下級精霊何千人分の操作をすることも可能なのだが、下級精霊を指揮して行う時のような細かい調整は効かないし、シイナがやりたいような気象操作の訓練となると仮に大規模な災害が起きてしまった時にシイナだけではカバーが難しくなってしまう。

更に何より今まで友人のミリィ・ユメミやフェイミン・キャサリンのような同僚と切磋琢磨することで実力をつけてきたシイナにとって今の環境はイマイチ張りが出ないのだ。

（あたしって本当にいい仲間恵まれてたんだな）

エヴァンジェリンやさよ達と過ごす今の生活が嫌なわけではないが、今までの自分がいかに周囲の關係に恵まれていたかにシイナは否応なく気付かされる。

王立学園の修行時代から友人となったミリィやユメミ達に負けないようにと己を磨き続けてきたシイナにとって目標となる相手あるいは競い合う相手が周囲にいない事に困惑しても仕方がない状況なのだ。

「・・・ま、あせつても仕方がないし今出来る事をするしかないわね」

シイナは気を取り直すように手に持っていた梨酒ペリのジョッキを傾けた。

「・・・普通にそれを飲むか？」

瓶一本分が入った特大ジョッキを呷るシイナに若干ひいてしまっているエヴァンジェリンの視線を浴びながら。

一日別荘でのんびり過ごした後別荘を出てエヴァンジェリンの家に戻ったシイナ達はいきなり妙なものを目にしていた。

エヴァンジェリンの家のリビングに無造作に置かれながらも絶大な存在感を放つその存在。

その存在に誰一人何も発せられなかった。

硬直してしまっている周囲の様子に異変を感じたアオイだけは『あう？』と首を傾げてはいたが。

「・・・何だコレは？」

「麻袋ですよね？」

「麻袋かと推定されます」

「ケケケ、麻袋ジャネエカ？」

頬をひくつかせながらようやく言葉を絞り出したエヴァンジャリンに皆が答えた通り、エヴァンジェリンの家のリビングに無造作に置かれたそれは麻袋だった。

但しそれはよく童話でトナカイのソリに乗って聖なる夜に世界中を飛び回るとされる聖人を模した老人が持つ袋並みに大きい。

その麻袋の中では明らかに何かが蠢いており、更には何故か麻袋に竹やりが刺さっている。

極めつけにはその麻袋には『シイナちゃんへ 愛を込めて？』と書かれた紙が張ってあった。

『誰が置いていったのか？』

『中に何が入っているのか？』

『竹やりが刺さっているけど中に入ってるモノは大丈夫なのか？』

『そもそも鍵が掛っていたこの家にどうやって入ったのか？』

ぶつちやけツツコむところはありすぎる程あったが、麻袋に書かれた言葉によってエヴァンジェリン達の視線はシイナへと集中する。

そしてその周囲の視線を受けたシイナは冷や汗を掻きまくっている。

実は麻袋を発見した瞬間シイナの脳裏には麻袋の中身とその実行者が浮かんでいた。

エヴァンジェリン達が事態に思考停止してしまっている間、シイナはその神様（じごあたり）とチャンネルを繋げようとしたが向こうが全く応じない。そうこうしているうちに今の事態に至ってしまったシイナはその相手が今頃この光景を笑いながら見ているだろう事を悟った。

（完全な愉快犯ね・・・）

自分の依頼者に軽い殺意を覚えつつシイナはこの状況を打開すべく大きく息を吐き出す。

「はあゝゝゝ。・・・聞きたい事はいっぱいあると思うけどとりあえずアレをなんとかしましょ」

「はあゝ、助かったゝゝ！」

ソファアーに腰をおろした金色の短い髪にメガネを掛けたソバカスのある顔が特徴的な女性が茶々丸の持ってきた冷たい麦茶を一気に飲み干し叫ぶ。

女性のその目には涙さえ浮かんでおり、身体全体が今の女性の心境を如実に表していた。

それもその筈、この女性身体を荒縄で縛られて身動き取れない状態にされた上で猿轡までされた状態で麻袋に入っており、ただでさえ密閉された空間で温度が上がっているところに自身がもがく事による体温の上昇と猿轡による呼吸困難というトリプルパンチを喰らっていたのだ。

それでも完全にグロッキー状態だった筈が麦茶を飲んだだけで一気に回復したあたりこの女性尋常ではなかったりするのだが。

「それは良かったですね、キャサリンさん。それでなんで貴女がここにいるんですか？」

何があつたのか大方想像はついているもののシイナはこめかみを押さえつつ金髪の女性、キャサリン・レヴィアタン・ペイレネ・コブライナに視線を向ける。

「いや、あたいにも良く分からないんだ。いきなりアロハシャツ着た野郎に捕まつたと思つたらいきなりこの状態だった。刺された竹槍はなんとか避けたがその後何の反応もなくてな。もがいてたところ助け出されたってワケだ。まあ、まさかシイナに助けられるとは思わなかったけどな？」

そんな目にあつたというのに最後は笑いながら話すキャサリン職場の大先輩に対して『相変わらずね』とか思いながらシイナはため息を吐く。

その二人のやり取りにシイナの隣りに座っていたエヴァンジェリンが口をはさんだ。

「シイナ、お前の知り合いのようだがコイツは何者だ？」

そのエヴァンジェリンの言葉に反応したのはシイナでは無かった。

「ほう？初対面の相手をコイツ呼ばわりとは中々躰られてないようだな、お嬢ちゃん？」

エヴァンジェリンは何気なく言っただけだがいきなり初対面の相手にコイツ呼ばわりされたキャサリンはニヤリと口を歪める。

「誰がお嬢ちゃんだ！？私はこれでも600年以上生きてるんだぞ！！」

「は？600年位なんだ？あたいから見たらまだまだお嬢ちゃんさ」

キャサリンにエヴァンジェリンが思わず立ち上がって噛みつくがなにせ相手は3000年以上生きている大精霊である。

（エヴァ、キャサリンさん相手なんて無茶よ……。それにしても何か懐かしいわね、このやり取り・・・）

「ケケケ、ガキダナゴ主人」

「はわゝ。エヴァさん相手にすごいです」

キャサリンに完全に子供扱いされるエヴァンジェリンの様子にシイナ達はそれぞれ呆れ、面白がり、感心するといった反応をしている。

シイナによって身体は成長する事が出来たものの、エヴァンジェリンの精神はやや子供っぽいところを残している。



おまけにこの間まで幼児体型ロリが最大のコンプレックスであったエヴァンジェリンは自分を『お譲ちゃん』呼ばわりするキャサリンに見事に釣られてしまっていた。

キャサリンとエヴァンジェリンの言い合いは続いていたがそれは完全にキャサリンが主導権を握っており、それは大人キャサリンに子供エヴァンジェリンがからかわれているだけでしかなかった。

「ハイハイ、話しが進まないのでキャサリンさんその辺にしろって下さい。エヴァもそうムキにならない」

シイナの仲裁にキャサリンとエヴァンジェリンはようやくやり取りを止める。

「はいはい。確かにあたしも話しを進めないと今の状況が全く分からないしな」

「・・・分かった。それで結局コイツは何者なんだ？」

場が落ち着いたところでシイナはまずエヴァンジェリンの疑問に答えることにする。

「こちらはキャサリンさん。あたしの職場の大先輩よ。それでこっちがエヴァンジェリン、今あたしがお世話になっているんです」

「キャサリン・レヴィアタン・ペイレネ・コブライナだ。シイナが世話になっているみたいだけどよろしくな？」

「・・・エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ」

紹介されたキャサリンが気さくに応じる様子に自分が子供っぽく感じたエヴァンジェリンが仏頂面で応じる。

だが次の瞬間エヴァンジェリンはキャサリンの自己紹介に気になる言葉があつた事に気付いた。

「さて、レヴィアタンだと？」

『レヴィアタン』

リヴァイアサンとも呼ばれるその存在は旧約聖書にも記述されている悪魔であり怪物。

海の底に住むとされる巨大な怪物として名を馳せている悪魔であり、七つの大罪の一つ『嫉妬』を司る七大悪魔の一柱である。

大悪魔として余りにも有名なその名前に思わずエヴァンジェリンは顔を顰めた。

エヴァンジェリンは以前にシイナから職場の同僚に次期妖精王候補や神帝候補の妃といった精霊がいる話を聞いた時にキャサリンの話も聞いた事があつた。

（ま、まさか・・・これがあの七大悪魔なのか!？）

その時は話し半分に聞いていたが、『異世界の』とはつくものの七大悪魔の実態にエヴァンジェリンが頭を抱えた。

「それでキャサリンさん・・・」

エヴァンジェリンが頭を抱えている間にもシイナはキャサリンにこの世界の事と自分の状況について説明をする。

「・・・成程な。お前がいきなり休職するって聞いた時は驚いたけどそういうワケか」

シイナの話聞き終えたキャサリンは納得の表情を見せた。

「信じられないかもしれない話ですけどね」

困った顔そするシイナにキャサリンは苦笑いを浮かべた。

「確かに突拍子もない話だけどな。あたしも巻き込まれたわけだしなあ・・・」

シイナの話は確かに突拍子もないが、シイナがそんな法螺を吹く筈が無い事をキャサリンは知っている。

何よりキャサリンもその自称神様とやらにこの世界に連れてこられてた身であり、それを受け入れられない程キャサリンの頭は固くない。

「すみません。何で神様がキャサリンさんを連れてきたのか正確にはわかりませんが多分あたしに巻き込まれた事は間違いないと思います」

シイナがキャサリンに頭を下げる。

「別にシイナが謝る必要無いぞ。シイナの仕事が終われば帰れるん

だろ？それに・・・」

キャサリンは軽く応じながら口元に笑みを浮かべ、言葉を切る。

そのキャサリンの様子にシイナは嫌な予感をビンビンに感じていた。

（な、何かとてつもなく嫌な予感がする・・・）

「すげえ面白えじゃねえか！！異世界だぞ？異世界！！丁度退屈してたとこだしこんな面白えことはないぞ！おまけにこっちじゃ災害起こし放題じゃねえか！！」

キャサリンはそれまでの飄々とした態度を脱ぎ捨ててテンション全開で言い切った。

あまりにもなキャサリンの言葉にエヴァンジェリン達が啞然とする中で嫌な予感が的中したシイナは内心でため息を吐く。

キャサリンと100年以上付き合ってきたシイナにとってキャサリンの災害マニアぶりは慣れたものである。

思わず脱力してしまったシイナだが内心安心もしていた。

キャサリンは生粋のトラブルメーカーである困った先輩だが、道理を踏まえない精霊ではない。

普段の言動はアレではあるがキャサリンは仲間を大切にする精霊であり、味方としてみれば心強いことこの上ない。

更に気象精霊としての仕事から見れば尊敬出来る技術とキャリアを

持っている精霊である。

多少気象災害の事で苦勞する事になるかもしれないが、それはシイナの気象精霊の訓練になる事だ。

何だかんだ言ってもシイナはキャサリンのことは信賴しているのだ。

（当たり前だけどキャサリンさん変わらないよねえ）

相変わらずなキャサリンに苦笑しつつシイナは話を進める。

「災害は程々にして下さいね……。それでキャサリンさんはこれからどうするんですか？」

シイナの質問に対し、周囲の視線がキャサリンに集まる。

その視線の中キャサリンは少し考え込んだ後不敵な笑みを浮かべる。

そして・・・

「あたいか？とりあえずこの辺りで普通にやるさ。魔法使って連中を相手にするのも面白そうだしな！」

キャサリンはとてもイイ笑顔でそう言い切った。

## 第十六話 キャサリン台風襲来（後書き）

「ミリイと」

「ユメミのお」

「「後書きコーナー！」」

「なんだか後書きコーナーも久しぶりな気がするわね」

「結構ご無沙汰だったからねえ」

「作者がいい加減すぎるわよね」

「なんだかリアルが大変だったみたいよお？今日日本は過去最大の氷<sup>フ</sup>河期<sup>リザード</sup>の中みたいだし」

「ま、あまりグチ言っても仕方ないわね。それにしてもキャサリンさんって異世界行っても相変わらず・・・」

「だってキャサリンさんだしねえ。でもシイナもいるし大丈夫よお」

「確かにキャサリンさん止められるのってシイナとイツミさん位だけど・・・シイナ大丈夫かな？」

「大丈夫よお？そう言えばミリイ？あたしの麻袋が一枚なくなってるんだけどお？」

「は？麻袋？それって昔使ったアレ？」

「うん？あの丈夫なヤツう」

「・・・」

「倉庫にしまっておいた筈なんだけどいつの間になくなってたんだよねえ」

「そ、そこまでにしましょ・・・」

「そお？」

「さて、それじゃ今日もこの辺りで・・・」

「「またね」」

## 第十七話 吸血姫の願い（前書き）

大変・・・というか遅れに遅れました。

第十七話投稿です。

## 第十七話 吸血姫の願い

『気象予報の時間となりました。五日前に台風12号が観測されて以来台風の発生が相次いで観測されています』

夜のニュース番組の中で気象情報が流れている。

その画面では恰幅の良い男性のアナウンサーが簡単な気象概況を伝えていた。

『本日は気象予報協会から岸緒義夫さんをお呼びしまして、今後の台風の推移を解説願いたいと思います』

『うむ。任せたまえ』

アナウンサーの紹介とともに何故か偉そうに胸を張ったチヨビ髭の老紳士が画面に登場する。

しかしアナウンサーはその態度を見事にスルーした。

『さて、今回日本列島の周囲に五つの台風が接近しつつあるのですが・・・これについては岸緒さん、いかがでしょうか？』

『うむ。まず始めにこれは大変珍しい事態だと申し上げます。元来この時期は台風が多い時期ですが、流石にこの数は異常ですからな』

腕を前で組んだまま発言する老紳士にアナウンサーも相槌をうつた。



『そうですね。それでは岸緒さん、何故このような状況になったのでしょうか？』

アナウンサーが老紳士にそのまま話を振るが、それに対して老紳士は訝しげな顔を浮かべる。

『君は耳が悪いのかな？オレは先程異常だと言った筈だが？』

『い、いえ、ですからその異常事態について解説をお願いしたいのですが・・・』

老紳士の態度にアナウンサーの口元が一瞬引き攣ったもののアナウンサーは再度老紳士に質問した。

だがお茶の間でKYと名高い老紳士はアナウンサーが取り繕おうとした努力を切り捨てる。

『異常気象。それだけだ』

『は？』

『気圧配置は例年通りなのにこんなに台風が来る事は異常なんだ。協会内でも前例のない事で原因はわかっとらん』

身も蓋もない老紳士の発言にアナウンサーは一瞬硬直してしまったもののすぐに立ち直った。

『・・・そうですか。それでは今後の台風の動きはどうなるのでしょうか？』

どうやら老紳士の発言を無かった事にしたらしいアナウンサーの思いが通じたのかこの質問には老紳士は普通に答えた。

『そうですな。ここまで五つ台風は全て同じような軌道できているのでこのまま他の四つの台風は台風12号に同行するか追従するでしょう』

『同行か追従ですか。これらの台風が合体するのではないかという話でもあるのですが・・・』

何気ないアナウンサーの発言に老紳士は思いつきり顔を顰めた。

『何を言っておるんだ？台風が合体などするわけないだろうが』

『はい？』

余りにもな言葉に呆然としてしまったアナウンサーを尻目に老紳士は背後に展開された天気図を棒で指す。

『いいかね？複数の台風が接近するとお互い影響しあって複雑な動きをする。これを『藤原の効果』と言うんだがこの効果には台風が相寄ることはあっても合体する事はないのだよ』

『・・・』

『分からないかね？それではもっと分かりやすいように説明してやる。【藤原の効果】には六つの可能性がある。それは相寄り型、指向型、追従型、同行型、離反型、時間待ち型なのだが、今回の台風はここまでほとんど等間隔できている。今日本列島の付近には強

い高気圧はないからこれらの台風は偏西風をほぼ平等に受けるだろう。従ってこれらの台風の動きは同行型、ないしは追従型となる可能性が強いのだ。理解出来たかね？」

何も発言しないアナウンサーに気をよくした老紳士がアナウンサーに向けて胸を張りながら解説をする。

あまりにも傍若無人な老紳士の態度にアナウンサーは傍から見ても必死と分かるような笑顔を浮かべた。

まさしくプロ根性の鏡というべきである。

『な、成程。よ、よく分かりました。その同行型、追従型となった場合台風はどうなるのでしょうか？』

『君は莫迦かね？追従、同行と言っておるんだ。このように台風12号と同じコースを辿っていくか並行していくに決まっておるだろうが』

老紳士が手に持った棒を動かすと背後の天気図が動き出し、台風12号を追ったように他の台風が動き出す図と台風12号と他の台風が並んで動く図が映し出された。

『・・・つまりこれらの台風は全て日本列島の上空やその付近を通過すると？』

『うむ。わかりやすく言えばその通りだ』

身体を震わながら絞り出すかのように言うアナウンサーに老紳士が鷹揚に頷く。

ブチッ

その瞬間何かが切れた。

『ふざけんな！視聴者の方々に分かりやすいように解説すんのが俺らの仕事だろうが！最初から分かりやすく説明しろ！仕事だから下手に出てればいい気になって番組目茶苦茶にしゃがってお笑い芸人窓際氣象予報士がふざけんな！こちとら厳しい倍率勝ち抜いてアナウンサーやってんだよ！何様だテメエ！』

それまで纏っていた温厚そうな雰囲気をかなぐり捨てたアナウンサーが吠えながら老紳士に向かって掴みかかっていく。

だがそのアナウンサーの手が老紳士に触れようとする瞬間画面が変わった。

「「「番組の途中お見苦しい場面がございましたことをお詫びいたします。再開までしばらくお待ちください。」」」

余談だが後日TV局にはアナウンサーに対する同情と賞賛のコメントが押し寄せ、それを知った恰幅の良いアナウンサーは涙を流したとか。

ゴクッゴクッゴクッ

大きなジョッキに満たされた泡立つ褐色の液体が一気に消えていく。

「くゝ、やっぱり一仕事した後のビールは最高だな！」

キャサリンは一気にビールを飲み干し、左手の甲で口元に付いた泡を拭う。

「しかもタダ酒ですしね。はあ・・・やっぱりまだ単独だとキャサリンさんには勝てないわねえ」

それに対してキャサリンと向かい合うシイナは大ジョッキに入ったシールドをムスっとしながら傾けた。

「悪いな、シイナ。こちらアツサリと負けるいかねえよ。ま、それでもこっちに来てから随分力付けたじゃないか。まさかお前が高気圧を台風にぶつけてくるなんて思わなかったぞ？」

「そりゃいきなり五個も台風持つてこられたらこっちも全力でやる

しかないですよ。本当に宣言通り5個も台風作った時は焦りましたよ、全く」

そんな会話を交わす二人の姿を同席していたエヴァンジェリン達は冷や汗を掻きながら見ていた。

「なあ、茶々丸？」

「はい、何でしょうか、マスター？」

「常識って何だ？」

「社会で、人々の間に広く承認され、当然もっているはずの知識や慣習の事だと思われます。ですが一部では『常識とは投げ捨てるモノ』といった考えがあり、私はこちらが正しいのではと判断されます」

律義に質問に答える茶々丸の言葉を聞きつつエヴァンジェリンはは遠い目をする。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは600年以上の時を生き抜いてきた吸血鬼の真祖である。

『闇の福音』とも呼ばれている彼女は世界最強クラスの悪の魔法使いであり、エヴァンジェリン自身もそれを自認していた。

そんな強大な力を持つが故にエヴァンジェリンは物事に悪ノリする癖がある。（肉体の成長が止まったために精神に子どものままだという疑いもあるが）

かつてナギ・スプリングフィールドと戦って敗れたのもその辺りが原因と言えるだろう。

だがそんなエヴァンジェリンをしても今日の前で酒を片手にテレビを見ている二人の精霊につっこみたい衝動が湧いてくる。

『オマエら色々な意味で少しは自重しろ！』と。

何せこの二人、最初はただ竜巻や集中豪雨等の気象操作の訓練をしていた筈がいきなりキャサリンが台風を使って災害を起こし、シイナがそれを防ぐという日本列島全体を巻き込んだ模擬戦をし始めたのだ。

その結果が『大型台風5個同時襲来』という日本全体をパニックに陥らせた現象である。

5個の大型台風の内2つは上陸前に消滅し、3つが本土を直撃したものの被害はやや大きめの台風1つの被害よりも少ないという不可思議な結果となったこの自然災害がまさか二人の精霊のただの模擬戦の結果だとは誰も思わないだろう。

だがエヴァンジェリンがそのツツコミを口に出さない。

今までシイナ達と暮らしてきた事でその規格外の行動に慣れてきてしまったという事もある。

しかしそれ以上にエヴァンジェリンは己の予想を超える行動を起こすシイナ達に突っ込もうとする自分自身に驚いていた。

600年以上生きてきたエヴァンジェリンの人生の大半は迫害と逃

亡と孤独に満たされている。

吸血鬼の真祖でありながら、エヴァンジェリンは己と同じ境遇の者を作りたくないという理由によってあえて自分の血族を持っていない。

魔法使いには賞金首として追われ、人間には異端の者として恐れられる。

その状況においてエヴァンジェリンは少しでも己の孤独を紛らわせようと人形使いとなり、チャチャゼロ達を生み出した。

しかしいくら自分の意思を持つてはいても、チャチャゼロ達はエヴァンジェリンの魔力によって動く人形であり、支え合う対象にはない。

バカげた事で笑いあつてくだらないやり取りをする。

そんな当たり前の光景を心の底で夢見続けたエヴァンジェリンはかつて一度だけそれを手にしかけた事があつた。

吸血鬼の真祖である自分を怖がらずに手を差し伸べた魔法使い、ナギ・スプリングフィールド。

だがその温もりは長くは続かず、やがてその希望も打ち砕かれた。

約束をしたナギは現れず、それでも約束を信じて待ち続けたエヴァンジェリンに届いたのはナギが死んだという知らせ。

【登校地獄】 によって話すようになったクラスメイトはエヴァンジ



エリンを忘れて卒業していく。

趣味に没頭したりもしたがそれでもエヴァンジェリンの気が晴れる事は無かった。

近右衛門や高畑とは話しはするものの、どこか他人行儀。

そんな光がささない日々。

だが今周りを見渡せばどうだろうか。

シイナと出会った事をきっかけに今のエヴァンジェリンの家には常に誰かがいて笑い声に満ちている。

そしていつの間にかエヴァンジェリンもツッコミという掛け合いをするまでにその中に溶け込むのが普通となっていたのだ。

「普通・・・か」

エヴァンジェリンの口からポツリと言葉が零れる。

「マスター、どうしました？」

「いや、何でもない」

それを聞いた茶々丸が首を傾げるもエヴァンジェリンは首を振りつつ首を上にあげた。

（シイナ達はいずれ自分達の世界へ帰る。その時私はどうなるんだろうか？）

シイナ達は来訪者であり、いずれは自分達の世界へと帰る。

だがエヴァンジェリンにはこの生活が消える事を想像したくはない。

エヴァンジェリンはふと顔を窓から見える空へと向け、目を閉じる。

それは遙か昔、吸血鬼となる前に日常的にしていた動作。

（神よ、お前が私を呪っている事は知っている。だが・・・この温もりだけはせめて少しでも長く感じさせてくれ）

そうしてしばらく瞑目していたエヴァンジェリンにシイナが声をかける。

「エヴァ、新しいお酒開けるわよ。早く飲まないとチャチャゼロに全部飲まれちゃうかも」

その声を聞いたエヴァは目を見開く。

「何！チャチャゼロ、お前少しは主に遠慮しろ！」

「ケケケ、早イ者勝ちダゼ、ゴ主人！」

先の事は分からない。

しかし今日もエヴァンジェリンの家が騒がしいのは間違いないだろう。



## 第十七話 吸血姫の願い（後書き）

「ミリイと！」

「ユメミのお！」

「後書きコーナー！！」

「なんだかここに来るのも凄く久しぶりね」

「作者があサボリにサボリまくったからねえ」

「拳句の果てには別の作品に手をつけるとか一体なにやってるんだろうね？」

「それにしてももう20話近いのにまだ原作突入していないわね」

「作者はあ後少なくとも3話くらい原作前の話を続けるって言ってるわあ」

「ま、アホな作者は放っておきましょ」

「そういえばあ、今回ジェット気流が出てきたねえ」

「これは説明しておいた方がいいかもね。ジェット気流はいわゆる偏西風のことよ」

「凄く大きな流れの気流だからあ、弓状列島の気象操作にはよく使うんだよねえ」

「実際に台風がよく沖縄辺りでカーブするようになるのはこの気流の影響が強いわね」

「あとお【藤原の理論】はあ調べると結構出てくるから興味があったら調べてみると面白いわよあ」

「今回もこんなところかな？」

「そうだねえ」

「それじゃ・・・」

「「またねー！！」」

#### 間話4 ウェールズのとある少年? (前書き)

なんとか書き上がりました

PCがぶっ飛んで卒論書きなおすはめになるなんて思わなかった・  
・

#### 間話4 ウェールズのとある少年？

SIDEネギ

ボクがメルディアナの魔法学校を卒業してからもう4カ月が経った。ボクは今スタンおじいちゃ・・・スタン師匠の下で修行をしている。

今ボクが住んでいるのは昔ボクが住んでいた村のスタン師匠の家。

村は・・・あの時悪魔に壊されちゃった村だけど今はかなり元通りになってる。

今も復興作業が続いてるんだけどボクもそれをお手伝いしてるんだ。

ううん、やっと魔法でお手伝い出来るようになったというべきかもしれない。

・・・だって石化が解けた村の皆と一緒に村の跡に初めて来た時ボクは何も出来なかったんだから。

村を復興させるのに一番必要な魔法は何かを直す、何かを作る為の魔法もしくは大地の妖精とかを召喚して手伝って貰う魔法だ。  
フムフム

魔法学校ではボクが殆ど見向きもしなかった魔法。

お父さんみたいに悪い奴らをやっつける魔法使いに憧れていたボクは基本魔法は勉強したけど後は戦闘魔法を覚える事に必死だった。

魔法学校には選択科目があっただけどボクは治癒系統や補助系統の魔法には見向きもせずに戦闘に関係ある精霊魔法とかの授業を受けた。

それもボクは飛び級で卒業したから最低限の授業しか受けていない。村を立て直すお手伝いを始めた時、ボクがここまで役に立つ事が出来ないなんて思わなかった。

そんなボクを尻目にネカネお姉ちゃんやアーニヤは村の人に交じって魔法を振るっていた。

『魔法学校の講師で一人前の魔法使いのネカネお姉ちゃんとはともかく、アーニヤがボクから見ても周りの村人と遜色のない魔法を使っている』

ボクにはそれが大きなショックだった。

アーニヤはしっかりと皆の役に立つ事が出来ているのにボクにはそれが出来ない。

ボクの方がアーニヤより成績が良かった筈なのに。

『本当に首席にふさわしいのはアーニヤじゃないか』

そんな考えがボクの頭に浮かんでいた。

その後ボクは皆に黙ってメルディアナに戻ろうとした。

ボクは村の復興では役に立つ事が出来なかったけど、アーニヤより強い魔法を使う事が出来る。

お父さんみたいに強い魔法使いになれば、今度はボクが村の皆を守る事が出来る。

そんな考えがボクの頭を占めていた。

尤もスタン師匠がそんな事許してくれなかったけど。

村の皆に黙ってこっそりと野営地を抜け出したボクを呼び止めたのはスタン師匠だった。

スタン師匠は校長先生から卒業後ボクが日本に行くまでの間の指導を任されることになっていた。

あの時ボクを助けてくれた人だけど、元々村に住んでいた時からお父さんの悪口を言っていたからボクはスタン師匠について『お父さんの悪口を言う意地悪なおじいちゃん』だと思っていた。

そんなスタン師匠はボクが村に戻るまでも『クシャミで魔法を暴発させるとは何事じゃ！』とか『もうちつと他人をいたわらんか！』とかボクを叱ってくれたんだけど、その時のボクはそれを意地悪と感じてしまっていた。

今思えばかなり恥ずかしい。

『村から逃げ出すのか？アーニヤ達が頑張っておるのに』

スタン師匠に見つかった時ボクはそう言われて逆上した。



そしてボクはスタン師匠に叫んだんだ。

『違う！僕はお父さんみたいな立派な魔法使いになりたいんだ！』  
マギステル・マギ

その時スタン師匠は何も言わなかった。

その後スタン師匠はネカネお姉ちゃんに僕の事を頼むと何処かにいつてしまった。

ボクはスタン師匠の意地悪から解放されたと思いこんで凄く嬉しかった。

これでずっと中断していた攻撃魔法の勉強もする事が出来るようになると思った。

今思うと凄く情けないけど。

暫くしてからスタン師匠が戻ってきていきなり旅行に行く事になった。

スタン師匠に連れられて行くことになったのは魔法世界。

そこでボクが見たものは・・・虚構と現実。

最初ボク達が訪れたのは『連合』の国だった。

そこではお父さんが『英雄』として尊敬されていた。

『皆に尊敬されるお父さん』

ボクはそんなお父さんから貰った背中の杖の存在を誇らしく感じたその時を今でも良く覚えてる。

でもそれはただの幻想に過ぎなかった。

浮かれていたボクが次に連れられて行ったのは『帝国』に近い地域だった。

そこではお父さんは『紅い悪魔』として恐れられていた。

お父さん達によって吹き飛ばされたという村の跡。

お父さん達と戦って死んだ人達のお墓。

お墓のある村で会った小さい子どもを連れていた女の人は寂しげに呟いていた。

『夫は『紅い悪魔』に殺されましたけど・・・今恨んでもあの人は帰ってきませんから』

最初ボクはそれを信じる事が出来なかった。

お父さんは『英雄』で『立派な魔法使い』だ。  
マギステル・マギ

そんなお父さんが酷い事をする筈がない。

でも周りにあるのは『紅い悪魔』ナギ・スプリングフィールドによってもたらされた被害の数々。

思わず目をそむけそうになったボクを止めたのはスタン師匠だった。

『目を背けるでない。物事には必ず表と裏がある。お主が卑怯者になりたくなければ受け入れるのじゃ』

そう言つてスタン師匠は嫌がるボクを押し留め続けたんだ。

よく考えたら分かる事だった。

悪魔を吹き飛ばしていたお父さん。

もしあの力が悪魔ではなくて人に向けられたら？

想像しただけでも身震いがする。

攻撃魔法は名前通り敵を倒す為の魔法。

そしてボクはよりその攻撃魔法の上位魔法を使える。

それはボクが人を簡単に殺せる力を持っているということ。

あの女の人みたいに悲しい人を作り出す事の出来る力。

ボクは力を・・・強さを求めるだけでその力を持つ事の意味を考えていなかったんだ。

帝国ではお父さんの友達で『紅き翼』の一員だったラカンさんにも会った。

ラカンさんから聞いたお父さんは『英雄』のお父さんじゃなくて『人間』のお父さん。

それにあの女の人に会ってからボクはお母さんの事が気になっていた。

何で今まで疑問に思わなかったのか分からないけどボクはお母さんの事を全く知らない。

だからラカンさんに『お母さん』について聞いたんだけど・・・ラカンさんから聞いた『お母さん』の話はボクにとって衝撃だった。

ボクのお母さんの名前は『アリカ・アナルキア・エンテオフュシア』。

元オスティアという国の女王で連合の偉い人達に濡れ衣を着せられて『災厄の女王』として処刑されたとされる人。

それからボクは随分と悩んだ。

ボクはお父さんみたいな『立派な魔法使い』マギステル・マギになりたいって思っていた。

でも『立派な魔法使い』マギステル・マギって誰にとっての『立派な魔法使い』なんだろう？

お父さんは連合の人から見れば『英雄』だけど帝国の人から見たら『悪魔』だ。

それに連合の人はお父さんを『英雄』としているけどお母さんは『

罪人』としている。

『マギステル・マギ立派な魔法使い』って一体何なんだろう。

そんなボクの悩みを解決してくれたのはラカンさんに聞いたお父さんの話だった。

『紅き翼』を含めてお父さんの周囲にはいつも笑いがあったらしい。

周りの人が笑ってくれる。

それって凄くいい事だと思う。

周りの皆を笑顔にさせる事が出来る『立派な魔法使い』になりたい。

それをスタン師匠に伝えたらスタン師匠は

『そうか』

とボクが初めて見る笑顔を浮かべながらボクを抱きしめてくれた。

それからボクは魔法世界からウェールズに戻ってきた。

そしてスタン師匠やネカネお姉ちゃんにボクがこれまで見向きしてこなかった魔法を教わりつつ、アーニヤ達と一緒に村の復興のお手伝いをしている。

ボクは皆を笑顔にする事が出来る『立派な魔法使い』になりたいとは思っているけどそれはどうしたらいいのかまだ分からない。

皆を守る事が出来る力は欲しい。

でも強くなればいいというだけではないと思う。

夜にその事について考えていたらアーニヤに問い詰められた後で怒られた。

『このバカネギ！そーやって考え込むのがアンタの悪いところよ！アンタはあせり過ぎなのよ！あたし達はまだ修行中なの！将来どうするのか見つけるのがあたし達の修行の目的でしょ！』

アーニヤの言う通りボクは少し焦り過ぎてたのかもしれない。

お父さんに会いたいという気持ちは今も変わらないし、お母さんの事も知りたいと思う。

でもそれで無茶をしてアーニヤとかネカネお姉ちゃんを心配させるのもダメだ。

今を少しずつボクに出来る事をして誰かの役に立つ事が出来ればいい。

少しずつ出来る事を増やしていけばいいんだから。

さて・・・ここまでこの4カ月の間にボクの身の回りで起きた事を思い返していたわけなんだけど、なんでボクがこんな事を思っているのかというと・・・はつきり言くと現実逃避だ。

「ネギ〜着替え終わった〜?」

「ネギ! さつさと出てきなさい!」

ボクの部屋の外でネカネお姉ちゃんとアーニヤが声を上げている。

ボクも出ていきたいのは山々だけど出ていく事は出来ない。

「はあ・・・」

ため息を吐きつつボクは目の前の姿見に映し出された自分の姿を見た。やった。

鏡に映っているのは水色のワンピースを着た赤毛のロングヘアの女の子。

未だに見慣れないけどこれが今のボクだ。

事の起こりは魔法学校の卒業式。

ボクが卒業式の時に与えられた課題は『日本の麻帆良学園で働くこと』だったんだけど・・・校長先生によると向こうでのボクの職場は女子校でボクは昼間はそこの生徒として過ごす事になるらしい。

言うまでもないけどボクは男だ。

校長先生に反論したんだけど・・・校長先生は笑顔でボクに薬を差し出した。

それは『性別反転薬』。

当時は『立派な魔法使い<sup>マギステル・マギ</sup>』を一途に目指していたボクにとって修行を放棄することなんて論外で・・・ボクはその薬を飲んじやった。

それからボクにとっての悪夢が始まったんだ。

ネカネお姉ちゃんとアーニヤによるボクの女の子修行。

『ネギが修行先で女の子として暮らせるようにする為』と言って嬉々としてボクを・・・。

ああ、ダメだ！

あの日々はもう思い出したくない！

いつの間にか自分の事を『僕』から『ボク』って呼ぶようになって



たし、ネカネお姉ちゃんは

『私っていうネギも見たかったけど・・・ボクツ娘もいいわね』

とかブツブツ言いだしてるし！

いつのまにか箆笥の中の服が全部女の子用に代わっていた時はもう泣きだしそうになった。

アーニヤはネカネお姉ちゃんを止めるどころか

『あたし妹が欲しかったのよね！』

とか言つてボクを着せ替え人形扱いするし！

出来るだけローブで過ごそうとしても毎朝ネカネお姉ちゃん達が服装チェックをしに来るからそれも無駄。

スタン師匠は申しなさそうな顔をしつつそれを黙認してるし・・・。

着替えないと最終的にネカネお姉ちゃんとアーニヤに強制的に着替えさせられる事になるから着替えはするんだけど・・・やっぱり恥ずかしい！

「ネギ！いい加減出てきなさいよ！今日はロンドンに買い物に行くんでしょ！」

中々部屋から出ようとしないボクにしびれを切らしたアーニヤがドアを開けて入ってきた。

思わず鏡の裏に隠れようとするボクを見つけてアーニヤはとびつきの笑顔を浮かべた。

「なんだ、もう着替え終わってるじゃないの。ふふ、似合ってるわよ？ネ・ギ！」

アーニヤの言葉に身体が熱くなる。

多分ボクは今真っ赤になっている筈だ。

「男の子でしょ！しゃっきりしなさい！」

いや、確かにボクは男の子だけど・・・今は女の子な訳で・・・。

「女は度胸よ！さあ、さっさと行くわよ、ネギ！今日はあの有名なあの店のアイスを絶対食べるんだから！」

アーニヤはボクの腕を掴むとボクを引きずって歩きだした。

今日もボクの些細な抵抗は無駄に終わったらしい。

うう、ボクこれから一体どうなっちゃうんだろう？

それに最近アーニヤに連れられて買い物に行くのが楽しくなりつつあるのが怖い。

そういえばアイスって言ってたけどあの店ってバナナミントのアイスが美味しいんだっけ？

それは食べてみたいなあ・・・。



#### 間話 4 ウェールズのとある少年？（後書き）

「恒例の後書きコーナーの時間で〜す。今回はミリィ達がお休みと  
いうことで、あたし、フィオレ・ゲンマシス・カーメルと」

「チカカ・ラクス・アヤルが担当ですう」

「それにしても今回かなり更新が開いたわね」

「作者がドジって卒論を一から書き直すはめになったみたいですよ」

「・・・なんていうかアホね。バックアップくらいとっておけばいいのに」

「油断大敵ですう」

「それにしても今回はかんりぶつ飛んでいるわ」

「作者から手紙を預かってるので読めますう。」

『作者は原作のネギが余り好きではありません。』

このままネギアンチにしようかとか思ってたんですけどそこで天啓が  
「好きじゃなかったら好きになるようにしちやえばいいじゃない」

どうせ元からTSというジャンルな訳ですし。

可愛い正義

というわけでネギオンナニヤの子化計画です。

決して男の娘ではありません」

だそうですよ」

「・・・ネギ君もご愁傷さまね」

「これはこれでありだと思いますう」

「ま、せいぜい作者が次の更新を早くする事を期待しましょ」  
「そうですねえ」

「それじゃ

「またね」  
（ですう）  
「」

## 間話5 目覚める姫君（前書き）

間話が続きます。

文章に荒っぱさが目立ちますね〜

2月中にあと一回更新したいところです。

## 間話5 目覚める姫君

SIDE 神楽坂明日菜

シャツ、シャツ・・・。

私以外誰もいない美術室に音が響く。

私が今描いているのは美術部に入部して以来何度も書いてきた高畑先生の絵だ。

デッサンはモデルを見ながら描くのが基本だけど何度も描いているうちにいつの間にかモデルを見なくても描けるようになってしまった。

暫くそのまま描き続けていた私の手が不意に止まる。

「・・・はあ」

私は溜め息を吐きつつ持っていた木炭をキャンパスの淵に置いた。

そして木炭デッサン用の食パンの耳を手に取りろうとして・・・途中で止めた。

（また・・・ね）

どうも最近物事に身が入らない。

新聞配達バイトも時も道を間違えちゃったりしたし、今日の授業

でも数学の時間に英語の教科書を開いたりしてしまった。

気分転換になるかと思って久しぶりに美術室に来てみたけどやっぱり中々筆が進まない。

このまま絵を描き続ける気がなくなった私はキャンパスから顔を上げて周りを見渡した。

夕方になって少し暗くなった美術室には私以外誰もいない。

元々美術部は部員が少ない上に、基本的に部活動は自由参加ということもあって多くの部員が幽霊部員の状態。

かくいう私もあまり活動に熱心なわけじゃないんだけど。

それでも私の知る限りこの賑やかな麻帆良学園の中でも美術室が一番静かな場所の一つで、私は何か一人で考えたい事がある時は美術室に来て絵を描いている。

いつもなら絵を描いているうちに気分がリフレッシュ出来るんだけど今日は絵を描いていても気分が晴れるどころか余計に気が重くなるだけだった。

原因は私自身も良く分かっているのよ。

今私が描いていた人・・・高畑先生の事だって・・・。

あまり認めたい事じゃないけど私はあまり頭が良くない。



少し前まではクラスで『バカレンジャー筆頭バカレツド』と呼ばれてたぐらい。

私自身あまり頭を使う事が好きじゃないと思ってた程の体力バカだった。

そんな私に変化が起きたのは一学期の事。

2年生になってうちのクラスに転入してきた木乃花さんからの言葉だった。

木乃花さんはいわゆる『出来る女の人』タイプの人で、うちのクラスでは珍しいタイプの人だったけど人付き合いが上手くてすんなりとうちのクラスに解け込んだ。

理科の実験でたまたま木乃花さんと同じ班になった私は実験で失敗しちゃって皆から『流石バカレツド』とかからかわれたんだけどその時に木乃花さんに話しかけられた。

その内容はなんで勉強しないのかっていう話だったんだけど『頭が悪いから』って答えた私に木乃花さんが返した言葉は衝撃的だった。

『学校の勉強って確かに必要ないかもしれないけど？将来の事を考えると決して無駄じゃないと思うよ？だって将来何をしたいか分からないけど学校の勉強をしっかりしていた方が色々な可能性があるでしょ？自分の新しい可能性を見つけられるかもしれないしね。頭が悪いっていう理由で諦めるなんてもったいないよ。私も手伝うから勉強してみない？』

私はそんな将来の事なんて考えた事なかったけど、木乃花さんの言

葉にはどこか説得力があつて私は気が付いたらその言葉に頷いていた。

その次の日から木乃花さんは私に勉強を教えてくれた。

途中から同じバカレンジャーのまきちゃんも加わって始まった勉強会は凄かった。

木乃花さんから教えて貰ったのは勉強の内容というよりも勉強の組み立て方。

今の自分を認識した上で、自分がより上に行くにはどのようにしたら良いか考えて実践する方法。

急激に頭が良くなるわけじゃなかったけど・・・自分が考えた方法で勉強して少しずつ小テストの成績が上がった時の嬉しさは今でもよく覚えている。

それから私の中で勉強が楽しくなって、結果として成績もすつこく上がったんだけど・・・今思うとこの時に私は変わったのよね。

私はこれまで『自分の頭の出来は良くない』事を理由に余り物事を深く考えようとはしなかったわ。

でも私は木乃花さんとの勉強を通して考える事の大切さを知る事が出来た。

それから私は色々考えるようになったんだけど・・・それが私の今の悩みになるなんて思わなかったわ。

私は夏休みに入ってから一度自分の将来について考えてみた。

一学期の間にうちのクラスを改めて見て気付いたんだけどうちのクラスのコは将来の目標がしっかりしているコが多い。

朝倉は『パパラッチ』とか呼ばれてるけど将来ジャーナリストになる為に頑張ってる訳だし、さっちゃんはコックさんを目指して日夜料理の研究をしている。

くーちゃんは武闘家を一直線に目指しているし、葉加瀬は科学者を目指して大学で研究してる。

木乃花さんも先生を目指してるみたいだし、私やまきちゃんに教えているのもその一環なのかもしれない。

別にクラス全員が将来の事を意識してるわけじゃないけど、同じクラスの子で確りと将来を考えている子がいると自分も考える気持ちになるのよね。

そして夏休みの間に私の将来の事を考えている時に私は壁にぶつかった。

その日私は本屋で本を立ち読みしていた。

就職関係の本だったけど将来の事を考えるにはもってこいの本。

そこに書かれていた『自己分析』。

将来を考える時は自分の過去を振り返る事が一つの指針になるらしい。

それで私は自分の事を振り返って見たんだけど・・・愕然としたわ。

私には麻帆良に来る前までの記憶が全くない。

私は気が付いたら高畑先生に連れられて麻帆良に来ていたわ。

じゃあ両親の記憶さえ無い私はいつ高畑先生と知り合ったの？

・・・昔の私ならここで考える事を辞めた・・・ううん、ここまで考える事さえ無かったかもしれない。

でも今の私はここで考える事を辞める事なんて出来ない。

私には考える事が出来る頭があるってもう分かってしまっているから。

そして私にはもう理解できてしまっている。

『高畑先生に聞けば何かが分かる』って。

でも私は・・・高畑先生に聞く事が怖い。

高畑先生が何も知らないという可能性は低い。

高畑先生はいい人だけど何も知らない子供を自分で育てるとは思えない。

多分記憶が無い頃の私と高畑先生は十中八九関係があった筈だと思う。

高畑先生は今まで私にそんな話を話してくれた事は無かった。

事情があるのかもしれない・・・でも、私はそれが知りたい。

でもそれを私から聞くと高畑先生との関係が壊れてしまいかもしれない。

私にはそれが怖い。

私はその事に気付いて1カ月以上経っているけどその結論は未だに私の中にない。

考え込んでいたらいつの間にか外が暗くなっていた。

「・・・帰ろっかな」

寮の門限も近いから私は道具の片付けをし始めた。

「やっぱりここにいましたのね」

そして片付けも終わって帰る支度が出来た時にいきなり声を掛けられる。

思わず振り返ると美術室の入り口に見知った人影が立っていた。

「いいんちょ・・・」

立っていた人物・・・いいんちょはそのまま私に向かって歩いてきた。

「・・・何の用？」

私の目の前まで歩いてきたいいんちょに私は仏頂面で問いかける。

いいんちょことあやかは私の幼馴染。

その付き合いはこのかよりも古い。

そして私にとって何より弱味を見せたくない相手。

「アスナさんはきつとここにいると思いましたわ。いつもアスナさんは迷うと一人に成りたがりますから」

私の質問に答えずにいいんちょは話し出す。

行動を読まれていた事に対して私の顔が赤くなるのを感じる。

「な・・・」

「一人で悩む事も結構ですけど誰かに相談する事も決して悪い事ではありませんわよ？」

いいんちょ・・・ううん、あやかの言葉に私は何も言い返す事が出来ない。

いつも余裕そうな笑みを浮かべていて高慢そうな印象をつけるあや

かだけど実は他人を想いやる気持ちが人一倍強い事を私は知っている。

私とあやかはいつもケンカばかりしているけどそれこそ気心が知れているからこそ出来る事だし。

「正直何かに悩むなんてアスナさんらしくありませんわ。私の知ってるアスナさんは単純で悩みなんて吹き飛ばしてしまうような方ですわよ」

「な、なんですってー！！！！？」

あやかの言葉に私は一気にキレてあやかに掴みかかった。

「ホホホ、それでこそアスナさんですわ！」

そのまま私とあやかはいくつとくみ合いを続け、最後にはお互いボロボロになって床に転がる事になっていた。

「そ、それでアスナさん、結論は出ました？まだ悩んでいるようなら相談に乗りますけど」

「・・・出たわよ」

ボロボロになった身体でなんとか私は立ち上がった。

そう、良く考えてみたら分かる事だった。

悩むなんて私らしくない。

私は高畑先生を信じている。

私の過去を聞いたぐらいで高畑先生が変わるなんてありえない。

それなら私の取る道は一つだけよ！

「おかげで覚悟がきまったわ。・・・ありがとね、あやか」

「あら、何の事でしょう？ふふふ、それにしてもアスナさんから名前を呼ばれるのも久しぶりですね」

お礼を言う私に対していいんちょは笑ってそれを誤魔化す。

正直私にとっていいんちょの存在はありがたかった。

このかも私と仲がいいけどいいんちょみたいに本音でぶつかり合うなんて事は出来ないから。

その後私は久しぶりにいいんちょと一緒に寮に帰った。

いいんちょのおかげで久しぶりに今日はよく眠れそうね。

SIDE 高畑・T・タカミチ



職員室で事務をしていたら明日菜君から呼び出しを受けた。

顔を赤くした明日菜君から受け取った手紙を読むと『夜に世界樹広場に来て欲しい』と書いてあった。

正直に話すと明日菜君の話の内容は大体想像がついている。

明日菜君が僕に好意を持っている事には大分前から気付いていた。

今回の呼び出しもおそらくそれについてだろう。

でも僕は明日菜君の想いに応えることは出来ない。

いや、愛される資格がないと言っべきか。

明日菜君が僕に好意を抱いているのは無意識に師匠の面影を僕から感じているからだろう。

いくら魔法と言えども人の記憶を完璧に消し去る事なんてできない。

恐らく師匠の最期の光景が明日菜君に無意識のうちに影響を及ぼしている筈だ。

僕は師匠の遺言に従って明日菜君・・・いや、アスナちゃんの記憶を無理矢理封印した。

それが必ずしも間違っていたとは思わない。

それは今の活発で良く笑う明日菜君自体が証明している。

でもアスナちゃんは昔ナギに好意を抱いていた事を僕は知っている。そんな彼女の想いを無理矢理封じ込めてしまったのは他ならぬ僕だ。そんな僕に錯覚によって好意を抱いている明日菜君の想いを受け入れる事なんて出来ない。

来年にはネギ君が麻帆良に来る。

彼の傍にいる事こそ明日菜君にふさわしい筈なんだ。

そう考えながら僕は明日菜君に指定された世界樹広場まで赴いていた。

僕が世界樹広場に着いた時明日菜君は既にそこで待っていた。

「待たせたかな、明日菜君？」

僕は明日菜君に声を掛けて歩み寄る。

「い、いいえ、こちらこそ来ていただいてありがとうございます！」

明日菜君は赤くなりながら僕に向かって頭を下げる。

僕には明日菜君に頭を下げられる資格なんて無いのに。

「それで何のようかな？」

明日菜君からの用事を半ば予想しながら尋ねた僕だったけど・・・彼女の口から出たのは予想外の言葉だった。

「あの・・・もし高畑先生がご存知なら私の麻帆良に来る前までの事について教えて欲しいんです!」

「・・・は?」

あまりの事態に僕は思わず啞えていた煙草がポロリと落としてしまった。

動転する僕に気付かず明日菜君は言葉を続ける。

「私って麻帆良に来る前までの記憶がなくて・・・私を麻帆良に連れてきてくれた高畑先生なら何か知ってるんじゃないかと思ったんです!」

「・・・なんで昔の事を知りたいと思ったんだい?」

僕は混乱しながらもなんとか声を抑えて明日菜君に尋ねた。

これが興味とかだけだったなら誤魔化す事も考えていた。

「私最近自分の将来について考えていたんです。それでもう一度私の事を振り返ってみたんですけど・・・私自分の事について殆ど知らないんです。麻帆良に来る前の事もですけど・・・お父さんとお母さんの事も・・・このままだと私・・・前に進める気がしないんです!」

その明日菜君の言葉を聞いた時僕は思わず空を見上げてしまった。

明日菜君の想いは誤魔化すには余りにも重すぎる。

ここ数年僕自身明日菜君をどうするか迷っていた。

詠春さんと相談した時に明日菜君が18歳になったら全てを明かすという話をした事もある。

でもここで彼女の想いを止めてしまう事が本当に正しいのだろうか？

様々な考えが僕の頭を駆け巡る。

「あの・・・高畑先生・・・？」

明日菜君に声を掛けられて我に帰ると明日菜君が心配そうに僕を見上げていた。

そうか・・・僕は何を考えていたんだ。

師匠はアスナちゃんの幸せを願って僕にアスナちゃんの記憶を消すように遺言を残した。

それならば僕の明日菜君の幸せを第一に考えるべきじゃないか。

来年にはネギ君が麻帆良に来る。

学園長はおそらくネギ君を2・Aの傍に置く筈だ。

その時明日菜君もネギ君の近くにいる事になるだろう。

ネギ君の近くにいる事・・・それは魔法に触れる事に等しい。

ネギ君の修行について僕が意見を挟むことは出来ない。

つまり明日菜君は遠かれ遅かれ魔法に巻き込まれる事になる。

何も知らないで魔法に巻き込まれる事と知った上で魔法に巻き込まれる事を比べたらその危険性は一目瞭然だ。

本当に明日菜君の幸せを考えるべきなら僕がする事は・・・

「・・・すまない、明日菜君。少し考え事をしていたんだ」

明日菜君が安心出来るように僕は笑みを浮かべながら話しを続ける。

「明日菜君の昔の事についてだったね。・・・確かに僕は明日菜君の昔の事について知っている。でもそれを知る事は明日菜君にとつてつらい事かもしれない。それでも明日菜君は知りたいかい？」

僕の質問に明日菜君は一瞬考え込んだけど直ぐに顔を上げた。

「・・・はい！不安はありますが・・・知らないと私は先に進めませんから！」

その明日菜君の顔には昔のアリカ様の面影が見て取れた。

「・・・アリカ様」

「た、高畑先生？」

思わず僕の口から洩れた言葉に明日菜君が戸惑うけど、僕はそれに答えずに目を瞑った。

（師匠、すみません。僕は師匠の遺言を破ります）

僕が再び目を開いた時、僕の覚悟はもう固まっていた。

「明日菜君、目を閉じていてくれないか？」

僕の言葉に明日菜君は戸惑いながらも目を閉じる。

僕は右手の人差し指を明日菜君のおでこに置く。

「た、高畑先生！？」

「大丈夫、すぐ終わるから」

明日菜君が慌てるも僕は明日菜君を落ち着かせる。

「<sup>エミット</sup>解けよ偽りの記憶、解放」

アスナちゃんの記憶を封印した時に設定したキーワードを唱えるとその瞬間明日菜君が意識を失って倒れた。

おそらく明日菜君・・・いや、アスナちゃんの記憶が解放されて大量の記憶が溢れ出たせいで脳が強制的に眠りについたんだろう。

次に目が覚めた時、明日菜君はアスナちゃんであり明日菜君である存在になっている筈だ。

僕は眠ってしまった明日菜君を背中に背負う。

この先アスナちゃんに何が起こるかは分からない。

願わくばアスナちゃんには幸せな人生を送って欲しい。

そのために僕は陰ながらアスナちゃんを応援することにしよう。

## 間話5 目覚める姫君（後書き）

「ミリイと」

「ユメミのお」

「「後書きコーナー!!」」

「最近あまりストーリーが進んでいないわね」

「作者もそれは気にしてるみたいよお？」

「まあそれはいいんだけど・・・それにしても原作崩壊しまくってるわね」

「もう前提自体からして壊れてるしねえ」

「ここまで原作壊しておいて収拾がつくのかしら？」

「次の話が終わったら原作に入るみたいだからあゝその時に期待ねえ」

「まあ最近シイナの陰が薄いし、作者にはせいぜい頑張ってもらいましょ」

「それじゃあ」

「「またね!!」」



## 第十八話　かくして舞台は動き出す（前書き）

大変お待たせしました！

物語の連載を再開します！

地震の時はご心配をおかけしましたが、知人は何とか無事で連絡を取る事が出来ました！

ただ表現には気をつけた上で掲載をしたいと思っています。

それとプライベートでの生活が変わり、更新スピードは以前より格段に落ち、タグ通り亀更新になると思いますのでご了承下さい。

## 第十八話　かくして舞台は動き出す

「・・・なるほどね」

メンテナンス時に超鈴音から茶々丸に託された映像を見終えたシイナは右手を口元にあてながら考え込む。

映像の内容は神楽坂明日菜と高畑の世界樹前のやりとりを一部始終撮影した映像だった。

世界樹を中心とした世界改変計画を進行している超鈴音はシイナによって世界樹に手が加えられた後も世界樹の監視を怠っていない。

それ故に明日菜と高畑のやりとりは超一味が常時世界樹周辺に設置している監視装置によって全てが把握されていたのだ。

その映像が何故シイナに渡されることとなったのか？

簡単に言ってしまうえば超鈴音によるシイナへの付け届けである。

麻帆良祭におけるシイナの策謀やシイナから提供された技術、茶々丸の映像を目の当たりした超鈴音はシイナの存在について『味方にすれば心強い事この上ないが、敵に回しては絶対にいけない存在。』というか敵に回した瞬間に計画事態が確実に崩壊してしまうネ』という評価を下していた。

一応中立協定を結んでおり、それなりに交流がある言ってもそれは確実なものではない。

ただ幸いな事に茶々丸の映像によってシイナが義理堅い人物であるという事は分かっているの。『それならば少しでも味方にはならないまでも敵対する可能性を減らしておこう』という考えのもと超鈴音は定期的に麻帆良の裏に関する事についてシイナに情報提供を行っていたのだ。

シイナからして見れば、リアリストである超鈴音がこういった行動を取る事は予測していた事であり、ありがたくその好意を受ける事になっている。

実のところシイナとしては超鈴音がシイナの邪魔をしない限りは超鈴音と事を構える気は毛頭なかったりするのだが。

「それにしても・・・これは予想外だわ」

超鈴音やエヴァ、千雨、さよに影響を与えた事はシイナ自身自覚しているが、神楽坂明日菜に対してはあくまでクラスメイトの一人として接している。

<sup>シイナ</sup>自分の行動によってある程度原作に変化が起きる事を想定していたシイナではあったが、明日菜に起きた変化は完全にシイナの予測の範疇から外れていた。

「・・・いえ、それはキャサリンさんの事も同じね」

何故キャサリンがこの世界に来ることになったのか？

それについてシイナは何度も考えているし、チャンネルを通して神と話そうとしたがキャサリンが来て以来神と連絡を取る事は出来ていない。

それについて疑問に感じていた所に明日菜の告白である。

シイナとしては何か得体のしれない事が起きている危機感を感じずにはいられない。

気象精霊として気象変化に対応するために常に何パターンもの事態を想定しながら働いてきたシイナの頭脳にはとある仮説が浮かび上がっていた。

『明日菜の変化のように自分<sup>シイナ</sup>がこの物語に介入したことで様々な変化が起きている。それならば自分の行動で何かが起きていて、それが自分の手に負えないと判断したからこそ神がキャサリンをこちらに送ったのではないだろうか？』

シイナ自身も随分と穿ち過ぎな考えであるとは思ってはいるが、現に明日菜に予想外の変化が起きている以上その可能性をシイナは否定する事が出来ない。

（確かに最近アオイの世話に夢中になっていたし・・・気を引き締めるに超したことはないわ。アレをさっさと完成させた方が良さそうね）

アオイに構うあまりに油断していた事を反省したシイナは己の気を引き締めるとともにその頭脳を凄まじい程のスピードで回転させていく。

（学園側に最近が目立った行動はないわね。学園長も真面目に働いているようだし・・・こちらは注意して見守っておくだけで良さそう。ネギの方は少しハプニングがあったけど原作よりは健全になっ

ているし・・・やっぱり今一番注意すべきなのは明日菜ね)

神楽坂明日菜・・・アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアは《黄昏の姫御子》であるがシイナが注目している点はそこではなくその生い立ちにある。

アスナはある意味ネギを超える天才である。

幼い頃に傍で聞いているだけで咸卦法を身につけてしまった事から分かる理解力と魔法・気の扱いの才能は驚異と言ってもよい。

更に幼少期に《黄昏の姫御子》として利用され、ナギ・スプリングフィールド達と世界を旅し恩人ガトウを目の前で失ったアスナは世界に潜む危険性について良く知っている筈である。

そのアスナが今置かれている自らの立場の危険性に気づく可能性は非常に高い。

そんな彼女が誰かに助けを求めようとすれば・・・

「十中八、九、エヴァしかないでしょうね・・・」

これから起こりうる面倒事に思考が至ったシイナはそれにどのような対処すべきかさらに思考に耽っていくのであった。

それから数日後、麻帆良学園女子中等部の茶道部の茶室にはエヴァンジェリンと茶々丸に加えてアスナの姿があった。

シイナの予測通りアスナは記憶を取り戻してから数日してエヴァンジェリンにコンタクトを取ってきた。

シイナから予め話を聞いていたエヴァンジェリンはアスナの境遇に興味を覚え、茶室で会う事を決める。

そうして放課後にアスナが手土産を持って茶道部の茶室を訪ねてきたのだが、茶室のは茶々丸が茶を点てる音が響くばかりで相對するエヴァンジェリンとアスナの間で會話は無い。

「どうぞ」

アスナとエヴァンジェリンの前にアスナが持ってきた羊羹とともに茶々丸が点てた茶碗を置いた。

羊羹を竹楊枝で切って口に運んだ後で茶碗を手にとって回し、茶を口に含んだエヴァンジェリンがほっと息を漏らす。

少し前までは人形のような幼女が抹茶を飲むという奇妙な光景もエ

ヴァンジェリンの身体が成長した今はどこか色気が漂う。

「それで、貴様が私に一体何の用があるのかな、神楽坂明日菜？」

悠然と構えるエヴァンジェリンにそれまで茶碗に手をつけずに正座していたアスナは静かに口を開いた。

「私に生き延びるための力を付けて欲しいの。お願い、エヴァンジェリンさん！」

そのまま頭を下げるアスナをエヴァンジェリンは面白げに見やる。

「ほう？ 貴様それは私が誰だか知っていて言ってるのか？ 神楽坂明日菜・・・いや、『黄昏の姫御子』と言ったほうがいいかな？」

エヴァンジェリンが笑みを浮かべつつ問いかけるとその言葉にアスナは思わず顔を上げた。

「・・・え？ なん・・・不思議か？ 私が貴様の素性を知っていることが？」・・・！？」

優越感に浸りながらエヴァンジェリンはアスナを見下ろす。

その様子<sup>エヴァンジェリン</sup>にアスナは会話の主導権を完全に相手に握られている事を悟りながら深呼吸をした。

（落ち着くのよ、私。相手は『闇の福音』。私よりも格上で当たり前なんだから！）

「貴女の言うとおり私の昔の名前はアスナ・ウェスペリーナ・テオ

タナシア・エンテオフュシア・・・ウエスペルタイア王国の王族の生き残りよ。貴女が『闇の福音』であることは承知・・・いいえ、だからこそ私を貴女の弟子にして欲しいの」

静かに、だが力強く言い切ったアスナはエヴァンジェリンの顔を真っ直ぐ見つめる。

（ほう・・・あの短い時間で立て直したか。それにこの目・・・実に面白いな。最初は断ろうかと思っていたんだが・・・これはもう少し試してみるか？）

麻帆良で今まで見てきた自称・正義の魔法使いとも高畑とも違ってはつきりとした意志を持っている事が伺えるアスナの眼差しにエヴァンジェリンは興味を覚えた。

「ふん、私の弟子に？生き延びる為に力が欲しいと言っていたが・・・どうということだ？」

「あの大战でアリカ姉様が『災厄の女王』として処刑されてからウエスペルタイアの王族は魔法使い達に憎悪されているわ。それにそれを広めた奴らにとって私の能力は欲しい筈。魔法関係者に知らなければいいけど・・・麻帆良マホウにいる限り知られずにすむ可能性はかなり低い。私は麻帆良びいる限り狙われるわ。私は今のところ中学を卒業したら麻帆良から離れるつもり何だけど・・・それだと今度は自分の事は自分で守らないといけない。どっちにしても私は自分を守るだけの力が必要なのよ」

エヴァンジェリンの口調から自分が試されている事を感じ取ったアスナは緊張しながら・・・それでも落ち着いた姿勢を崩さずにゆっくりと話す。



話を聞いていたエヴァンジェリンは事前からアスナの能力についてシイナから情報を得ていたものの予想以上のアスナの聡明さを目の当たりにしてこれまでの彼女とのギャップに違和感を感じずにはいられなかった。

「神楽坂明日菜・・・お前・・・存外頭が回るのだな？」

「やめて・・・。記憶が戻る前までのあたしは黒歴史だから・・・」

思わずエヴァンジェリンが漏らした言葉にアスナはその場で頭を抱えた。

人の記憶や精神に関わる魔法というのは負担が非常に大きい。

記憶を封印されていた明日菜の場合かなりの負担が脳に掛つていた筈であり、むしろその状態で最下位に近いとはいえ中学生レベルの学力を保有し、さらにシイナと出会ってから普通の学力を維持する事が出来た明日菜はある意味異常であると言えるだろう。

だが本来の頭脳を取り戻したアスナは記憶に残る少し前までの自分の醜態についてある意味トラウマを抱くようになっていた。

本気で嫌がるアスナの様子にエヴァンジェリンは同情を覚えつつ話題を変えようと話を振り向ける。

「ま、まあともかく話は分かった。だが何故私なんだ？高畑やジジイに頼むという手もあるだろうに？」

エヴァンジェリンの問いに現実に戻ってきたアスナは顔を歪めなが

ら首を横に振った。

「正直ね、タカミチや学園長は信用出来ないのよ。ガトーさんはあたしに普通の女の子として生きて欲しいって言ってたわ。あたしも本当だったらこのまま普通の神楽坂明日菜として生きたいと思う。

でもうちのクラスって・・・異常なのよ。雪広財閥の娘のアヤカに既に大学レベル以上の知識を持っている超さんにハカセ、武術の達人のクーちゃん・・・ここまででも普通じゃないけどあくまでここまで常識レベルよ。でもこれに詠春の娘のこのか、明らかに忍者の長瀬さんに尋常じゃない空気の桜咲さんと龍宮さん、美空ちゃんや祐奈も魔力持っているし・・・そこにエヴァンジェリンさんと私よ？絶対に何か思惑があるに決まっているわ。本当にあたしに普通の女の子として生きて貰いたいってタカミチが考えていたらあたしをこのクラスに入れるわけがないの。タカミチに自覚があるにしろ無いにしろ・・・私はいずれ学園長やタカミチに利用されるわ」

（そこまで頭は回るか。しっかりと物の本質を見抜いているな・・・。素材も良いし別に面倒を見てやっても良いが・・・最後に覚悟を見せてもらうか）

アスナの答えにアスナの評価を上へ上げつつエヴァンジェリンは意地悪く唇をつり上げる。

「・・・そうだな、別に弟子にしてやってもいいが、お前を弟子にするとして私に一体何の得があるのだ？」

問われたアスナは一瞬キョトンとした後で考え込んだ。

（やはりこの辺りはまだまだ甘いか。それで貴様は一体どんな答えを出すのだ、アスナ？）

興味深そうにエヴァンジェリンがアスナを見やる中で考え込んでいたアスナが顔を上げる。

「貴女に自由をあげられるわ。今貴女から魔力をあまり感じないっていうことは今何かの呪縛を受けているのよね？私が自由に能力を使えるようになればそれを解除できると思うわよ」

自信ありげに笑ったアスナに対してエヴァンジェリンは・・・

パチパチパチ

茶室に拍手の音が響く。

笑みを浮かべつつ拍手をしたエヴァンジェリンはその場で立ち上がった。

「いや、見事だアスナ。その洞察力、実に素晴らしい。だが惜しかったな。その問題は既に解決済みだ」

突然の拍手に怪訝な顔をしていたアスナはその言葉を聞いた瞬間俯いた。

なまじ自信のある答えであっただけにそれ以上の答えは容易に見つからない。

だがそれでもアスナは別の答えを探そうと頭をフル回転させて・・・そして。

「・・・私の血よ」

脈絡のない言葉に目を丸くしたエヴァンジェリンを尻目にアスナは続ける。

「魔法無効化能力を持つ私の血をあげるわ。しかもわたしはまだ処女よ・・・処女の王族の血・・・吸血鬼にとつてこれ以上のものは中々見つからないわよ？それでも足りないなら貴女の従者になるわ。このままガトウさんの想いも無駄になんてさせない！何をしてでも私は生き延びる！」

最後は絶叫するように言い切ったアスナをエヴァンジェリンは呆然と見つめていたがやがて笑いだした。

「ハハハ！いい！面白いぞ神楽坂明日菜！到底あの正義バカ共には持ち得ない覚悟だ！」

自分の想いの為なら手段は選ばない。

正義とはかけ離れたそのアスナの言葉にエヴァンジェリンは清々しさを感じたが、それ以上にそのアスナの瞳に興味を惹かれた。

エヴァが高畑の修行に協力したのはその強くなりたいという気持ちに興味を持ったからだが、それは己自信が強くなりたいという思いによるものだ。

対して今のアスナは大切な人<sup>ガトウ</sup>の想いを守りたいという気持ちから強くなる事を望んでいる。

明確な想いを抱いた今のアスナの瞳はその高畑のが霞むほどに輝いていた。

「よかるう、貴様の弟子入りを認めようではないか。報酬は貴様の言うとおりその血の提供だ。だが覚悟しろよ、アスナ？私の修行はヤワなものではないぞ？」

ニヤリと見る者が見れば一瞬で魅了されてしまいそうな妖艶な笑みを浮かべるエヴァンジェリンに一瞬キョトンとしてしまったアスナだったが、少し遅れてその言葉の意味を理解する。

「望むところよ、師匠」

大胆不敵に笑いながらアスナはエヴァンジェリンへ手を伸ばす。

その意味を理解したエヴァンジェリンもまた手を伸ばし・・・アスナの手を掴んだ。

闇の姫君と黄昏の姫・・・生まれも生い立ちもどこか似たような点を持った二人の間に何かが芽生えた瞬間だった。

所変わって麻帆良学園女子中等部にある学園長室では近右衛門が招かれざる客を迎えていた。

「お主もしつこいのう……。だから無理じゃと言っておるじゃろうが……」

近右衛門はため息を吐きつつ机を挟んで向かいに座る男を見やる。

「何でだよ！？この俺が先生になってやろうって言ってるんだぞ！？」

向かいに座る男、ルルーシュ・ウェンリーはその端正な顔を歪めつつも怒鳴る。

このルルーシュという男、黙っていれば間違いなく普通の女性がため息を吐くほどに整った顔をしているのだが、その身に纏う軽薄さと欲望に忠実すぎる性根がそれをぶち壊しにしている。

この『紅き翼』の一員であり『不死の魔王』の異名を持つ男が近右衛門を訪ねてきた時近右衛門は思わず居留守を使いたくなる衝動に駆られた。

近右衛門は現在認識阻害の結界の消滅後に麻帆良をこの世界で定着させる準備の為に奔走しているが、最初から奔走していた訳ではない。

圧倒的な力を持つシイナに何とか対抗できないものかと考えを巡らせたこともあった。

その中の手段として『紅き翼』のルルーシュ・ウェンリーを迎えるという考えもあつたのだが、それは思い浮かんだ瞬間に破棄された。その理由は明確である。

メリットに比べてデメリットが大きすぎたのだ。

ルルーシュの力は『紅き翼』でも随一であり、それこそナギ・スプリングフィールドを超える程である。

だがシイナの力を目の当たりにしている近右衛門はそのルルーシュの力を持つてしてもシイナを抑える事ができるかどうか確信を得る事が出来なかった。

もし失敗すれば今以上に状態が悪化するリスクを考えれば確信を得られない手段を用いるわけにはいかない。

そしてルルーシュを招く事を否定した最大の理由はルルーシュの存在そのものにある。

このルルーシュという男素行が悪すぎるのだ。

ルルーシュの性格を一言で言い表せば軟派かつチンピラな自分至上主義者である。

少し美人を見つければ相手の身分や場所を構わず口説き、しかもその口調がその余りにも上から目線な口説きな為に大抵振られる。

そこで終わればいいのだが、この男振られると逆上して暴れるのである。

おまけに自由行動が多く、『命令何ソレ、美味しいの?』という態度を地でいつているのだ。

そんな男を美女・美少女の多い麻帆良に迎え入れればどうなるか。

それを考えた瞬間にルルーシュを招くという考えは近右衛門の中で消し飛んだ。

ただでさえ連合上層部の必死の情報操作によってルルーシュの悪評はなんとか旧世界では抑えられているという状況なのである。

魔法生徒達がこの『英雄』の実態を知ったらどうなるか想像に難くない。

おまけに近右衛門とて孫娘このかを持つ身である。

大切に育てている羊がいる小屋に狼を招き入れる者がいる筈がない。

そうして近右衛門もこの考えの事は忘れ去り、麻帆良の改革に取り組んでいたところに今回ルルーシュの突然の訪問である。

そしてルルーシュは近右衛門に会うなり、『俺を雇って来年来るネギと一緒に担任にしろ』と言ってきたのだ。

近右衛門からしてみればそんな要求を呑める筈がない。

只でさえ今の麻帆良は大変にデリケートな時期なのだ。

何とか明石教授らを中心とした穏健派の魔法使いを中心として改革



を進め始め、今まで教職に就いていて教員免許を持っていなかった魔法先生達については教員免許取得の為のプログラムの進行や部活の講師、警備員などへの配置換えを行っている。

魔法世界で活動していたルルーシュが日本の教員免許など持っている筈が無くその時点でまずアウトである。

更にメルディアナの魔法学校校長からの連絡によれば健全に成長しつつあるというネギは来年生徒としてこの麻帆良に来る筈だが、女子生徒として来るネギをルルーシュに引き合わせる事など『英雄』としてのイメージを崩す意味でもその身の危険の意味でも出来る筈がない。

ぶつちやけ麻帆良の責任者である近右衛門としてはこの自重というものを何処かに置き忘れてきたルルー<sup>バカ</sup>シュをこの麻帆良に入れるわけにはいかないのである。

それ故に近右衛門は表現をオブラートで何重にも包みながらもそのルルーシュの要望を否定しているのだが、それを理解出来ないルルーシュはかれこれ3時間以上も近右衛門の前に居座っていた。

そのG並のしぶとさに近右衛門は辟易としていた。

「何と言ってもお主をこの麻帆良に受け入れる事は出来ん」

もはや疲れてきてオブラートに包む気力さえ無くなった近右衛門はため息を吐きつつそう断言した。

それ以上何も語ろうとしない近右衛門の様子にルルーシュはソファーから立ち上がる。

「ああ、そうかよ！そう言っただったら俺は勝手にやらせて貰うぜ！後から後悔しても遅いからな！？」

どこかの三流映画にでてくるしょぼい悪役が吐きそうなセリフを吐き捨てた後ルルーシュは転移魔法で部屋から消え去る。

後に残った近右衛門は招かざる客が消えた事に安堵の息を吐いた。

「ふう、ようやく出て行っただか……。それにしてもナギ、何でお主はあやつを仲間にしたのかのう？これで諦めてくれればよいのじやが……。何やら嫌な予感がするのう……」

底知れぬ不安を感じた近右衛門だったが、彼の不安は近い将来的中することになるとはこの時誰も知らなかった。



第十八話　かくして舞台は動き出す（後書き）

「久しぶりのミリィと」

「ユメミのお」

「「後書きコーナー！」！」

「いやー、かなりのご無沙汰だったわね」

「そうだねえ」

「作者の気力自体は一月で復活したみたいだけど新生活に慣れなかったのと大賞応募用の作品の構想をしていたらしいわよ？」

「一つの作品も完結してないくせに何やってるんだろうねえ？」

「まあアホな作者の事は放っておきましょう」

「さて、シイナが本領を発揮してきたわね」

「あの子陰でこそそこそ動く事が得意だからねえ」

「そうそう、それで他の人が気づかないうちに事態が解決したりしてるのよね」

「あたし達もかなり助かってるんだけどねえ」

「それにしてもシイナって・・・アンソンと連絡取っているのかな？」

「さあ？」

「この間ホークがアンソンにグチられたって言ってたんだけど・・・」

「もしかしてえーアンソン忘れられたの？」

「それ不憫すぎるわよ、アンソンが。しかもいつの間にかシイナは子連れになっているし・・・」

「大丈夫だよー、アンソンって顔に似合わず面倒見がいいからねえ」

「そうだといけどね・・・」

「さて、今回もこれぐらいにしておきましょうか」  
「そうだねえ」。次はいつになるか分からないけどあゝ  
「またねっ！！」

## 作品打ち切りのお知らせ

皆様、御無沙汰しております。

突然の事ではありますが、『気象精霊麻帆良へ』は未完結のまま打ち切りとさせて頂きたいと思います。

理由と致しましては、

1・現在少年マガジンにて連載中の原作『魔法先生ネギま!』の展開からしまして本作品は乖離が激しく、現在の作者自身の技量では筋の通った作品として進行させて行く事が不可能であると判断した事。

2・書いている作者自身からしましてこの作品を魅力ある作品としてこれからも続けていく自信が持てない事。

という事が挙げられます。

作者の勝手な都合によって打ち切りという事になりましたが、今まで応援して下さいました読者の方々には申し訳なく思いますがご了承頂ければ幸いです。

尚、『気象精霊麻帆良へ』は打ち切りとしますが、主人公であるシイナを引き続き用いた作品として『気象精霊記』の二次創作作品を書く事を考えております。

もしも今後その作品を投稿する事となりましたら連載中の拙作『袁

の王佐』と共に暇つぶしの傍らお読み頂ければと思います。

最後となりますが、この作品を完結させる事無く打ち切る事となつてしまいました事をお詫びするとともに、これまでこの作品を応援して下さいた事にお礼を申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5437n/>

---

気象精霊麻帆良へ

2011年9月17日17時59分発行